スーパー グローバル ハイスクール

平成27年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究報告書・第５年次（令和元年度）

研究開発構想名

長寿県NAGANOから世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成

Fostering Global Leaders from ＮＡＧＡＮＯ to Promote Health and Longevity around the World

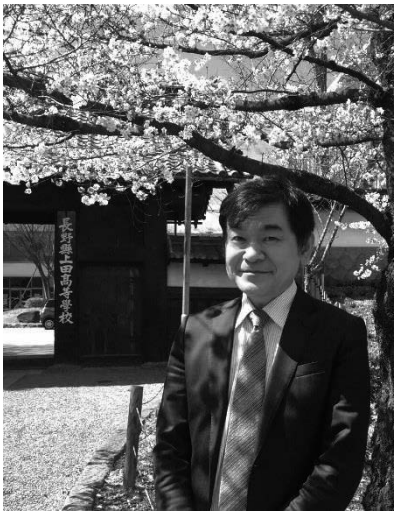
令和２年３月

長野県上田高等学校

Nagano Prefectural Ueda Senior High School

未来を創造する

長野県上田高等学校長　廣田 昌彦



平成２７年に指定を受けてから５年間、その前年にアソシエイト校として準備段階がありましたので６年にわたる上田高校のスーパーグローバルハイスクールの取組がその指定期間を終え、大きな成果をおさめながら終了する運びになりました。上田高校はこの事業によって、新しい学びに向かう創造的な緊張を受けとめる学校として県内外に注目を集めるようになりました。

現代社会において様々な社会的課題が指摘されますが、そのほとんどは容易に解決策を見いだすことはできません。大規模な根本的対策を講じることがむずかしいために、主に対症療法的なアプローチが用いられる傾向がありますが、それは副作用をうみ、さらなる社会的課題をうんでいる現状があります。

たとえば原子力発電所の新規制基準の適応による電源不足に対して、対症療法的に火力発電への依存が増えると、それはCO_2排出増加という副作用をうみ、日本の環境保護貢献度をさらに高めるよう国際社会から要請されています。

環境保全の取組が国境を超え立場を超えたあらゆる機関の参入が待たれるように、社会的な共通課題の解決のためには企業や大学、研究機関、政府、自治体、市民など多様な関係者が多層的に連携・共創しあう循環体制が必要です。現代的な課題を根本的に解決しようとするイノベーティブなグローバル人材は、専門性を持ちながらも、多様なプレーヤーをまきこみ、プラットフォームを形成し、同じ目標・方向にむかってオーケストレイトしていく経験とそれに培われた能力がかかせません。

本事業が開発したカリキュラムにより、人種も国籍も言語にもとらわれず、積極的に社会変革の取組に参加し、技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する力をもつ若者たちや、失敗してもトライ＆エラーで何度でも立ち上がり、成功するまで粘り強く挑戦し続ける若者たち、ありたい自分の姿や理想の社会と、目の当たりにする現実との乖離の中に創造的緊張を楽しむ感性に満ちている若者たちが、本校卒業生から次々と生まれ出づることを期待しています。

この間、直接学校の取組を指導してくださいましたＳＧＨ運営指導委員の皆さまをはじめ、あらゆる立場で本事業に携わってくださった国内国外の多くの関係者の皆さまに篤く御礼を申し上げます。

スーパーグローバルハイスクール研究報告書目次

長野県上田高等学校

巻頭言　　学校長　廣田 昌彦

目次

Ⅰ　ＳＧＨ研究開発の概要
ＳＧＨ職員指導体制 1
ＳＧＨ研究開発完了報告書 2

Ⅱ　課題研究
ＳＧＨ概要　課題研究編 19
グローバルスタディⅠ国際理解講演会 22
グローバルスタディⅠ長野県内フィールドワーク（日帰り８コース） 23
グローバルスタディⅠJICA・ICAN国際理解教育「世界が百人の村だったら」 28
グローバルスタディⅠ課題研究入門講座 29
グローバルスタディⅠＪＩＣＡ出前授業　青年海外協力隊ＯＢＯＧ講演会 30
グローバルスタディⅡ日本語課題研究 31
グローバルスタディⅡ首都圏フィールドワーク（１泊2日10コース） 35
グローバルスタディⅡ英語課題研究 41
グローバルスタディⅢ受講者ポートフォリオ 47
グローバルスタディⅢ北陸新幹線サミット 50
グローバルスタディⅠⅡⅢ課題研究評価方法 56

Ⅲ　海外研修・海外交流
３つの海外研修の概要 57
台湾新北市錦和高級中学・国立苗栗高級中学来校 58
台湾延平高級中学・台湾新民高級中学来校 59
2学年台湾研修旅行（台湾フィールドワーク・高校交流） 60
ボストンスタディツアー（昨年度） 66
フィリピンスタディツアー（昨年度） 69

Ⅳ　研究発表
ＳＧＨ概要　研究発表編 74
松尾ゼミナール 75
第１回アカデミックプレゼンテーション・NAGANO英語プレゼンテーション大会 76
「こんにちは県議会です」・長野県高校生「私のプロジェクト」発表大会 77
筑波大学附属坂戸高等学校国債ＥＳＤシンポジウム・七尾高等学校ＳＳＨ・ＮＳＨ成果発表会 78
全国高校生フォーラム・立教大学関東甲信越静地区高校生探究学習発表会 79
シニア大学・ＳＧＨ甲子園（昨年度） 80
留学フェローシップ 81
長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会 82
授業のＳＧＨ化（アクティブラーニング）及び教職員研修 88

Ⅴ　評価と考察
ＳＧＨに関する生徒アンケート分析と考察 90
ＳＧＨに関するＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ分析と考察 96
ＳＧＨに関する教職員アンケート分析と考察 98
ＳＧＨに関する保護者アンケート分析と考察 101
ＳＧＨに関する英語能力の分析と考察 102
長野県ＳＧＨ運営指導委員会・議事録 104
ＳＧＨ活動の自己評価と課題 113
５年間の活動における意識調査と実態調査のデータ推移 114

Ⅵ　関係資料
教育課程表 116
令和元年度ＳＧＨ研究開発活動 117

Ⅰ　ＳＧＨ研究開発の概要　　ＳＧＨ事業の教職員指導体制

ＳＧＨ係と各学年全職員と連携して、ＳＧＨ行事を推進
学習指導係・学習指導係・進路係・ＳＧＨ係が協力し、全学年職員と連携して実行

長野県教育委員会 ←指導← 長野県ＳＧＨ運営指導委員会

↓ 指導 ↓

長野県上田高等学校
学校長　廣田昌彦

↓ 指導 ↓

学習指導係		宮下美和
海外交流アドバイザー		直井　恵
ＳＧＨ事務職員		松井恵子
ＳＧＨ会計	事務長	小山　隆

ＳＧＨ係会（毎週月曜日）　※ＳＧＨ業務の企画運営反省

教頭　柳沢忠男　　○は各担当責任者

ＳＧＨ係（８名）　※校務分掌上の係に位置づけられ、各教科を母体として選出

地歴	○ 白鳥敏秀	ＧＳⅠ○	ＧＳⅢ	１学年○
	長野県内フィールドワーク	北陸新幹線サミット（ＨＳＳ）		
	フィリピンスタディツアー	ＮＧＯアイキャン連携	ＳＧＨ通信	
	ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ	ＲＥＳＡＳ	「信州学」推進	
	★課題研究人権ジェンダー・ビジネス都市カテゴリー指導主任　長野県立大学、上智大学連携			
情報	小林まゆ子	ＧＳⅡＪ○	ＧＳⅢ	２学年○
数学	ＩＣＴ○	首都圏フィールドワーク	職員研修	授業評価　授業のＳＧＨ化
	フィリピンスタディツアー	ユニセフ連携	アクティブラーニング	
	★課題研究子どもスポーツ、国際協力カテゴリー指導主任　慶応大学連携			
英語	髙野芙美	ＧＳⅡＥ	２学年	
	海外留学・海外進学	外部英語検定	台湾研修旅行○	
	ボストンスタディツアー	東京外国語大学連携		
	★課題研究保健・医療カテゴリー指導主任　佐久総合病院、佐久大学連携			
国語	松田大輝	ＧＳⅢ○	３学年	
	ＩＣＴ○	職員研修	学力向上	授業評価　早稲田大学連携
	★課題研究歴史アートカテゴリー指導主任			
理科	塩澤一成	ＧＳⅡＪ	２学年	
	長野県内フィールドワーク	信州大学、筑波大学、ＪＡＸＡ連携	ＳＧＨ報告会	
	★課題研究生命情報・テクノロジーカテゴリー指導主任			
英語	西村晃洋	海外留学・海外進学	２学年	
	海外高校交流事業	長野ビジネス外語カレッジ連携	英語コミュニケーション能力向上	
	★課題研究食と防災カテゴリー指導主任	ＳＧＨ生徒作品集編集		
ＧＩ	サッビ・トパール	ＧＳⅡＥ○	ＧＳⅢ○	２学年
	英語website	台湾事前学習○	英語コミュニーション能力向上	
	★課題研究国際協力カテゴリー指導主任			

※ＧＩ：グローバル講師

↓　↑　ＳＧＨ事業を連携して推進

	２学年会　ＳＧＨ係　小林まゆ子				課題研究指導カテゴリー
英語	木村　貴峰	ＧＳⅡ	台湾高校交流	２年	人権ジェンダーカテゴリー
数学	佐藤　稜花	ＧＳⅡ		２年	テクノロジーカテゴリー
数学 ○	島﨑　邦明	ＧＳⅡ		２年	環境生命カテゴリー
理科	塩澤　一成	ＧＳⅡ	SGH担当、台湾研修旅行○	２年	テクノロジーカテゴリー
家庭	山田　純子	ＧＳⅡ		２年	ビジネス都市カテゴリー
国語	中澤　東樹	ＧＳⅡ	進路指導担当	２年	歴史アートカテゴリー
英語	太田　理沙	ＧＳⅡ	キャリア教育担当、台湾高校交流○	２年	国際協力カテゴリー
地歴	甲田　泰広	ＧＳⅡ	進路指導担当	２年	食と防災カテゴリー
	１学年会　ＳＧＨ係　白鳥敏秀				課題研究指導カテゴリー
国語 ○	百瀬　慎一	ＧＳⅠ		１年	ビジネス都市カテゴリー
保体	中島　拓磨	ＧＳⅠ		１年	子どもスポーツカテゴリー
理科	気賀沢　洋司	ＧＳⅠ	進路指導担当	１年	環境生命カテゴリー
数学	小坂　祐貴	ＧＳⅠ	キャリア教育担当	１年	テクノロジーカテゴリー
数学	横山　祐介	ＧＳⅠ	台湾研修旅行○	１年	テクノロジーカテゴリー
地歴	桐山　彩織	ＧＳⅠ	進路指導担当	１年	保健医療カテゴリー
英語	坂下　朋子	ＧＳⅠ	台湾高校交流	１年	国際理解カテゴリー
英語	藤沢　衛	ＧＳⅠ	SGH担当、台湾高校交流○	１年	国際協力カテゴリー

（別紙様式３）

令和２年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　長野県長野市南長野幅下 692－１
管理機関名　長野県教育委員会
代表者名　　原　山　　隆　一　　印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
平成３１年４月１日（契約締結日）～令和２年３月３１日

２　指定校名
学校名　　長野県上田高等学校
学校長名　　廣田　昌彦

３　研究開発名
長寿県 NAGANO から世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成

４　研究開発概要
長寿県 NAGANO が世界に誇る「いのち・健康」に関わる課題研究をすすめ、その研究成果を発信するためにフィリピン、アメリカや台湾への海外研修を実施する中で、自律的・協働的な 21 世紀型スキルを育成する生徒全員参加型の教育課程の研究開発を行う。

５　管理機関の取組・支援実績
（１）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①運営指導委員会 ②探究的な学び研究会 ③SH 校ﾌｫｰﾗﾑ					①ア	②		①イ ③			①ウ	
④SGH 校取組紹介	←											→
⑤ICT 環境整備	←											→
⑥外国人配置	←											→

（２）実績の説明

① SGH 運営指導委員会：SGH 関連授業参観、取組の概要説明、意見交換及び指導

ア　第１回 令和元年８月５日(月)(於:上田高等学校)

イ　第２回 令和元年 11 月 18 日(月)(於:上田高等学校)

ウ　第３回 令和２年２月８日(土)(於:上田市文化センター)

② 「探究的な学び」研究会：令和元年９月３日(火)(於：長野県総合教育センター)

新学習指導要領の先行実施により、本年度から「総合的な探究の時間」が実施されていることを受け、各校の探究をさらに深めるため、長野県内の高校の取組の実践を紹介し、効果的なカリキュラム編成に資することを目的に実施。

③ 「SH 校フォーラム」の開催　令和元年 11 月 15 日（金）（於：長野 TOIGO）

文部科学省事業指定（SGH、SSH、地域協働等）校の高等学校長を中心に構成する会議。分野を越えて、各パイロット校がその研究開発の成果を相互に報告・共有し、カリキュラム研究開発の水準をさらに高めるとともに、事業内容の向上を図った。

④ SGH 校取組の紹介：運営指導委員会についての広報、SGH 事業について県民への周知。

⑤ ICT 環境整備：全教室 ICT 環境整備　リース契約で約 400 万円支援

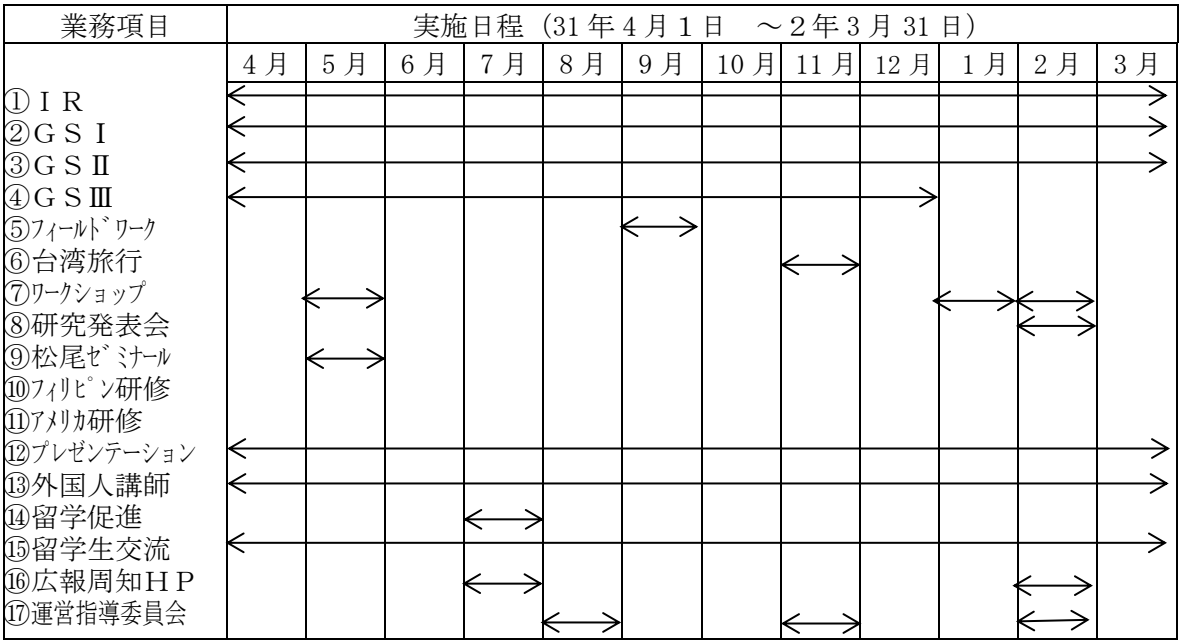
電子黒板及び実物投影機の普通教室への整備 ・探究学習用 PC42 台 ・WEB 会議システム１式 ・無線アクセスポイント２台

⑥ グローバル講師・ALT 配置　約 860 万円

ＡＬＴ１名に加え、高校で教えた経験のある外国人講師を１名　独自に雇用。

６　研究開発の実績

（１）実施日程



（２）実績の説明

① ＩＲ（国際関係論）［１年全員　３単位、学校設定科目］

・「世界史Ａ」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し、３単位で行った。

・地歴公民科の基礎知識を習得させグローバル課題の理解と考察を深めた。

・ＧＳＩと連携してグローバル課題についての背景まで含めた多角的な学習。

② ＧＳＩ（グローバルスタディⅠ）［１年全員　１単位、学校設定科目］

・「世界史Ａ」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し、１単位で行う。

・「ＩＲ」と「総合的な探究の時間」「英語」と科目横断・融合型授業を展開。
・課題研究の基礎となる学習。

③　ＧＳⅡ（グローバルスタディⅡ）［2年全員　２単位、学校設定科目］
・「社会と情報」２単位を学校設定科目とし再編成し実施。
・生徒個々の課題研究について、多角的に検討させ探究を深めた。
・共通の課題を持つ生徒同士がグループ学習を進めた。
・台湾研修旅行やＳＧＨ報告会を通して研究発表の実践的な取組を行った。

④　ＧＳⅢ（グローバルスタディⅢ）［3年希望者　１単位、学校設定科目］
・選択者は増加単位分として、放課後や休日などを利用して調査研究を行う。
・実情に即した政策提言でその影響評価まで含めて研究を行った。
・「北陸新幹線サミット」を主催。６月開催　参加者　167 名
・他のＳＧＨ指定校が主催する発表会でＳＧＨの取組の成果普及共有を図った。

⑤　フィールドワーク［１・２年全員］
ア　１学年県内フィールドワーク
・テーマ「国際理解」「長野県におけるいのちと健康」
・課題設定、情報収集、整理分析を目的に実施。事前にワークショップを行った。
・全８コースによる調査を実施
・実施後は、中間発表会及び、全体の報告会において研修内容を発表した。
イ　２学年　国内フィールドワーク及び海外フィールドワーク
・テーマ「世界におけるいのちと健康」
・国内フィールドワークは課題研究テーマに沿った全 11 コースで実施した。
・各地で、専門家や現地の学生や高校生との意見交換を行った。

⑥　海外フィールドワーク（台湾研修旅行）［２年生全員］
・テーマ「台湾と平和」「世界におけるいのちと健康」
・課題研究のテーマに沿った研修先で学習した。
・現地高校生との交流も行い、草の根レベルの国際交流を行った。

⑦　ワークショップ　［１・２年生徒対象］
・海外から研修旅行で来日した生徒との交流。（台湾から海外研修旅行４校を受入れ。）
・異文化理解の実践の場として、英語での積極的なコミュニケーションを図る。

⑧　課題研究発表会　［１・２年全員及び、３年生　卒業生　一般］
・課題研究の成果を２年生全員がポスターセッション形式で発表。
・ポスターセッションでは全員が英語でのプレゼンテーションを行う。
・講師、助言者として様々な分野での専門家やＳＧＨで学んだ卒業生を招聘。

⑨　松尾ゼミナール［全校生徒対象］
・グローバル課題をテーマに全員対象の講演会を行った。
・講演会の後、希望生徒による座談会を行った。

⑩　フィリピンスタディツアー［選抜者］
・ＮＰＯアイキャンが進める支援活動を学ぶための体験的なプログラム。
・ＮＰＯアイキャン、佐久総合病院国際保健医療科、ＪＩＣＡ長野デスク等と連携。
・海外進学アドバイザーや各種連携機関等と連携し事前学習を進めた。
・本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となった。

⑪　アメリカ研修　ボストンスタディーツアー［選抜者］
・世界最先端の治世に触れ、今後どのような学びが必要なのか理解する研修。
・各専門機関で、高校生がプレゼンテーションを行い、専門家から指導助言を受けるべく、事前学習をすすめた。
・本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となった。

⑫　校内外でのプレゼンテーション
ア　アカデミックプレゼンテーション［各学年希望者］

イ　Ｇ２０持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合
・６月 15 日（土）長野県軽井沢町で開催されたG20 で高校生代表として発表。
・「持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合」で、課題探究の成果を活かして野生生物の管理と地域の連携について政策提言を行った。
ウ　第１回 NAGANO 英語プレゼンテーション大会［選抜者］
・長野県立大学で９月 28 日（土）開催された大会に参加し研究発表を行った。
・発表テーマ「女性の社会進出について、上田市の母親の職場復帰を助ける子育て支援の在り方について考える。」
エ　生徒の主体性を育む、県議会における高校生との意見交換会［選抜者］
・長野県庁県議会等で行われた県会議員と高校生との意見交換会で発表。
・発表テーマ「牛丼が引き起こす水不足～長野県で飼料用米稲作を促進しよう～」
オ　長野県高校生『私のプロジェクト』発表大会　［選抜者］
・ＮＰＯ法人「カタリバ」が主催、「マイプロ全国大会」の県予選。
・本年度から長野県教育委員会主催で実施され、個人部門・学校部門共に入賞。
・個人部門は最優秀賞にあたる県知事賞を獲得し全国大会進出。
・学校部門もこれまでの自分たちの学びの成果が評価されベストラーナー賞を受賞。

⑬　ＡＬＴやＧＩ（グローバル講師）と連携した英語による授業の推進［全校生徒］
・外国人講師２名により、生徒たちの実践的な英語力の養成に努めた。
・プレゼンテーションやディスカッション等の実践的なプログラムの開発を行った。

⑭　海外留学の奨励　［各学年希望者］
ア　長野県教育委員会主催海外進学講座を本校で開催
・ＮＰＯ留学フェローシップと連携して開催。（毎年７月開催）
・海外で学ぶ日本人大学生によるセミナー形式で海外留学の方法や研究を紹介。
・関心のある高校生 23 名が参加。世界で学ぶことの意義をワークショップで考えた。
イ　トビタテ留学！JAPAN（官民協働海外留学支援制度）の活用に努めた。
ウ　ＨＬＡＢ　ＯＢＵＳＥには２名の参加者があった。
エ　上田市中央公民館、上田市多文化共生推進協会と連携し、在住外国人や留学生との交流を進めた。

⑮　留学生との交流［各学年希望者］
・フランスからの交換留学生を１年次に１年間受入れ。
・文化祭において長野ビジネス外語カレッジの留学生を招待し交流イベントを行った。
・２月 11 日(火)には、海外の様々な国からの留学生 24 名との交流を行った。

⑯　研究成果の普及について
・学校のＨＰでＳＧＨでの研究成果を紹介。
・地域の市民講座やフォーラム、および小中学校で取組事例を紹介した。
・県教委主催高校教員対象の探究的な学び研修会で先進的事例として取組を紹介。
・活動報告書を域内の全県立高等学校へ配布し、研究成果の周知を図った。
・文化祭でも各種ＳＧＨの取組を発表した。
・国内外から計４件の視察を受け入れ、本校の教育システムや授業改善を紹介した。

⑰　運営指導委員会の開催　（本報告集の「Ⅴ　評価と考察」に議事録を掲載）
管理機関主催で、以下のとおり年間３回の運営指導委員会を開催した。
ア　運営指導委員
委員長　　近藤誠一 氏（元文化庁長官・長野県文化振興事業団理事長）
副委員長　滝澤　正 氏（上智大学名誉教授）
委員　　赤池　学 氏（ユニバーサルデザイン総合研究所長）
大井恭子 氏（清泉女子大学教授）
金子元昭 氏（シナノケンシ株式会社社長）
中西　茂 氏（玉川大学教授）

イ　第１回　　令和元年８月５日(月)(於:上田高等学校)
○主な報告内容
本年度の課題について、北陸新幹線サミットの成果、ＧＳⅢ課題研究発表代表２名
「若者の政治参加意識を高める。選挙に行こう！」「地域の観光産業の振興について」
ウ　第２回 令和元年 11 月 15 日(月)(於:上田高等学校)
○主な報告内容　本年度の取組、生徒の能力育成について、来年度以降の取組について
エ　第３回 令和２年２月８日(土)(於:上田市文化センター)
○主な報告内容　本年度の成果と次年度以降への課題について

7　目標の進捗状況、成果、評価
（1）中間報告での指摘を受けての改善・対応状況
①　中間報告での指摘
中間報告では、研究開発に関わるそれぞれの取組に対する評価については、当初の目的を達成している高評価を受けたが、評価方法についての改善が必要であるとの指摘があった。
②　対応状況
生徒の活動を評価するために、探究的な活動の深まりを測るルーブリックを開発し使用した。課題研究の指導を全職員が担当する際に、指導の観点を明確に示し、それに基づいた評価を生徒にフィードバックした。生徒の能力開発における客観的なデータとしてはこれまでと同様、「ＧＰＳアカデミック」を採用し、継続的に生徒の能力の実態を把握し、校内で研究開発の改善について検討し指導方法の改善を図った。
（2）検証・評価方法　（詳細は次章以降のそれぞれの報告ページ参照）
①　取組ごとの評価
ア　生徒へのアンケートの実施
イ　教員・保護者対象のアンケートの実施
②　ＧＰＳアカデミックの実施
（3）研究開発の成果とその効果　（詳細は次章以降のそれぞれの報告ページ参照）

8「５年間の研究開発を終えて」
（1）教育課程の研究開発の状況について
教育課程の特例措置に関わる学校設定科目について
ＳＧＨの指定を受け、スーパーハイスクール事業の開発目標にあるグローバル・リーダーの育成に資する教育課程の研究開発を行うため、学校設定科目として以下、①から④の科目の開発を行った。
①　ＩＲ（国際関係論）［１年全員　３単位、学校設定科目］
「世界史Ａ」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し３単位で行った。地歴公民科の基礎知識を習得しながら、ＧＳＩと連携してグローバル課題について背景まで含めた多角的な学習を進めた。
【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】
高校入学直後から自らが生活する世界についてこれまで以上に国内外へ視野を拡大し、世界で発生している出来事をジブンゴトとして捉えられるよう生徒に考えさせる内容となるよう教科開発の工夫を行った。

②　ＧＳＩ（グローバルスタディⅠ）［１年全員　１単位、学校設定科目］
「世界史Ａ」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し１単位分をこの科目として行った。「ＩＲ」と「コミュニケーション英語Ⅰ」「総合的な学習の時間」を関連づけながら、科目横断・融合型授業をティーム・ティーチングも取り入れて展開し、課題研究を進めてきた。
【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】
「いのち・健康」をめぐる時事問題や県内の事象について、指定直後から従来の知識偏重の

詰込み型の学びからの脱却をテーマに、主体的・対話的で深い学びを実践的に進め、探究的な学びを講義、調査、フィールドワークを通じて現状を知り、生徒各自が課題設定し、共通の課題を持つ同士がグループを組んでその課題研究を深めることができた。解決策を含む研究成果についての発表会を討論形式で行った。

また、ＪＩＣＡ、ＮＰＯアイキャン等の協力で国際関係ワークショップを行った。

○主な取組

ア　国際理解教育　「ＳＤＧｓのこれまでとこれから」

5月30日(木)　講師　直井　恵　氏（海外交流アドバイザー）

ＳＤＧｓの各課題の理解を目的に、様々な国際課題の解決に向けて、今世界で起きている具体例を通して理解を深め、解決には先ず、物事の本質を知ることが重要であるということを理解した。特に、講演内で、スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんのスピーチが紹介され、生徒たちも同世代であるジェネレーションＺの若者が世界に向けて行動を起こしている実践を目の当たりにし自分たちも何ができるのかを考えるきっかけとなった。

イ　国際理解教育「世界が100人の村だったら」

10月3日(木)講師　竹内　岳　氏（ＪＩＣＡ長野デスク）
直井　恵　氏（海外交流アドバイザー）
西坂　幸　氏（ＮＧＯ法人アイキャン）

「世界が100人の村だったら」を下敷きにしたクラス毎に世界の現状を理解するためのワークショップを実施した後、全体会でＪＩＣＡ長野デスクの竹内岳さん、ＮＰＯアイキャンの西坂幸さん、本校海外交流アドバイザーでＮＰＯアイキャン代表の直井恵さんによる講演を通じて、世界の格差や国内にある格差についても考える機会とした。

ウ　課題研究

本校のＳＧＨ研究開発では、生徒全員が個人で課題研究を行うことを必須とし、１年次には前半で探究の進め方や、社会課題についての体験的なプログラムを通して研究の素地を整え、後半には各自がＳＤＧｓの解決の視点を持って課題研究のテーマを見出し、研究する。その中で、各自の研究の設計や見通しへの指導を学校全体の教員が手分けして個別指導を行った。

特に課題研究の指導では、課題発見から論文作成までの一連の流れをフローチャートに示し、初めて探究的な学びを行う生徒でも、研究が進められるようなガイダンスを行う。チャートには、自分が「どのような社会課題に問題意識を持ったのか。」「その解決策としてどのような仮説を立てたのか」「研究を進めるためには、どのようなアプローチや調査方法を採用するのか」「実際の調査には、どのような参考文献や情報を活用するのか」等を考えさせる。また、仮説に対する反対意見を自らで想定させ、「自分の研究の客観性」や「その解決策はＳＤＧｓのどのようなターゲットの課題解決に繋がるのか。」も当初から意識させる指導を行った。

さらに課題研究を充実したものとするために、これまで社会人講座として各界の最前線で活躍する同窓生を講師として招き、キャリアガイダンス学習として行ってきた企画を、探究的な学びの要素を加え、課題研究の入門講座としてリニューアルして分科会方式で行った。分科会のカテゴリーは次の通り。

	カテゴリー	講師名	タイトル
①	人権・ジェンダー	岩下智太郎	ジェンダーと人権　～弁護士の視点から～
②	歴史・アート	高松　寿夫	『万葉集』―「令和」の典拠
③	農業・資源	吉川　友二	酪農・第一次産業が環境保護に果たす役割
④	ビジネス・都市	荻原　靖	企業の社会的役割とは何か？
⑤	平和・貧困・国際協力	瀧澤　郁雄	健康を守る国際協力
⑥	子ども・スポーツ	竹鼻ゆかり	子どものこころとからだのサインを知ろう

⑦	生命・情報	井出　浩一	情報通信技術の動向とそれが実現される時代に向けて
⑧	医療	吉澤　要	日本の医療・社会保障の現状と課題
⑨	保健	中田　覚子	看護の魅力、そして看護職に求められる役割
⑩	テクノロジー①	渡邉　博	イノベーションを起こそう！
⑪	テクノロジー②	中沢　信明	カメラを用いた非接触型インタフェースの開発
⑫	地方創生	浜村　圭一	まちづくり・むらおこしの勘所

エ　探究的な学びスキルの習得

課題研究をまとめる上で、ＩＣＴ機器の運用スキルやプレゼンテーションの方法などを身に付け、協働的に学ぶ能力の養成を行った。プレゼンテーションの場として、国際理解教育のワークショップのまとめや、フィールドワークのレポートを行う中間発表会、課題研究の１年次の報告を行うＳＧＨ報告会を企画した。

年間指導計画

教科名	SGH	科目	GS Ⅰ(グローバルスタディⅠ)	単位数	1	履修年	1

学習進度計画

学期・月		学　習　内　容	時間数	学　習　の　ポ　イ　ン　ト
前期	4	ＩＣＴ機器スキルの習得 グローバル課題の理解	3	・近年の国内外の政治,経済上のグローバル課題を１つ取り上げ，レポートを作成する。
	5	ＩＣＴ機器スキルの習得 国際理解教育	3	・前月のレポートに基づいてパワーポイントファイルを作成し，プレゼンテーションを行う。
	6	ＤＤＰスキルの習得 国際理解教育	3	・プレゼンテーション以外にもテーマ討論等に取り組むことにより，ディベート，ディスカッション，プレゼンテーション能力の向上に努める。
	7		2	
	8	フィールドワーク事前学習	2	・「総合的な学習の時間」枠内で実施する「社会講座」（同窓会主催）とフィールドワーク（８コースから選択する県内バス研修)に関連した学習を通じて進路意識を涵養するとともに,秋以降の課題研究の土台とする。終了後は自ら課題を設定してパワーポイントファイルを作成し,プレゼンテーションを行う。
	9	フィールドワーク事前学習 フィールドワーク事後学習	3	
後期	10	フィールドワーク事後学習 ＧＳＩ中間発表会 課題研究入門	4	
	11	課題研究入門 主に日本語レポートの作成と発表	3	・各自の進路目標とも連動させて,自らテーマを設定し，課題研究に取り組む。
	12		3	
	1	課題研究 主に英語レポートの作成と発表	3	・「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業と連携しつつ，英語レポートの土台を作る。
	2	ＳＧＨ研究報告会 ＪＩＣＡ出前授業青年海外協力隊ＯＢＯＧ講演会	3	・外部に向けフィールドワークの成果や自らの課題研究を発表する。
	3	課題研究報告書作成	2	・発表への評価を基に１年間の総括を行い，２年次の「ＧＳⅡ」への土台とする。

③　ＧＳⅡ（グローバルスタディⅡ）［２年全員　２単位、学校設定科目］

「社会と情報」２単位を学校設定科目とし再編成し実施した。ＧＳＩの成果を発展させ、「いのち・健康」に関する共通の課題を持つ生徒同士がグループ課題研究を進める。

【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】

課題研究の中間の成果を台湾研修旅行にて発表し、現地の高校生と議論を行った。その後、それぞれが課題解決策を含む研究成果をまとめ、２月のＳＧＨ課題研究発表会でポスターセッション及び討論会形式で実施した。

また、研究成果を英語で発表できるように年間を通じて実践的なプレゼンテーションの方法やディスカッションの方法を学び、海外フィールドワークや現地の高校生との交流会では英語を用いてコミュニケーションをし、ＳＧＨ報告会のポスターセッションで全員が英語での説明を加え質疑応答も行うことで、英語の実践力も養成した。

○主な取組

ア　課題研究（ＧＳⅡ―Ｊ：２単位のうち１単位分）

課題研究の発展的な研究、研究を深めるための首都圏フィールドワークや台湾研修旅行での発表やディスカッションを通し、各自論文をまとめた。

イ　英語での探究的な学び（ＧＳⅡ―Ｅ：２単位のうち１単位分）

外国人のグローバルインストラクターと日本人の教員で担当。

英語でのコミュニケーション能力の獲得を目指し「自己紹介」「ディベート」「プレゼンテーション」「レポート作成」等の基本を協働的、対話的に学んだ。

ウ　中間発表会　ポスターセッション　7月 29 日(土) 本校の体験入学の企画

中学生や保護者、中学校の教員を対象に、課題研究についてポスターセッション・質疑応答を行い、プレゼンテーションスキルを養成するとともに、研究の見直しや軌道修正のヒントを得た。

年間授業計画

教科名	SGH	科目	GSⅡJ(グローバルスタディⅡJ)	単位数	1	履修年	2

学習進度計画

学期・月		学　習　内　容	時間数	学　習　の　ポ　イ　ン　ト
前期	4	課題研究テーマの確認・課題研究	3	・課題研究の日本語レポート作成。 ・ICT スキル、モラルの学習。
	5	課題研究・課題研究テーマの再設定	3	・レポートの完成。発表に向けて、テーマの再考察。
	6	課題研究(スライド作成)	3	・レポートからプレゼンテーションに起こす。 ・研究手法を考える　先生方より助言を頂く。
	7		2	
	8	フィールドワーク事前学習	2	・フィールドワークに関連した学習を通じて進路意識を涵養する。自己の課題研究に照らし合わせて、関連のあるフィールドワークを行う。終了後は自ら課題を設定してパワーポイントファイルを作成し，プレゼンテーションを行う。その際、ＳＤＧｓと関連させて考える。
	9	フィールドワーク事前学習 フィールドワーク事後学習	3	
後期	10	台湾研修旅行事前学習 台湾研修旅行事後学習	4	・日本との共通点や違い、自分の課題研究との関連などに着目して調べる。また、実際に行って感じた事も大切にする。「GSⅡE」の授業と連携する。
	11		3	
	12		3	

	1	課題研究まとめ	3	・「GSⅡE」の授業と連携しつつ，英語レポートとともに自分の課題研究をまとめる。
	2	SGH 報告会	3	・内外に向けフィールドワークの成果や自らの課題研究を発表し、助言をいただく。
	3	課題研究報告書作成	2	・学習の年間総括を行い，キャリアに結びつける。

教科名	SGH	科目	GSⅡE（グローバルスタディⅡ-E）	単位数	1	履修年	2

学期・月		学 習 内 容	時間数	学 習 の ポ イ ン ト
前期	4	Presentation Skill Level Up Project - Self-Introduction Presentation - A Trip to Ueda Crit. Thinking Presentation	7	・Make a short self-introduction presentations with visual aids, all in English ・Use critical thinking skills to research Ueda City and create a trip tailored to a specific target audience. ・Make a pair presentation to share your plan with classmates.
	5			
	6	Logic and Debate Project - Logical Organization - Persuasive Rhetoric - Impromptu Team Debates	7	・Construct logical arguments in English. ・Develop their research and source- verification skills ・Write short logical argumentative speeches ・Study parliamentary debate techniques and participate in simple classroom debates in small groups
	7			
	8	Taiwan School Exchange Project - Research - Presentations - Discussions - Exchange	10	・Study effective presentation elements ・Plan and create presentations based on fieldwork and individual research projects ・Develop communication techniques for presentations and discussion ・Design discussion questions and formats ・Hold presentations and discussions for classmates
	9			
後期	10			
	11			
	12	Taiwan Trip Report	4	・Record experiences and observations from the school exchange and Taiwan fieldwork
	1	Independent Research Project - Research Showcase English Speech - Research Project English Summary	4	・Prepare English speeches for the Independent Research Project Showcase event
	2		2	・Compose and revise a short summary of Independent Research Project topic
	3			

④　ＧＳⅢ（グローバルスタディⅢ）［３年希望者　１単位、学校設定科目］

選択者は増加単位分として、放課後や休日などを利用して調査研究を行い、実際の政策提言となるように研究を行った。

【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】

指定以来、グローバル・リーダー育成を目指し、２年生までに取り組んだ学びを応用し、研究を進めることで、真の学力の更なる獲得の支援を行うことができた。

特に、生徒たちは学びを進める中で、二次的情報の収集のみで研究を行うのではなく、自らの力で一次的情報を求め、調査研究を行い、高校卒業後も必要となる研究のスキルを身につけることができた。また、本校主催の「北陸新幹線サミット」や他のＳＧＨ指定校が主催する各種発表会等のイベントや集まりでＳＧＨの取組の成果普及、共有を図った。

○主な取組

ア　北陸新幹線サミット

６月 22 日(土)に本校が主催し、北陸新幹線沿線ＳＧＨ指定校や県内のＳＨ校の生徒を招き分野別に課題研究発表会を実施した。

当日は、国際協力機構（ＪＩＣＡ）人間開発部次長 瀧澤郁雄氏から「世界の健康を守る：グローバルヘルスと国際協力」と題した基調講演をいただき、その後テーマ別６分科会形式で政策提言型のプレゼンテーションや高校生同士のディスカッションを行った。

特に英語によるプレゼンテーション能力の向上を目的として、サミットでは他校の参加者とともに英語のプレゼンテーション及びディスカッションを行う分科会を設け、お互いに研鑽を積んだ。

各分科会においてはプレゼンテーション 10 分間の後、グループディスカッション 15 分間行い、専門分野の講師３名から助言をいただいた。長野県教育委員会や長野県総合教育センター、長野県立大学やＪＩＣＡ本部、佐久総合病院、ＮＧＯ・ＮＰＯ法人等から外部指導者として招聘した。

また、これまでのＳＧＨ活動の成果を普及させるため一般に広く公開し、県内外から多くの視察者を迎えた。運営にはＪＲ東日本長野支社の後援をいただき参加者の歓迎ムードを高めてもらった。

○各分科会のテーマ

分科会Ⅰ　「信州発いのち健康フォーラム」
分科会Ⅱ　「地域課題から地域創生を提言①②」
分科会Ⅲ　「グローバル課題から解決策を提言①②」
分科会Ⅳ　「グローバル課題から解決策を英語で提言」

○参加校

県外　筑波大学附属坂戸高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校、
新潟県立国際情報高等学校、石川県金沢大学付属高等学校、石川県立七尾高等学校
県内　長野県飯山高等学校、長野県長野高等学校、長野県屋代高等学校、
長野県篠ノ井高等学校、長野県上田高等学校

○参加者数　来校高校生 69 名、引率教員 20 名、講師来賓 18 名、一般参加 17 名、
本校生徒 29 名、校内運営教員 14 名、　計 167 名

総合的探究の時間での学び

①　フィールドワーク　［１・２年全員］

ア　１学年テーマ「国際理解」「長野県におけるいのちと健康」

県内フィールドワークのための課題設定、情報収集、整理分析を行い、９月 12 日(水)全８コースによる調査実施後、クラスでワークショップや討論を行い、その成果を中間発表会やＳＧＨ報告会において発表した。

○各コース及び講師一覧

Ａ　環境・生命（いのち・健康を、食と農業と自然環境を通じて考える）
ＮＰＯ法人　ピッキオ　井上　基 氏　他　フィールドワーク
Ｂ　国際理解（いのち・健康を、国際理解と歴史文化を通じて考える）
長野県立大学グローバルマネジメント学部　森本博行 教授　講義及び演習
亀清旅館　タイラー・リンチ 氏　他１名　ワークショップ
Ｃ　ビジネス・都市（いのち・健康を、まちづくり、海外発信を通じて考える）
長野県立大学グローバルマネジメント学部　大室悦賀 教授　　ワークショップ
小布施町役場　大宮　透 氏、間瀬海太 氏、平岡　駿 氏　フィールドワーク
Ｄ　国際協力（いのち・健康を、国際協力、多文化共生を通じて考える）
塩尻市　コレージオ・ロゴス　小松崎キミヨ 校長　取材・交流体験

ＪＩＣＡ駒ケ根青年海外協力隊訓練所　岡田妙子 氏　サヤミ 氏　語学研修
Ｅ　子ども・スポーツ（いのち・健康を、教育問題、スポーツ振興を通じて考える）
ＡＣ長野パルセイロ　堀江三定 社長、大橋良隆 氏　講義・ワークショップ
青木村立児童センター　沓掛英明 教育長、高田玲子 所長　講義・演習
Ｆ　保健・医療（いのち・健康を、長寿を支える保健福祉活動を通じて考える）
佐久総合病院　佐久医療センター　北澤彰浩 医師　講義・ワークショップ
佐久大学　二神真理子 助教、金古吉美 氏　講義・ワークショップ
Ｇ　化学・材料（いのち・健康を、化学材料と医薬品開発を通じて考える）
信州大学繊維学部　本吉谷二郎 特任教授　講義・演習
寿製薬株式会社　冨山　泰 社長、小出智和 氏　講義・見学
Ｈ　テクノロジー（いのち・健康を、長寿を支えるテクノロジーを通じて考える）
信州大学工学部　遠藤守信 特任教授　講義
シナノケンシ株式会社　小野塚明葉 氏　講義・見学

イ　２学年テーマ「世界におけるいのちと健康」

課題研究テーマに沿った全 11 コースによる国内フィールドワークを９月 11 日(水)～12 日(木)に実施した。

各コース一覧

Ａ　食と防災（いのち・健康を、震災復興と地域づくりを通じて考える）
１日目　ベレッシュ（農業法人）、福島県立ふたば未来学園高等学校
２日目　いわき市観光復興防災支援センター
Ｂ　国際協力（いのち・健康を、国際機関と国連大学交流を通じて考える）
１日目　東京外国語大学
２日目　国際連合大学、ＪＩＣＡ市ヶ谷地球ひろば
Ｃ　歴史・アート（いのち・健康を日本の歴史と芸術文化を通じて考える）
１日目　早稲田大学文化構想学部、東京ジャーミイ・トルコ文化センター
２日目　国立歴史民俗博物館
Ｄ　人権・ジェンダー（いのち・健康を、法律と人権、現代政治を通じて考える）
１日目　上智大学法学部・法科大学院
２日目　憲政記念館、最高裁判所、ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾂｳｫｯﾁ、日本弁護士連合会
Ｅ　ビジネス・都市（いのち・健康を、経済活動と都市活動を通じて考える）
１日目　東京証券取引所
２日目　立教大学経済学部
Ｆ　子ども・次世代（いのち・健康を、教育問題・多文化共生を通じて考える）
１日目　慶應義塾大学総合政策学部
２日目　アクション、東京学芸大学附属国際中等教育学校
Ｇ　保健・医療（いのち・健康を、長寿を支える保健福祉活動を通じて考える）
１日目　日本赤十字血液センター、国際医療協力局
２日目　国際医療福祉大学成田キャンパス医学科コース、看護・理学療法コース
Ｈ　環境・生命（いのち・健康を、生命科学と健康と薬品を通じて考える）
１日目　筑波大学国際統合睡眠医科学機構
２日目　昭和大学薬学部
Ｉ　テクノロジー（いのち・健康を、長寿を支える科学技術を通じて考える）
１日目　筑波大学プラズマ研究センター
２日目　産業技術総合研究所
Ｊ　テクノロジー（いのち・健康を、長寿を支える科学技術を通じて考える）
１日目　理化学研究所　ＲＩＫＥＮ
２日目　上智大学理工学部

② 台湾研修旅行 ［２年生全員］

11 月 26 日(月)～30 日(金)で行われた台湾研修旅行では、台湾をフィールドとした平和や「いのち・健康」に関する学習及び、現地高校生との意見交換を行った。

ＧＳⅡ課題研究のフィールドとして、交流の深い台湾を研修旅行の場として選定し、課題研究テーマに従い、グローバル課題について意見交換とテーマに沿ったフィールドワークを実施した。

台湾と日本との間に共通する社会課題（ＩＴ化、高齢化問題や男女共同参画社会等の課題）について地元の大学や医療機関・日本から進出している企業等を訪問し、台湾の実情を見聞したり、自分たちの考えを発表したりした。

また、最終日には、私立新竹曙光・國立新竹女子・國立新竹高級商業職業学校・國立科学工業園区実験の４校の高級中学を、分かれて訪問し、日本に関わるプレゼンテーションや現地高校生との文化交流を体験した。

○フィールドワーク先

Ａ 外交・国際協力コース
研修場所 國立臺灣師範大學國語教學センター、
公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所

Ｂ 観光行政コース
研修場所 國立臺灣師範大學國語教學センター、台北市政府觀光傳播局

Ｃ 歴史藝術コース
研修場所 中華民国総統府、國立故宮博物院、二二八紀念館、華山 1914 文創区

Ｄ ビジネス都市コース
研修場所 國立臺灣師範大學國語教學センター
六福客棧、剥皮寮歷史地区、東三水街市場、點水樓小籠包製作体験

Ｅ 教育子どもコース
研修場所 臺北市士林区福林國民小學、臺北市立大學

Ｆ 保健医療コース
研修場所 臺北榮民總醫院、詣居日間照雇中心、淡水義山公托老中心

Ｇ 自然環境コース
研修場所 野柳地質公園、淡水紅毛城、漁磯埠頭、淡水老街

Ｈ 産業技術コース
研修場所 科達製薬股分有限公司、大溪老街、大溪老茶廠、八徳路電脳街

③ ＧＳＩ・Ⅱ課題研究発表会 ［１・２年生全員］

２月８日(土)上田市文化センターを会場に、探求的な学びの総まとめとして発表会を行った。長野県教育委員会の高校改革推進参与の内堀繁利先生による基調講演の後、２学年・１学年で優秀な研究を行った代表者によるプレゼンテーションやＳＧＨ卒業生によるプレゼンテーション及び本校職員による模範プレゼンテーション及び、２学年全員による各自課題研究についてのポスターセッションを行った。各発表に対して生徒たちからもたくさんの質問が出され、活発な質疑応答があった。充実した報告会となった。

【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】

本校の課題研究は、全員が個人課題に取り組む方式で進めてきた。２年間の研究の集大成として、この発表会で全員が英語と日本語の両方で発表を行うよう指導した。

特に、ポスターセッションの分科会は課題研究のカテゴリー別に同じような系統の生徒が集まるグループ編成をし、背景知識を有する生徒同士が集まっているので、プレゼンテーションの後の討論の場面でも、ディスカッションが簡単に成立しやすいように工夫した。また、各会場には専門分野の講師や校内の教員を複数名、助言者として迎え、また全員が発表の冒頭で行う英語の発表部分に対しても、英語で指導助言をしてもらえるよう県内の高等学校や中学校に勤務するＡＬＴや英語教員を多く招いた。こうした工夫が功を奏し、発表を見た後の質疑応答や研究に対する改善点についても互いにアドバイスし合うことができた。

④　松尾ゼミナール［全校講演会］

グローバルな課題をテーマとして、全校生徒を対象に報告会と講演会を兼ねたゼミナールを実施した。毎回、課題研究に関する意識とキャリア意識が融合的に高まるような工夫を行い、本年度は５月 23 日(木)、佐久総合病院佐久医療センター小児科医長国際医療部長蓮見純平氏による「世界は遠いか？　Think globally, act locally の考え方」と題した講演を行った。講演では、ジンバブエでの海外青年協力隊での体験の後、小児科医を志した先生の経験を聞いた。「世界に関わろうとすれば世界は近い。遠いか近いかは皆さん次第なので、世界の一員として世界と関わっているという自覚を持って生きていくことが大切である」というメッセージを生徒たちは真剣に受け止めた。

また、講演会後に、講師と希望者で、講演会の内容や自らの研究に関わることやキャリアデザインに関わる質問や講師との意見交換を行い、更に学びを深めることができた。

特別活動等での学び

①　フィリピン・スタディツアー　［選抜者］

【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】

指定以来、フィリピンでストリートチルドレンの支援を行っているＮＰＯアイキャンの活動に参加し、実際に現地の子供たちとの交流を通じて、社会における格差の現状や格差が引き起こす課題、ひいてはフィリピン国内の社会的課題を学んだり、支援の在り方自体について考えたりする機会を得る。子供の支援以外にも公的機関や病院も訪れ、事前学習に学習していたプレゼンテーションも行った。

出発まで準備の段階でＮＰＯアイキャンや佐久総合病院国際保健医療科、ＪＩＣＡ長野デスクと連携して事前学習を進め充実した研修となった。

本年度は、３月 15 日(日)に出発の予定で、準備を進めてきた。残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となったが、体験的に学ぶこのようなプログラムは、感受性豊かな青年期の生徒たちにとっては大きな財産となることを確信している。

帰国後、プログラムに参加した多くの生徒たちは、社会に存在する格差について従前の教科書で学んだ知識のみ理解にとどまらず、自分たちで行える支援の形を模索し、数種の発展的・実践的な課題研究に繋げられている。中でも、帰国後のツアー参加者が中心となって立ち上げたカンボジアでの上水道インフラが脆弱な地域の人々に、井戸を贈る「カンボジア井戸プロジェクト」は、自主的に校内外で広く寄付金を募り、集めた資金をもって実際に現地に赴き井戸を建設する活動を行い、継続的にその活動を広く周知することに努める活動が始まったり、自らの住む地域にも格差による貧困が存在することに気が付き、地域の子ども食堂に通う生徒への「学習支援」を行うボランティア活動を立ち上げる生徒たちが生まれてきたりしていることは、本校のＳＧＨ活動が目指す、一人ひとりのいのちや健康をささえることのできるグローバル・リーダーの育成が順調に進んでいる証であると思われる。

②　ボストンスタディーツアー研修　［選抜者］

世界の地の最先端に触れるため、アメリカ合衆国ボストンを訪問し、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学の研究室や関連施設で教授や大学院生にプレゼンテーションを行い、問題について討論をした後、専門家から指導助言を受け、各自の課題研究の参考にした。また、パインマナーカレッジの外国人用学生寮で宿泊し、外国人向けの英語研修を受講したり、ボストン市内の美術館等の文化施設を訪問したりし、英語学習の実践的なトレーニングを行った。

３月 16 日(月)からに出発の予定で、準備を進めてきた。残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となったが、参加予定の生徒は、約４か月間の事前学習を行い、プレゼンテーションの準備を行い、充実した準備ができた。

【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】

昨年度、研修に参加した生徒たちは、研修で学んだことを踏まえ、それぞれの課題研究の充実を図り研究を仕上げた。

本年度も７月 22 日（月）には県教育委員会主催の海外研修報告会で英語による研修内容のプレゼンテーションを行ったり、６月に開催されたＧ２０で高校生代表として環境保全に対する提言をしたりしている。

また、これまで本研修に参加した生徒は、研修内容で学んだ内容に加え、各自のキャリアデザインを検討する際にも、グローバルな視点を持って、自らのキャリアを考える際の参考とすることができた。こうした点からも、本研修プログラムは、生徒たちに学びのフィールドは国内のみにとどまらず、世界基準で学ぶことを気が付かせるきっかけとなる点でも教育的な効果が高いと言える。

③　校内外でのプレゼンテーション

【グローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫】

これからの日本の教育で求められる真の学力の養成には、自らの考えや主張を適切に相手に伝え、周囲と協働的に物事を進めていける力の養成も重要なポイントとなる。この点からも、本校のＳＧＨ活動では、様々な機会を積極的に活用し、生徒のプレゼンテーション能力や協働的に学ぶ姿勢の涵養に努めた。

主な取組

ア　アカデミックプレゼンテーション

海外研修や校外のグローバルに関わる催しに参加した生徒を中心に、研修報告会を実施し、聴衆との意見交換を行うことで、自分たちの研究成果やＳＧＨ事業の成果普及をはかった。

本年度は４月 13 日(土)に行い、管理機関である長野県教育委員会学びの改革支援課から２名の講師を迎え「フィリピンスタディーツアー報告」「ボストンスタディーツアー報告」「カンボジア井戸プロジェクト報告」「オーストリア室内楽芸術研修」などのプレゼンテーションが行われた。報告会は一般にも公開し、全内容を地元のテレビ局で番組として放映された。

イ「持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合」

６月 15 日（土）に長野県軽井沢町で開催されたG20「持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合」で、課題探究の成果を活かして野生生物の管理と地域の連携について政策提言を行った。

発表者は、本校の海外研修ボストンスタディーツアーに参加し、帰国後も研修を活かし英語でのプレゼンテーションの技術も研鑽を重ねた。

ウ　第１回 NAGANO 英語プレゼンテーション大会

９月 28 日（土）長野県立大学で開催された大会で「女性の社会進出について、上田市の母親の職場復帰を助ける子育て支援の在り方について考える。」と題したプレゼンテーションを行った。

エ　「生徒の主体性を育む、県議会における高校生との意見交換会」

12 月５日（木）長野県庁県議会等で行われた県会議員と高校生との意見交換会で、「牛丼が引き起こす水不足～長野県で飼料用米稲作を促進しよう～」と題し、研究発表を行った。出場生徒は、夏季休業中に自主的に「Future Global Leaders Camp 2019」（大阪大学主催）に参加したほか、11 月 23 日の予選を突破して本行事に臨んだ。当日は本生徒のプレゼンテーションの評価も高かったが、探究活動を通じた社会への参与意識を育むことも目標とされており、参加高校生による県議会傍聴や、議員も交えてのディスカッションも行われ、高校生たちが県政を身近に感じ、当事者意識を高める機会となった。

オ　長野県高校生『私のプロジェクト』発表大会

12 月 14 日（土）15 日（日）長野県総合教育センター及び、長野県塩尻志学館高等学校にて開催された。ＮＰＯ法人「カタリバ」が主催し、高校生自身の学びの成果を発表する「マイプロ全国大会」の県予選が、本年度から長野県教育委員会主催で実施され、個人部門、学校部門ともに予選ラウンドを通過し、決勝ラウンドでは個人部門で最優秀賞にあたる県知事

賞を獲得し全国大会への切符を手にした。また、学校部門もこれまでの自分たちの学びの成果が評価されベストラーナー賞を受賞した。ＳＧＨでの学びの成果が、生徒たちの主体的な学びにつながり結実を見せた実践事例として大いに評価したい。

④　ＡＬＴやＧＩ（グローバル講師）と連携し英語による授業を推進する。

管理機関から外国人講師２名の配置を受け、英語やＧＳの授業で、生徒たちの実践的な英語力の養成に努めた。

特に、前述のとおりＧＳⅡでは年間を通じて、すべての生徒が英語によるプレゼンテーションやディスカッション、自己紹介等の実践的なプログラムのもと英語力の養成に努めた。

（２）高大接続の状況について

ＳＧＨの研究開発には、指定以来、多くの大学の協力を得て多くの企画を進めてきた。

①　東京外国語大学との連携協定

平成 29 年には、東京外国語大学と連携し、２年次の国内フィールドワーク先としての受け入れや、留学生が多く在籍するゼミナールの本校への訪問時の特別授業の実施。全校生徒対象の講演会に大学の教授を講師として招聘するなど、様々な支援をしていただいた。また、毎年、本校からは将来のグローバルで活躍する人材を目指し同大学へ進学し、さらに研究をつづける生徒がいる。

②　フィールドワークの受け入れ先としての大学の協力

生徒のフィールドワークの受け入れ先として、県内の信州大学、長野県立大学、佐久大学等の各大学や県外の筑波大学、早稲田大学、慶応大学、国際医療福祉大学、立教大学、法政大学等の多くの大学が､本校の生徒の受け入れ生徒に対し課題研究の指導や支援をしていただいた。

③　大学の単位履修制度の設置の有無について

５か年では、単位履修制度の設置はなかったが、次年度以降、ＷＷＬの構築を目指し、県内の大学との単位履修制度設置に向けて準備中。

（３）生徒の変化について　（詳細は「Ⅴ　評価と考察」の章の報告ページ参照）

①　生徒のＳＧＨ活動に対する意識の共時的な変化

ＳＧＨ活動の学びを重ねるにつれて、自身の成長を実感するようになる。

・日本語プレゼンテーション、英語の論文作成、プレゼンテーション意欲に向上が見られる。
・プレゼンテーション後、他からのフィードバックを得て自己肯定感が高まる。
・全体的に、学年が進むにつれて、ＳＧＨ活動に対する肯定的な評価が高まる。
・海外留学に対する意識も学年が進むにつれて高まる。

②　生徒の汎用的な能力に関わる通時的な変化

ＧＰＳアカデミックの各能力の結果から、社会で必要とされる３つの思考力について、本校の生徒には以下の傾向が見られた。

・「批判的思考力」及び、「創造的思考力」については、指定以来年度を重ねるにつれて、その能力の向上が見られた。
・「協働的思考力」は、１年次から２年次になると下がる傾向が見られた。この背景には、学年が進むにつれて本校では課題研究が個人研究中心のスタイルになるためではないかとの仮説を立て、本年度は４月以来、授業で周囲の仲間との協働的な学びを、これまで以上に意識した指導を取り入れ、本年度の調査では、その数字に改善傾向が見られた。

（４）教師の変化について

○　ＳＧＨ活動の有用性　主体的・対話的な協働的学びに対する意識の変容

指定前は、従前の知識・技能の習得を強調した指導に慣れていた教師にとって「アクティブラーニング」や「探究的な学び」の取組はなじみが薄く、高校教育の現場では特別なものとして捉えられていたが、指定後に全員がＳＧＨ的な学びを理解すると、対話的で協働的に学ぶ生

徒たちが、それまでより主体的に学ぶ姿が観察されるようになり、スタッフはこうした学びの効果を実感しながら、多くの教員が授業改善に取り組むようになった。当初は、対話的な学び合いのスタイルを採用し、授業内容の定着や生徒の汎用的な能力を養成していたが、一つの授業で取り扱うべき内容が多く、時間的な課題が指摘されていた。試行錯誤が続く中、指定の２年後の平成 29 年度には、管理機関により全ての普通教室に電子黒板等のＩＣＴ機器の導入がなされた後は、板書の時間の短縮等で、協働的な学びの場面を生み出すことができるようになり、加速度的に授業改善が進んだ。

その後、学び合いのスタイルが定着し、多くの生徒の成長を目の当たりにするようになると、教科内で主体的に授業改善に取り組む教師のグループが生まれた。

本年度の職員対象のアンケートにも「スタートした頃に比べて、生徒も意欲的・積極的に取り組んでいるように感じる。」「生徒たちの自分の意見を堂々と述べる姿勢に成長を感じる。」「上田高校は大きな変革を遂げたと思う。」「生徒が自分は何に興味があるのか発見したり、関心を広げたりする機会になっていたと思う。」「現代社会における様々な課題について、生徒の意識が高まっている。」等の高い評価が大半を占め、否定的意見の比率はほとんどの調査項目できわめて少ない。また「改善点・アドバイス」における個々のコメントも、建設的、未来志向的なものが多くなり、ＳＧＨ活動に対する総合評価も「賛同する」「どちらかというと賛同する」の評価で 100％となり、教育効果は、スタッフの共通認識となった。今後も、教員の意識の変化は、生徒の指導・支援に多角的でスパイラル状の発展を遂げると思われる。

（５）学校における他の要素の変化について

①　学校改革への積極的な参加

ＳＧＨ関連の科目以外の科目においても、授業改善が進んだばかりでなく、生徒会活動やクラブ活動のみならず、ＰＴＡの活動にいたるまで、生徒の主体性などの汎用的な力を育成しようとする機運が高まっている。あらゆる機会をとらえて生徒の思考力や判断力、表現力を鍛える観点で生徒に接しながら、教員の柔軟な試行錯誤がはじまっている。

生徒会活動では、生徒総会の持ち方や役員の決め方を工夫することで、生徒の協働力や多様な意見を生かそうとしたり、クラブ活動では生徒の意見を取り入れて自主管理させたりする指導が増えてきた。また、考査問題の質の転換も進んだ。すべての教科が、毎回の考査に、生徒の表現力や思考力を測る問題を出題し、考査後には優良な評価問題は、すべての教員が共有できる仕組みと取り入れた。本年度の職員アンケートでも「知識技能だけでなく、思考力や判断力を問う考査を作問・実施できたか」についても「十分取り組めた」「取り組めた」が 81％で「取り組めなかった」と回答する教員はなくなり、考査の問題に思考力を問う問題を出題することも定着してきた。

これらの変化は、本校での教育活動全般について、生徒の「学び」という視点で再検討し、前例にとらわれず、積極的に改善を行おうとする態度が生まれていることの証明と言える。

②　保護者の意識の変化

保護者のＳＧＨ活動に対する意識にも変化が見られ、本校のＳＧＨ活動の充実が進むにつれて、保護者対象アンケートにおけるＳＧＨ関連項目の回答も高い評価の比率が増加した。特に「ＳＧＨの取組は上田高校の教育活動の充実や活性化に役立つと思いますか」という質問項目に対しては、３学年の保護者が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という肯定的な回答も、平成 28 年度には 69％であったが、令和元年度には 83％まで向上している。

また、「ＳＧＨの取組はお子さんの進路に対する意識を高めていますか」という質問項目でも、肯定的な評価が平成 28 年度には 32％であったが、令和元年度には 59％まで向上した。

（６）課題や問題点について

○　研究開発・実践の過程で生じた課題や失敗だったと感じている点

・海外進学の意識の涵養について

生徒のアンケートの結果を分析すると「海外留学や海外大学への進学を考えている。」の項

目で「高い」「普通」と回答した生徒の割合は、それぞれ指定された平成 27 年度当時 18%，65%、５年間を経過した令和元年度の調査の結果でも 18%，68%と大きな差はなかった。

毎年、希望者対象の海外留学進学講座を開催したり、海外大学へ実際に進学した現役大学生を全校集会に招聘し、海外での大学生活の様子等を伝えたりしたが、海外進学の意識の向上をすることはできなかった。意識の向上が見られなかった理由について、抽出調査からは海外大学に進学する費用が高額となる点が主な理由と考えられる。

一方、海外留学への意識は向上しており、校内で企画している海外研修への参加希望者は増加の傾向が見られることからも、今後、高校卒業後のキャリアを海外に見出す生徒については、進学に対する資金面の支援等について、これまで以上に外部機関と連携し情報提供をする必要がある。

（７）今後の持続可能性について

①　研究開発の継続

これまで本校で研究開発を行ってきた各種の取り組みについては、以下の通り継続する。

ア　教育課程に関わる研究開発

ＳＧＨで開発してきた教育課程上の特別な科目については、引き続き教科「グローバルスタディーズ」として次年度以降も継続して全生徒を対象に行う。（継続については文部科学省の認可済み）

イ　総合的な探究の時間や特別活動に関わる研究開発

総合的な探究の時間や特別活動として展開してきた各種の取り組みについては、次年度以降も継続して行う。特に「探究的な学び（課題研究）」関わる取組については、更に充実したものとなるように改善を図る。

②　海外研修の取組について

これまで開発してきた海外研修（台湾研修旅行、フィリピンスタディーツアー、ボストンスタディーツアー）は引き続き継続して行う。また、この他の海外研修についても実施の検討を行う。

③　管理機関の関わりについて

管理機関として長野県教育委員会は、今後も高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ること目指し、県内の高等学校での教育改革を推進する。

その際、上田高等学校については、文部科学省が進めるＷＷＬコンソーシアム構築支援事業の基幹校として申請し、引き続き支援をする予定。

【担当者】

担当課	長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課	ＴＥＬ	026-235-7435
氏　名	長嶋　幸恵	ＦＡＸ	026-235-7495
職　名	指導主事	e-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

Ⅱ　課題研究

長野県上田高等学校ＳＧＨ課題研究

研究開発構想　**長寿県NAGANOから世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成**
～「長野モデル」からグローバルヘルスへ～　長野から世界へ健康長寿を発信しよう！

	1　　年　　生	2　　年　　生	3　　年　　生
Ⅰ課題研究	グローバルスタディⅠ 時事問題研究 フィールドワーク報告 （ＧＳⅠ）全員 週1回	グローバルスタディⅡ ＧＳＪ　課題研究日本語 ＧＳＥ　課題研究英語 （ＧＳⅡ）全員 週2回	グローバルスタディⅢ 選択者14名 （ＧＳⅢ）選択
	県内フィールドワーク 8コース　　9月　12日	首都圏フィールドワーク １０コース　　9月11日12日	

＜研究開発単位Ⅰ　課題研究教育課程の開発＞

教科教育と連動した課題研究を重視し、グローバルな視点から地域をとらえ、同時に地域からグローバル課題について考察できる科目横断型カリキュラムを開発する。グローバル課題に関する探究活動を自律的に進め、日本とアジア諸国が協働してこの課題に立ち向かう効果的な研究ができるカリキュラムを開発する。

◆ 今年度の重点目標

i	**論理的思考力・英語による発信力向上** 2年全員台湾研修旅行および2年全員英語ポスターセッションを通じて英語による発信力向上をうながす。
ii	**教員間の連携・協力・指導体制向上** 全教室に入った電子黒板や、ＩＣＴを活用した授業や授業のＳＧＨ化により新しい学力を高める。
iii	**ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）カテゴリーに従った課題研究の進展** ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の指導を受け全課題研究テーマをＳＤＧｓと関連づけて探究する。
iv	**海外との定常的な連携** 台湾（台湾師範大学、台湾市立大学）フィリピン大学、ハーバード大学、ＭＩＴ、ＵＮＵにおいて発信する。
v	**大学・研究機関との連携強化** ＪＩＣＡ、ＳＧＵ等と連携を深め、大学教授による課題研究の指導をうけ、内容を深める。

グローバルスタディⅠ（1年・1単位）

視聴覚室
ＳＧＨ係＋ＨＲＴ

1　ねらい　ＳＧＨ教科グローバルスタディⅠにおいて、グローバル課題を題材としてレポートのまとめる力とＩＣＴスキルを身につけ、県内フィールドワークにより、自らのキャリアプランを通して協働力を構築する。自らの設定した課題に沿って、課題研究を個人研究としてはじめ、探究力を養う。

2　グローバルスタディⅠ年間カリキュラム

4月	「時事問題からグローバル課題を探究する」　パワーポイント	4月　ＳＧＨアンケート1
5月	国際理解教育講話	直井恵氏（海外交流ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）
6月	「時事問題からグローバル課題を探究する」	生徒評価シート
7月	県内フィールドワーク事前学習　パワーポイント	
9月	県内フィールドワーク	県内各分野の大学・研究所訪問 全８コース
9月	県内フィールドワーク事後学習　パワーポイント	9月　ＳＧＨアンケート2
10月	ICAN・JICA国際理解教育　講演会　座談会	講師：西坂幸氏・竹内岳氏
10月	課題研究入門講座	講師：OB・OG諸氏
11月	「課題研究」（個人）　課題設定　日本語	ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ
2月	ＳＧＨ報告会	プレゼンテーション 2年ポスターセッション
	ＪＩＣＡ出前授業　青年海外協力隊ＯＢ・ＯＧ	
	学年成績	2月　ＳＧＨアンケート3

グローバルスタディⅡ（２年・２単位）

視聴覚室・324番教室
ＴＴ授業

１　ねらい　グローバルスタディⅡ日本語において、グローバルスタディⅠで課題設定した内容を探究し、課題解決型提言ができる２１世紀型スキルを身につける。首都圏フィールドワークにより、課題を発信し，専門家より指導を受ける。さらに、台湾フィールドワークを経て、全員ポスターセッションで発信する。

２　グローバルスタディⅡ日本語年間カリキュラム　　**ＳＧＨ係・情報科１名**

４月	「課題研究」（個人）　　ワード	4月　ＳＧＨアンケート１
７月	中学３年生対象課題研究ポスターセッション	
８月	首都圏フィールドワーク事前学習	東京外国語大学教授指導
９月	**首都圏フィールドワーク**	首都圏各分野の大学・研究所訪問 全１０コース
	ＳＧＵ大学等課題研究プレゼンテーション37名実施	9月　ＳＧＨアンケート２
９月	首都圏フィールドワーク事後学習　　パワーポイント	
	前期成績	
10月	台湾研修旅行事前学習講演会　　佐久大学廣橋雅子准教授	ＳＧＨ幹事校アンケート調査
後期内容	台湾フィールドワーク事前学習	
11月	**台湾研修旅行**	台湾フィールドワーク
12月	台湾フィールドワーク事後学習	ＧＰＳ-Academicテスト
1月	「課題研究」（個人） ポスターセッション　　全員 カテゴリー別 プレゼンテーション　　選抜 各クラス１グループ	
2月	**ＳＧＨ報告会**	プレゼンテーション ポスターセッション
	学年成績	2月　ＳＧＨアンケート３

１　ねらい　グローバルスタディⅡ英語において、グローバルスタディⅠで課題設定した内容を英語で探究し、課題解決型提言ができる英語コミュニケーションスキルを身につける。台湾研修旅行により、課題を発信し、現地高校生とカテゴリー別に英語ディスカッションする。帰国後その成果についてディベートを実施する。

２　グローバルスタディⅡ英語年間カリキュラム　　**ＳＧＨ係・ＧＩ２名**

４月	プレゼンスキルアッププロジェクト　　グループワーク	4月　ＳＧＨアンケート１
５月	①　自己紹介プレゼンテーション ②　Visit Ueda-上田市紹介ー（ペアプレゼンテーション）	紙ベーススライド使用 パワーポイントスライド使用
６月	論理・ディベートプロジェクト	
８月	ディベートスキル・論理とルールの理解 即興型ディベート演習①②	
９月	**首都圏フィールドワーク**	首都圏各分野の大学・研究所訪問 英語プレゼンテーション
	即興型ディベート演習③④	9月　ＳＧＨアンケート２
	前期成績	
10月	台湾研修旅行高校交流プロジェクト 台湾研究リサーチ・プロジェクトグループ分け	
11月	プレゼンテーション&ディスカッション準備	
	台湾研修旅行	台湾FWプレゼンテーション（英語） 台湾高校交流・ポスタープレゼン（英語・全員）
12月	台湾高校交流事後学習（argumentative writing）	
1月	ＳＧＨ報告会課題研究プロジェクト 課題研究ポスターセッション英語スライド作成	ＧＰＳ-Academicテスト
2月	**ＳＧＨ報告会**	プレゼンテーション（英語） ポスターセッション（英語・日本語）全員
	報告会振返り（self-evaluation essay）	
	学年成績	2月　ＳＧＨアンケート３

ＳＧＨ入門：時事問題よりグローバル課題を探究する

ＳＧＨ科目グローバルスタディ入門のため、時事問題をコンテンツとして、ＰＢＬ（課題解決型）学習をする。生徒の中学３年間のニュースを、ＳＧＨカテゴリー別に精選し、生徒は自らの選択したテーマについて、課題の設定→仮説と検証→課題の解決→提言というプロセスで論理的にまとめる能力を身につける。
ＩＣＴ活用能力と論理構成力・グループワークによる基礎的プレゼンテーション能力を身につける。

生徒は希望する時事問題を選択
ワードで右の項目を作成
スライドで右の項目を作成
※信濃毎日新聞記事検索システム利用

① 課題の設定理由
② 課題の要点分析
③ 課題の原因と背景
④ 課題への批判
⑤ 課題の解決方法
⑥ 課題の未来
⑦ 参考文献

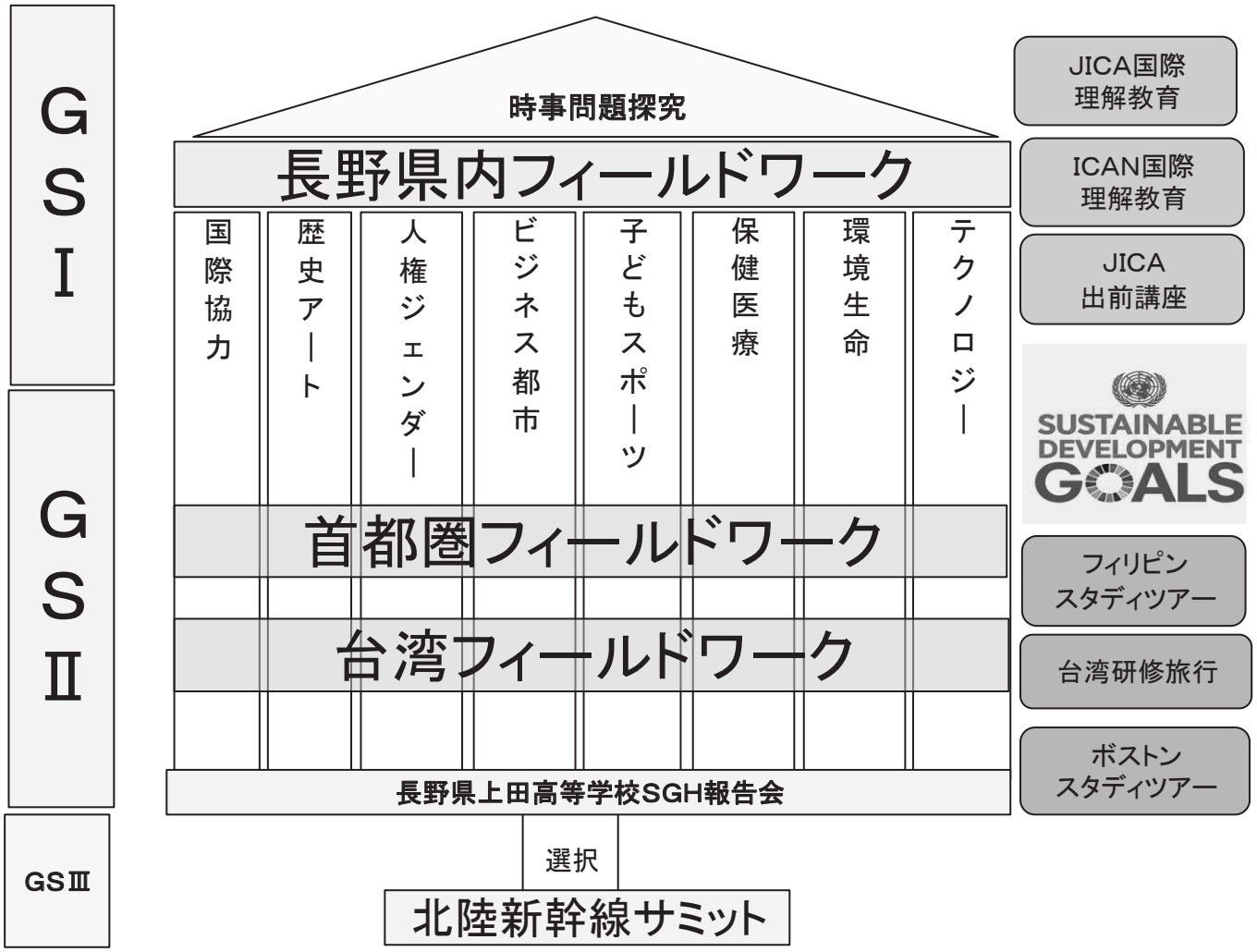
時事問題選択一覧表

A　自然環境と地域文化	人数
震災遺構保存の是非	10
欧州高校生，温暖化抗議のストライキ	23
外国人材受け入れ拡大	21
働き方改革はどうなる？	22
日本のジェンダーギャップ指数	15
B　食の観点とビジネス展開	**人数**
原発再稼働の是非	2
ｼｪｱﾘﾝｸﾞｴｺﾉﾐｰの背景と可能性	12
消費税引き上げの是非	23
米中貿易戦争の影響は？	7
日本の国際捕鯨連盟脱退の是非	13

C　地域社会と国際社会	人数
辺野古への基地移設をどうする？	9
核兵器禁止条約と日本政府の選択	8
どうする北方領土問題	10
米国に向かう移民の流れをどうする？	19
五輪に向けた健康増進法改正	14
D　地域医療システム	**人数**
しつけのあり方とは？−暴力と懲戒の間−	21
旧優生保護法による強制不妊手術	14
大学での軍事研究の是非	6
受精卵のゲノム編集の是非	38
ＡＩの可能性と危険性	33

課題研究とフィールドワークカリキュラムの構造

３つのグローバルスタディ＋３つのフィールドワーク+３つの海外研修



Ⅱ　課題研究　　１学年国際理解講演会

１　ねらい

入学して間もない新鮮な気持ちのなかで、課題研究の基礎となるＳＤＧｓの理念を学ぶ機会として設定した。講師は本校海外交流アドバイザーで、ＯＧでもある直井恵さんを講師に迎え、よりなじみやすい雰囲気のなかでグローバル学習スタートラインとすることを目指した。

２　概要

（１）日　　時　５月30日（木）　15時35分～16時20分

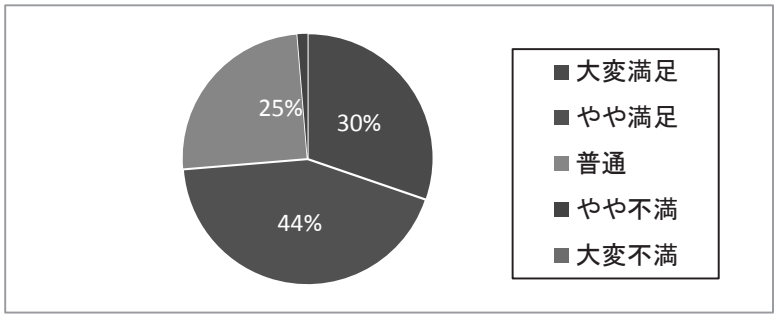
（２）講　　師　直井　恵氏（認定NPO法人アイキャン代表）

（３）内　　容

単にＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）について簡潔に内容を紹介するばかりでなく，講師自らが取り組んできたフィリピンでの貧困者支援の活動を紹介したり，格差拡大が進む世界の現実を、グラフなどをまじえて説明した。また，この時点ではまだ日本では知名度の低かった、スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんの活動を紹介して、若者の世界を変えていく可能性への期待を語った。

３　生徒対象アンケート結果（今回の総合評価）

（１）生徒対象アンケート結果



（２）生徒の感想

① 講演で気づいたこと

・海外の女子高校生が世界に向けて地球温暖化をやめるように発信している姿を見て、良い刺激を受けた。
・スウェーデンの少女の演説を聞いて、各国の首脳が話し合うより私たちが協力し合った方が良いということが心に残った。
・SDGsが掲げられているのも拘わらず、それが達成されている国は少ないことが分かった。
・世界各国が平和と平等のためにどのような活動をしているのか分かって良かった。
・一人一人が国際問題に興味を持つことが大切だと思った。
・SDGsについて知っているつもりであったが、初めて知ることがほとんどだった。
・話が分かりやすく、SDGｓが思ったより身近にあることが分かった。
・自分の視野や考えている範囲がとても狭いと感じた。
・最近SDGｓのことを良く耳にするが、達成するためにはその本質をよく理解しなければならないと気付いた。

② ＳＤＧｓ達成のために自分や日本に何ができると思いますか

・一人一人が環境に対する考えを改め、有限の資源を後世のために大切に残していく意識を持つ。
・フィリピンのバナナの話に限らず、フェアトレード商品を積極的に買うようにする。
・海や陸の環境については自分たちの行動で改善できる点もあると思うので、ごみの出し方など気を付ける。
・支援とかどうかより、食品ロス、節電などに取り組むべき。
・まずSDGｓについて自分から積極的に学び、その上で何ができるかを考えたい。
・自分たちが少し我慢すれば出来ることが沢山あるので、意識するだけで地球が少しずつ変わってくると思う。
・飢餓をなくすために私たちが食料を無駄にしない。
・利己的な考えでなく、利他的な考え方ができるようになること。

４　評価と考察

昨年までは1年生は5月に「世界が百人の村だったら」のワークショップを行ったが今年度はこれが10月に移動したため、学年行事としての講演会とした。５月下旬の初夏を思わせる陽気のなか、少なからぬ生徒が問題意識を持って学ぶことができていた。その後の県内フィールドワークの事前学習や秋以降の課題研究，さらにはフィリピンスタディツアーに向けてのへの問題意識を涵養することになったものと思われる。

Ⅱ　課題研究　グローバルスタディⅠ県内フィールドワーク　　対象１学年生徒　３２０名

１　ねらい

信州の地域資源である県内の大学・民間企業・病院・研究機関などで課題研究に役立つ研修を行い、最先端の学問や技術に触れるとともに、自らのキャリアプランの形成とこれからはじまる課題研究の基礎としていく。

２　概要

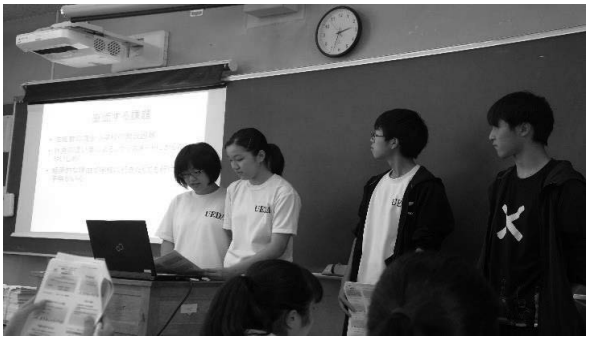
（１）日　　時　9月12日（木）

（２）場　　所　長野県内の大学・民間企業・病院・研究機関など

（３）内　　容

県内を対象とし、日帰りバスを利用するカテゴリー別８コースを設定し、生徒は希望するコースを選択する。平成26年度まで夏季休業中に実施していたキャリア教育（職場就業体験）をベースに内容をＳＧＨ化する。総合的な学習の時間の枠組み内で実施した。

ＧＳＩ授業時間内にグループ単位で事前学習をし、実施前日にはその成果をグループごとに発表、コース内で共有した。終了後には同様に事後学習を行い、授業時間内にコース別に発表を実施し、成果をクラス内で共有した。さらに各個人がレポートを作成した。

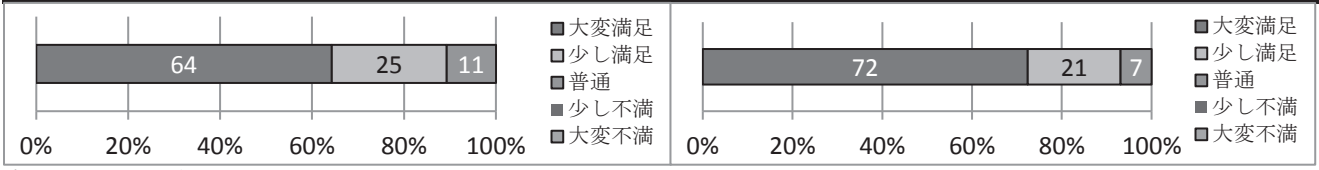


（実施前日に行われた、コースごとの事前学習発表会）

（４）コース別内容と、実施後の生徒の感想

Ａ　環境・生命　　いのち・健康を、食と農業と自然環境を通じて考える。
サブカテゴリー：環境・防災、農業・資源、食品・栄養

NPO法人 ピッキオ　井上 基氏　他



軽井沢町　NPO法人ピッキオ

テーマ：**野鳥の森周辺の自然探索、環境教育**

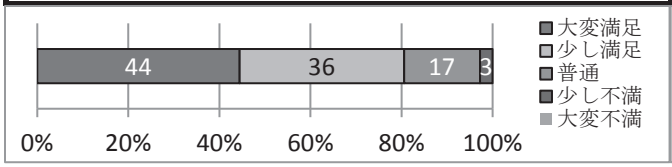
テーマ：**ツキノワグマ保護管理**

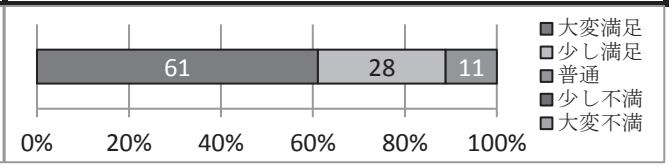
・「この自然を守りたい」という気持ちになったので、地球環境問題について調べたい。
・すべての動植物がお互いに関わり合って生きていくことを学んだ。
・自然の食物連鎖の中で人間はどう影響を及ぼしているのか気になった。
・実際に森の中を歩いて、人が暮らす場所とクマの生活エリアがとても近いことが分かった。
・生物が夫々の役割を果たして、自然のバランスが保たれていることが分かった
・ピッキオはクマを駆逐するのではなく共生することを目標として活動していることに感動した。

B 国際理解

いのち・健康を、国際理解と歴史文化を通じて考える。
サブカテゴリー：歴史・アート

県立大学ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部　森本 博行教授	亀清旅館　タイラー・リンチ氏他1名





長野市　県立大学ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部
テーマ：**長野県の地場産業と外国人観光客を結びつけるには**

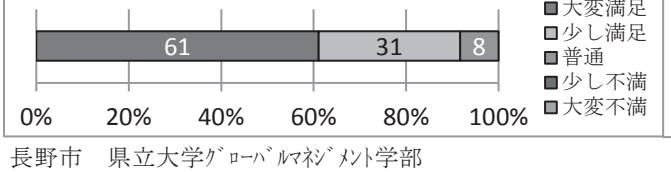
千曲市　亀清旅館
テーマ：**外国人観光客へのおもてなし**

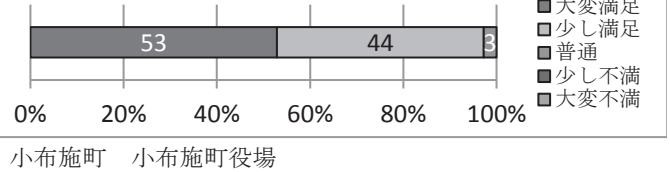
・日本酒の輸出が年々減少していることや、リンゴがあまり輸出されていない事実を知り驚いた。
・グループディスカッションが楽しく、自分に何ができるか考えさせられ刺激的だった。
・国によって来日目的が違い、それに合った対応が必要だと思った。
・グループディスカッションではテーマが難しかったが、講師のアドバイスにより良い学びが出来た。
・「異文化理解」にはたくさんの課題があり、私たちができることを考えていきたい。
・外国人の話を聞いて「日本らしさ」とは何かを改めて考えることが出来た。
・日本人がもっと日本の文化や伝統を学ぶ必要があると思った。

C ビジネス･都市

いのち・健康を、まちづくり、海外発信を通じて考える。
サブカテゴリー：ビジネス・都市

県立大学ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部　大室 悦賀教授	小布施町　大宮 透氏、間瀬 海太氏、平岡 駿氏





長野市　県立大学ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部
テーマ：**社会的課題の解決と将来ビジョンの必要性**

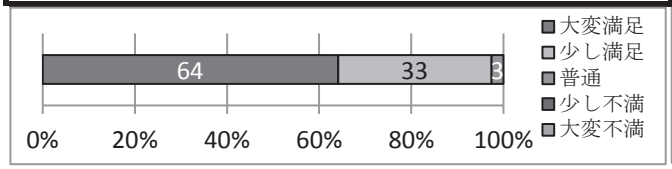
小布施町　小布施町役場
テーマ：**小布施のまちづくりについて**

・「どんな未来にしたいか」日頃から考え、企業から求められる人材になりたいと思った。
・SDGｓが設定されたことの影響や、社会を良くするために大切なことを学んだ。
・地方創生の方法がとても勉強になり、自分の地域に活かしたいと思った。
・人口の100倍の観光客を集客した、行政と町民一帯の取り組みが分かった。
・企業同士が争わなかったり、町民が関わる”協力の町”だと思った。自然と懐かしさを感じる町だった。

D 国際協力

いのち・健康を、国際協力、多文化共生を通じて考える。
サブカテゴリー：国際協力、人権・ジェンダー、平和・貧困

コレージオ・ロゴス　　小松崎 キミヨ校長

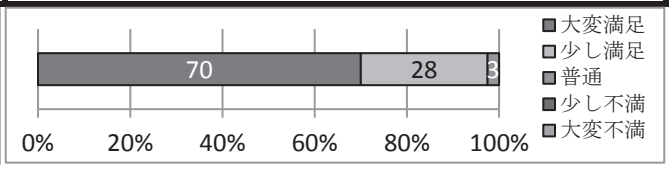


塩尻市　コレージオ・ロゴス

テーマ：**ブラジル人学校の生徒との交流をとおして異文化への理解を深める**

・在日ブラジル人の状況や、高校生の将来の夢を聞き、自分たちが出来ることは何か考えることができた。
・何故ブラジル人学校が必要かよく知らなかったので、ブラジルの歴史と関係があることを知り驚いた。
・JICAのビデオで「世界に最も近い」という言葉が印象に残った。

ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
岡田 妙子氏、サヤミ先生



駒ヶ根市　青年海外協力隊訓練所

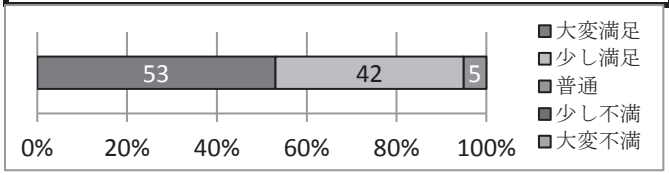
テーマ：**青年海外協力隊の活動、ネパール語入門による異文化理解**

・海外青年協力隊は特別な活動だと思っていたが、研修を受ければ誰でも参加できるものだと知った。
・言語を習得する時に大事なことは、第六感や、覚えたことを日常でどんどん使うことだと分かった。

E 子ども･スポーツ

いのち・健康を、教育問題、スポーツ振興を通じて考える。
サブカテゴリー：子ども・スポーツ

ＡＣ長野パルセイロ　堀江 三定社長、大橋 良隆氏

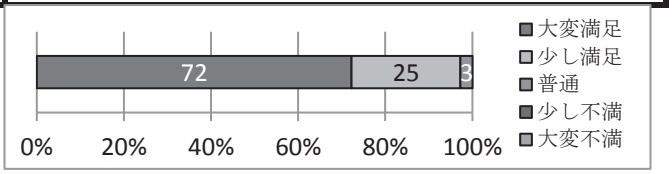


長野市　長野Ｕスタジアム

テーマ：**ＡＣ長野パルセイロの歩み**

・地域密着型クラブとしての取り組み内容がとても良いと思った。
・自由とはなにか、規律との関係も学べ、これからの生活に考えを活かしていきたい。

青木村児童センター
沓掛 英明教育長　高田 玲子所長



青木村　青木村児童センター

テーマ：**インクルーシブ教育、児童センターの取り組み**

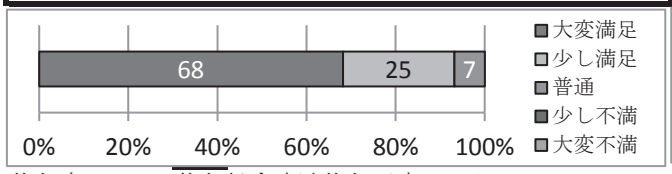
・子どもに技術を教えるときは、子供が感覚的に自分らしさを表現できるようにサポートすることが大切だと思った。
・縦割り集団の中で異年齢交流をしたり、スマホ、ゲームなしの自然の中で遊ぶことがいかに大切かを知り良かった。
・自然を生かした子供教育は、人格形成にとても役に立つと思った。

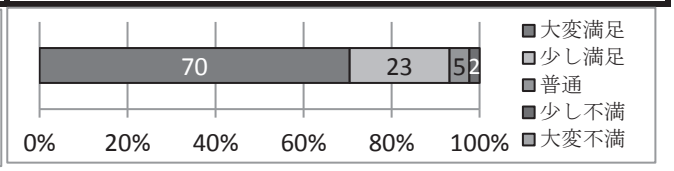
F 保健・医療

いのち・健康を、長寿を支える保健福祉活動を通じて考える。
サブカテゴリー：保健・医療

佐久総合病院 佐久医療センター　　北澤 彰浩医師

佐久大学 二神 真理子助教、金古 吉美氏





佐久市　　佐久総合病院佐久医療センター

テーマ：**地域に根ざした医療の実践**

佐久市　　佐久大学

テーマ：**フィジカルアセスメントをして自分の体を知ろう**

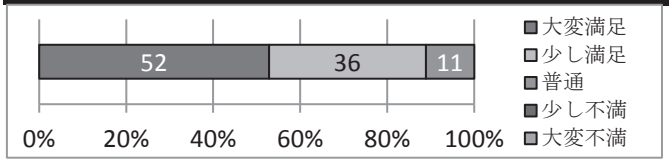
・自分がどのように最後を迎えるか、それを家族で話し合いをする「人生会議」を自分の生活で実践したいと思った。
・「死とは一人一人が持つ物語のフィナーレである」という言葉が印象に残った。
・若月先生の作り上げた伝統が、受け継がれ活用されているところがすごいと思った。
・ドクターヘリを見学出来て、迅速な行動をするための様々な工夫がされているのが分かった。
・フィジカルアセスメントにより、自分の体について深く知ることが出来た。
・看護士の仕事は医師のサポートだけではなく、患者のサポートも重要なことだと思った。

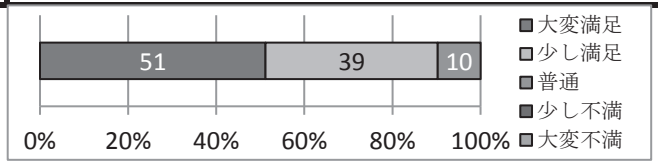
G 化学・材料

いのち・健康を、化学材料と医薬品開発を通じて考える。
サブカテゴリー：生命・情報

信州大学繊維学部　本吉 谷二郎 特任教授

寿製薬株式会社　冨山 泰社長、小出 智和氏





上田市　　信州大学繊維学部

テーマ：**身近な大学で最先端の科学技術に触れる**

坂城町　　寿製薬株式会社

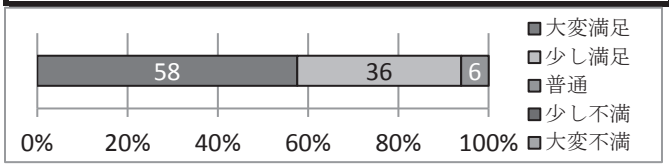
テーマ：**新薬開発のための努力に触れる**

・幅広い分野での研究がなされ、世界でリードしている研究もあると聞き誇りに思った。
・研究室によっては器具を自作したり、学生が自主的に研究していることが理解できた。
・繊維学部についての見方が変わり、今まで視野になかった研究職についても学ぶことが沢山あり視野が広がった。
・世界中の人々を幸せにするために日々励んでいる地元企業を誇りに思う。
・会社説明で薬に対する強い情熱を感じ、私もこういう気持ちをもって仕事に就きたいと思った。

H テクノロジー

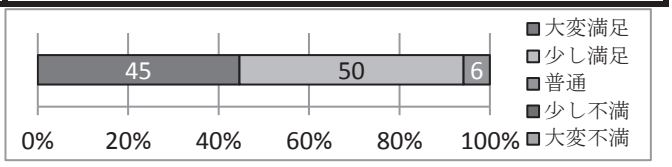
いのち・健康を、長寿を支えるテクノロジーを通じて考える。
サブカテゴリー：テクノロジー

信州大学工学部　遠藤 守信特任教授他	シナノケンシ株式会社　　小野塚 明葉氏他



長野市　　信州大学工学部

テーマ：**理系の心得～入試の先、大学の先 輝く未来がある**



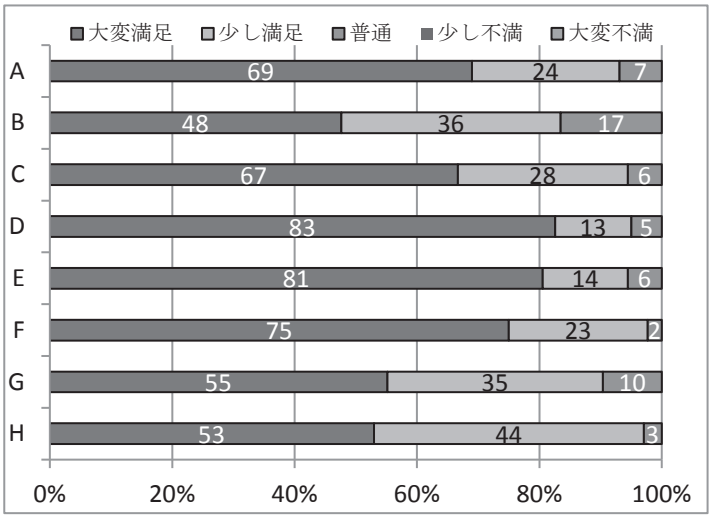
上田市　　シナノケンシ株式会社

テーマ：**紡績業から精密機器製造へ変革した企業を知る**

・機械にとって替わらないための「創造力」、偉人たちの名言を踏まえた講演は心に深く刻まれた。
・講演で自分がどんな学習をすると、やりたい職業に就けるか分かり良かった。
・教授の方々の白衣がとても汚れており、研究の厳しさを感じた。
・紡績業からモーター製造中心の精密機械の会社へ変わったことを知り驚いた。
・グローバル化した会社においては英語が大切であることが分かった。

3　生徒アンケート

（1）今回の総合評価



（2）来年への課題（生徒，職員アンケートより）

・事前学習での成果を訪問先に事前に送ってよい成果が得られるのではないか。

・事前学習をもう少し増やしてほしい。

・講演の内容が事前学習と重なり、新しく知ることができなかった。

・事前の打合せを充実させて、質問時間を多くとらせたい。

・事前学習と当日の研修内容が離れていた部分があった。

・移動時間が長くなってしまうコースが一部にあって残念。

4　評価と考察

昨年度に引き続き、フィールドワーク前日にはコースごとにグループ単位の発表会を持ってその成果を共有することができた。ただし、事前学習の忙しさや、一部には当日の学習との乖離を指摘する声もあり，今後の検討課題である。事後学習は、例年どおり事前学習とは異なりＧＳＩの授業内でコース別の発表を行って各コース内容を共有するようにした。グループ内の全生徒が協力して事前学習、事後学習の２回のプレゼンテーションに取り組んだことは発信スキルを高めるうえで意義があったと思われ，今後も継続させていきたい。

コース別では、毎年満足度がやや低かったG、Hコースにおいて改善が見られた。Hコースでは初めて企業見学を取り入れ、現実感が増したのではないか。今後は後半の探究活動の基礎となっていくような内容の深化に努めていきたい。

Ⅱ　課題研究　　ＪＩＣＡ・ＩＣＡＮ国際理解教育「世界が１００人の村だったら」

１　ねらい

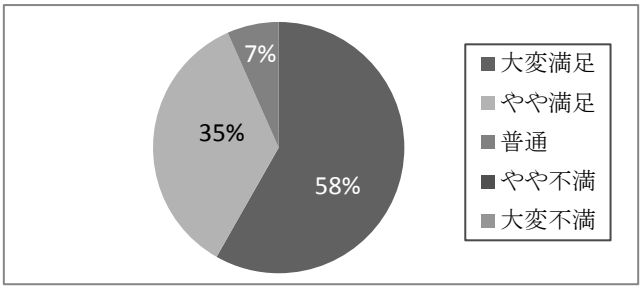
連携機関ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所と共同して作成した国際理解教育カリキュラムの行事である。さまざまな疑似体験をともなうワークショップを通じて世界の構造やその矛盾に気づくことにより、課題研究の基礎とする。また，フィリピンで社会問題に取り組むＮＰＯの方の講演を聴くことで，グローバル課題解決に向けた学習の機会ともする。

２　概要

（１）日　　時　10月3日（木）　第5、6時限
（２）場　　所　１年各ＨＲ、第２体育館
（３）講　　師　竹内岳氏（JICA国際協力推進員）
　　直井恵氏（本校SGH海外交流アドバイザー）
　　西坂幸氏（認定NPO法人ICAN）
（４）内　　容　対象１学年生徒320名

クラス単位で年齢、性別、宗教、所得、居住地域、言語などを記した「役割カード」を各人が持ち、様々なテーマ別に集団を作り、世界や、国内の現実の疑似体験を行う。その後学年全体の場で講演を聞いてさらに学習を深める。

３（１）生徒対象アンケート結果　　（総合評価）



（２）生徒の感想

①　本日のワークショップで気付いたこと

・後進発展途上国の発展が遅れている原因は先進国にもあるという言葉が特に心に残り、途上国の人に本当に申し訳なく思った。
・自分たちがいかに幸せを持て余しているかに気付きました。
・いかに日本など先進国が発展途上国に対して、何もしていない事が分かりショックだった。
・全世界の人々が食料問題とかそれぞれのことを考えて、全員が行動しないと達成できないと思った。
・今日改めて「ジブンゴト」という視点で意識してみたら、なぜか焦りという気持ちが少し出てきた。

②　世界の格差を解決する方法

・先進国がきれいな環境や水などを作る技術を、仕事と一緒に途上国に提供すれば少しは良くなる。
・国連が各国から税金のようなものを集め、日本でいう地方交付税交付金のように、貧しい国への支援制度をつくる。
・発展途上国への援助は継続しつつ、先進国の経済成長を抑える。
・「公平」や「貧富」の基準は人によって違うので、一人一人それらの基準に基づいて国際協力の視点を持つこと。
・義務教育の学習科目に世界のことについて考える教科を増やして、世界の格差に目を向ける人を増やしていくこと。

③　本日のワークショップの全般的感想

・今まで世界は広すぎて分からなかったけれど、この体験によって世界の社会問題が本当に深刻だということに気付いた。
・自分にできることは「ハチドリのひとしずく」かもしれないが、それでも何かできることを探して行動していきたい。
・日本は食料自給率が低く海外の国から手助けしてもらっているので、日本人として海外のためにできるどんなに小さなことでもいいので取り組んでいきたい。
・講演会最後に「私たちにできることは、毎日毎日を大切に過ごすことである。」と言っていたのが印象深い。
・自分の進路について漫然とした思いがありましたが、このワークショップで何かつかめた気がしました。
・自分は海外には行きたくないと思っているが、国内でも出来ることはたくさんあると気付きました。
・「自分の国は幸せだからいい」という考えから「世界中のみんなが幸せでいてほしい」という考えに変わった。
・同じ命の価値であるのに、苦しい思いをしながら生きる子供たちがいることを忘れずに、自分は一生懸命生きていくべきだと感じた。

４　評価と考察

1学年人権平和教育を兼ねて実施した。第１段階として各ホームルームにおいてクラス単位でワークショップを実施し、その際のファシリテーターを昨年この講座を経験した2年生が担当、その後体育館に移動して、全体で講師の解説を聞いた。今年は年間行事計画の関係で5月から10月に移動したことから生徒の感想の変化が気になったが、「大変満足」の割合が昨年を上回り、充実したものとなった。生徒の感想からも、現実への参与意識が感じられる。終了後の座談会に参加した生徒の少なからぬ部分が、10月18日に実施されたフィリピンスタディツアー説明会に参加することとなった。来年もその中から多くの生徒が1年生へのファシリテーター役を志願してくれるものと信じる。

Ⅱ　課題研究　　１学年課題研究入門講座

１　ねらい

秋以降に本格化する個人で取り組む課題研究のテーマ設定や、進路選択の参考とする。

２　概要

（１）日　　時　10月29日（火）　13：50～15：30

（２）講　　師　以下のとおり

（３）内　　容

これまでキャリア教育に重点を置いて「社会講座」などの名称で行われてきた様々な分野で活躍する本校OB・OGの話を聴く講座の名称を標記のようにし、課題研究の意識づけや探究、研究方法などについて語っていただいた。

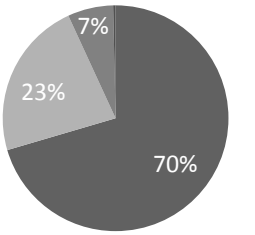
	カテゴリー	講師名	タイトル
①	人権・ジェンダー	岩下智太郎	ジェンダーと人権　～弁護士の視点から～
②	歴史・アート	高松　寿夫	『万葉集』―「令和」の典拠
③	農業・資源	吉川　友二	酪農・第一次産業が環境保護に果たす役割
④	ビジネス・都市	荻原　　靖	企業の社会的役割とは何か？
⑤	平和・貧困・国際協力	瀧澤　郁雄	健康を守る国際協力
⑥	子ども・スポーツ	竹鼻ゆかり	子どものこころとからだのサインを知ろう
⑦	生命・情報	井出　浩一	これからの情報通信技術の動向とそれが実現される時代に向けて
⑧	医療	吉澤　要	日本の医療・社会保障の現状と課題
⑨	保健	中田　覚子	看護の魅力、そして看護職に求められる役割
⑩	テクノロジー①	渡邉　博	イノベーションを起こそう！
⑪	テクノロジー②	中沢信明	触れないであやつる　ー カメラを用いた非接触型インタフェースの開発 ー
⑫	地方創生	浜村　圭一	まちづくり・むらおこしの勘所　～試百難の巻～

３　生徒対象アンケート結果

（１）生徒の感想

・ジェンダーについては被災地での例など、私が考えたことのない視点からも説明してもらい多様な考え方が大切なことを感じた。(①)
・日本最古の万葉集にも参考文献があるということに、当時の中国文明の発展のすごさを知ることが出来た。(②)
・今までのGSで環境について植物・森林・自然・動物の方面から見てきたが、産業としてあらためて環境ついて考えさせられ、さらに視野を広げ自然環境について考えられて良かった。（③）
・どうして日本の企業はＳＤＧｓの取り組みを積極的にしないのかなと思った。（④）
・一つの問題を解決するには、その背景にある問題も解決しなければいけないことが分かった。（⑤）
・ＳＤＧｓの中に子供に関する課題が3つも入っているが、それほど重要なことだと改めて思った。（⑥）
・AIによって無くなる職業、5Gの凄さ、IoTによる革新が何につながっていくのか、又その先の未来を想像することが自分自身にできるのか改めて考えさせられた。（⑦）
・世界で活動するのも大切だが地域医療に目を向けるのも良いと思った。（⑧）
・今後の課題研究に役立つような資料探しの方法、テーマの選び方、サイトなどを教えていただきとても参考になった。(⑨)
・日本は世界と比べて産業が衰えてきているので、イノベーションを起こせるように学習を大切にしたいと思った。（⑩）
・研究・開発において、目的や誰を対象としてどのような物を目指すのかを明確にし、問題提起し、考察、実行していくべきことが大切だと感じた。（⑪）
・まちづくり、まちおこしがSDGsにつながるとは思っていなかったので驚いた。(⑫)

（２）今回の行事の総合評価



３　評価と考察

昨年まではこの時期に県内フィールドワークの中間報告会を行っていたが，今年度は11月以降本格化する課題研究のテーマ設定に向けて力を注がせる意味をこめて，従来の「社会講座」をリニューアルして行った。12名の講師の方には事前に行事の趣旨をお伝えし，快諾を得た。生徒たちの感想に表れた満足度は1年生が経験したSGH活動のなかでは最も高いレベルとなった。ＳＤＧｓに言及した感想も多く，多くの生徒にとって文字通りの課題研究の入門になったと信じる。

Ⅱ　課題研究　グローバルスタディⅠ　JICA出前授業青年海外協力隊OBOG講演会

１　ねらい

ＧＳＩ講演会：年齢が近い世代の青年海外協力隊経験者の国際貢献活動に耳を傾けることにより、
途上国への国際協力の現場を実感するとともに、１年間の開発教育のひとつの到達点とする。

２　概要

（１）日　　時　２月１８日(火)　１時限(１・３組)、２時限(４・８組)、５時限(２・６組)、６時限(５・７組)

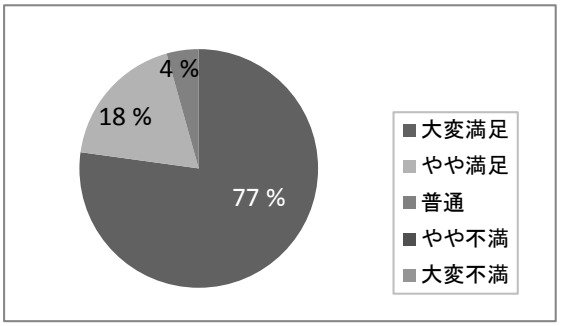
（２）場　　所　上田高校同窓会館

（３）講　　師　小木曽 一希氏（平成26年 教師海外研修でモンゴル派遣、坂城高校教諭）
下村 珠美氏（平成27～29年　青年海外協力隊でバヌアツ派遣）

（４）内　　容　対象１学年生徒320名
２クラス合同で、２人の講師がのべ４回にわたって講演やワークショップを行い、自らの活動経験や、開発、さらには貧困問題に対する思いを語り、生徒と一緒に考えた。

３　生徒アンケート

（１）行事の総合評価



（２）生徒の感想、記録より

○小木曽 一希氏

①　現地での活動

・モンゴルでの教師海外研修ごみ処理所や孤児院を訪問。現地の方との共同生活。ゲルで生活。
・モンゴルの教育機関、福祉施設、JOCV活動現場などを訪問し、授業実践、文化交流、視察。

②　地球市民 ～あなたができる国際協力とは？

・支援をすればよいだけでなく、その人にとって本当に幸せなものは何かを考えたボランティア精神が必要。
・まず自分の視野を広げ、物事を多方面から見ることができるようになること。そこからよく考えること。
・自分の考えを相手に押し付けるのではなく、相手の目線に立って自分の中の様々な考え方を広めていく。
・私たちが一方的に幸せを追求するのではなく、現地の方の幸せを一緒に追求し、それを持続可能な形にすることが、本当の支援だということを知り、具体的にこれから考えていきたい。

○下村 珠美氏

①　現地での活動

・バヌアツの小学校で、算数の学力向上、現地の先生方の指導改善、音楽教育の普及を行っていた。
・現地の子どもたちに、学習の楽しさを知ってもらう活動。

②　地球市民 ～あなたができる国際協力とは？

・自分が良かれと思ってやったことでも、相手にとって嬉しいとは限らないということに共感できたので、何が相手にとっても大切か見極めるため観察しようと思った。
・まずは他の国や地域のことを知ることだと思う。文化や、自分が知らないところでどんな生活がされていて、どんな課題があるのかといった状況を理解してから、その先のことを考えなければいけないなと思った。

４　評価と考察

10月のワークショップ「世界が百人の村だったら」に続く、JICAと提携して実施する学年全体規模での国際理解教育である。生徒のアンケートでは昨年同様に「大変満足」、「やや満足」の合計値が９割以上となった。自らができる国際協力として「私たちが一方的に幸せを追求するのではなく、現地の方の幸せを一緒に追求すること」、「自分が良かれと思ってやったことでも、相手にとって嬉しいとは限らないということに共感できた」という講師の発言をスタートラインとする生徒の感想が目立った。

Ⅱ　課題研究　　グローバルスタディⅡ課題研究テーマとプレゼンテーション・フィールドワーク

1 まとめ

・グローバルスタディⅡ課題研究は、個人のテーマにより実施した。他者とディスカッションしながら自己のキャリアプランに適した課題設定ができた。
・プレゼンテーションを含む三回のフィールドワークを通じて将来のキャリアに適した課題設定を見直しながら研究活動を推進した。
・ＳＧＨ報告会で全員ポスターセッションを実施し、ディスカッションからより深い学びを得られた。英語のスキルがあがった生徒が多い。

2 カテゴリー別課題研究テーマ　　※プレゼンテーション・フィールドワーク複数の場合は代表的なものを掲載した。

課題研究カテゴリーでは、保健、テクノロジー、人権、教育分野に属する生徒が多い。プレゼンテーション機会は分野が多い。
プレゼンテーションではなく、ポスターセッションの機会を増やし、相互にコミュニケーションを取れるようにした。
2学年は台湾研修旅行でのプレゼンテーション、ＳＧＨ報告会ポスターセッションを全員１人ずつが経験できた。
理系の分野での発表の機会、プレゼンテーションの機会が増えた。
全員フィールドワークを経験し、その体験によって自己の課題研究テーマを変更する生徒が増えた。その他フィリピン・ボストンフィールドワークができた。

	カテゴリー　　選択人数	319	22%	プレゼンテーション	58%	フィールドワーク
A カテゴリ	国際協力カテゴリー	35	26%	プレゼン割合％	31%	フィールドワーク％
B カテゴリ	文化カテゴリー	15	13%	プレゼン割合％	53%	フィールドワーク％
C カテゴリ	人権カテゴリー	51	16%	プレゼン割合％	29%	フィールドワーク％
D カテゴリ	ビジネスカテゴリー	38	24%	プレゼン割合％	68%	フィールドワーク％
E カテゴリ	地域カテゴリー	17	24%	プレゼン割合％	68%	フィールドワーク％
F カテゴリ	子ども次世代カテゴリー	45	24%	プレゼン割合％	67%	フィールドワーク％
G カテゴリ	保健医療カテゴリー	57	25%	プレゼン割合％	54%	フィールドワーク％
H カテゴリ	環境生命カテゴリー	7	14%	プレゼン割合％	86%	フィールドワーク％
I カテゴリ	テクノロジーカテゴリー	54	22%	プレゼン割合％	89%	フィールドワーク％

		課題研究テーマ（主題のみ掲載）	人数	課題研究テーマと適合したプレゼンテーション場所		課題研究テーマと適合したフィールドワーク場所
A		**国際協力カテゴリー**	35	9	11	
1	国際協力	最も望ましい援助とは		小学生説明会		
2	国際協力	正解がない国際支援		体験入学		国際協力
3	国際協力	禁足地				
4	国際協力	働き手不足から考えられる外国人労働者受け入れの是非				
5	国際協力	日本人の寄付に対する意識				ビジネス都市
6	国際協力	世界でも評価されゆくおもてなし				
7	国際協力	日本とフィリピンの子どもたちの食				国際協力
8	国際協力	日本とフィンランド				
9	国際協力	ゲーテッドコミュニュティの在り方				
10	国際協力	水資源を解決すると未来はどう変わるのか				
11	国際協力	どうしたらソマリアの治安を改善できるか？				
12	国際協力	靖国神社と天皇				
13	国際協力	外国人看護師のあり方				国際協力
14	国際協力	世界の水問題が解決しないのはなぜか				国際協力
15	国際協力	青年海外協力隊の実態		小学生説明会		国際協力
16	国際協力	途上国における地域開発事業		小学生説明会		外交国際協力
17	国際協力	私たち高校生は世界のために何ができるか		探究甲子園		
18	国際協力	どうしたらグローバル人材は増えるのだろうか		国連大学		国際協力
19	国際協力	安全なトイレの重要性				国際協力
20	国際協力	イスラーム過激思想下で生きる子供たち				
21	国際協力	フィリピンの今と健康医療		筑波坂戸高校発表会		
22	国際協力	竹島問題				
23	国際協力	貧困地域の人の生活水準を向上させるために		アカデミックプレゼンテーション		
24	国際協力	世界に広がるテロ				
25	国際協力					国際協力
26	国際協力	広がるテロ				
27	国際協力	井戸の危険性				
28	国際協力	尖閣諸島はどこの国？				国際協力
29	国際協力	世界の難民の状況を考える				
30	国際協力	F-35Aは本当に欠陥機？				
31	国際協力	米ソ冷戦と米中冷戦		サイエンスアソシエーションプロジェクト報告会		
32	国際協力	A lot of differences between the U.S.A and Japan				
33	国際協力	北朝鮮の現状				
34	国際協力	世界の陸と陸・国と国をつなぐ海の権利は誰のもの？				
35	国際協力	スポーツの商品開発では何を目指すのか？				
B		**文化カテゴリー**	15	2	8	
1	文化	数学の存在意義		プラズマセンター		
2	文化	AI作家の誕生				
3	文化	伝統的工芸品を守れ！				歴史アート
4	文化	「パクリ」と「パロディ」は何が違う？				歴史アート
5	文化	なぜ囲碁は将棋より人気が出ないのか				歴史アート
6	文化	アニメ文化による日本の伝統文化への影響について				歴史アート
7	文化	世界に展開する日本の発酵食品				
8	文化	美術館の未来				
9	文化	日本人の米離れ				
10	文化	童話の結末				歴史アート
11	文化	京都の景観と都市開発				
12	文化	「機械の声」ボーカロイド				
13	文化	和の文化から考え、労働災害を減らす				歴史アート
14	文化	日本人と歴史の在り方		早稲田大学		歴史アート
15	文化	郷土史と観光				歴史アート
C		**人権カテゴリー**	51	8	15	
1	人権	世界各国におけるＬＧＢＴの存在				
2	人権	中国の知財問題				
3	人権	LGBTと出産				
4	人権	燃え上がる情報社会		アカデミックプレゼンテーション		
5	人権	～目覚めよ！若者たち～		アカデミックプレゼンテーション		
6	人権	会社内保育所設置による問題点、社会の影響はどうなるのか？				
7	人権	日本の死刑制度				
8	人権	増え続ける子どもへの虐待				
9	人権	情報を忘れてもらう権利の登場？！				
10	人権	社会の変化と終活のあり方				人権ジェンダー
11	人権	日本の領土問題				人権ジェンダー
12	人権	今だ続く奨学金破産				
13	人権	LGBTのいじめをなくすには				
14	人権	介護福祉士の給料の安さの原因は？				
15	人権	死刑是非　死刑の疑問、その変遷と共に考える				人権ジェンダー
16	人権	日本の労働問題について				
17	人権	日本人のQOL		サイエンスアソシエーションプロジェクト報告会		
18	人権	分かり合うことの難しさ				
19	人権	健康寿命延伸のための一手				
20	人権	少年法を改正すべきか				人権ジェンダー
21	人権	安保理改革の重要性		公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所		

22	人権	日本の不寛容社会とその原因					
23	人権	刑事責任の有無					人権ジェンダー
24	人権	不寛容社会と日本の神様					
25	人権	国、人種に関係なく医療と人道援助を			国際医療協力局		
26	人権	犬・猫たちの行方					
27	人権	忘れられる権利　vs　SNS					人権ジェンダー
28	人権	若者と主権者意識					人権ジェンダー
29	人権	産業財産権を守るには					
30	人権	「幸せ」とは？					
31	人権	問題の外在化					
32	人権	著作権と作品に触れる私たち					人権ジェンダー
33	人権	集団に縛られる日本人					人権ジェンダー
34	人権	なぜ日本人は働きすぎなのか			体験入学		
35	人権	夢がない					
36	人権	ジェンダーギャップ指数を上げるために					人権ジェンダー
37	人権	動物園の裏側					
38	人権	入管法改正が引き起こす問題					
39	人権	ポップカルチャーの発展とＬＧＢＴの関係性			長野高校英語プレゼン発表会		
40	人権	21世紀：人種差別と経済					人権ジェンダー
41	人権	周りの環境による人への影響					人権ジェンダー
42	人権	災害で明らかになった日本の課題					
43	人権	若年層の投票率					
44	人権	子どもへの体罰と子どもの心身の健康と発達					
45	人権	法律が生む無国籍					人権ジェンダー
46	人権	日本の自虐史観					
47	人権	市民の権力によって倒される政府					
48	人権	武士道					
49	人権	少年犯罪はなぜ生まれる？					人権ジェンダー
50	人権	死刑					
51	人権	災害後に起こる犯罪			上智大学		人権ジェンダー
D		**ビジネスカテゴリー**	38	9		26	
1	ビジネス	文房具のデザイン					
2	ビジネス	現代の音楽の在り方					
3	ビジネス	何故ブラック企業がなくならないのか					ビジネス都市
4	ビジネス	日本の未来を考える					ビジネス都市
5	ビジネス	これからの企業の在り方					ビジネス都市
6	ビジネス	行き過ぎた資本主義社会			長野東部中学校		観光行政
7	ビジネス	外国人労働者と日本の未来			JETRO		ビジネス都市
8	ビジネス	結婚式場の今後のかたち					ビジネス都市
9	ビジネス	ふるさと納税は必要？					観光行政
10	ビジネス	揺れるコンビニ					
11	ビジネス	ゲーミフィケーション					ビジネス都市
12	ビジネス	生涯スポーツを普及させるために			立教大学		ビジネス都市
13	ビジネス	牛丼が引き起こす水不足			こんにちは県議会		
14	ビジネス	萌え絵が与えたもの					ビジネス都市
15	ビジネス	日本がラスベガスに！？			JETRO		ビジネス都市
16	ビジネス	訪日外国人の受け入れ方					ビジネス都市
17	ビジネス	SDGsをより身近に感じるためには					ビジネス都市
18	ビジネス	「キャッチコピー」で伝える					
19	ビジネス	動物は商品なのか					経済都市
20	ビジネス	ファストファッションの発達の光と影					経済都市
21	ビジネス	日本企業の社内公用語化			国連大学		
22	ビジネス	累進課税					ビジネス都市
23	ビジネス	ソーシャルビジネスで現状を変える					ビジネス都市
24	ビジネス	観光立国					
25	ビジネス	どうなる？未来のお金					ビジネス都市
26	ビジネス	ｅースポーツの日本での広がり					
27	ビジネス	廃墟問題と観光					観光行政
28	ビジネス	じゃんけんの損と得					
29	ビジネス	外国人労働者			アカデミックプレゼンテーション		ビジネス都市
30	ビジネス	目指せ観光地			私のプロジェクト 台北市政府観光局		観光行政
31	ビジネス	日本の第一産業のこれから					
32	ビジネス	商店街の小さな大学から					経済都市
33	ビジネス	格安ファッションのカラクリ			立教大学		ビジネス都市
34	ビジネス	音楽ネット配信の新たな問題					
35	ビジネス	最高レベルのおもてなしとは?					
36	ビジネス	フェアトレードを広めるために					歴史アート
37	ビジネス	日本人の長時間労働と労働生産性					経済都市
38	ビジネス	ベーシックインカムはただの夢なのか					ビジネス都市
E		**地域カテゴリー**	17	4		9	
1	地域	伝統食品でのまちおこし					歴史藝術
2	地域	まとめて集めて地方自治					
3	地域	We are 外来種！					
4	地域	噴火災害と火山の共生					
5	地域	コンパクトシティ政策					歴史藝術
6	地域	地域経済を活性化するために					ビジネス都市
7	地域	定常型社会					ビジネス都市
8	地域	佐久市らしい街づくりをするには			信州学サミット		
9	地域	外来生物は悪者なのか？					
10	地域	法の役割					経済都市
11	地域	野生動物との共生から日本の未来を考える					
12	地域	世界の食料がたりなくなる？			サイエンスアソシエーションプロジェクト報告会		
13	地域	別所線の力			信州学サミット		ビジネス都市
14	地域	変化する食生活					経済都市
15	地域	日本の食糧自給率					
16	地域	世界に広がる和食					防災復興
17	地域	「住んでよし、訪れてよし」の街づくり			サイエンスアソシエーションプロジェ		観光行政
F		**子ども次世代カテゴリー**	45	11		30	
1	教育	アクティブラーニングの必要性					教育子ども
2	教育	不登校は悪いことなのか					子ども次世代
3	教育	AIは教師になれるのか					
4	教育	映像を用いた防災教育の可能性とその影響			ふたば未来高校		
5	教育	誰にでも優しい世の中へ			全国高校生フォーラム		子ども次世代
6	教育	世界でも日本だけ！？					子ども次世代
7	教育	保健室の在り方					子ども次世代
8	教育	生涯スポーツで楽しいスポーツライフを					
9	教育	ダウン症候群の子どもたち					子ども次世代
10	教育	カウンセラーは本当に足りないのか？			アカデミックプレゼンテーション		教育子ども
11	教育	なぜ小学校に行かなければならないのか					
12	教育	音楽の未知なる可能性・音楽療法の力とは					
13	教育	体力格差の広がりにおける意識改革					子ども次世代
14	教育	考えられる大人になるために					教育子ども
15	教育	日本の教育			体験入学		教育子ども

16	教育	グローバル化により日本や世界で求められる人材になるためには			東京外国語大学		教育子ども
17	教育	日本の教育の問題点					子ども次世代
18	教育	深刻化するモンスター化					子ども次世代
19	教育	自分を好きになるということ					子ども次世代
20	教育	「子どもらしさ」が失われる子どもたち					子ども次世代
21	教育	新しい教育					子ども次世代
22	教育	教育格差と経済格差					子ども次世代
23	教育	給食の無償化は必要なのか					
24	教育	日本で起こる男女格差をなくす方法はあるのか？					
25	教育	発達障害への薬物治療から差別問題を見つめる					
26	教育	教育費と教育格差を経済から考える					
27	教育	読み聞かせから一人読みへ					
28	教育	言葉が通じない世界					子ども次世代
29	教育	学校統廃合が与える学力への影響					子ども次世代
30	教育	日本人はなぜ英語をはなさないのか			東京外国語大学		
31	教育	小中一貫校の取り組みから教育を見直す			アカデミックプレゼンテーション		子ども次世代
32	教育	ネット翻訳が発達する今、英語教育の必要性を考える			慶應大学		子ども次世代
33	教育	日本の留学生減少の背景					
34	教育	もしも日本の教育費が大学まで無償化されたら					子ども次世代
35	教育	教育が目指すもの					子ども次世代
36	教育	知ることと認めること			慶應大学		子ども次世代
37	教育	教育県長野復興計画にラグビーから次世代教育を			北信越フォーラム		子ども次世代
38	教育	学校はトラウマ製造機？					子ども次世代
39	教育	子どもの運動不足について考える					子ども次世代
40	教育	学習意識を高めるために「いろ」の効率的な利用方法を探る					
41	教育	美術の授業がいじめをなくす			早稲田大学		
42	教育	給食の必要性					
43	教育	大学入試改革					子ども次世代
44	教育	幼少期の教育を見直そう					子ども次世代
45	教育	長野県の特別支援教育の現状と課題					子ども次世代
G		**保健医療カテゴリー**	57	14		31	
1	保健	我が子に会いたい					保健医療
2	保健	長野県のがん患者生存率を日本一に					保健医療
3	保健	外国人看護師					保健医療
4	保健	僻地の医療					保健医療
5	保健	がんに立ち向かうために					
6	保健	自分で決める治療			体験入学		保健医療
7	保健	都市部の動物医療を地方の動物に					
8	保健	赤ちゃんポストに預けられる子どもたち					保健医療
9	保健	私たちが向き合い考える認知症			体験入学		保健医療
10	保健	医療費は抑制できるのか					
11	保健	医療費抑制					保健医療
12	保健	在宅ケアの理想と現実・在宅ケアの在り方					保健医療
13	保健	音楽の力					保健医療
14	保健	パラスポーツの振興			関東甲信越静地区高校生発表会		保健医療
15	保健	医療機器利用で遅れをとる日本					保健医療
16	保健	ドラッグデリバリーシステムの現状					
17	保健	必要となってきたセルフメディケーション					
18	保健	地域による保育課題の差					
19	保健	臓器移植の現状					
20	保健	チーム医療の未来					保健医療
21	保健	安全に薬を服用する方法			昭和大学		保健医療
22	保健	薬剤師のあり方					保健医療
23	保健	深刻な医師不足を打開するには					保健医療
24	保健	残薬			昭和大学		
25	保健	ドーピングに走る人々たちについて					
26	保健	病児にとって大切なこと			国際医療福祉大学		保健医療
27	保健	健康に年をとるために			淡水義山托老中心		保健医療
28	保健	保険制度が崩壊寸前！？					
29	保健	代理出産の現実					
30	保健	嚥めない人の食事改善					
31	保健	漢方薬と人の心					
32	保健	スウェーデンの介護					保健医療
33	保健	睡眠と子どもの成長の関係			小学生説明会		
34	保健	睡眠と豊かな人生			長野県高校生プレゼンテーション大会		
35	保健	抗うつ剤					
36	保健	なぜ薬剤師の国家資格を取るためには６年制に行かなくてはならないか					
37	保健	患者さんを支える医療					
38	保健	人工臓器の可能性			体験入学		保健医療
39	保健	日本の医療制度は無事か？					保健医療
40	保健	医療事故はなぜ起きるのか					保健医療
41	保健	IPS細胞研究と未来			睡眠医科学機構		保健医療
42	保健	製薬産業と知的財産権			七尾高校報告会		保健医療
43	保健	これからのガン治療					保健医療
44	保健	世界の国の乳児死亡率の現状					
45	保健	遅れる日本の医療					
46	保健	ストレスが人間にもたらす影響					保健医療
47	保健	日本がおこなっている発展途上国への医療機器の輸出は効果があるのか？					保健医療
48	保健	トラウマ治療で治す「治らない病」					
49	保健	日本が世界で一番認知症が多いワケ					保健医療
50	保健	子どもを捨てる理由					
51	保健	依存症とは			睡眠医科学機構		
52	保健	多重介護の課題					保健医療
53	保健	どうしたら満足のいく在宅医療が受けられるか？					
54	保健	希少動物のいのちを繋ぐ					
55	保健	日本のジェネリック医薬品					保健医療
56	保健	AIと医療の融合			屋代高校報告会　国際医療福祉大学		保健医療
57	保健	IPS細胞を用いた再生医療					

H		**環境生命カテゴリー**	7	1		6	
1	環境	ゲノム編集を広げるために					環境生命
2	環境	身近なプラスチックが凶器に					
3	環境	デザイナーベイビーの問題と未来					環境生命
4	環境	農業が無くなる！？					環境生命
5	環境	海洋汚染			OCEAN'S47		環境生命
6	環境	地球温暖化がもたらす気候変動					環境生命
7	環境	AIの発達による教育の変化					環境生命

I		テクノロジーカテゴリー	54	12		48	
1	技術	AIがもたらす可能性					テクノロジー②
2	技術	なぜデバイスラグは縮まらない？					テクノロジー①
3	技術	建設の断続性					テクノロジー②
4	技術	ＡＩから考える水産業の未来					産業技術
5	技術	技術は人を滅ぼすか			体験入学		テクノロジー②
6	技術	昆虫サイボーグの未知の可能性					テクノロジー①
7	技術	量子コンピュータについて					テクノロジー②
8	技術	IOTとAIで変わる製造業					テクノロジー②
9	技術	ＡＩロボットの活用					テクノロジー①
10	技術	炭素繊維で何ができるか					テクノロジー①
11	技術	ロボットの本来の姿					テクノロジー②
12	技術	その情報・本当に正しいですか?			アカデミックプレゼンテーション		テクノロジー①
13	技術	公共建築物木材利用促進法で日本は変われるか					テクノロジー①
14	技術	釘を使わない職人技					テクノロジー①
15	技術	自動運転は導入されるべきなのか					テクノロジー②
16	技術	植物工場の新たな形					
17	技術	来たるEV革命			プラズマセンター		テクノロジー①
18	技術	人手不足の解消に向けて					テクノロジー②
19	技術	仮想通貨は普及されるべきか					テクノロジー①
20	技術	環境保全・共生			G20サミット		テクノロジー②
21	技術	３D技術によってもたらされる生活					
22	技術	変化する航空業界			プラズマセンター		テクノロジー①
23	技術	世界での自動運転の在り方					
24	技術	システムの自動化に求められているものとは?					テクノロジー①
25	技術	電気自動車のこれから					産業技術
26	技術	宇宙エレベーターの必要性					産業技術
27	技術	農業がもたらす世界の未来は？			ふたば未来高校		
28	技術	超電導技術を普及させるために			上智大学		テクノロジー②
29	技術	スマホ依存					テクノロジー②
30	技術	人工光合成によって地球温暖化は防げるか			産業総合研究所		テクノロジー①
31	技術	火星移住を実現させるには					テクノロジー②
32	技術	日本の木造建築の未来					
33	技術	海洋汚染を止めたい！			産業総合研究所		テクノロジー①
34	技術	燃料電池車は究極のエコカーなのだろうか			産業総合研究所		テクノロジー①
35	技術	ドローンの可能性					テクノロジー①
36	技術	成層圏プラットフォームを使った経済活動					テクノロジー①
37	技術	遺伝子操作が抱える問題					テクノロジー①
38	技術	衰退している日本の半導体産業、展望は？					テクノロジー②
39	技術	AIとの共存					テクノロジー②
40	技術	ＳＮＳの上手な使い方					テクノロジー②
41	技術	新たな宇宙時代の幕開け					テクノロジー①
42	技術	バイオマス発電とは					産業技術
43	技術	通信システム４Gから５Gへ					テクノロジー①
44	技術	空の産業革命					テクノロジー①
45	技術	エネルギー問題とナノテクノロジー					テクノロジー①
46	技術	ビックデータの活用がもたらすものとは					子ども次世代
47	技術	AIの進化					テクノロジー②
48	技術	私たちの身の回りにあるＩｏＴ			上智大学		テクノロジー②
49	技術	３D技術の可能性					テクノロジー①
50	技術	プラスチック海洋汚染を止めるには					
51	技術	バーコードの代わりになるもの					テクノロジー②
52	技術	木造建築とカーボン			アカデミックプレゼンテーション		テクノロジー②
53	技術	リサイクル問題と解決策					産業技術
54	技術	ビッグデータの分析で広がる可能性					テクノロジー①

ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク

宿泊　【 Ａ：小名浜旅館新よね　　Ｂ～Ｇ、Ｊ：国立オリンピック記念青少年総合センター　　Ｈ・Ｉ：筑波山ホテル青木屋 】

★　長野県上田高等学校生徒課題研究プレゼンテーション

Ａ　食　と　防　災

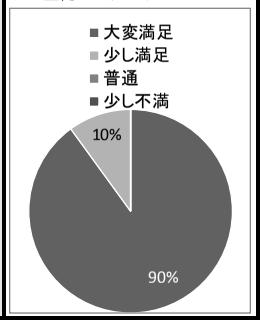
13人

いのち・健康を、食と防災と地域づくりを通じて考える。

引率　甲田　泰広
引率　西村　晃洋

責任者　8　宮原　未稀
　　8　髙田　亜衣香

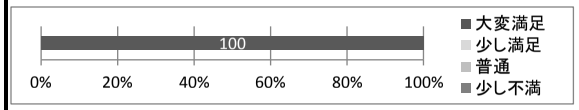
生徒アンケート



9　11　水

ベ　レ　ッ　シ　ュ

施設見学　ご講演

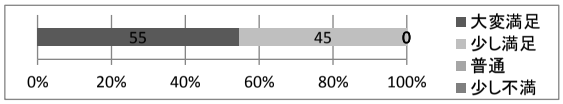


・風評被害による作物が売れないことの悲しさや悔しさを直接聞くことができた。
・地震は天災だが原発事故は人災だという言葉がすごく印象に残った
・先輩が風評被害の野菜を売ろうと動いたことを知り、自分も行動したい

9　12　木

福島県立ふたば未来学園高等学校

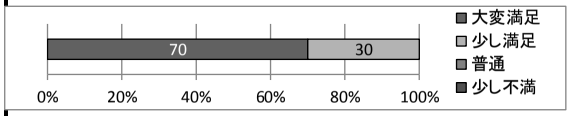
プレゼンテーション



・地元の同世代の人の意見が聞けて有意義であった。
・生徒全員が自主性のある学校で、自分ももっと自ら考えて動ける人になろうと強く感じた。
・校内の学生自ら運営するカフェに、地元の人や外人が来ており驚いた。

いわき市観光復興　防災支援センター

語り部さんのご講演



・地域に寄り添う復興のあり方を考えることが出来ました。
・津波の現場を見学することが出来、被害の大きさが想像以上であった。
・未解決の問題が沢山あるが、自分に何が出来るか考え続けたい。

Ｂ　国　際　協　力

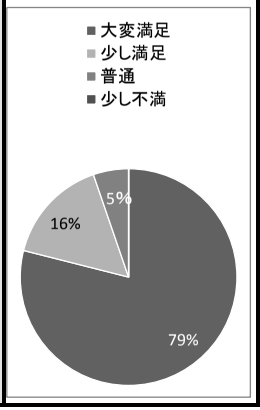
27人

いのち・健康を、国際機関と国連大学交流を通じて考える。

引率　太田　理沙
引率　髙柳　剛士
引率　Sabbi　Topal

責任者　3　木内　ひより
　　3　宮下　稜生

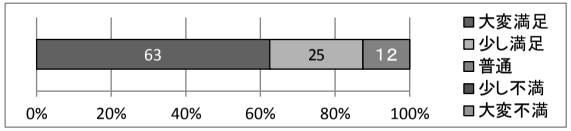
生徒アンケート



9　11　水

東　京　外　国　語　大　学

留学生との交流　「長野の魅力を語り合う」
講義：岩谷滋雄先生　前外交官　「国際交流のための基礎知識」
生徒プレゼンテーション
★　「グローバル化により日本や世界で求められる人材になるためには」
★　「日本人はなぜ英語を話さないのか
～英語力が国際競争力に与える影響～」



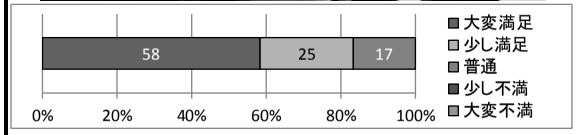
・様々な国際系の将来について知ることが出来、進路の参考になった。
・留学生のプレゼンで、外国語の向上には留学が一番の近道だと実感した。
・研修に最初はついていけなかったが慣れてきてこの慣れが大切だと思った。

9　12　木

10:00-12:00

国　際　連　合　大　学　東京都港区

講義：国連大学について　SDGsについて
生徒プレゼンテーション
★　「日本企業の社内公用語化」
★　「どうしたらグローバル人材は増えるのだろうか」

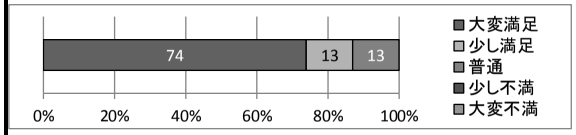


・プレゼン、ディスカッションを通じて自分の「グローバル」に対する見方の狭さが分かった。
・ＳＤＧｓについてより詳しい情報を知ることが出来た。
・「変化にめげない受け入れる力」という言葉が印象に残った。

13:00-15:00

JICA　地　球　ひ　ろ　ば　東京都文京区

見学
SDGsワークショップ



・ＳＤＧｓすごろくを通じて世界の問題が、自分の身により近いものと考えることが出来た。
・地球の環境問題について、SDGｓとつなげて考えてみて、
今まで知らなかった問題や、日本とは違う支援を知ることが出来ました。

ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク

C 歴 史 ア ー ト

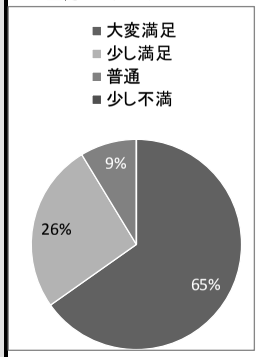
32人

いのち・健康を、日本の歴史と芸術文化を通じて考える。

引率　中澤　東樹
引率　柳澤　哲

責任者　8 岩井　亨
8 久松　龍平

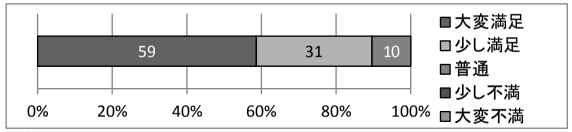
生徒アンケート



9　11　水

早稲田大学文化構想学部

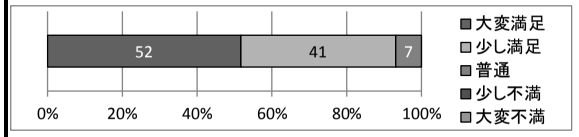
講義　山西優二教授
生徒プレゼンテーション
★「妖×観光！！」～御代田ver.～」
★「美術の授業がいじめをなくす
～今後の教育現場における感性教育の在り方～」
★「日本人と歴史の在り方～
「蛍丸」復元から見る現代人と歴史のつながり～」



・「文化」についての考え方が人それぞれ異なっていることが面白かった。
・大学生や教授のプレゼンは、学校で教わった理想通りで素晴らしかった。

東京ジャーミイ・トルコ文化

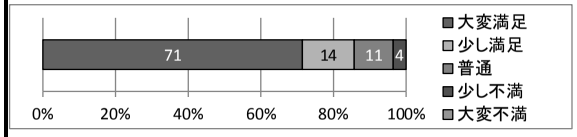
解説　イスラーム教・モスク・文化センター
広報・出版担当　下山　茂氏
イスラム文化説明



・施設の内装はとても綺麗で異世界感が満載であった。
・礼拝所の説明は、普段ニュースの情報以外のものであった。
・自分が普段見ている世界がすべてではないと改めて実感した。

国立歴史民俗博物館　千葉県佐倉市

博物館自由見学



・教科書に載っていたものを自分の目で見ることができ、知識が増えてとても充実した見学ができた。
・日本の古代から現代を様々な視点で見学することで興味が広がった。

D 人 権 ジ ェ ン ダ ー

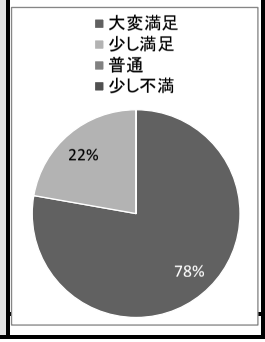
32人

いのち・健康を、法律と人権現代政治を通じて考える。

引率　木村　貴峰
引率　竹内　久美子

責任者　3 菅野　太雅
3 小岩　祐太

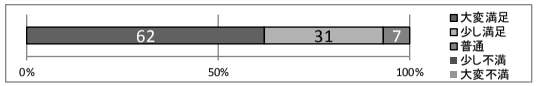
生徒アンケート



9　11　水

上智大学法学部・法科大学院

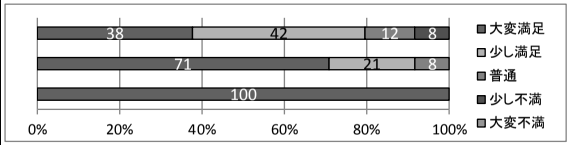
講義：矢島基美教授
生徒プレゼンテーション
★「災害後に起こる犯罪」
★「日本のジェンダーギャップ」



・現役大学生によるガイドで普段知らない情報や、大学生から見た状況を知ることが出来た。
・政教分離という1つのテーマでこれだけ議論されていて面白いと思った。
・大学の講義は高校と違い、自分から参加したもの勝ちだと思った。

9　12　木

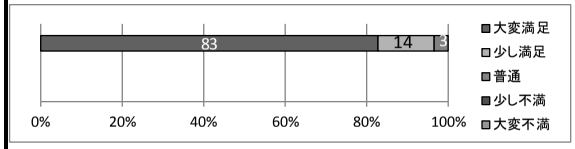
憲政記念館　上段
最高裁判所　中段
ヒューマンライツウォッチ　下段



・国会の模型や議場の椅子に座ることが出来たりして臨場感を味わえた。
・裁判所が気軽に相談出来たり、弁護人を紹介してくれたり、意外と身近な存在であると感じた。
・ＨＲＷについて活動内容を実際に伺い、事前学習で調べたことより大変であることが分かった。

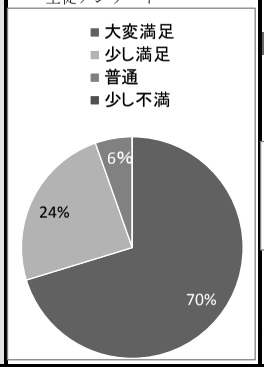
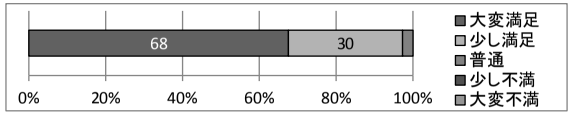
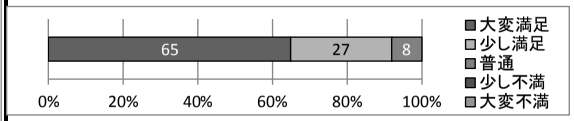
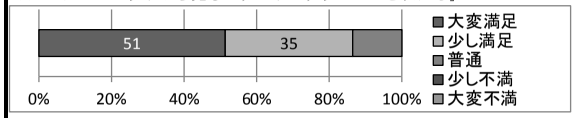
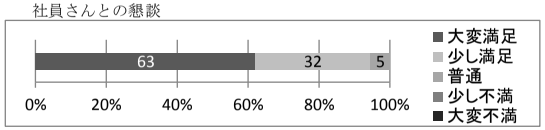
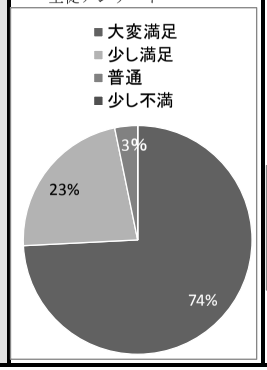
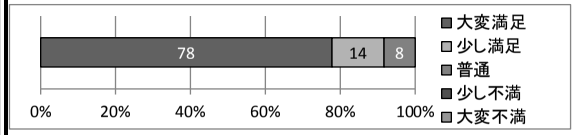
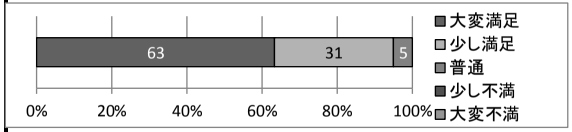
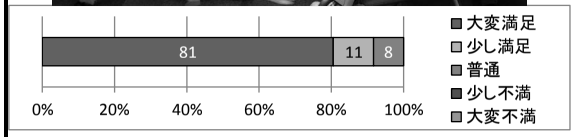
日本弁護士連合会

質疑応答



・様々な角度からの質問と答えが聞けて良かった。
・裏話やネットでは分からないことを話していただき興味深かった。
・弁護士とは社会正義実現のため、常に依頼者に寄り添うことが求められる職業だと学んだ。

ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク

		9　11　水	9　12　木	
E	**ビジネス・都市** 41人 いのち・健康を、経済活動と都市活動を通じて考える。 引率　山田　純子 引率　酒井　拓也 責任者　4　鈴木　晴奈 4　村田　のの葉 生徒アンケート  	**東京証券取引所** 東証Arrowsの説明  ・とっつきにくかった「株」が少し身近に感じるようになった。 ・自分にはなじみのない場所だと思ったが、実際行ってみると、社会の様々な方面で役立っていてとても身近であると感じた。 **ＪＥＴＲＯ本部** 生徒プレゼンテーション ★　「日本がラスベガスに!?」 ★　「外国人労働者の未来」  ・５つの省と連携してプログラムを進めていることを知り興味を持った。 ・日本と海外の企業の架け橋という役目を担っていることが分かった。 ・上田高校生のプレゼンに対し、違った視点からの意見や考え方を聞き参考になった。	**立教大学経済学部** 講義：田島夏与教授 RESAS実習 生徒プレゼンテーション ★　「生涯スポーツを普及させるために」 ★　「クローゼットから見るファストファッションと私たち」  ・ＲＥＳＡＳのより専門的な利用方法を学び参考になった。 ・図書館が広大で素晴らしく、食堂も綺麗で美味しかった。 ・統計をしっかり学ぶことで「どういうことが起きていて、何が必要なのか」を把握することができ、問題解決につながることを学んだ。 **キャノンＩＴソリューションズ（株）** 企業概要説明 プログラミング体験 社員さんとの懇談  ・文理関係なく採用していると聞き、選択肢が広がったと思う。 ・一人の質問に対しそれぞれの人が色々な意見を述べてすごいと思った。 ・お客様の要望に沿ったプログラミングで、課題を解決するのが仕事だと分かった。	
F	**子ども・次世代** 39人 いのち・健康を、教育問題 多文化共生を通じて考える。 引率　小林まゆ子 引率　川島　準希 責任者　7　丸山　紘人 7　髙津　慎太郎 生徒アンケート  	**慶應義塾大学総合政策学部** 大学生OGによるワークショップ 生徒プレゼンテーション ★　「ＡＩが発達する今、英語教育の必要性を考える」 ★　「『大丈夫か』に『大丈夫』と答える子ども」  ・自分を見つめ直し、新しい自分を発見する良い機会になった。 ・大学生の進行がスムーズで議論中にいつもより意見が出ていた。 ・目標を立てる前に”自分を理解する”所に重点を置くのが新鮮だった。	**アクション** 講演：長田幸子様 フィリピンとのスカイプ交流  ・ゴミ山で暮らす少女の映像を見たときは衝撃的で胸が苦しくなった。 ・スカイプでの元ストリートチルドレンの女性との交流が印象深かった。 ・自分のチャレンジ券を大切にして有効に利用していきます。 ・負の循環を、教育によって良く変えていけることが分かった。	**東京学芸国際中等** 学校概要説明：杉本紀子先生 先生方へのインタビュー 授業見学・生徒交流  ・「覚える」授業ではなく「考える」授業だったので良いと思った。 ・英語教育の高さを感じた。生徒先生一体となって教育の質を高めていた。 ・勉強をするということの捉え方が自分の中で変わった。 いろいろな人の話を聞かないと視野が広がらない。

ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク

		9　11　水		9　12　木

G 保健・医療

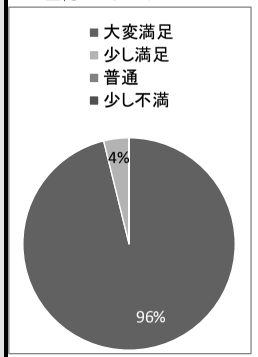
31人

いのち・健康を、長寿を支える保健福祉活動を通じて考える。

引率　髙野　芙美
引率　中山希久子

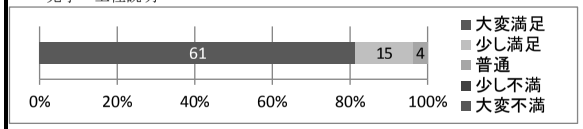
責任者　6　鴻巣　有希
　　6　山口　明香莉

生徒アンケート



日本赤十字血液センター

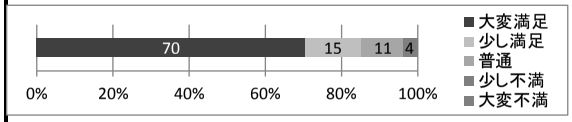
見学・工程説明



・献血の量が足りないことを知り献血しやすい環境つくりに興味を持った。
・何かあった時のために、血液サンプルを10年間保管しているのに驚いた。
・臨床検査技師の職業に就いては漠然としてイメージしか持っていなかったが、現場を見ることが出来て良かった。
・血液の検査は殆どの工程が数人で行われていることに驚いた。

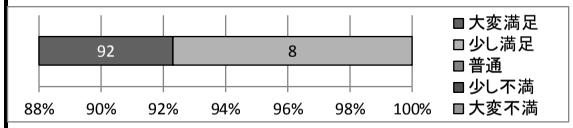
国際医療協力局

概要説明　橋本千代子様　松藤三紀様
生徒プレゼンテーション
★　「国、人種に関係なく医療と人道支援を」
★　「フィリピンの今と国際協力」

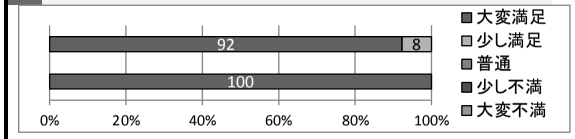


・SDGsの目標３だけでない、他の目標と組み合わせた活動が印象に残った。
・継続した援助が多かった、ただワクチンや食料を送るだけでなく、全体的な環境がよくなるような活動だった。
・国際的な援助はよく考えて行わなければならないことが分かった。

国際医療福祉大学成田キャンパス



国際医療福祉大学成田キャンパス　医学科コース
国際医療福祉大学成田キャンパス　看護・理学療法コース



・将来医療がどう活躍するかそのために今何をすべきか考えさせられた。
・手術等のシュミレーションが出来る機械が整っていて興味深かった。
・看護学では精神面への配慮が大事なんだと思った。

H 環境・生命

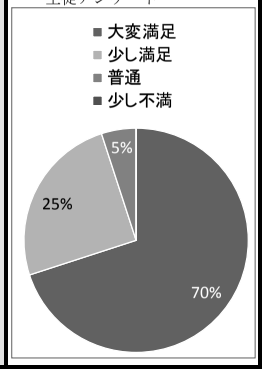
33人

いのち・健康を、生命科学と健康と薬品を通じて考える。

引率　島﨑　邦明
引率　大石　隆裕

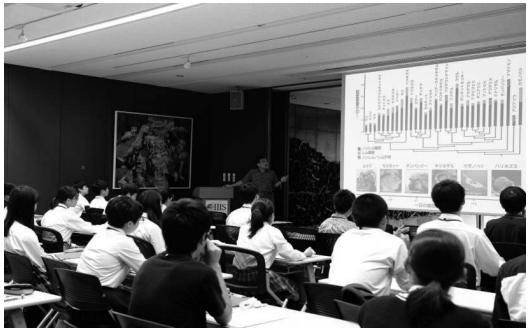
責任者　6　宮坂　岳
　　6　宮林　裕夢

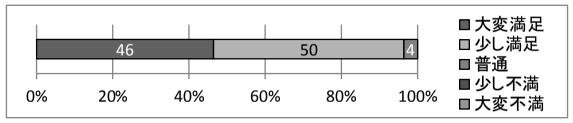
生徒アンケート



筑波大学国際統合睡眠医科学機構

講義：　柳沢正史教授
生徒プレゼンテーション
★　「iPS細胞研究と未来　～研究の結果から考察する～」
★　「睡眠と豊かな人生　～良い眠りの重要性～」
★　「人の脳はやめられない脳！？　～脳科学から見た依存症～」

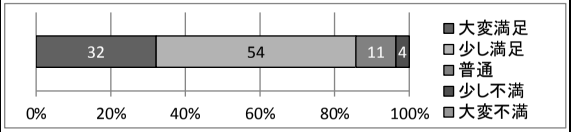




・睡眠についてこれだけ深い研究をしているのが世界でここだけだが、それでも分からないことがあると説明あり。
難しい事に常に挑戦し自ら道を開くのが本当の研究だと思った。
・一つの物事について沢山の角度から研究していて、視点が多くあるということは良いことなんだろうと思った。

昭和大学薬学部

講義：野部　浩司教授　　実習見学
生徒プレゼンテーション
★　「安全に薬を服用する方法　～薬の相互作用～」
★　「残薬　～医療費の削減へ～」
★　「製薬産業と知的財産権～新薬開発と発展途上国の医薬品アクセス～」



・チーム医療で一人の患者を救うこれほど素晴らしいものはないと思った。
・薬剤師の将来について話があり、薬剤師を目指す者はどのような準備が必要かを聞くことが出来た。

ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク

Ⅰ　テクノロジー

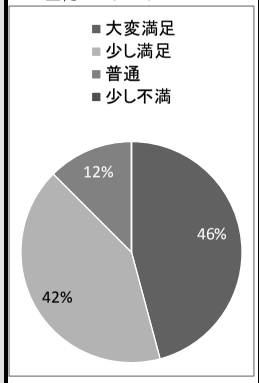
35人

いのち・健康を、長寿を支える科学技術を通じて考える。
資源機械物理エネルギー

引率　佐藤　稜花
引率　細田　甚成

責任者　2　田村　遥
　　2　小西　沙幸

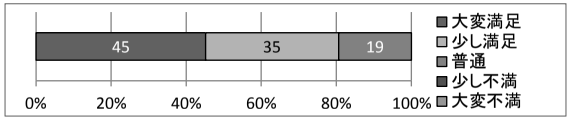
生徒アンケート



9　11　水

筑波大学プラズマ研究センター

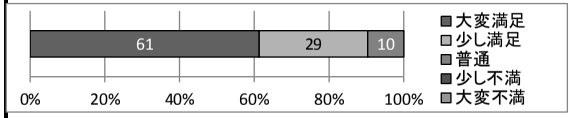
講義：坂本瑞樹センター長　　施設見学
生徒プレゼンテーション
★　「数学って必要なの？～数による社会成立とグローバル化に向けて～」
★　「世界で進むEVシフト～EVシフトで日本産業が危機に?!～」
★　「変化する航空業界　～パイロット1人制の是非～」

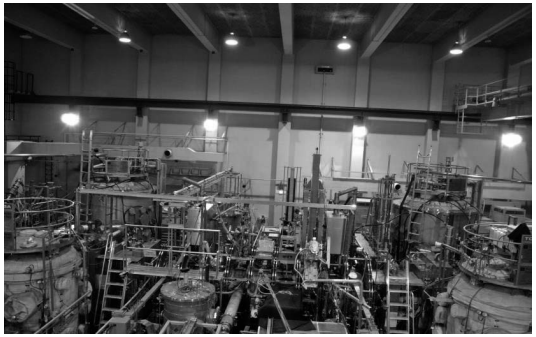


9　12　木

産業技術総合研究所

講義：高木英行先生
研究室見学：倉本浩司先生　Sharma Atul先生
生徒プレゼンテーション
★　「人工光合成によって地球温暖化は防げるか
～CO2を資源とすることはできるか～」
★　「海洋汚染を止めたい！　～私たちは何をすべきか～」
★　「燃料電池車は究極のエコカーなのだろうか
～燃料電池車（ＦＣＶ）の実態～」





・大学で水素などのクリーンエネルギーの研究をしたいと思っていたが、今回新しいクリーンエネルギーについて知ることが出来参考になった。
日本のロケットに対する研究意識の高さが分かった。
・自分が学んだ内容が研究の中にあり、高校での学習の重要性を感じた。
・プラズマが身近にも存在していることや、その細部まで分かりやすく説明されとても勉強になった。

・持続可能な社会を作るためにはエネルギー改革が重要だと分かった。
・非常に幅広い研究をしているので、自分の進路にも役立てていきたい。
・新たなエネルギーで世の中がどのように変わるか考えさせられた。

Ｊ　テクノロジー

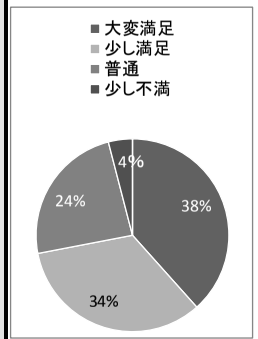
33人

いのち・健康を、長寿を支える科学技術を通じて考える。
電気電子情報

引率　塩澤　一成
引率　田村　敏信

責任者　1　小林　海斗
　　1　柳澤　友希

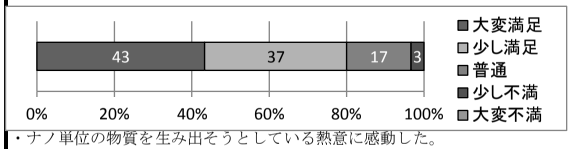
生徒アンケート



9　11　水

理化学研究所　ＲＩＫＥＮ

概要説明：野田茂穂研究員
見学：石井晃博研究員　山下大喜研究員　　町屋秀憲研修生

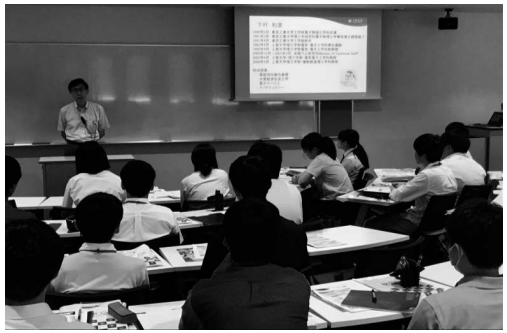


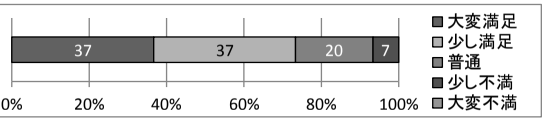
・ナノ単位の物質を生み出そうとしている熱意に感動した。
・人の動きや野球ボールの空気の流れなどをコンピューターによって再現し、あらゆる人の役に立てているのが素晴らしいと思った。

9　12　木

上智大学理工学部

講義：下村和彦教授
生徒プレゼンテーション
★　「環境保全・共生
～軽井沢から見えてくる課題とこれからのまちづくり～」
★　「超電導技術を普及させるために～超電導送電の現状と課題～」
★　「私たちの身の回りにあるＩｏＴ～ＩｏＴ家電からわかること～」





・研究に使う機会は起動に時間がかかる上、長時間稼働を見守るために常駐する人がいるなど、忍耐力と研究に対する熱意が必要と感じた。
・文系色の強い大学だというイメージだったので、理科の詳しい研究も行われているので驚いた。
・大学生の意識の高さに驚かされた。

Ⅱ　課題研究　首都圏フィールドワーク評価と考察

1　ねらい

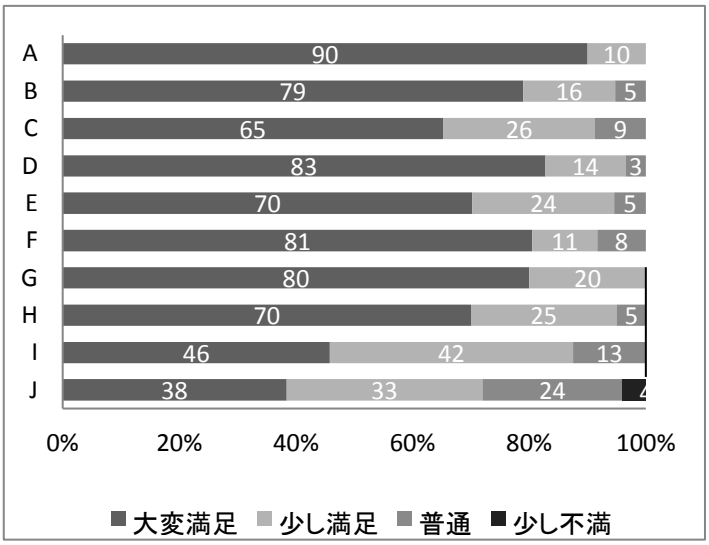
グローバルスタディⅠで設定した生徒の課題研究テーマよりカテゴリー別に研修先を選定する。
グローバルスタディⅡ課題研究フィールドワークを首都圏にカテゴリー別１０コースを設定し、
生徒は自らのキャリアプランにあわせて、希望するコースを選択する。
グローバルスタディⅡ課題研究のプレゼンテーションをし、専門家よりアドバイスをしていただく。
研究や活動の最先端で活躍されているかたのお話を聞いたり、実践を見学する。
首都圏フィールドワーク事前、事後報告をグローバルスタディⅡでグループワークで実施する。
首都圏フィールドワークでの学びを自己の課題研究に活かす。

2　概要　　詳細は、首都圏フィールドワークのページを参照

① スーパーグローバル大学における先進的な研修を計画する。
※大学教授、大学院生、大学生の指導をあおぎ、アクティブラーニング形式で実施する。
早稲田大学・上智大学・立教大学・慶應義塾大学
筑波大学・東京外国語大学
② 研究機関　先進技術を扱う研究所において研修を計画する。
筑波大学睡眠医科学研究機構、プラズマ研究センター　国立歴史民俗博物館
産業技術総合研究所、理化学研究所　上智大学
③ 教育機関　研究テーマを決めた意見交換を含む研修を計画する。
昭和大学薬学部　国際医療福祉大学　国連大学
ふたば未来学園高等学校・東京学芸大学附属国際中等教育学校
④ 専門機関　各カテゴリーの専門機関で研修を計画する。
ヒューマンライツウォッチ　アクション　ＪＩＣＡ　ＪＥＴＲＯ
日赤血液センター　国際医療協力局　東京ジャーミイ
⑤ 公共機関　各カテゴリーの公共機関で研修を計画する。
いわき市観光復興防災支援センター　ベレッシュ　最高裁・日弁連
東京証券取引所

3　生徒アンケート調査

２年全員参加　9月11日～12日　１泊２日バス利用



A・ 今は完全に復興したようにみえるけれど、未解決のことは沢山ある。助けたいとか簡単には言えないけれど、自分に何ができるか考え続けたいと思った。

B・ 先進国にも途上国にもそれぞれ課題があり、途上国の問題だと押し付けることは出来ないと思った。自分に出来そうなことを考え、実行していきたい。

C・ 大学生や教授のプレゼンは課題が絞ってあって、課題の解決策が様々な視点からいくつも盛り込んでありすごくまとまっていた。自分に活かしたい。

D・ 紛争が起こっている地へ行って取材することは大変だけどやりがいがありそうなので、大学生でもインターンで活動できそうなので私もやってみたい。

E・ 先輩の話を聞いて、自分はまだなんでもできる年齢だから、もっと経験を積もうと決心した。色んな所へ行き、色んな話を聞く。

F・ 勉強するということの捉え方が自分の中で変わった気がする。色々な人の話を聞かないと視野が広まらない。まだまだ経験不足だと感じた。

G・ パラスポーツのボッチャの体験は自分にとってとても大きい衝撃で、将来の夢の実現に活かしたい。

H・ これからもっと機械化が進み、調剤する仕事は正直人より機械の方が早くて正確であるため、薬学部に入る時にはどのような薬剤師増を思い描けばよいか分かってよかった。

I・ エネルギー、特に化石燃料の深刻さを改めて実感した。自分にできることをしていきたいと思った。

J・ 何をしに大学に入るか考えを改めることが出来た。

4　評価と考察

課題研究について専門的な見識からアドバイスを頂き、コースの他の生徒も参考になるお話を伺った。
最先端の研究について実践的な内容の講義をしていただいたり、大学生、高校生と相互にディスカッションすることでより考えを深化させたり、方向転換をしたり、能動的な考え方ができるようになった。
新規研修先：東京証券取引所、アクション、産業技術研究所、理化学研究所、上智大学理工学部
課題研究に有益なフィールドワークは生徒アンケートより考察すると以下の４つの特色がある。

・ プレゼンテーション・ディスカッション形式　　例：国連大学、東京外国語大学、上智大学、JE、早稲田大学
昭和大学、国際医療協力局、国際医療福祉大学、筑波大学
大学教授・大学院生・大学生・専門家が生徒プレゼンに対しアドバイスをいただけた。
・ アクティブラーニング・ロジカルシンキング　　例：ふたば未来学園高校、東京学芸大学附属国際中等教育ﾆJICA
グループワークで論理的にアイデアを集計し、生徒が主体となって結論を導き出す内容
・ ワークショップ・ブレインストーミング形式　　例：慶應義塾大学、立教大学
グループワークで主体的にディスカッションし、アイデアを出し合う内容
・ グループワークによる専門的なラボ体験　　例：国際医療福祉大学　上智大学　産業総合研究所理化学研究所
先端研究に関する実験体験

Ⅱ． 課題研究　Global Studies II: English 2019-2020

１ Ｐｌａｎ

Purpose

Students participated in Global Studies II: English (GSII:E) activities to expand their ability to communicate their own ideas on their research topics and international issues in English. The coursework was designed to foster critical thinking skills while supporting SGH fieldwork projects and the yearly research showcase (報告会).

Goals

Successful students will…

- Expand upon their work from their first year GSI class to present their individual research topics in English.
- Proactively seek to expand their communication skills through presentations and discussions that relate to their other courses, GSII: Japanese projects, school trip, and other SGH fieldwork projects.
- Develop critical thinking and organizational skills which allow them to communicate effectively in spoken and written English.
- Participate in collaborative projects to develop their interpersonal communication skills.

２ Ｄｏ

月	学　習　内　容	時間数	学　習　の　ポ　イ　ン　ト
4 5	Self-Introduction Presentations & Visit Ueda! Presentation Skills Project	6	• Make a short self-introduction presentation with visual aids, all in English • Use critical thinking skills to utilize the knowledge gained on their fieldwork trip and evaluate and create a response to their trip
6 7	English Debate Project	7	• Construct logical arguments in English. • Develop their research and source- verification skills • Write short logical argumentative speeches • Study parliamentary debate techniques and participate in simple classroom debates in small groups
8 9 10	Taiwan School Exchange Project → Research	10	• Study effective presentation elements • Plan and create presentations based on fieldwork and individual research projects

11	→ Presentations → Discussions → Exchange		• Develop communication techniques for presentations and discussion • Design discussion questions and formats • Hold presentations and discussions for classmates • Interact with other students in an international, intercultural setting
12	Persuasive Essay Writing (Taiwan Exchange Project)	4	• Record experiences and observations from the school exchange and Taiwan fieldwork • Utilize OREO-style writing to compose a 5-paragraph persuasive essay about future school trips and school exchanges
1 2 3	Independent Research English Presentation Project (Research Showcase)	6	• Compose and revise short summary essays about individual Independent Research Project topics • Prepare short English speeches using topic-specific technical language to explain students' research processes, information, and results • Present English speeches using summaries and outlined ideas to an audience of peers, school members, community members, and invited English teachers from other schools

3 Check

Reoccurring lesson activities included 'Small Talk' conversation time, question making activities, and group brainstorming work. Projects were completed as pair work or group work to foster collaboration skills. During each project, students set goals for their own, personal learning targets, completed self-evaluation assessment forms, and provided peer review and feedback for other students.

4 Act

Students built up more confidence using the English skills they have developed in other courses. They reported that they were motivated to learn new vocabulary and communication strategies for their chosen and assigned topics, especially when interacting with Taiwanese students on their school visit and ALT guest instructors at the Research Showcase event.

After completing this course, students should be able to hold basic to intermediate-level conversations about simple global issues and explain their thinking with logical reasoning. Students can further build on their work in this course by focusing on self-review and peer editing, intermediate argument construction, and intermediate critical analysis in the future.

Ⅱ． 課題研究　Global Studies II: English Project - Impromptu Debate

Students completed a 5-lesson project on Impromptu Debate where they focused on constructing logical arguments, supporting their opinions with research and verified sources, interacting with each other to challenge presented ideas, and rhetoric techniques they could use to convince peer judges to agree with their opinions.

Debate Project Process

Understand the Format → Define the main opinion (motion) → Create supporting reasons with examples and data → Challenge reasons with questions, examples, and data → Refute challenges with questions, examples, and data → Evaluate reasons and rhetoric to agree or disagree with the opinion

1: Discussion	2: Opinion Hunt	3: Debate	4: Debate	5: Debate
• Motivations and Skills • Team Brainstorming	• Team Brainstorming • Interview Interaction • Team Evaluation	• Rules and Format • Speech Preparation • Debate • Class Evaluation	• Team Brainstorm • Speech Preparation • Debate • Class Evaluation	• POI Focus • Brainstorm • Speech Preparation • Debate • Class Evaluation

After spending two lessons on skill practice, students participated in impromptu debates on familiar topics (e.g. school events and policies) in teams of three. These classroom debates used the *Parliamentary Debate Personnel Development Association*'s debate format and rules (bilingual introduction worksheet pictured below) and preparation materials including debate speech resources designed specifically to support a variety of student language levels.

By completing the project, students learned how to prepare two main reasons, supporting facts, empirical examples, logical effects of policy changes, and emotional considerations for their impromptu assigned side (Government/Opposition) of the debates with only fifteen minutes of preparation time, and to respond to their opposing side's arguments promptly with Points of Interest and rebuttal speeches during the debate.

Impromptu Debate Introduction Worksheet

PARLIAMENTARY DEBATE
即興型ディベートのルール

About This Style of Debate ディベートスタイルについて

Parliamentary Debate is a form of impromptu debate that is used all over the world in education, government, and entertainment settings.
パーラメンタリーディベートは世界中の学校や政府行政、興行の場で活用されている即興型のディベート形式です。

Each debate has two teams (Government and Opposition) that represent different opinions about the debate's motion. They try to convince a third party (Judges) to agree with their side's opinion. Sides are assigned to each team, so there are times where they must consider a topic from a different perspective than the one they hold.
一つの論題に対し、肯定と否定チームに分かれます。肯定側は「ガバーメント」と言って、否定側は「オポジション」と言います。各々のチームが第三者（ジャッジ）を説得させる形式をとります。チームは肯定/否定チームのいずれを担当するかを自ら選ぶことはできないので、自身の意見とは異なる視点からの主張も考えなければならないことがあります。

After a motion is announced, teams have 15-20 minutes to prepare what they want to say in the debate. Their arguments should be based on their knowledge, not extensive research.
論題が発表されてから 15 分～20 分間準備の後、準備時間の後、ディベートを開始します。チームの議論は広範な研究ではなく、自分の知識を基に作ります。

To learn more about Impromptu debate, please visit *http://englishdebate.org/*

Debate Rules ディベートのルール

★ There are two teams in this debate with three speakers per team. The names and roles of each speaker are in the diagram to the right.
ディベーターの人数は、二つをチーム 3 名の計 6 名です。それぞれの役割名と内容は右図に書いています。

★ After the motion is announced, teams have 15-20 minutes to prepare their arguments and speeches.
論題が発表されてから 15 分～20 分間、議論とスピーチの準備時間があります。

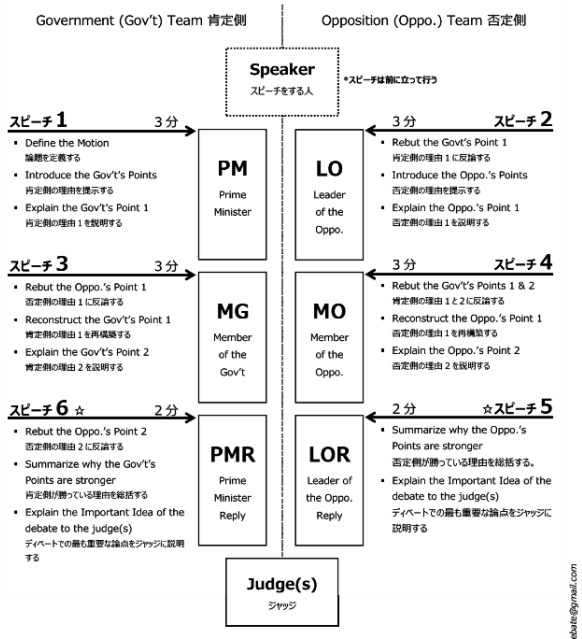
★ The order of the speeches is shown in the diagram to the right. Each speaker should speak 3 or 2 minutes. 30 seconds under or over time is okay.
スピーチの順番は右図に書いてあります。スピーチ時間は、1 人 3 分または 2 分です。ただし、時間 30 秒は許容範囲です。

★ There is no preparation time between speeches. The next speaker should prepare their rebuttals and reconstructions during the previous speech.
スピーチ間の準備時間はありません。次の人は前のスピーチが行われている時間に反論や立て直しを準備するべきです。

★ During a speech, the opposing team may interrupt to ask a question by saying "Point of Information" or "POI". The speaker may choose to accept the question by saying "Yes, please" or decline the question by saying "No, thank you". Speakers should answer questions they accept.
スピーチの途中で、相手チームは質問することができます。質問をしたい時には「ポイント・オブ・インフォメーション」か「ポイ」と言います。スピーチをしている人は質問を受ける場合は、「イエス・プリーズ」と言い、質問を拒否する場合は「ノー・サンキュー」と言います。受けた質問には答える必要があります。

★ Judges should choose a winner for the debate based on each team's presented ideas and the way they expressed them. A judge's personal opinion and any expert-level knowledge they have should not factor into their decision.
ジャッジが勝者を決める評価基準は主に「内容」と「表現」の 2 つの観点です。ジャッジが持つ個人的な考えや専門的知識はできるだけ排除し、客観的に判定します。

Debate Setup and Order ディベートの構成と順序



Key Vocabulary 主要な語彙

Go·vern·ment	与党（肯定側）	Op·po·si·tion	野党（否定側）
mo·tion	論題、トピック	de·fine (de·fi·ni·tion)	定義する（定義）
o·pin·ion	意見	point	理由、ポイント
PO·II	質問時の掛け声	re·but (re·but·tal)	反論する（反論）
con·vince	説得する	re·con·struct (re·con·struc·tion)	守る、再構築する（立て直し）
re·sult	結論	sum·ma·rize (sum·ma·ry)	要約する（総括）

©2016 Nagano English Club League necdebate@gmail.com

II. 課題研究　Global Studies II: English Project - Research Showcase Presentations

In addition to their independent research projects conducted in the GSII:J course, students completed a short speech project in GSII:E to summarize their research and express their ideas and opinions on their research topic. Students wrote short DOREO-style English summaries for their research then practiced unscripted speeches with their classmates in group settings before presenting at the SGH Research Showcase event's Poster Session.

During the Poster Session, each GSII student gave a 2-7 minute English speech that described their topic, research methods, points of interest from their research, and their suggestion for future action within their topic. These speeches were presented in front of their peers, university student advisors, SGH advisors, teachers, and visiting Native English-speaking Teachers (NESTs) from around Nagano Prefecture. After further elaboration on their topic in Japanese, most students also participated in bilingual question and answer time with the NESTs and their peers.

As the final part of this project, students were asked to reflect on and discuss the Research Showcase event to evaluate their preparation, research, and presentation quality.

English Summary and Speech Composition Guide

Written Summary

[D]escription: **What is your topic?** *[Explain the topic's keywords or ideas in easy English.]*

[O]pinion: **What do you think after finishing your research?** *[What is your opinion about your topic?]*

[R]eason: **Why do you think this?** *[Give one reason for your opinion.]*

[E]xamples x2: **Support your reason with more information.** *[Provide facts, statistics, or quote sources.]*

[O]pinion: **What should be done in the future?** *[Take away point!]*

Speech Outline

1. Self-Introduction
   - Who are you?
   - Why did you choose this topic?
2. Topic Introduction
   - What is your topic? (Explain it in easy English.)
   - Why is your topic important?
3. Topic Information
   - What is the present situation concerning your topic?
   - What problems does your topic have?
   - Who or what does your topic effect?
4. Research Information
   - What sources did you get your information from? (Experts, newspapers, websites...)
   - What new things did you learn about your topic?
   - What do you still not understand about your topic?
   - What is the most interesting thing you learned from your research?
5. Conclusion
   - What is your opinion about (or idea for) this topic?
   - What will you do in the future related to this topic?

Ⅱ．　課題研究　　ＧＳⅡ英語　台湾研修旅行学校交流プレゼンテーション活動

1　ねらい

・台湾研修旅行の高校訪問でミニプレゼン・インタビュー・ディスカッションを通して、意見交換をおこない、自らの視野を広げる。

・直接近い距離で交流することで互いの親睦を深める。

・グローバルスタディⅡ（英語）授業にてグループワークにより準備をおこなう。

2　概要

実施日　2019 年 11 月 28 日（研修旅行 4 日目）

訪問校

学校名	国立科学工業園区実験高級中学	国立新竹女子高級中学	国立新竹高級商業職業学校	私立新竹曙光高級中学
地域	新竹県	新竹県	新竹県	新竹県
クラス	１組５組	２組４組	３組７組	６組８組
男子	34	32	33	33
女子	40	40	42	40
合計	74	72	75	73
訪問時間	10:00-15:00			

Global Issue & Culture Opinion Exchange Program (50~60min)

訪問時に、こちらから持ち込みのプログラムとして、60 分を確保してもらうことを依頼。

Topic: Global Issues & Culture

自分の課題研究テーマや両国の高校生が関心を寄せているテーマ

日本の文化の昔と今

台湾の生徒はどのように考えるのか知りたいことや日本で問題になっていることが台湾でどうなのか。

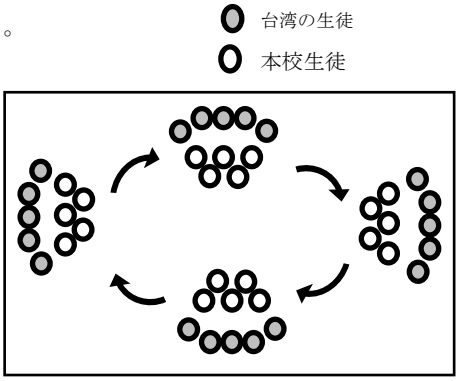
Procedure：

２クラスで 1 校を訪問するため、20 人ずつ４つのグループに分かれる。

↓

20 人が　5 人ずつ 4 つのグループに分かれる。台湾の生徒も同じくらいの人数が入る。

この小グループでプレゼン&ディスカッションを行う。



流れ：5’　Group Set-up / Icebreakers（あいさつ・自己紹介・名刺交換など）

10’　Presentation ①　（問題提起、背景知識の説明）（模造紙ポスタープレゼン）

5’　Interview & Discussion　①　（プレゼンテーマに関するリサーチのための質問をした後、意見交換する）

プレゼン→インタビュー／ディスカッションの流れを 2 回行う。

5’　Clean-up / Goodbyes　（全体に話し合ったこと、気づいたことの共有）

プレゼンテーション&ディスカッショントピック

1. Traditional and Modern Pastimes
2. Gender Roles
3. Traditional and Modern Art
4. Traditional and Modern Holidays
5. Mythology and Popular Stories
6. Education System, School Life, and Student Culture
7. Traditional Martial Arts and Modern Sports
8. Traditional and Modern (Local) Food

3　生徒の感想

・日本のアートについて、画像を多く使ってポスターを作成したため、台湾の高校生にも理解してもらえて嬉しかった。
・もっと英語を勉強してから行きたいと思った。英語でコミュニケーションがもっととれたらもっと楽しかったと思う。
・英語で自分の考えを伝える経験ができてよかったと思う。台湾の生徒さんからも同じようなプレゼンがあると相互理解がもっと深まるのではないかと思う。
・台湾の生徒さん達が、私たちが分からない言葉などは、簡単な表現に言い換えて伝えてくれたので、コミュニケーションがとりやすかった。自分の英語力の無さを痛感した。
・英語で自信を持って話せるようになったと思う。
・台湾の生徒さんの人柄の良さに触れることができて嬉しかった。プレゼンテーション中、相槌を打ってくれたり、しっかりと受け答えしてくれてありがたかったし、緊張がほぐれた。

当日のプレゼンの様子（上段）
ポスター準備の様子（下段）

4　評価と考察

今年度はプレゼンテーション資料をポスターに替え、日本の芸術、教育、学校生活などについて、写真や図表を使うなどの工夫をしながら、完成させた。昨年度に引き続き 2 度目の訪問である高校がほとんどであったため、当日も大きな混乱もなく発表を行うことができた。本校生徒がファシリテーターとタイムキーパーを担当した。当日は英語の指示出しに緊張したり、時間の調整に苦労したりする姿も見られたが、台湾の高校生たちが熱心に自分たちの発表に耳を傾けてくれたことに感謝していた。台湾の学生たちの熱烈な歓迎と温かなもてなしのおかげで、どの生徒も充実した時間を過ごせたようである。帰国後は、自身の英語力を向上させたいという生徒たちからは前向きな感想も聞かれ、今後の学習への積極的な取り組みに繋がることを期待したい。

Ⅱ　課題研究　　グローバルスタディⅢ受講者　ポートフォリオ

1　ねらい

ＳＧＨ全員カリキュラム（グローバルスタディＩⅡ）で実施した課題研究をキャリアに応じて更に深化させる。

課題解決のアクションプランを地域で考案するため、地域で自主的にフィールドワークを実施し、論文を作成する。

北陸新幹線サミットを主催し、ＳＧＨ高校生と課題研究をカテゴリー別にプレゼンテーションし、ディスカッションする。

2　概要　　選択教科　増単位 １単位　　13名選択　英語論文コース3人、日本語論文コース10人

※単位修得者全員のグローバルスタディＩⅡⅢポートフォリオと、進路先（2020年3月上旬時点）を掲載した。

1　A （女）		海外研修　フィリピンスタディーツアー
1年	ＧＳＩ	時事問題　待機児童問題
	県内ＦＷ	国際理解　清泉女学院大学・亀清旅館　駒ヶ根にてプレゼン
	ＳＧＨ報告会	県内ＦＷ報告
2年	ＧＳⅡ	子ども次世代　課題研究　「日本の教育格差を解決する」
	首都圏ＦＷ	歴史芸術　早稲田大学・国立歴史民俗博物館・東京ジャーミィ
	台湾ＦＷ	歴史芸術　国立台湾師範大学・二二八記念館・国立故宮博物館
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「地元信仰の保護と伝承」
		北陸新幹線サミット　第２分科会　地域の課題から地域創生を提言
		フィールドワーク　信濃国分寺（上田市）　生島足島神社（上田市）
進路	進学先	大妻女子大学　文学部　日本文学科

2　B （女）		海外研修　フィリピンスタディーツアー　カンボジア井戸プロジェクト
1年	ＧＳＩ	時事問題　同性愛・同性婚は違法なのか
	県内ＦＷ	保健医療　佐久総合病院・佐久大学看護学部
2年	ＧＳⅡ	保健医療　課題研究　「発展途上国において健康向上のためにできること」
	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学・国連大学・ＪＩＣＡ地球ひろば
		東京外国語大学にてプレゼン
	台湾ＦＷ	環境生命　佛教慈濟醫療財團法人台北慈濟醫院・慈済環境保護センター
	その他の活動	第１回北信越ＳＧＨフォーラム　シニア大学　など
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	英語コース　「Our possibilities with Extracurricular activities」
		北陸新幹線サミット　第４分科会　グローバル課題から解決策を提言（英語）
進路	進学先	埼玉大学　経済学部　経済学科（国際プログラム枠）

3　C （男）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　アメリカのパリ協定からの離脱
	県内ＦＷ	保健医療　信州大学繊維学部　寿製薬
2年	ＧＳⅡ	産業技術　課題研究　「AIの普及がもたらすメリット」
	首都圏ＦＷ	テクノロジー　ＪＡＸＡ筑波宇宙センター　筑波大学
	台湾ＦＷ	産業技術　新竹サイエンスパーク　ＴＳＭＣ
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「これからの時代を支えるAIの賢い使い方」
		北陸新幹線サミット　第２分科会　地域の課題から地域創生を提言
		フィールドワーク　須藤物産（上田市）
進路	進学先	信州大学　工学部　電子情報システム工学科

4　D （男）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　ブラジルでジカ熱　流行は防げないのか？
	県内ＦＷ	保健医療　佐久総合病院・佐久大学看護学部
2年	ＧＳⅡ	子ども次世代　課題研究　「震災の復興は地域だけでいいのか」
	首都圏ＦＷ	テクノロジー　ＪＡＸＡ筑波宇宙センター　筑波大学
	台湾ＦＷ	環境生命　佛教慈濟醫療財團法人台北慈濟醫院・慈済環境保護センター
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「地球に太陽を作ろう！」
		北陸新幹線サミット　第３分科会　グローバル課題から解決策を提言（日本語）

5　E（女）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　人工知能の発達がもたらす社会への影響
	県内ＦＷ	化学・材料　信州大学繊維学部　寿製薬
	ＳＧＨ報告会	県内ＦＷ報告
2年	ＧＳⅡ	産業技術　課題研究　「インドから考える発展途上国の電力不足」
	首都圏ＦＷ	テクノロジー　ＪＡＸＡ筑波宇宙センター　芝浦工業大学
	台湾ＦＷ	産業技術　新竹サイエンスパーク　台積創新館　ＴＳＭＣ
	ＳＧＨ報告会	首都圏ＦＷ報告
	その他の活動	第３回関東・甲信越静地区スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会　出場
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｃ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「超高齢社会日本におけるウェアラブルロボットのあり方とは？」
		北陸新幹線サミット　第１分科会　信州発いのち・健康フォーラム
		フィールドワーク　信州大学繊維学部

6　F（女）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　移民制限
	県内ＦＷ	化学・材料　信州大学繊維学部　寿製薬
2年	ＧＳⅡ	ビジネス都市　課題研究　「菅平の観光業を発展させるには」
	首都圏ＦＷ	ビジネス都市　立教大学、JETRO、SONY　立教大にてプレゼン
	台湾ＦＷ	ビジネス都市　中国師範大学、日置電機
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「菅平の観光客を増やしたい
		～まずは女子大生をターゲットに秋のスタンプラリーを開催～」
		北陸新幹線サミット　第２分科会　地域の課題から地域創生を提言
		フィールドワーク　上田商工会議所、イオン、ヤマダ電機、ユニクロ
進路	進学先	長野県立大学　グローバルマネジメント学部　グローバルマネジメント学科

7　G（女）		海外研修　フィリピンスタディーツアー
1年	ＧＳＩ	時事問題　東京オリンピックに向けて民泊実施か？
	県内ＦＷ	ビジネス都市　小布施町
	その他の活動	「世界がもし１００人の村だったら」ファシリテーター
2年	ＧＳⅡ	子ども次世代　課題研究　「これからの世界で必要とされるリーダー育成教育」
	首都圏ＦＷ	食と防災　農産物直売所ベレッシュ・福島県ふたば未来学園高等学校・
		いわき市防災ツアー
	台湾ＦＷ	教育子ども　台北日本人学校・台北市立天母国民小学・臺北市立大學
	その他の活動	ＳＧＨ甲子園　参加
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「ＳＧＨのソノサキ」
		北陸新幹線サミット　第３分科会　グローバル課題から解決策を提言（日本語）
		フィールドワーク　ISAK　御代田町教育委員会関連団体際日外国人向けの日本語教室
進路	進学先	信州大学　教育学部　家庭科教育コース

8　H（女）		海外研修　ボストンスタディーツアー参加（ハーバード大学幹細胞研究所にてプレゼン）
1年	ＧＳＩ	時事問題　カジノ法案の是非
	県内ＦＷ	保健医療　佐久総合病院・佐久大学看護学部
	ＳＧＨ報告会	県内ＦＷ報告
	その他の活動	長野市ＳＧＨ報告会プレゼン「ボストンスタディーツアー報告」
2年	ＧＳⅡ	保健医療　課題研究　「外国人患者をどのように受け入れるべきか」
	首都圏ＦＷ	保健医療　血液センター・　国際福祉大学・　国際医療協力局（プレゼン）
	台湾ＦＷ	保健医療　台湾慈恵基金会・　慈恵病院
	その他の活動	七尾高校でのプレゼン発表　あがり症サークル・ボランティア参加
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	英語コース　課題研究　「うつ病人口を減らすには」
		北陸新幹線サミット　第１分科会　いのち・健康フォーラム
		フィールドワーク　上田高校スクールカウンセラー
	その他の活動	養育里親のトーク会参加　発達障害者のトーク会参加

9　I（女）		海外研修　フィリピンスタディーツアー
1年	ＧＳＩ	時事問題　待機児童問題
	県内ＦＷ	国際理解　清泉女学院大学　亀清旅館
	その他の活動	グローバルクラスメート　松尾祭にて外語カレッジ生案内
2年	ＧＳⅡ	子ども次世代　課題研究　「なぜいじめはなくならないのか」
	首都圏ＦＷ	子ども次世代　慶応義塾大学総合政策学部　ユニセフハウス
		東京学芸大学付属国際中等教育学校
	台湾ＦＷ	教育子ども　台北日本人学校・台北市立天母国民小学・臺北市立大學
	その他の活動	銀座長野にてプレゼンテーション　石川県七尾高校にてプレゼンテーション
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「若者は選挙に行かないと4000万円も損をする!?」
		北陸新幹線サミット　第２分科会　地域の課題から地域創生を提言
		フィールドワーク　県選挙管理委員会　フェイスブックを用いたアンケートの実施
進路	進学先	早稲田大学　社会科学部　社会科学科

10　J（女）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　勇気と希望を与えてくれた難民選手団
	県内ＦＷ	子ども・スポーツ　南長野運動公園　青木村児童センター
	ＳＧＨ報告会	全体会　「子どものいじめ問題～なぜいじめはなくならないのか～」　プレゼンテーション実施
2年	ＧＳⅡ	子ども次世代　課題研究　「子どものいじめ問題～なぜいじめはなくならないのか～」
	首都圏ＦＷ	子ども次世代　慶応義塾大学　総合政策学部（課題研究プレゼン実施）
	台湾ＦＷ	教育子ども　台北日本人学校・台北市立天母国民小学・臺北市立大學 台北市立天母国民小学にて「小学校英語教育」プレゼン実施
	ＳＧＨ報告会	全体会　「What Abilities Do Students Need in the Future?」（プレゼン実施）
	その他の活動	銀座Naganoにて課題研究プレゼン実施
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「本当にいじめはありませんか？ ～一人でも多くの子どもを救うために～」
		北陸新幹線サミット　第２分科会　地域の課題から地域創生を提言
	その他の活動	高校生のための学校教師未来塾in長野　参加
進路	進学先	信州大学　教育学部　現代教育コース

11　K（男）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　自動運転実用化の影響
	県内ＦＷ	子ども・スポーツ　長野Ｕスタジアム　青木村児童センター
	ＳＧＨ報告会	「世界平和の実現～戦後のドイツから学び、考える～」発表
	その他の活動	高校生による学習支援参加
2年	ＧＳⅡ	平和貧困　課題研究　「世界平和の実現～戦後のドイツから学び、考える～」
	首都圏ＦＷ	子ども次世代　慶応義塾大学総合政策学部　ユニセフハウス 東京学芸大学付属国際中等教育学校
	台湾ＦＷ	子ども・教育　台北日本人学校・台北市立天母国民小学・臺北市立大學
	ＳＧＨ報告会	「現代の教育格差に立ち向かう～高校生による学習支援～」発表
	その他の活動	高校生による学習支援参加
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「若者よ、世界を見よう～ＳＤＧｓを達成するために～」
		北陸新幹線サミット　第３分科会　グローバル課題から解決策を提言（日本語）
進路	進学先	金沢大学　理工学部　物質化学科

12　L（女）		海外研修　ボストンスタディーツアー
1年	ＧＳＩ	時事問題　熊本地震の被害について
	県内ＦＷ	国際理解　清泉女学院大学　亀清旅館
	その他の活動	ＪＩＣＡ青年海外協力隊　1日体験入隊　100人村ファシリテーター
2年	ＧＳⅡ	ビジネス都市　課題研究　「日本の‘おもてなし’　～インバウンドを狙うには～」
	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学・国連大学・ＪＩＣＡ地球ひろば
	台湾ＦＷ	国際理解　日本台湾交流協会　・台北事務所
	その他の活動	県庁にてボストンスタディーツアー報告プレゼン
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	英語コース　課題研究　“It’s time to do calligraphy!” －How can we share calligraphy culture with the world？-
		北陸新幹線サミット　第４分科会　グローバル課題から解決策を提言（英語）
		フィールドワーク　驒山館（長野市）
進路	進学先	千葉大学　国際教養学部　国際教養学科

13　M（男）		海外研修　フィリピンスタディツアー　カンボジア井戸プロジェクト
1年	ＧＳＩ	時事問題　過労死について
	県内ＦＷ	国際理解　清泉女学院大学　亀清旅館
2年	ＧＳⅡ	平和貧困　課題研究　「貧困問題を解決するには？」
	首都圏ＦＷ	人権ジェンダー　明治大学博物館・日本弁護士連合会
	台湾ＦＷ	歴史芸術　國立臺灣師範大學・國立故宮博物院・二二八紀念館
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「貧困が子どもの心理に及ぼす影響 」
		北陸新幹線サミット　第３分科会　グローバル課題から解決策を提言（日本語）

Ⅱ　課題研究ＧＳⅢ　　長野県上田高等学校　第３回北陸新幹線サミット
関東北信越地区ＳＧＨ指定校課題研究発表会

１ ねらい

期日　　2019年6月22日（土）10:00～16:00

場所　　長野県上田高等学校　長野県上田高等学校同窓会館

コンセプト　関東甲信越北陸地区高校課題研究発表会
テーマ別６分科会形式で、各分科会において専門分野の講師３名から助言をいただく
プレゼンテーション10分＋グループディスカッション15分
ディスカッションの充実

来賓

飯島由美	長野県総合教育センター所長
盛岡正博	佐久大学理事長
大室悦賀	長野県立大学グローバルマネジメント学部教授
宮越幸代	長野保健医療大学看護学部准教授
瀧澤郁雄	国際協力機構（JICA）人間開発部次長
小川幸司	長野県教育委員会学びの改革支援課高校教育指導係
長嶋幸恵	長野県教育委員会学びの改革支援課高校教育指導係

講師

第Ⅰ分科会	**信州発いのち・健康フォーラム**	**日本語**
盛岡正博	佐久大学理事長	連携機関
宮越幸代	長野保健医療大学看護学部准教授	
斎藤まどか	新潟大学医学部学生	本校卒業生
第Ⅱ分科会	**地域の課題から地域創生を提言①②**	**日本語**
大室悦賀	長野県立大学グローバルマネジメント学部教授	連携機関
伊藤友江	食と農のまちづくりネットワーク代表理事	連携機関
直井　恵	本校海外交流アドバイザー，認定ＮＰＯ法人アイキャン代表	
小川幸司	長野県教育委員会学びの改革支援課高校教育指導係	管理機関
間篠花音	青山学院大学地球社会共生学部学生	本校卒業生
望月啓太郎	慶応義塾大学経済学部学生	本校卒業生
第Ⅲ分科会	**グローバル課題から解決策を提言①②**	**日本語**
瀧澤郁雄	国際協力機構（JICA）人間開発部次長	連携機関
竹内　岳	JICA長野デスク　国際協力推進員	連携機関
飯島由美	長野県総合教育センター所長	管理機関
遠山里菜	筑波大学社会・国際学群学生	本校卒業生
南澤 諒真	筑波大学人間学群学生	本校卒業生
饗場己武	東京大学文科Ⅰ類学生	本校卒業生
第Ⅳ分科会	**グローバル課題から解決策を提言**	**英　語**
長嶋幸恵	長野県教育委員会学びの改革支援課高校教育指導係	管理機関
Daniel Topal	長野県長野高等学校G講師	連携機関
藤森　舞	千葉大学国際教養学部学生	本校卒業生

	参加高等学校	生徒	引率		参加高等学校	生徒	引率
SGH	筑波大学附属坂戸高等学校	16	2	SSH	長野県飯山高等学校	13	1
SGH	東京学芸大学附属国際中等教育学校	13	1	SGH	長野県長野高等学校	4	1
SGH	新潟県立国際情報高等学校	10	3	SSH	長野県屋代高等学校	2	1
SGH	石川県立金沢大学付属高等学校	2	1		長野県篠ノ井高等学校	4	1
NSH	石川県立七尾高等学校	5	1	SGH	長野県上田高等学校	29	8

来校高校生69名，引率教員20名，講師，来賓18名，一般参加 17名，本校参加生徒29名，校内運営教員 14名，　計167名

２ 概要

長野県上田高等学校　北陸新幹線サミット

開会行事　　長野県上田高等学校同窓会館２階ホール

長野県教育委員会挨拶　　飯島由美氏　（長野県総合教育センター所長）

学校長挨拶・来賓・講師紹介・参加高校紹介

記念講演　　瀧澤郁雄氏（国際協力機構（JICA）人間開発部次長）「世界の健康を守る：グローバルヘルスと国際協力」

飯島由美氏の挨拶

瀧澤郁雄氏の記念講演

第Ⅱ分科会①でのディスカッション

第Ⅲ分科会①での質疑応答

閉会行事

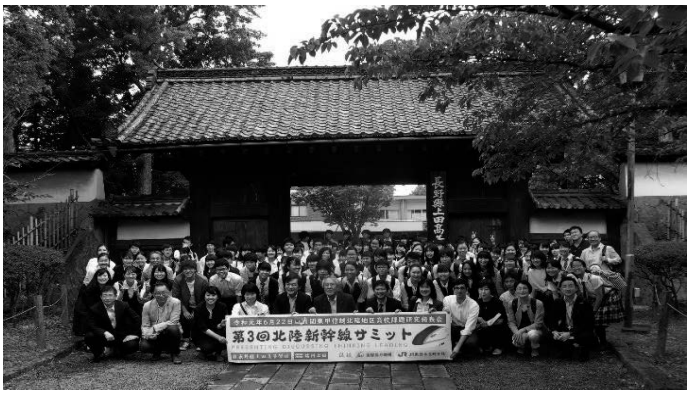
シェアリング

分科会Ⅰ		信州発いのち健康フォーラム	分科会代表生徒による報告
分科会Ⅱ		地域課題から地域創生を提言①②	分科会代表生徒による報告
分科会Ⅲ	日	グローバル課題から解決策を提言①②	分科会代表生徒による報告
分科会Ⅳ	英	グローバル課題から解決策を提言	分科会代表生徒による報告

生徒代表挨拶　　吉田花菜（本校生）　　学校長閉会挨拶　　廣田昌彦

シェアリング

参加者全員で記念写真　　上田高校古城の門



分科会 Ⅰ 信州発いのち・健康フォーラム　　112番教室

関東甲信越北陸地区課題研究発表会

プレゼンテーション高校名	「プレゼンテーションテーマ」
discussionテーマ	※ディスカッション内容の要点記録

講評　盛岡正博氏　(佐久大学理事長)　　講評　宮越幸代氏　(長野保健医療大学看護学部准教授)

1 長野県上田高等学校　「うつ病を防ぐには？」

discussion　心の状態を客観的に知るためにはどんな方法が有効か？

※口の中のアミラーゼを計る　自分の状態，自分のもやもやを紙に書き出す

2 長野県上田高等学校　「貧困が子どもの心理に及ぼす影響」

discussion　国内における貧困問題について

※ 体験学習はお金・場所がかかる。　貧困と自己肯定感の低下は直接結びつけていいのか

3 東京学芸大学附属国際中等教育学校　「外国人観光客が利用しやすい医療機関へのアクセス推奨」

discussion　日本の政府や病院・医療従事者は外国人観光客が医療を受けることについてどのような整備をすべきなのか

※ 定住者・半定住者に対する医療機関が整っていない。　医療通訳の制度化。

4 筑波大学附属坂戸高等学校　「環境教育をマイクロプラスチックの視点から考える」

discussion　どのような日常生活をおくれば環境や人の健康をまもれるか

※ レジ袋を自分が使わないとともにSNSで発信。　衛生面をいくつかの視点で考える

5 東京学芸大学附属国際中等教育学校　「日本の子どもを対象としたテクノロジーを用いた自己肯定感の改善」

discussion　子どもたちの自己肯定感を向上させる手段にはどのようなものがあるか。テクノロジーはどのように寄与できるか

※日本と海外の違い。文字で送るというだけでは響かないのではないか。

6 長野県上田高等学校　「超高齢社会の日本におけるウェアラブルロボットのあり方」

discussion　介護士不足をどう解決するか？

※ ロボットがあれば問題がすべて解決されるのか　そもそも腰を痛める介護が間違っていないか。

分科会 Ⅱ 地域の課題から地域創生を提言①　　114番教室

関東甲信越北陸地区課題研究発表会

講評　大室悦賀氏 (長野県立大学グローバルマネジメント学部教授)　　講評　伊藤友江氏 (食と農のまちづくりネットワーク代表理事)

1 長野県飯山高等学校　「方言で地方創生」

discussion　オリンピックを機に訪れる外国人観光客をどう長野県に呼び込むか。

方言を使って地方創生ができないか（キャッチフレーズを作る以外に）

※ 方言Tシャツ。　音を使って広めていく→CMや映像、イントネーション、リズムの面白さも用いる。

2 長野県上田高等学校　「これからの時代を支えるAIの賢い使い方とは？」

discussion　AIの有用性を伝えていくのにどんな方法があるのか

※ どこまでAIを使うべきか。　若者が支える農業として興味を持たせる。

3 長野県上田高等学校　「若者は選挙に行かないと4000万円も損をする!?」

discussion　投票の望ましい雰囲気とは

※ 私たちの世代が選挙を変えていくべき。選挙率が高いスウェーデンを参考にする。

4 石川県立七尾高等学校　「プチ移住」

discussion　能登での生活を体験してもらうツアーを提供するビジネスプランをどのようにして周知するか

※ インスタなどは結局それを見に行こうとは思わない。　SNSも大事ではあるが地元の人の力が大切。

5 長野県上田高等学校　「菅平高原の観光業を発展させるためには」

discussion　情報を宣伝する時，どのツールを使ったらいいか

※ 有名な場所だけでなく、ふとした美しい場所にも誘う。　食に注目した地元のオリジナル菓子の販売。

分科会 Ⅱ　地域の課題から地域創生を提言②　　116番教室

関東甲信越北陸地区課題研究発表会

講評　直井恵氏（上田高校海外交流アドバイザー，NPO法人アイキャン代表）　講評　小川幸司氏（長野県教育委員会学びの改革支援課）

1 長野県上田高等学校　「地元信仰の保護と伝承―蕪民将来信仰をめぐって―」

discussion　地域の民俗文化に興味を持ってもらうために何ができるか

※ 歴史ある寺を近代的な形で伝えるのはどうか。　時代に合わせた方法で興味を持ってもらうことがまず大切。

2 長野県屋代高等学校　「千曲市をよりよいまちにするために」

discussion　自分たちが過ごす地域の活性化について

※ 地元出身の有名人で人寄せが出来るのでは。　インスタ映するオブジェつくり。

3 長野県上田高等学校　「本当にいじめはありませんか？～一人でも多くの子どもを救うために～」

discussion　私の提唱する案について

※ 第3者の雰囲気でいじめが起きてしまう場合がある。　ポジティブ思考や「やめて」と言える勇気も大事。

4 長野県飯山高等学校　「飯山市の民宿で体験型ツアーを作る」

discussion　観光で地域創生の可能性について

※ 自然を生かしたインスタ映えスポットを取り入れる。そこでしか体験できないを組み込む。

5 東京学芸大学附属国際中等教育学校　「日本のボランティア意識の向上を高校生視点で図る
―都市農業プロジェクトの実施を通して」

discussion　日本の社会貢献意識の「量と質」どちらへの着目により意義があり、どう取り組むべきか。

※ 量はもちろんだが、リーダーとなる質も必要。　人のためにやり始めたボランティアが最終的に自分のために。

分科会 Ⅲ　グローバル課題から解決策を提言①　　122番教室

関東甲信越北陸地区課題研究発表会

講評　瀧澤郁雄氏（国際協力機構（JICA）人間開発部次長）　講評　遠山里菜氏（筑波大学社会・国際学群学生）

1 金沢大学附属高等学校　「新しい包装を提案し、プラスチックごみを減らす！」

discussion　環境問題について、プラスチックごみによる海の汚染について

※ 日本の行動・意識が遅れている。　昔のやり方を上手く利用してみれば。

2 新潟県立国際情報高等学校　「WATER　REVOLUTION」

discussion　発展途上国で飲料水を作るための方法について

※ 紛争による支援の難しさ。　洗剤で救える限界がある。

3 長野県上田高等学校　「若者よ，世界を見よう～SDGsを達成するために～」

discussion　若者の目を世界に向けるにはどうしたらよいか

※ 高校生の限界（大学生を入れては）。　「自分は恵まれている」で終わらないか。

4 長野県篠ノ井高等学校　「“JENESYS 2018”マレーシア派遣事業に参加して」

discussion　“Halal”を通して多文化共生について考えませんか？

※ 日本人とムスリムで違いを作ってほしくない。　島国だからこそ多文化共生が難しい部分がある。

5 筑波大学附属坂戸高等学校　「筑坂発！食品ロス0プロジェクト」

discussion　日本のもったいない精神と食品ロスの現状におけるギャップは、どのように生まれるのか

※ とても裕福な家でない限り残すことはない。　生産者と消費者のギャップが多い。

6 長野県上田高等学校　「SGHのソノサキ」

discussion　教育において強制は必要か？主体性を重視するか？

※ 強制的にやるべき所はやる方が良い。　小さなきっかけから将来的につながっていく。

分科会 Ⅲ　グローバル課題から解決策を提言②　　124番教室

関東甲信越北陸地区課題研究発表会

講評　飯島由美氏（長野県総合教育センター所長）　　講評　竹内岳氏（JICA長野デスク国際協力推進員）

1 長野県長野高等学校　「長野高校米国リーダー研修報告～この研修で学んだこと」

discussion　これからのグローバル教育について

※ 自分を見つけることが大切(who you are)。　グローバル人材を育てるためには（日本の問題は）。

2 長野県上田高等学校　「地球に太陽を作ろう！」

discussion　自分が考えた以外に核融合の安全性を広める方法はあるか

※ そもそも核融合発電が知られていないので、興味がある人が集まらない。　原子力発電と何が違うかを広めよう。

3 新潟県立国際情報高等学校　「GENDER　ROLE」

discussion　身の周りのジェンダーロール

※ 絵本を次世代に伝えるための工夫は。　子供がターゲットだが、大人の考えを変える必要がある。

4 東京学芸大学附属国際中等教育学校「市民として未来を構築するための歴史教育を考案・実施する」

discussion　「多様性を認め合う授業」を作るためには

多文化社会の中で生きるための資質を育むために必要な教育とは

※ 日本人で誰だろう？国籍？血縁？→多様性が感じられる。　日本の主観が全くない相手国の教科書を読む。

5 金沢大学附属高等学校　「サッカーでＨＩＶの根絶を目指す！」

discussion　サッカーでＨＩＶをテーマにした試合をしたいと考えているが、この発表の実現性はどれくらいあるのか

※「経済力のない人に高い抗HIV薬をどうするか。　いきなりアフリカよりアジアから先に。

6 筑波大学附属坂戸高等学校　「訪日外国人により日本を安全にかつ楽しんでもらうためのガイドブック作成」

discussion　”若い/wakai” に情報共有をするにはどうしたら良いか

※ ガイドブックを見て留学生が実際にどう思うかを知りたい。　中身にもっと日本らしさを。

分科会 Ⅳ　グローバル課題から解決策を提言　　132番教室

関東甲信越北陸地区課題研究発表会

講評 長嶋幸恵氏（長野県教育委員会学びの改革支援課）　　講評 Daniel Topal氏（長野県長野高等学校G講師）　　使用言語：英語

1 長野県飯山高等学校　「難民救済プロジェクト　Refugee Support Project」

discussion　日本にいる難民の状況/先進諸国は難民をどう受け入れているか/日本の難民を取り巻く問題点

※ 災害時の被害者も身近な難民と言える。日本の場合，難民と接する機会が少ない。

2 長野県上田高等学校　「Our possibilities with Extracurricular activities」

discussion　高校生の勉強・部（班）活動以外の活動についてどう考えるか？

※ Good experience for our life.　Our view bicomes wider,our heart becomes stronger.

3 新潟県立国際情報高等学校　「Easier Farming and Better Photographs」

discussion　How can we encourage people to move in our home town?

※ Intorduce job to young people.　Changing image of farming.

4 東京学芸大学附属国際中等教育学校　「障がい者と健常者の相互理解に向けた交流及び共同学習の実施」

discussion　どのような場面において異質な他者との相互理解は必要とされるか。それはどのように得られるのか

※ Playing games. Easy games are good.

5 新潟県立国際情報高等学校　「FUTURE OF UONUMA」

discussion　新しい技術でより住みやすい町にするには

※ Using Drone to elderly people.

6 長野県上田高等学校　「It’s time to do calligraphy! -How can we share calligraphy culture with the world?-」

discussion　What should we do to preserve Japanese traditional culture in order to attract foreigners?

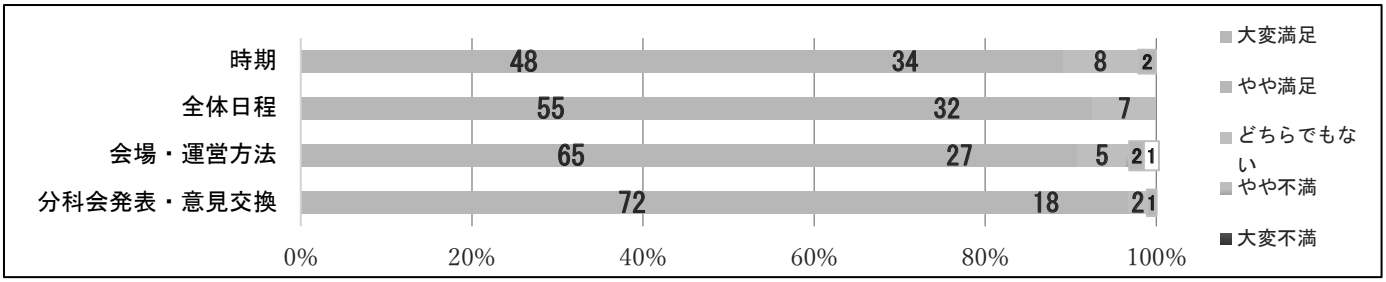
※ Origami, Omotenashi, Sado, Japanese History and so on are also important.

7 筑波大学附属坂戸高等学校　「日本の高等学校で学んで考えたこと～タイと日本の高校の学びを比較しながら～」

discussion　これから、高校生の留学や国際交流はどう進めていけばよいか

※ More Students must go abroad.

3　生徒アンケート



①時期、時間、準備について

○	×
・3年もぎりぎり参加できる時期でよかった。 ・土曜日である。 ・ポスターも素敵でした。センスの良さが色んな所に見えました。 ・開催時期の周知が早い。	・一般参加校への広報には持ち物の明記が無かった。 ・もっとお客さんが来てもいいと思う。宣伝をしてほしい。

②全体日程について

○	×
・丁寧に案内していただいた。 ・ディスカッションが建設的にできた。 ・一緒に昼食を食べるというのが楽しかった。 ・多様な学校の生徒さんと話し合うことができるグループ分けであること。	・アイスブレイクは各分科会会場に着いてから行った方が効果があるのでは？ ・ミニレクチャーのとき、縦長の会場のため、後ろのほうはパワポが見えにくかった。

③会場、運営方法

○	×
・ディスカッション時間がちょうどいい。 ・話しやすい机の配置だった。 ・マイクなどの機材は良かった。 ・評価シートがあっていいと思いました。 ・ディスカッションの配置が適切で話しやすかった。 ・事前に配布されたプリントに時間が細かく書かれていたので良かった。	・1人でプレゼンする場合、ディスカッションの内容の全てを聞けない。 ・評価シートを書く時間が少ない。 ・レーザーポインターがあると良い。

④発表や意見交換について

○	×
・発表の時間が10分ある。 ・ディスカッションのなかでも講師の方からフィードバックを頂けるのがとてもよかった。 ・講師の方がディスカッションに入ってくださることで深いものになった。 ・最後のシェアリングがあることで他の分科会についても知ることが出来て良かった。	・ディスカッションが盛り上がらないときには，司会者に頑張ってほしい。司会スタッフの事前訓練が必要ではないか。 ・分科会Ⅳは参加者の英語力の差が大きく，その一方で発表テーマも多岐にわたった。ディスカッションは日本語も可にするとか，事前に発表トピックを決めておくなどの工夫が必要。

4　評価と考察

関東北信越地区や県内のＳＧＨ、ＷＷＬ、グローカル教育改革推進事業指定校などの高校生のレベルの高い課題研究プレゼンテーションが集まった。さらにその後の講師も交えたグループディスカッションを通じて、発表生徒は質疑応答のみならず、昼食時間にも他校生との交流を深め、多様な文化や見方に接することができたことがみてとれる。

４項目の満足度は全般的に昨年とほぼ同様である。昨年度のディスカッション時間の不足の声を受け、今年は開始時間を早めたり、昼食場所を校外から校外に変更して時間の拡大に努めた。しかし、ディスカッション時の司会生徒の盛り上げ方や、事前の広報のありかたなどは来年へ向けさらに工夫したい。ハイレベルの助言者や協力機関とのつながりも大切にしつつ、この行事を今後さらに発展させていきたい。

Ⅱ　課題研究　　課題研究評価方法

グローバルスタディⅠⅡⅢ評価基準

高い程度に目標を達成しているもの　　評定１０ 評定９

観点１～２を満たしているもの、かつ観点３～観点５が極めて優れているもの
観点１　校内のＳＧＨカリキュラムを越えて、探究活動ができ、他校や地域で発信活動ができたもの
観点２　校内のＳＧＨカリキュラムの発信活動で、他者評価の中で一定程度良い評価が得られたもの

目標を達成しているもの　　評定８　評定７　評定６

観点３　適切な課題設定をし、情報収集・探究活動をし、具体的な課題解決に導くレポートができたもの
観点４　課題解決に導くレポートが、プレゼンテーション・ポスターセッションで適切に発信できたもの
観点５　協働的なグループワークの中で複数意見を共有し、協力して完成し効果的に発信できたもの

目標をほぼ達成しているもの　　評定５　評定４　評定３

観点３　課題設定をし、情報収集を含めた探究活動をし、課題解決に導くレポートができたもの
観点４　課題解決に導くレポートが、プレゼンテーションあるいはポスターセッションで発信できたもの
観点５　協働的なグループワークの中で、レポートを完成し発信できたもの

目標の達成にはまだ不十分な点がみられるもの　　評定２

観点３～観点５がまだ不十分な点があるもの

目標の達成が不十分で、不認定または不認定のおそれがあるもの　　評定１

観点３～観点５が全く不十分なもの

評価カード　（様式Ａ）　　パフォーマンス評価

発表者：　年　組　氏名		タイトル	
	下の観点で右の５段階で評価してください。→	よ　い　やや良い 普　通　やや悪い　努力不足	
1	内容	課題の分析が適切に行われていたか	課題設定理由・課題の要点・課題の批判・解決提言
2	構成	ポスター・スライドの構成は適切だったか	全体構成・適切な資料・引用表現・字や図の大きさ
3	進行	話し方，時間配分は適切だったか	わかりやすい話し方、わかりやすい要点、主張
4	交流	聞き手とコミュニケーションがとれていたか	聞き手の興味に即して簡潔な説明、適切な質疑応答
5	総合	発表は総合的にみてどうだったか	適切な発表資料＋適切な発表表現
6	講評	（評価できる点、課題の残る点など具体的に記述してください）	

評価カード　（様式Ｂ）

評価		右の評価のいずれかに○印	大変満足	少し満足	普　通	少し不満	大変不満
自己評価	1	内容が理解できた					
	2	興味関心が向上した					
	3	進路の参考になった					
	4	積極的に参加できた					
	5	ＳＧＨ事業の総合評価					

研究計画書（論文作成構成力シート※授業担当者・カテゴリー担当者が添削指導

Ａ　ＳＧＨカテゴリー　ＳＧＨテーマいのち・健康との関係　キャリアプラン

Ｂ　課題研究テーマ　主　題　副　題　英　訳

Ｃ　課題研究プレゼンテーション　小学生　中学生　高校生　大学生　社会人
　　誰に発信できるか？　行政機関　専門機関　国際機関　上田市　長野県　台湾

Ｄ　テーマ設定

どこ	上田	長野	日本	アジア	国家	世界	宇宙
いつ	過去	19ｃ	20c前	20c後	現在	近未来	22c
だれ	国籍	年齢	性別	職業	生物	全員	地球
なぜ	意識	原因	方法	現在	コスト	環境	地球

Ｅ　課題研究論文構成　フローチャート（実際の用紙はＡ３版）

第１章	はじめに　このテーマは　だが　どうだろうか？ 課題選択理由　課題の背景目的　問題提起
第２章	課題の要旨　論文記述後に要旨を200字程度で記述する。 過去の研究例
第３章	課題の要点　このテーマは　ということがわかった。 問題提起　仮説→検証
第４章	課題の批判　確かに　かもしれない。　というのもわかる。このような問題点がある。 反対意見理解　課題の問題点
第５章	課題の解決　しかし私は　だと思う。なぜなら　だからだ。 このようにすれば解決できる 課題の未来
第６章	結論・考察　まとめ　よって私は　と考える。 私は　このようにしたらいいと提案する。 公的機関提言

Ｆ　参考資料

文献・図書・教科書資料　直接訪問調査　インタビュー　フィールドワーク
意識調査アンケート　科学的観察実験　新聞記事 信濃毎日新聞統合データベース

長野県上田高等学校ＳＧＨ海外研修

ＳＧＨテーマ
～「長野モデル」からグローバルヘルスへ～　長野から世界へ健康長寿を発信しよう！

	2年生	1・2年	
Ⅲ海外研修	台湾研修旅行 2年全員　11月実施	フィリピンスタディツアー 選抜　　3月実施	ボストンスタディツアー 選抜　3月実施

1　ねらい　＜研究開発単位Ⅱ　海外研修プログラムの開発＞

世界のグローバル課題を課題研究として学ぶ中で、研修先の国・地域の特性や諸問題へ視野を広げ、日本とアジア諸国について共有できる課題に関して、意見を交換したり、自分の考えを発表する。そのプロセスを通じ、生徒がグローバルに考えて活動する意欲・行動力を育成できる海外研修プログラムを開発する。

2　概要　「３つの海外研修」

海外研修における学びを推進すると同時に、海外から来校する高校生と積極的に意見交換する。

長野県上田高等学校３つの海外研修

①　台湾研修旅行

2019年11月25日～11月29日
2年全員320名　　引率16 名

11　25 月　上田→成田空港→桃園国際空港
11　26 火　台湾フィールドワーク

外交国際協力	台湾師範大学　日台交流協会	**観光行政**	台湾師範大学　台北市政府観光局
歴史芸術	故宮博物院　二二八紀念館等	**ﾋﾞｼﾞﾈｽ都市**	台湾師範大学　剥皮寮歴史地区・東三水街市場散策
教育子ども	福林国民小学　台北市立大学	**保健医療**	台北栄民総医院　淡水義山公托老中心
自然環境	野柳地質公園　淡水紅毛城　淡水老街等	**産業技術**	科達製薬股分有限公司　大渓老茶工場　八徳路電気街

11　27 水　Ｂ＆Ｓプログラム研修
11　28 木　高校訪問　課題研究意見交換　　クラス別

・ **國立科学工業園区実験高級中學**	１組 ５組	【交流内容】
・ **國立新竹女子高級中學**	２組 ４組	歓迎セレモニー　　昼食交流
・ **國立新竹高級商業職業学校**	３組 ７組	授業体験　　グローバル課題意見交換
・ **私立新竹曙光高級中學**	６組 ８組	

11　29 金　桃園国際空港→成田空港→上田

②　フィリピンスタディツアー

昨年度３月実施

3　10 日　上田→成田空港
3　11 月　成田空港→マニラ空港
3　12 火　路上の子どもたちとの交流　　ブルメントリット
3　13 水　パヤタス（ごみ山）フィールドワーク
3　14 木　GRACES(国立高齢者介護施設) COSE(現地NGOｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑ型福祉施設)訪問
3　15 金　セントルーカス病院見学　JICAマニラ事務所訪問　日系企業
3　16 土　児童養護施設「子どもの家」訪問交流　現地報告会
3　17 日　マニラ空港→成田空港→上田

③　ボストンスタディツアー

昨年度3月実施

3　10 日　上田→成田空港→ボストン空港
3　11 月　ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ　ﾌﾞﾙｯｸﾗｲﾝﾊｲｽｸｰﾙ課題研究意見交換
3　12 火　ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ　ハーバード大学メディカルキャンパス見学
3　13 水　MIT科学博物館　ﾏｻﾁｭｰｾｯﾂ工科大学ﾒﾃﾞｨｱﾗﾎ課題研究意見交換
3　14 木　ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ　ﾊｰﾊﾞｰﾄﾞ大学ｹﾝﾌﾞﾘｯｼﾞｷｬﾝﾊﾟｽ課題研究意見交換
3　15 金　ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ　ﾊﾟｲﾝﾏﾅｰｶﾚｯｼﾞｱﾄﾞﾐｼｮﾝｽﾞ課題研究意見交換
3　16 土　NBA観戦、ﾎﾞｽﾄﾝ美術館鑑賞、ﾎﾞｽﾄﾝｼｼﾝﾌｫﾆｰｵｰｹｽﾄﾗ鑑賞
3　17 日　ボストン市内自由研修
3　18 月　ボストン空港
3　19 火　成田空港→上田

Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾 新北市立錦和高級中学来校

1　ねらい

異文化理解　英語によるコミュニケーション能力の向上

2　概要

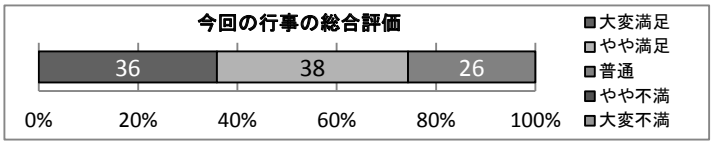
（1）日　　時　5月22日（水）　11時00分～15時30分

（2）訪 問 者　台湾新北市立錦和高級中学
生徒19名、先生3名、通訳1名、添乗員１名、長野県観光機構１名

（3）内　　容　歓迎セレモニー、交流授業、昼食交流、お別れセレモニー

3　生徒アンケート

（1）生徒対象アンケート結果　　ホストクラス（２年２組対象）



（2）生徒の感想

① 自分からの発信で気づいたこと

・お互いの母国語でない英語で話が通じたことが感動的だった。

・流暢な英語を並べるだけでなく、相手に伝わるように発表することが大切。

② 外国の方々からの受信で気づいたこと

・予想以上に日本のことを知っており、日本語を話せる人がいること。

・話そうという意志を見せないと会話が続かない。

③ 次回への課題

・伝えようという意志を持って交流しなければならない。英語を学んで”伝わらない”というもやもやを解消したい。

・自分たちは台湾のことについて良く知らないので、文化などよく調べて訪台したい。

4　評価と考察

国際語としての英語を実践する機会として、生徒たちは英語を使おうと努力していた。特に、昼食交流を通して、互いの関係性が高まった後はシームレスなやりとりが多々見られた。

Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾 国立苗栗高級中学来校

1　ねらい

異文化理解　英語によるコミュニケーション能力の向上

2　概要

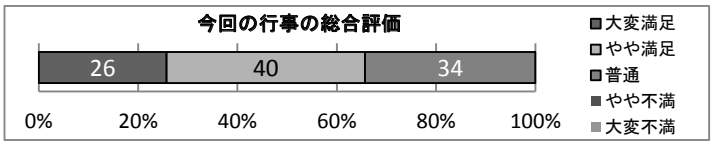
（1）日　　時　5月28日（火）　10時00分～15時00分

（2）訪 問 者　台湾国立苗栗高級中学
生徒18名、先生2名、添乗員（通訳兼）1名、通訳１名、長野県観光機構１名

（3）内　　容　歓迎セレモニー、交流授業、昼食交流、上田市街地フィールドワーク交流、お別れセレモニー

3　生徒アンケート

（1）生徒対象アンケート結果　ホストクラス（２年７組対象）



（2）生徒の感想

① 自分からの発信で気づいたこと

・簡単な言葉（文法）に言い換えるなどして、相手に理解してもらえるよう努めた。

・英語を母国語としない人同士の英語によるコミュニケーションは想像以上に難しかった。

② 外国の方々からの受信で気づいたこと

・緊張するのはお互い様だと感じ、だからこと自分から積極的にならねばと思った。

・同じ英語でも日本、台湾とそれぞれ特有の発音がある。

③ 次回への課題

・相手に心を開いてもらえるような面白いテーマが用意できていなかった。

・心を強く持って失敗を恐れず、積極的に取り組んでいこうと思う。

4　評価と考察

お互いが母語ではない英語を使ってのコミュニケーションに難儀した生徒も見られたが、身振り手振りやIT機器を駆使するなど、伝えようとする意志の強さがいかに大切かを知らせてくれた交流会となった。

Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾 私立延平高級中学来校

1　ねらい

異文化理解　英語によるコミュニケーション能力の向上

2　概要

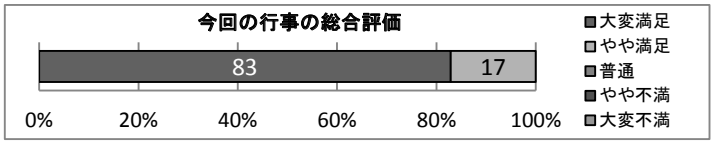
（1）日　　時　1月20日（月）　11時00分～15時00分

（2）訪 問 者　私立延平高級中学
生徒54名、先生6名、通訳1名、添乗員１名、長野県観光機構１名

（3）内　　容　歓迎セレモニー、交流学習、昼食交流、お別れセレモニー

3　生徒アンケート

（1）生徒対象アンケート結果



（2）生徒の感想

① 自分からの発信で気づいたこと

・自分の伝えようとする意志が大切で、相手とのコミュニケーションを積極的にすることが大事だと学びました。

② 外国の方々からの受信で気づいたこと

・コミュニケーション力が高く、英語力やプレゼンテーションでの進め方など、差を感じるところもあった。

・台湾の方々は政治などにも熱心で、心優しい人達だと思った。

③ 次回への課題

・自分たちの英語力を高めなければならない。自分から発信していく積極性やコミュニケーション力を高めたいと思った。

・交流相手の国について知っていることも必要だと感じた。

4　評価と考察

有志生徒でスタッフを募集したところ、予想以上の生徒が集まった。日程的に十分な余裕があり、セレモニーや協働製作、台湾生徒の研究発表など、充実した内容の交流会を通して、生徒の満足度が非常に高まった。

Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾 私立新民高級中学来校

1　ねらい

異文化理解　英語によるコミュニケーション能力の向上

2　概要

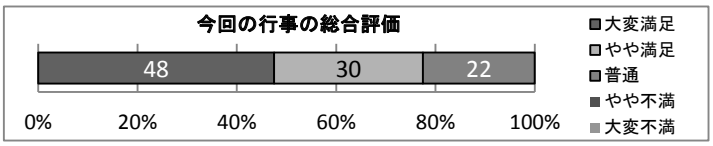
（1）日　　時　2月6日（木）　10時00分～13時30分

（2）訪 問 者　台湾私立新民高級中学
参加生徒60名　先生4名　エスコート1名　ガイド2名　計67名

（3）内　　容　歓迎セレモニー、共同製作、昼食交流、お別れセレモニー

3　生徒アンケート

（1）生徒対象アンケート結果　ホストクラス（1年5組対象）



（2）生徒の感想

① 自分からの発信で気づいたこと

・恥ずかしがらずに積極的に話し掛けると、相手もたくさん話してくれる。

・日本語を学んでいる人に、わかりやすい日本語を話すことが難しかった。

② 外国の方々からの受信で気づいたこと

・英語より日本語が上手い人がいたりして、日本語が上手でびっくりしました。日本と同じような文化もたくさんあった。

・積極的に話し掛けてきてくれたので、私も外国の人と交流するときは、「積極的に」をモットーにしていきたい。

③ 次回への課題

・自信が持てないときでも、自分からやろうとする姿勢を大切にしていかなければいけないと思った。

・もっと英語を使っていくこと。相手の国の言葉も理解したいと思った。

4　評価と考察

1年生のクラスで本年度初めての交流会となった。やや会話は停滞気味な面も見られたが、交流会をきっかけに異文化理解や外国語の重要性に気づいた生徒が多かった。

Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾研修旅行

1　ねらい

＜研究開発単位Ⅰ　課題研究教育課程の開発＞＜研究開発単位Ⅱ　海外研修プログラムの開発＞

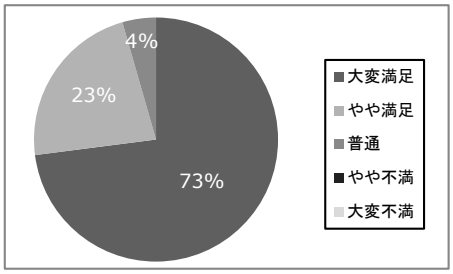
上記２つの融合した効果的なカリキュラムとして２年全員台湾研修旅行を実施した。ＧＳⅡ課題研究フィールドワークとして台湾を研修旅行の場として選定し、高校における英語による意見交換と課題研究テーマに適したカテゴリー別の台湾フィールドワークを実施する。

2　概要

事前学習	グローバルスタディⅡ英語 高校交流準備	10月～11月
	グローバルスタディⅡ日本語　台湾フィールドワーク事前学習	10月～11月
	事前講演会　講師：王　珠恵氏（アジアンワイズ代表）	10月3日（木）
台湾研修旅行	令和元年　　11月25日（月）～11月29日（金）	
	26日 フィールドワーク　　カテゴリー別フィールドワーク	
	27日 台北市内 Brothers & Sisters プログラム　台湾大学生と市内自由行動	
	28日 台湾高級中学交流　　授業交流・プレゼンテーション&ディスカッション	
事後学習	グローバルスタディⅡ英語　台湾高校交流ディスカッション	12月
	グローバルスタディⅡ日本語 台湾研修旅行報告書作成	12月
	台湾研修旅行報告プレゼンテーション　SGH報告会にて	2月8日（土）

3　生徒アンケート

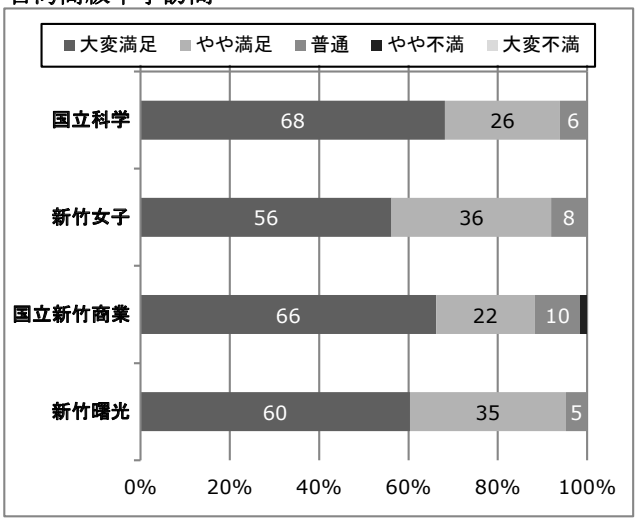
総合評価



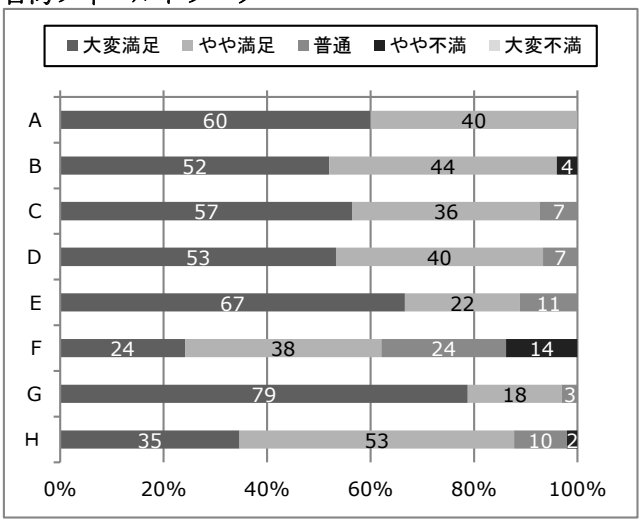
生徒の感想

・自分の今と将来について、より考えを深めることができた。
・これからの日本や台湾の経済がどのなっていくべきか深く考えさせられた。
・積極的に参加でき、学ぶことが楽しかった。英語を勉強し始めた頃もこのように楽しかったことを思い出し、本来、学ぶことは楽しいことだということを思い出せた。
・台湾の歴史について学び、行政の中心をこの目で実際に見ることができた。
・自分たちとの英語に対する意識の差を直に感じた。日本の英語教育とのレベルの差を見せられ、日本の英語教育に課題意識を持った。

台湾高級中学訪問



台湾フィールドワーク



4　評価と考察

課題研究と海外研修を融合した台湾研修旅行プログラムを設定し、台湾の高校生・大学生・ビジネスリーダーと英語あるいは日本語で意見交換することができ、お互いの国際理解につながる成果があった。

○ 高校交流　　高校交流に関する生徒アンケートは88%～95%が満足と回答している。
グループで選んだテーマについて、仲間と協力して準備を進め、現地高校で意見交換することができた。
事前の発表準備がなかなか進まないチームもあり、仲間と協働して課題に取り組む力の育成を大切にしたい。

○ 台湾フィールドワーク　生徒アンケートは62%～100%が満足と回答している。
A, Eは専門機関・大学でプレゼンテーションとディスカッション、Gは自然散策を取り入れたためか満足度が高い。
昨年度課題となったテクノロジーコースについては、見学場所を変更したことにより、生徒の評価が高くなった。
F〈保健医療〉コースで「やや不満」が見られたのは、見学内容の重複と昼食が生徒にとってややロに合わなかったことが原因と推察される。

○ 総合所見
ＧＳ・総合学習を連動した事前学習＆事後学習が有効に作用し、96%と昨年を上回る満足度となった。
フィールドワークでは、研修場所の再検討を行い新たな研修先を開拓することができた。
一方で事前学習の不足を指摘する声もあり、来年度の実施に向けてさらに教科横断的な取り組みも含め検討していきたい。

Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾フィールドワーク

1　ねらい

2つのフィールドワーク→首都圏フィールドワークに続く海外フィールドワークを台湾で実施した。
課題研究カテゴリー別に8つのコースを設定し、プレゼンテーションを含む台湾フィールドワークを実施した。

A 外交･国際協力

▶ 研修１

2　概要

（1）場　　所 國立臺灣師範大學國語教學センター　　（午前A・B・D合同コース）
（2）日　　程 9時00分～12時00分

3　生徒の感想

・体験型講座だったので、どんどん会話の練習ができた。
・英語の構成と似ているところもあって、理解しやすかった。
・アクセントやトーンの違いがあって難しかったけれど面白かった。
・講師の先生がとても明るく、わかりやすかったので積極的に参加できた。
・学ぶのが楽しかった。英語を勉強し始めたころもこんな感じで楽しかったことを思い出し、本来学ぶことは楽しいことだということを改めて感じた。
・分かっているならば、どんどん発言するべきだと思った。

▶ 研修２

2　（1）場　　所 公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所

（2）日　　程 14時～16時
・生徒プレゼンテーション「日本と台湾の若者の人権意識と政治参加」
・講演　近年の台湾をめぐる国際情勢について

3　生徒の感想

・講演会では、自分の今と将来についてより考えを深めることができた。
・私たちのプレゼンテーションの内容に沿って講演をいただいたので、学ぶことが多かった。
・台湾・中国・香港がそれぞれどういう関係でつながっているのか、以前は知らなかったが、お話しを聞いてよく理解できた。
・台湾が国際社会で置かれている立場や情勢について前よりも深く知りたいと思った。

B 観光行政

▶ 研修２

2　（1）場　　所 台北市政府観光傳播局

（2）日　　程 14時～16時　　生徒プレゼンテーション「長野県の観光課題と解決策」
観光協会業務説明・台北探索館見学

3　生徒の感想

・長野県の観光課題についてのプレゼンテーションについて、台北市の観光課題を比較して講評していただいたのでとても有意義だった。
・探索館の見学ででは、台湾が現在の観光都市になるまでの歴史と経緯が良く分かった。
・台湾について事前学習をしていったが、まだまだ知らないことが沢山あったし、観光局に来たからこそ知ることができたことも多かった。
・観光都市台北の魅力をどのように世界に発信しているのかについても理解できた。

C 歴史藝術

► 研修２

２（１）場　　所 **中華民国総統府・國立故宮博物院**
二二八紀念館・華山1914文創区

（２）日　　程 9時30分～17時15分

３ **生徒の感想**

・総統府では銃を構えた兵士が入口に立っていたりと、日本ではまず見ることのない風景に興奮を覚えた。まさに政治の中心だということを実感した。

・ニニ八紀念館については、もっと事前に学習してから見学すべきだった。

・ニニ八紀念館では、現在の香港の問題とも関連づけることができ、若者の政治に対する姿勢について考えることができた。

・故宮博物院では何千年も前の物が今も形として残っていることにとても感動した。

・故宮博物院の展示物が多くて、見ごたえがあった。授業で学んだことと結びつけて見学ができ、大変興味深かった。

D ビジネス都市

► 研修２

２（１）場　　所 **六福客棧（講演会）・剥皮寮歴史地区**
東三水街市場・點水樓小籠包製作体験

（２）日　　程 13時30分～18時00分
講演「女性の社会進出と台湾でのビジネス展開」
講師　呉佳玟　氏（太平洋世界旅行社総経理）

３ **生徒の感想**

・台湾の家庭は共働きがとても多く、核家族化が進んでいることを知った。

・企業が台湾に進出するメリットについて教えていただいた。

・台湾は日本よりも女性の社会進出が進んでいることを知った。

・昔ながらの市場を見学し、実際に買い物もしたことで、台湾の活気ある日常を体験することができた。

E 教育子ども

► 研修１

２（１）場　　所 **臺北市士林区福林國民小學**
2年3年生英語授業見学・教職員との懇談

（２）日　　程 9時00分～11時00分

► 研修２

２（１）場　　所 **臺北市立大學　教育の国際化について大学生とディスカッション**
生徒プレゼンテーション　「実践的な英語を学習するためには」
「日本の大学入試改革と英語を学ぶ意義」

（２）日　　程 13時30分～15時00分

３ **生徒の感想**

・小学校の英語教育の質が台湾の若者の英語力の高さに結びついていると感じた。

・子どもたちの様子を見る機会が多く元気をもらえた。

・大学入試のことや受験勉強についての話では、英語学習への意識の高さに驚いた。

・英語による先生方との懇談や大学生とのディスカッションは大変だったが、自分の考えを何とか英語で伝えようと努力し有意義な時間を過ごすことができた。

F 保健医療

▶ 研修１

２（１）場　　所 **臺北榮民總醫院**

詣居日間照雇中心（病院付属のデイケアセンター施設見学）

（２）日　　程 9時00分～11時10分

▶ 研修２

２（１）場　　所 **淡水義山公托老中心（デイケアセンター）**

講演「台湾の地域介護と健康促進政策」

生徒プレゼンテーション　「長野県の医療課題と健康促進政策」

（２）日　　程 13時30分～15時00分

３　**生徒の感想**

・栄民病院では高齢者の方が自立して生活を送れるような工夫や手伝い過ぎないことで、高齢者の方が自ら考え、脳が衰えないような工夫が見られた。

・台湾ではAIやIT導入など高齢者介護の施設が充実していると思った。

・デイケアセンターで交流した利用者の方の日本語がとても上手で、貴重な体験となった。

・話しを聞くだけでなく、実際に利用者の方と触れ合えたことで、台湾だけでなく日本の介護についても身近な問題として感じることができた。

G 自然環境

▶ 研修

２（１）場　　所 **野柳地質公園・淡水紅毛城**

漁礁埠頭・淡水老街散策

（２）日　　程 10時00分～17時00分

３　**生徒の感想**

・自然の力でできた一つも同じものがない面白い形の岩を見ることができた。（野柳）

・「女王の頭」と称えられる岩はひときわ存在感を放っており、自然によって生み出された造形に感動した。

・普段は海を見ることのない私たちが海外に出て海を見たり、自然の地質を体感することができ、とても感慨深かった。

・淡水地区では、台湾が外国に統治されていた時代の建築物や展示をみることができた。

・昔の台湾と日本を比較することで、今の両国の関係性を理解するきっかけとなった。

・急遽、淡水一有名なお寺を見学することができた。お参りの作法などを学び、台湾の信仰文化にも触れることができた。

H 産業技術

▶ 研修１

２（１）場　　所 **科達製薬股分有限公司　製薬会社工場見学・講演**

（２）日　　程 ９時30分～10時30分

▶ 研修２

２（１）場　　所 **大溪老街散策・大溪老茶廠・八徳路電脳街見学**

（２）日　　程 14時00分～18時20分

３　**生徒の感想**

・製薬会社の研究室では薬を調合している場面を見学できた。

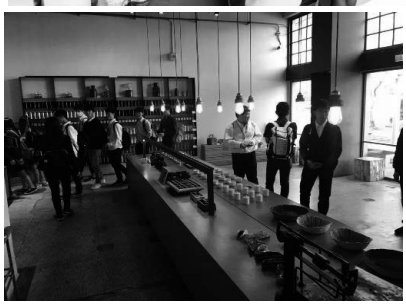
・健康補助食品や化粧品といった分野にも進出していてすごいと思った。

・漢方薬について学んだ。管理の仕方がとても慎重で驚いた。

・お茶工場では、日本統治時代に使われていた器具なども見ることができた。

・電化製品や電子機器など、最先端の商品を手に取り見ることができた。

・電気街は理系にはたまらない空間で、パソコンやスマートフォンなど、興味ある分野の最先端技術を目の当たりにし、有意義な時間を過ごせた。



Ⅲ　海外研修・海外交流　　台湾研修旅行　高校交流

1　ねらい

・台湾同世代と異文化理解と異文化交流　　・課題研究プレゼンと英語コミュニケーション向上

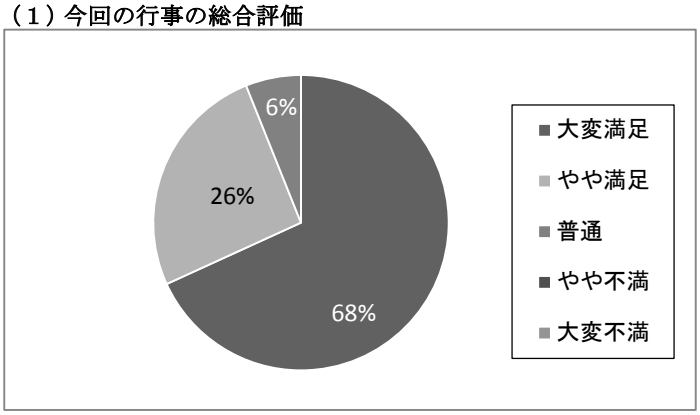
2　概要

11月28日（木）　　2クラス80名が4高校を訪問

3　生徒対象アンケート結果

１組・５組　國立科学工業園区実験高級中學

（1）今回の行事の総合評価



▼台湾文化体験交流（擂茶づくり）

（2）生徒の感想

①　国際交流部門

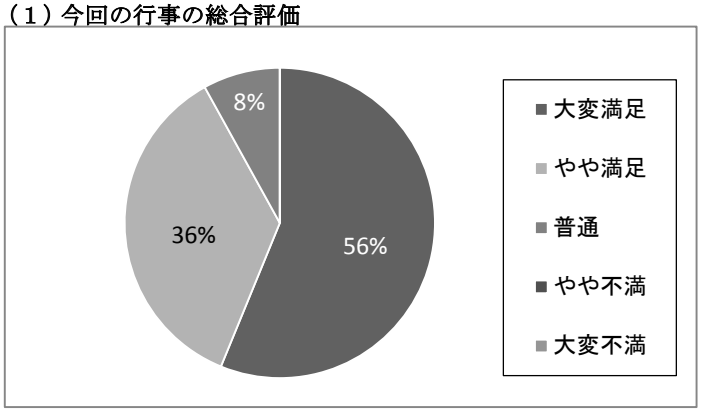
・自分の英語力を試すいい機会だった。自分の見ている世界は狭いと思った。
・台湾の学校やお互いの将来について話すことができてよかった。相手の英語力に刺激を受け、私も頑張ろうと思った。
・一緒に行動する時間が多く、楽しい友達にたくさん出会えた。台湾の文化にも触れることができた。

②　ＳＧＨ部門

・相手の目を見て話したり、相手に質問したりと、相手と関わることを大切にプレゼンできた。
・台湾の学生と意見交換する機会はなかなかないのでとてもいい機会になった。英語をたくさん使うことができた。
・日本での流行や歴史に相手が興味を持って聞いてくれて、互いに情報交換ができた。
・ポスターの準備がしっかり出来ていたので,現地の高校生に理解してもらえた。

２組・４組　國立新竹女子高級中學

（1）今回の行事の総合評価



▼お別れセレモニー合唱パフォーマンス

（2）生徒の感想

①　国際交流部門

・台湾の学生と会話をすることで、国際交流に興味が持てた。
・昼食交流は台湾の学生と色々な話をしたり写真を撮ったりできるので、とても良い時間だと思った。
・英語を勉強する意欲が高まった。
・日本と台湾の学校の違いを発見できた。

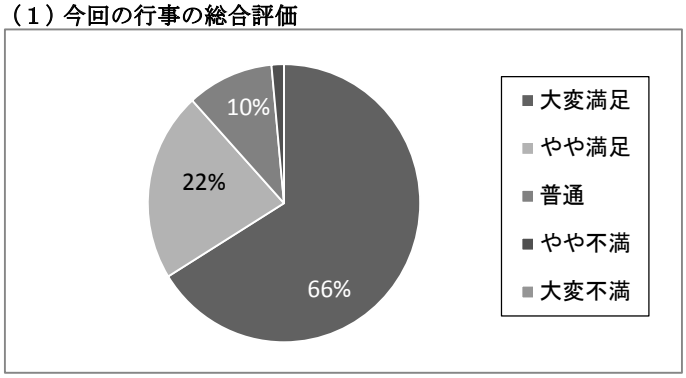
②　ＳＧＨ部門

・台湾の生徒の英語力の高さにびっくりした。もっと勉強しなければいけないと思わせてくれる良い刺激になった。
・自分の英語力を見直す良いきっかけとなった。
・台湾の生徒の反応が良くてディスカッションが活発だった。
・プレゼンは少人数でやることで、一人一人とコミュニケーションをとりやすく良かった。
・自分の英語で伝える経験はすごく良いし、同時にそれを見直す良いきっかけになった。

Ⅲ　海外研修　台湾研修旅行　高校交流

３組・７組　國立新竹高級商業職業学校

（１）今回の行事の総合評価



▼ポスターを用いて英語プレゼンテーション

（２）生徒の感想

①　国際交流部門

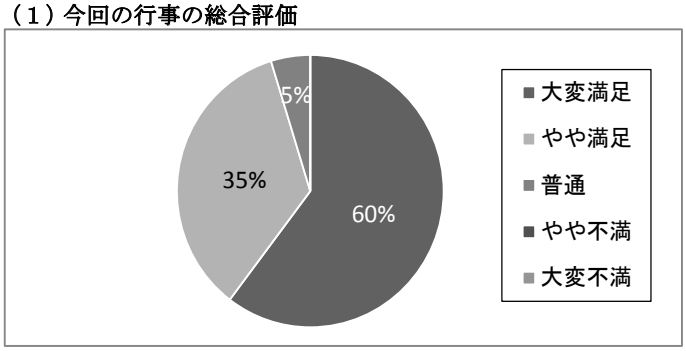
・台湾の生徒の英語の発音が良くて、自分もつられて発音が良くなった気がする。
・日本語を話せる生徒さんがいたり、ほとんどの生徒さんが英語を話せていたのに刺激を受けた。
・英語で話すことが緊張して、中国語・日本語・英語が飛び交う教室内に居ることもドキドキしたが、とても良い経験だった。

②　ＳＧＨ部門

・プレゼンテーションやディスカッションを通じて、台湾の生徒達と沢山会話をすることができ、互いの国の文化交流を図れた
・相手がたくさん質問をしてくれたので、より深く自分のテーマについて考えさせられた。他国の人の意見を聞けてよかった。
・お互いの文化について今までより知ることができた。
・ＧＳＥで準備したプレゼンを台湾の学生に理解してもらえた。

６組・８組　私立新竹曙光高級中學

（１）今回の行事の総合評価



▼昼食交流

（２）生徒の感想

①　国際交流部門

・らい茶や愛玉子など伝統的な食べ物を実際に自分で作り、台湾の文化に触れることが出来た。
・台湾の子と友達になれたこと。外国の文化にふれあうことで、広い視野を持てた。
・台湾の学校の施設、生活、生徒の様子が見学を通して体感できた。
・少人数グループで、人数比も１：１くらいで英語で話しやすい雰囲気で良かった。

②　ＳＧＨ部門

・ＳＧＨのプレゼンテーションでは、台湾の高校生と活発にディスカッションを行うことができた。
・たくさん英語が使える機会があるので、コミュニケーション力が上がる。
・自分の英語がどれほど伝わるのか知るいい機会だった。
・台湾の高校生の反応を見ながら会話するようにプレゼンできた。
・熱心に聞いてくれて、質問もしてくれ、交代で作業している間に、台湾の生徒さんと英語で話せたことがすごく嬉しかった。

４　評価と考察

・台湾研修旅行４年目をむかえ、ＧＳEの授業・ＬＨＲ等で効果的な事前準備ができた。
・昨年に引き続き訪問した学校が多く、スケジュール調整やこちらからの要望を快く受け入れてくれたことに感謝したい。
・多くの生徒がディスカッションの準備に積極的に取り組み、当日は英語で発信する機会を多数得ることができた。
・毎年のことではあるが、現地の高校生の英語力の高さに刺激を受け、学習意欲の向上に繋がったとの感想が多く聞かれた。
・全員が英語でのプレゼンテーションに挑戦したが、事前準備の不足を感じる一方で、相手に伝わる発表ができたことが自信になったと感じた生徒も多くいた。
・生徒たちは英語でうまく自分の考えを伝えられないもどかしさを感じつつも、言葉の壁を超えて分かり合えることを実感し、海外研修ならではの貴重な時間を過ごすことができたと感じる。

ボストンスタディツアー実施報告

１．概要

日　　時　　平成３１年3月１０日（日）～１９日（火）
参加生徒　　２年9名（女子3名、男子6名）、１年１０名（女子7名、男子3名）　計１９名
滞在先　　パインメナーカレッジ英語研究所寮
企画協力　　株式会社 BOSTON BRIDGE to higher education　（代表　蝦名　恵　（えびなさとし））
指導・添乗　　蝦名　恵、　猿橋　あや子　（ボストンブリッジ）
指導・引率　　髙野　芙美

２．目的

学術都市ボストンのカレッジで世界から集まる仲間と同じクラスで英語を学び合い、学生同士の相互理解を深める実践的な訓練を行う。大学の寮に滞在し、多様な文化と教養を身に着けた友人を作る良い機会を得る。ハーバード大、メディカルキャンパス、MIT といった世界最先端の学術機関では論理的構成によるプレゼンテーションを学び、世界の第一線で活躍する講師と意見交換を通じて、先端教養に直接触れ、世界を知るとともに、自分を知り、自分の未来を見つける機会とする。

３．研修内容

英語学習　ELI インターナショナルクラス

パインメナーカレッジカレッジ英語研究所　３月１１日（月）～１５日（金）４日間

【講師】Dan Bohrs 氏（ELI Program Director）ほか ELI スタッフ

【研修内容】世界各国から集まる仲間 Reading/Vocabulary, Writing/Grammar, Listening/Speaking の授業

ELI 授業と修了式

高校交流

ブルックラインハイスクール（日本語クラス）　３月１１日（月）１４：００－１５：００

【講師】Rachel Eio 氏　（教諭）

【研修内容】名門公立高校の日本語クラス生徒を訪問、上田市と上田高校の紹介と交流

★生徒プレゼンテーション：「Introduction of Our hometown, Ueda and our School」

高校生との交流

学術研修

①ハーバード大学メディカルキャンパス Longwood Medical Area　３月１２日（火）１４：２０－１６：２０

【研修内容】ハーバード大学医学部をはじめ、世界的に有名な病院や製薬会社の研究施設が立ち並ぶエリアを見学

ハーバード大学医学部
ボストン小児病院

②マサチューセッツ工科大学(MIT) 3月１３日（水）　１０：００～１８：００

【講師】Ira Winde 氏（Media Labo 科学研究員）Paul Lukez 氏　設計家　(元)MIT 建築学スクール教授

【研修内容】都市設計・スマートシティ設計の専門家より、街づくりイノベーションについての講義と生徒発表

★生徒プレゼンテーション：

①「International Academic & Cultural City Ueda-Revitalizing our hometown with full of pride-」

②「AI and Me – AI develops sustainable Ueda-」

MIT 生徒プレゼンと講義

③ハーバードケネディス政策学スクール、ハーバード幹細胞研究所　3月１４日（木）１４：００－１７：２０

【講師】Cathryn Ashbrook Cluver 氏（外交プロジェクト主任）Brook Reeve 氏― 幹細胞研究所所長

【研修内容】日米の視点から「外交」「リーダーシップ」「女性の活躍」とは何かを一緒に考える。

★生徒プレゼンテーション：「Gender Equality-Elderly can revitalize our hometown Ueda-」

ケネディスクール
生徒プレゼンと
幹細胞研究所

④パインメナーカレッジアドミッションズオフィス　3月１５日（金）１４：００－１５：３０

【講師】Samuel H. Whit 氏　(PMC Admissions 主任)、Dan Bhor 氏（ELI Program Director）Rhonda Seida 氏（ELI Executive Director）

【研修内容】日米の入試制度、教育制度の比較、キャリアデザインとリーダーシップについての講義

★生徒プレゼン：「Educating Global Human Resources- From scholastic test to holistic evaluation」

生徒プレゼンと
Sam 先生による講義

自主研修フィールドワーク

ボストン街歩き・芸術鑑賞・プロスポーツ観戦など　3月１６日（土）・１７日（日）終日

【研修場所】フリーダムトレイル、ファニエルホール、ボストンコモン、ボストン美術館、NBA 観戦、ボストンシンフォニー鑑賞

【研修内容】アメリカ独立と建国の父の足跡を辿り、市民権運動そして多民族多文化の街ボストンの歴史を学ぶ。

生徒プレゼンと
Sam 先生による講義

４．生徒の感想

- 今回のツアーに参加した大きな理由の一つはこのMITでの体験が大変魅力的だったからだ。将来自分に合っていれば研究職に就きたいと思っているので世界的に有名なMITでプレゼンをさせていただいた経験と，間近に一流の講師陣のお話を拝聴できたことに大変感動し、非常に価値のある経験だった。

- MITでのPaul先生による「街づくり」に関する講義は感嘆の一言だった。根拠が大変爽爽かつ論理的で話がスッと入ってきた。私は人に自分の考えを伝えることが、というかテキストに起こして説明することが大の苦手なので、ポールさんのような話ができるようになりたいと思ったし、なろうと思った。

- 事前学習では、プレゼンテーションの推敲を繰り返す中で自分のしたかったことがどんどん鮮明になっていったのを覚えています。専門用語や発表の仕方など苦労は沢山ありましたが、しっかりした発表を目指し、みんなと共に練習を重ね仕上げていくことができました。このプレゼンテーション創りを通じて、生まれて初めて人に伝えるためのプレゼンの過程を体験することができたと感じました。

- 私は日本の男女格差について研究しており、どんな法律を作ったら男女格差がなくなるかということばかり考えてきました。しかし、それは間違っていました。ハーバード大学で講師のキャスリン先生に「どうしたら日本の男女格差がなくなると思いますか。」とお伺いしたところ、キャスリンさんは「別に無理に決まりを作って強制しなくてもいいのではないか。」とおっしゃいました。「女性一人一人の考えは違うのだから、その人の会った待遇をすればいい。」と。それを聞いて私はとても大事なことに気づかされました。女性一人一人の気持ちにより添うことが大切なのだということに。今回の発表で学んだことを今後の活動や課題研究に生かして、キャスリンさんのようなかっこいい女性になりたいと感じました。

- パインメナーカレッジアドミッションズでは私も関心の高い教育に関するテーマで話が進んでいった。自分の心に響いたのは「様々なことに興味があってよい」ということだった。私は科学全般に興味があって、数学も物理も化学も地学も生物もすべて学んでみたいし、情報も工学も経済学も心理学も教育学も学びたい。すべてに本気で興味がある。正直今までは一つに絞るという矮小な発想しかなかったし、日本ではそれが一般的だったのと、一つに絞るという行為がかなり精神的にきていたので、新たな選択しないという選択肢を得られたのはよかった。人生で興味のあることにはできるだけ挑戦しようと思えるようになったし、実際にそうしていく。

- アメリカの大学に入学するためには、エッセイがすごく重要で、どれだけ自分にしかなく、読み手の心を掴めるエッセイをかけるかが大事になってくるということを聞きました。勉強だけやっていても通用しない社会はもう既にあり、このツアーのような経験を通して自分にしかないものを積み上げていくことが大切になる社会が日本にもそろそろくるはずなので、とにかくいろんな経験をしたいと思いました。

- 帰るのが楽しみという旅行は今回が初めてだったかもしれないです。日本が恋しくて早く帰りたかったという意味ではなく、10日間の滞在で何かわからないけれど、自分の中で何かが変化していて成長している気がして、日本に帰ってそれを確かめられるのが楽しみだったからだと思います。

５．研修を終えて

３カ月にわたる事前学習を経て、１０日間のボストン研修に臨んだ１９名の生徒たちにとって、現地で見るもの全てが新鮮で刺激的だったようである。毎夜行った振り返りの時間に見せる生徒の表情は、日に日に輝きを増し、その日の研修で感じたことを自発的に発言する数も増えていった。事前学習で生徒たちは、「理論的で理知的なプレゼンテーションについて」を学び、世界の最高峰の学術機関で発表をさせていただく機会を得た。ハーバード大学やMITは世界最先端の学術機関であるということは言うまでもないが、そこで生徒たちを指導してくださった講師の方々の真摯な姿勢に、世界の第一線で活躍している一流の研究者の方々の姿から、「常に謙虚であること」の大切さを学んだ。今回お世話になった講師陣は皆、「良い世界を創るのは教育の力」ということを信じ、多忙な時間を割いて生徒たちの指導に当たってくださった。参加した生徒たちは、この研修で学んだことを糧に、社会と連携し、グローバル課題解決に向けて自分は何ができるか、そのために何を学ぶべきかを考えながら、たくましく自分の進路を切り開いていくことを期待したい。

フィリピンスタディツアー2018事前学習事後活動

1　ねらい

認定ＮＰＯアイキャンをコーディネーターとして研修プログラムを実行する。
フィリピンの生活向上をめざすアイキャン事業地で住民参加型自立的生活向上プロジェクトについて研修する。
アイキャン事業地において、地域住民にインタビューしながら課題を英語でディスカッションする。
事後には現地で学んだことをグローバルリーダーとして広め、発展させる。

2　概要

①　事前学習

10	12 金	アイキャン　吉田 文氏講演会・座談会
12	13 木	事前学習　アイスブレーキング　班分け
12	20 木	フィリピン概要リサーチ　　国歌練習 1 自然環境　　4 民俗・宗教 2 国家・政治　　5 歴史・文化 3 経済・産業
1	10 木	フィリピン概要発表　　リーダー決定
1	17 木	NBL交流会計画
1	24 木	フィリピンスタディツアー保護者説明会　　生徒発表会 海外交流アドバイザー　直井恵さん講演　「ICANの事業地・訪問先の概要説明」
2	7 木	渡邉愛凜さん講演 フィリピン語講座
2	14 木	コミュニケーション講座 NBL交流会打ち合わせ
2	16 土	NBL交流会　　長野ビジネス外語カレッジ交流会
3	3 日	プレゼンテーション準備 事前準備 しおり読み合わせ
3	8 金	結団式 プレゼンテーション発表

②　事後活動

4	13 土	アカデミックプレゼンテーション①
5	25 土	上田高校PTA総会
6	15 土	上田高校小学生説明会
6	22 土	北陸新幹線サミット
7	6 土	上田高校文化祭における展示発表
7	27 土	上田高校中学生説明会
10	18 金	フィリピンスタディツアーガイダンス
11	16 土	上田高校小学生説明会
2	8 土	上田高校SGH報告会
2	10 月	シニア大学

7月6日　松尾祭　フェアトレード販売

11月16日　小学生説明会

フィリピンスタディツアー2018日程表

コーディネーター　認定NPOアイキャンマニラ事務所

参加者20名（1年20名）、引率3名　　海外交流アドバイザー直井　恵氏同行指導

3　10 日	上田高校出発式　　高校発→貸切バス（昼食ＳＡ各自）→成田空港 ボストンスタディツアー参加者見送り 直前ガイダンス（ホテル会議室）		成　田 ビュー ホテル
3　11 月	ホテル出発→ホテルシャトルバス→空港（第2ターミナル） 成田空港→マニラ空港 オリエンテーション→　　タガログ語レッスン		Philippines University
3　12 火	A組　1班・2班	B組 3班・4班	
	パヤタス（ゴミ山）　　ＰＩＣＯ訪問 ホームビジット　　フェアトレード プレゼン発表（スポーツ、少子高齢化） インタビュー　　住民主体協同組合 ◆ゴミ山の健康被害に対し、母親たちが協力して運営する地域診療所で学ぶ。	ブルメントリット　　ＵＰ訪問 カリエカフェ インタビュー　若者たちによる協同組合 ディスカッション ◆貧困問題とそこで闘っている元路上の青年たちから学ぶ。	
3　13 水	ブルメントリット　　ＵＰ訪問 カリエカフェ インタビュー　若者たちによる協同組合 ディスカッション ◆貧困問題とそこで闘っている元路上の青年たちから学ぶ。	パヤタス（ゴミ山）　　ＰＩＣＯ訪問 ホームビジット　　フェアトレード プレゼン発表（公衆衛生、発酵食品） インタビュー　　住民主体協同組合 ◆ゴミ山の健康被害に対し、母親たちが協力して運営する地域診療所で学ぶ。	
3　14 木	◆高齢者福祉における施設型アプローチと地域型福祉アプローチから学ぶ。 午前 ＧＲＡＣＥＳ（施設型高齢者福祉施設）　　国立高齢者介護施設 午後 ＣＯＳＥ訪問　現地ＮＧＯグループホーム型福祉施設　　地域型福祉現地ＮＧＯ		
	A組	B組	
	バランガイ地域訪問 プレゼン発表（介護、高齢化）	バランガイ地域訪問 プレゼン発表（介護、高齢化）	
3　15 金	◆フィリピンで活躍している日本人と意見交換する。　　マカティ ＪＩＣＡフィリピン事業所訪問 マニラで活躍するＪＩＣＡ職員とグループワーク ラーメンたかし セントルーカス病院 富裕層を対象としている先進病院で医療制度を学ぶ		
3　16 土	◆フィリピンの文化を学び、日本の文化を交流する。　　児童養護施設「子どもの家」 子ども・若者と交流 パフォーマンス（日本のポップカルチャー・伝統文化発信交流） 国歌斉唱 ショッピングセンター 夕食・現地報告会準備		
	現地報告会　　ホテル会議室 講師 ICAN事務所スタッフ 各班ごと「３つの○○」をテーマに研修をまとめ、報告 修了式		
3　17 日	マニラ空港→JAL746便（昼食：機内食）→　　成田空港→スカイライナー→北陸新幹線→上田駅		

フィリピンスタディツアー2018

フィリピンから学ぶと同時に、日本のグローバル課題を発信する研修を実施しました。

マニラ首都圏最大のゴミ山～パヤタス

ごみ山地域の住民の自治組織の人々と交流しました。

マニラ首都圏最大のゴミ山～パヤタス

フェアトレード組織訪問・家庭訪問をしました。

マニラ首都圏スラム～ブルメントリット

貧しい地域でストリートチルドレンと交流しました。
子どもの保護施設の見学と、家庭訪問をしました。

カリエカフェ

ストリートチルドレンだった子どもたちの自律の場として、運営しているカフェでワークショップ。

ＪＩＣＡフィリピン事務所訪問

フィリピン在住の日本人の活躍を学びました。
各分野で活躍する人材とディスカッションしました。

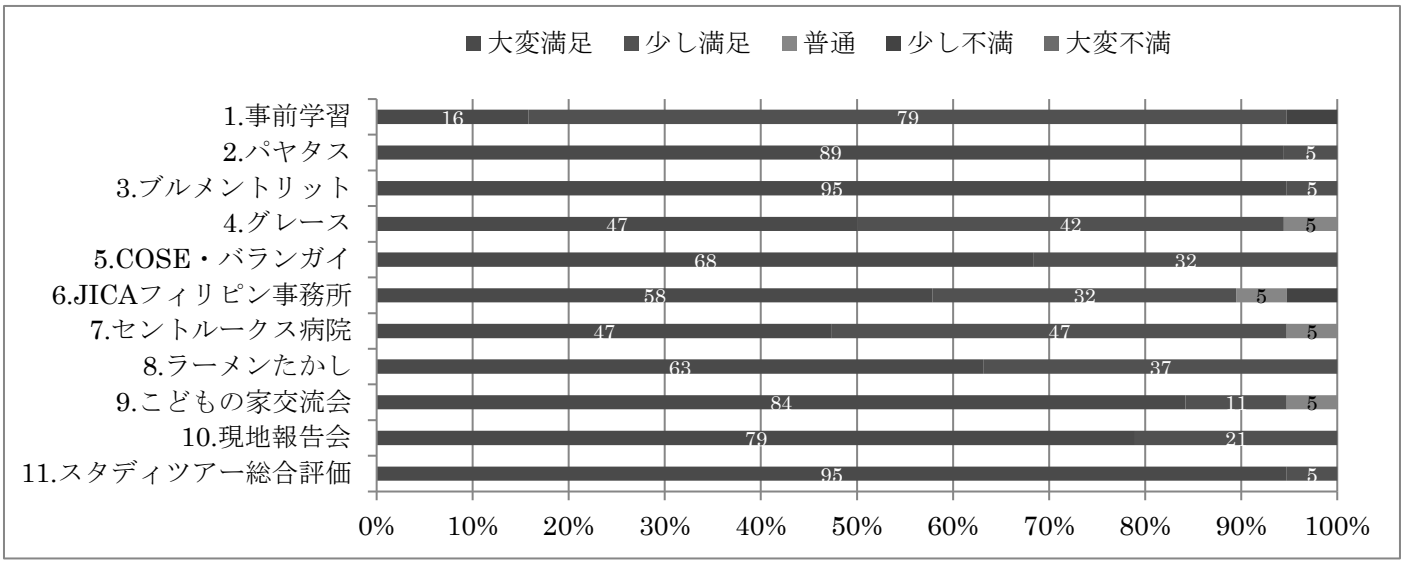
ストリートチルドレン交流会～日本文化発信

ストリートチルドレンと児童保護施設で両国のゲームを通して交流。日本文化を披露しました。

Ⅲ　海外研修・海外交流　　フィリピンスタディツアーアンケート

3　生徒アンケート

事前学習→現地学習→事後学習のプロセスで実施し、参加した先輩がメンターとして後輩の指導をするサイクルが確立。フィリピン研修における活動がＳＧＨにおけるグローバルリーダー人材育成に貢献をしている。



1	**事前学習**
	・ 色々調べたが、情報量の少なさが目立った。 フィリピン国歌に力を入れたのはとても良かったと思う。 ・ 日本在住のフィリピンの方の話が聞けて良かった。
2	**パヤタス（ごみ山）**
	・ 普段絶対に行けないような場所の、家庭を訪問をしたことが非常に良い経験となった。 ・ フェアトレードに携わるお母さんたちの団体と直接交流できたのが良かった。 ・ 許可がもらえるなら写真撮影を行い、記録として残せればよい。
3	**ブルメントリット（一時保護施設）・ＫＡＬＹＥ**
	・ 貧困の姿を五感で感じて、特にカフェの人が語ったギャングとの過去について衝撃を受けた。 ・ 実際に路上生活をしている人が、楽しそうにカフェをしていることを見ることができた。 ・ 子ども達との遊び方を事前に学ぶ。
4	**グレース（高齢者一時保護施設）**
	・ 日本との共通点を知り、高齢化社会はただごとではないと感じた。 ・ 施設の環境は良いものではなかったが、家族のように接しているというフタッフの言葉が印象に残った。 ・ 日本とは異なるプライバシーが保護されていない中での、介護の状況を見ることが出来た。 ・ 事前に日本の保護施設の事情を調べておけば良かった。
5	**ＣＯＳＥ・バランガイ（高齢者自治組織）**
	・ ＮＧＯがコミュニティーを形成し、それが地域に影響を与えるという構造が理解できた。 ・ 高齢者の方が非常に積極的で、プレゼンの質問をたくさんくださり良かった。 ・ 日本にも還元できるような、高齢者の活動に魅力を感じた。 ・ 発表した体操は面会したお年寄りには物足りなかったのではないか。
6	**ＪＩＣＡフィリピン事務所**
	・ 少人数に分かれ興味のある分野の話が聞けて良かった。 ・ 国際協力のキーワードになる課題（ミクロとマクロの視点）について知れて良かった。 ・ 説明に対するこちらからの質問ではなく、質問に対する回答というスタイルに準備できていなかった。

7	セントルークス病院
	・ フィリピンでも貧富の格差の拡大が重要な問題だと深く感じた。 ・ 最先端の医療現場を見てフィリピンの凄さを知った。 ・ 価値観に触れられ、貧困層の人との格差を学べた。
8	ラーメンたかし
	・ 日本文化がどのような形で外国に伝えられているのか学ぶことが出来た。 ・ 久々の日本食を美味しくいただいたが、質問点があまり浮かばなかったことが反省点。 ・ フィリピンで起業するメリット・デメリットを詳しく聞けた。
9	こどもの家交流会（長期保護施設）
	・ 集大成としてああいった機会はとても貴重で嬉しかった。 ・ 班ごとの交流では、現地の子供が仲良しと苦手な子がいるのでもっと配慮したいと思った。 ・ ダンスやヒューマンニットの企画で子供たちが協力的で嬉しかった。 ・ 自由時間に独りぼっちになる子がいたので気をつける。
10	現地報告会
	・ 準備時間が少ない中、自分たちが感じたことをそのまま書いて発表したのが良かった ・ 「３つの○○」とパターンを予め決めてあったので、他の班の発表も分かりやすかった。 ・ ＩＣＡＮの方々のお話から感銘を受けた。
11	フィリピンスタディツアー総合評価
	・ 日本と正反対のような国でありながら、どこか日本を感じさせられるようなときもあり、地球共通の笑顔など広い世界を感じた。 ・私たちが国際的な問題についてどれだけ無知かを知った。 私を「何か action を起こしたい」と思わせてくれた。自分でできることから少しずつ変えていく。 ・ この経験が刺激や違和感となって、これからの課題研究、ＧＳ活動に生きてくると思う。 ・ ＮＧＯの実態は衝撃的で、もっと深く掘り下げて調べようと思うきっかけになった。 ・ 今まで持っていたあいまいな考えでは何も解決できないし、むしろ変えようとする人の努力を妨げていたのではとも思った。 ・ シェアリングが毎日できて、いつもは意見をなかなか言えない自分を少し変えることが出来た。

4　評価と考察

事前学習　：ICAN のスタッフやお招きした講師の方から多面的に話をしていただき、生徒の視野を広げることができたと考える。また、現地でのコミュニケーションが上手くいくように、どのような活動が好ましいのか考えを深めることができた。これらの活動を通しても、現地においてどのような点に着目して行動するべきか、学ぶかという視点を持つことができた。

現地報告会：今回は感じたことや、現地での受信を大切に考えることに重きを置いて活動した。今まで考えていたこと以上の体験をしたことによって、新たな課題に向き合うことになった。存在する課題の解決に向けて、個別の生徒たち自身ができることは何なのかを考え、まとめ、発表した。生徒たちそれぞれの視点から見た思いを共有することで、視野が広がり、考えも深まっていった。ご講評も賜り、新たな視点を得るとともに、励みとなった様子である。

事後報告：　帰国後は、校内外のさまざまな機会において、高校生をはじめ、地域社会や大学など、幅広い対象に向けて生徒たちが自らの経験を発表した。今回の活動を冊子として今後に残していけるものを作成し、多くの方たちと体験を共有することの一助になった。生徒たち自身が体験を再度ふりかえり次の活動にむけて意欲を高めている様子である。今後のさらなる活躍に期待したい。

長野県上田高等学校ＳＧＨ年間研究発表

研究開発構想　**長寿県NAGANOから世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成**
～「長野モデル」からグローバルヘルスへ～　長野から世界へ健康長寿を発信しよう！

スーパーグローバルハイスクール研究開発単位の活動

	1年生	2年生	3年生
Ⅳ研究発表	1年SGH報告会 GS 1年全員　2月	2年SGH報告会 GS 2年全員　2月	北陸新幹線サミット いのち健康フォーラム
	松尾ゼミナール　グローバルに活躍する海外研修発表会　5月		
	アカデミックプレゼンテーション　希望者研修報告　4月　10月（とりやめ）		

1　ねらい　＜研究開発単位Ⅲ　生徒の成長が期待できる報告会の開発＞

課題研究の中で、効果的に研究する意欲を伸ばし、成長していく姿を自らが発信し、報告できる方法を開発する。
生徒の目的意識や自己理解が明確になり、さらに学習を深めていこうとする意欲につながることが期待される。
課題研究を更に深め、他校や地域におけるプレゼンテーション大会への主体的な出場につながっている。

2　概要　カリキュラム

全員プログラム　松尾ゼミナール　　事前学習→講演会→座談会（希望者）→事後アンケート
希望者プログラム　各種プレゼンテーション大会への生徒の積極的参加や派遣

①　Ｇ２０エネルギー・環境関係閣僚会合

主催 政府
ベアドッグの活用による野生グマ対策に学びつつ、
住民参加による野生動物との共存策を提言
▼6月15日　軽井沢町

②　屋代高校２学年課題研究中間発表会

主催 長野県屋代高等学校
屋代高校生の全員参加行事に本校生徒２名も
参加し、ポスターセッションを実施
▼８月24日　屋代高校（千曲市）

③　同窓会会員大会

主催 上田高校同窓会
健康に年をとっていくことに関する提言
▼11月９日　上田東急REIホテル

④　環境講演会　ＳＤＧｓを使いこなそう

主催 うえだ環境市民会議
課題研究に基づき、市民に提言
▼２月15日　上田市中央公民館

Ⅳ　研究発表　　松尾ゼミナール

1　ねらい

国際的に活躍できる人材を育成することを狙いとし、世界的に活躍する方の講演を聞く企画。今回は、本校との連携先の佐久総合病院院内の国際協力組織でも中心的に活躍する蓮見純平先生をお招きし、国際貢献のありかたについて考える機会とした。

全校講演会の様子

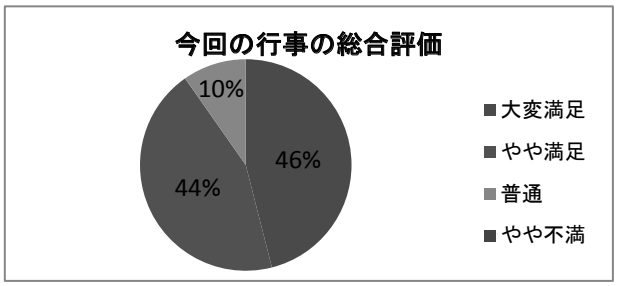
2　概　要

（1）日　時　　5月23日（木）　13時55分～15時35分
（2）場　所　　長野県上田高等学校　第一体育館
（3）講　師　　佐久総合病院佐久医療センター 小児科医長 蓮見純平氏
（4）内　容　　全校対象　　959名
講演　「世界は遠いか？ Think globally,act locallyの考え方」
終了後の希望者座談会

希望者による座談会の様子

3　生徒の感想

（1）生徒対象アンケート結果



（2）生徒の記述より

①「世界の広さ」や「世界の遠さ」についてのイメージは、講演前と講演後で変わりましたか？どんな変化がありましたか？

・アフリカ大陸の現状を知り、国際関係や医学系の職業に興味がわいた。
・物理的に遠く離れていても、繋がることができ世界は狭くなりつつある。
・外国での活躍について、はっきりイメージできるようになった。
・心理的な「広さ」は自分次第で「近く」になれると分かった。
・自分のやりたい事、興味のあることについて考え行動することにより世界は今まで以上に近くなる。
・世界の広さや遠さは「自分自身で変わる」というのが結論ではっとした。
・現代では世界で起こっている問題は、世界の人全員が関わっていることだと知った。
・世界は狭くて近いと感じたからこそ、いま世界で起こってる色々な問題を見逃せないと思った。
・世界の問題も意外と身近だと感じた。
・「世界の遠さ」についてはSNSの発達に伴って、徐々に近くなりつつあることを学んだ
・青年海外協力隊になって様々な国に行けることを知り、進路の選択肢のひとつになった。

②ユニバーサル・ヘルス・カバレッジの精神に基づく国際医療協力に関して、あなたはどのような貢献ができると思いますか？

・ワクチン費用など募金活動への積極的な参加や呼びかけ。
・世界の現状を知り、どんな支援が必要か考える。
・国際医療の職につくこと。
・活動を多くの人に知ってもらうための情報の発信。
・支援といっても上から引っ張るよりも、下から押し上げる支援が大切。
・自分たちが教育を受け、立派な大人になること。
・献血をすることによる国際医療への協力。
・しっかり働き納税することで、社会福祉サービス向上に貢献する。
・ジェネリック医薬品を選択し、国の医療費を削減していくことで貢献できるのでは。
・食品ロスをなくす。

4　評価と考察

毎年国際的に活躍する方を講師にお呼びして全校一斉に行う本行事は､昨年度の秋から時期を変更して5月に実施とした。本校のSGH研究開発構想は「いのち・健康」である。その点で､保健・医療活動を通じて「いのち・健康」を守る活動について学んだ今回の活動はSGH活動の原点へと立ち戻るものでもあった。高校卒業後､まずは医療に関係のない学部に入学してやがて医師を目指したこと､地域の病院の医師である点で､多くの生徒が国際貢献を身近なものと感じられるようになったのではないだろうか。アンケートのデータでも､昨年度より「大変満足」､「やや満足」の数字が上昇した。

Ⅳ　研究発表　　第１回アカデミックプレゼンテーション

１　ねらい

海外研修体験者を中心とした生徒のプレゼンテーション能力の向上と、ＳＧＨ事業の一般への公開

２（１）日　時　4 月 13 日（土）12 時 15 分～14 時 15 分

（２）場　所　上田高等高校　会議室

（３）助言者

斉藤則章氏　長嶋幸恵氏　（以上長野県教育委員会事務局学びの改革支援課高校教育指導係より）

（４）発表内容

①ＳＧＨフィリピンスタディツアー
②ＳＧＨボストンスタディツアー
③カンボジア井戸プロジェクト
④全日本高等学校選抜オーケストラ・ウィーン公演 2019 に参加して
⑤東御市派遣米国オレゴン州高校生ホームステイ体験報告
⑥坂城町派遣高校生タイ国研修事業報告

３　聴衆のアンケートや、助言者の講評より

・現状→提案という流れでプレゼンの内容が深まってよかった。
・課題の決定から全体を貫くメインテーマをもう少しはっきりさせてプレゼンテーションを行ったほうがいい。
・学んだ事をもとに「オリジナリティ」のある内容のあるプレゼンだった。
・英語の発表は大変だけど、聞き手の反応を見てみんなが理解できるようにするといい。
・SDGs の視点から考察しているところがわかりやすかった。
・せっかく多くの高校生と交流したので、その点をもっと盛り込んでもよかったのではないか。
・現地でのカルチャーショックを中心に、「学びの体勢」についても言及していてよかった。
・異文化を受け入れ、それらとよい関係を築くには、寛容な心や柔軟な心を持つこと、自分の言葉に責任を持つことが大切。

４　評価と考察

前年度末に実施された希望者海外研修の成果の報告を中心に行われた。公開行事として実施され、中学生や保護者（当日は２学年 PTA 総会が開かれた）、報道関係者、さらには入学後間もない１年生などが訪れ、その緊張感をバネに、生徒がプレゼンテーション能力を高めていったことが感じられた。ここで発表した生徒の少なからぬ部分が、その後も様々な SGH 活動で活躍することになった。

Ⅳ　研究発表　　第１回 NAGANO 英語プレゼンテーション大会

１　ねらい

グローバルリーダーに求められる国際的な対話力育成を目指すとともに、高校・大学という枠を超えた人々が集い、多様な個性を相互に発信する契機とする。

２（１）日　時　9 月 28 日（土）9 時 ～ 12 時

（２）場　所　長野県立大学　三輪キャンパス

（３）ファシリテーター　川向　思季（長野県立大学　学生）

（４）発表内容

Gender-equal Ueda - Elderlies can revitalize our hometown Ueda-

女性の社会進出について、上田市の母親の職場復帰を助ける子育て支援の在り方について考える。

３　聴衆のアンケートや、助言者の講評より

・発表スライドもわかりやすく作られており、内容の構成も論理的で聞きやすかった。
・英語の発音がクリアで、話すスピードも適切だった。
・自分の地域についてのデータの収集・分析・考察がそろっており、伝えたい内容がはっきり伝わってきた。
・高齢化社会や男女格差の問題は、全国共通の課題であり、人口減に伴い経済が縮小していく社会の中でどのように皆が共存・協力して生きていくのかが難しい課題だと思いました。

４　評価と考察

これから課題研究を本格的に始める１年生が主な聴衆であり、本校生徒の英語による発表は、研究の手法・データの分析と考察、そして研究成果の英語で発表するプロセスを共有することができた。他校の生徒との交流もあり、お互いに刺激を受けた１日となった。

Ⅳ　研究発表　　県議会における高校生との意見交換会～「こんにちは県議会です」～

1　ねらい

主体的な活動を情報交換し、広い視野からこれまでの活動を見直すと共に社会との接点を見出し、新たな仲間とともに高校生の提言を発信する。

2　概要

（1）**日　　時**　12月５日（木）　　14時00分～17時00分
（2）**場　　所**　長野県議会棟　第１特別会議室
プレゼン発表タイトル　「牛丼が引き起こす水不足～長野県で飼料用米稲作を促進しよう～」

3　生徒の感想

（1）**成果と課題**

① 準備段階
・様々な人からアイディアをいただき、頭でしっかり考えたプレゼン準備ができた。

② 当日の発表について
・アドリブも入れながら、自信を持って堂々と発表ができた。
・明白にならないままプレゼンしてしまった点があった。

（2）**全体の感想**
・意識の高い各地の高校生に大変刺激をうけた。
・どんなに大きくて、自分ではどうにもできないと一見思う難しい問題でも、意外と身近に自分ができる小さなことがあって、実際に実行している高校生がいることがわかった。

4　評価と考察

正式名称は「生徒の主体性を育む、県議会における高校生との意見交換会」で、探究活動を通じた社会への参与意識を育むことも目標とされており、県議会事務局、長野県高等学校長会専門委員会とともに、生徒実行委員会が企画運営にあたった。出場生徒は夏季休業中に自主的に「Future Global Leaders Camp 2019」（大阪大学主催）に参加したほか、11月23日の予選を突破して本行事に臨んだ。当日は本生徒のプレゼンテーションの評価も高かったが、参加高校生による県議会傍聴や、議員も交えてのディスカッションも行われて、何よりも高校生たちが県政を身近に感じ、当事者意識を高める機会となった。

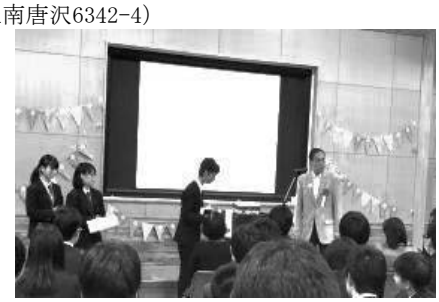
Ⅳ　研究発表　　長野県高校生「私のプロジェクト」発表大会

1　ねらい

学校で取り組んでいる「探究的な学び」や自らの発想で取り組んだ探究活動の成果を、学校の枠を超えて発表し合い学び合うことにより、課題発見や解決に向けて試行錯誤することの楽しさを共有するとともに、他者のアドバイスを受けて自分自身を成長させる機会にする。

2　概要

（1）**日　　時**　12月14日（土）13：00～19：00　宿泊（1日目）　＞１泊２日
　　15日（日）　9：00～16：30　（2日目）
（2）**場　　所**　1日目　長野県総合教育センター、知新寮（塩尻市大字片丘南唐沢6342-4）
　　2日目　塩尻志学館高等学校（塩尻市広丘高出4-4）
発表タイトル　「目指せ観光地！軽井沢のお隣御代田の挑戦」
　　「カンボジア井戸プロジェクト」



3　生徒の感想

（1）成果と課題

① 準備段階
・自分の学んだドラマを、スライドに入れる方法や見せ方、また、御代田になぜ注目したか見つめる良い機会となった。
・自分たちのドラマ、オリジナリティがないと気づけ、「私たちのプロジェクトだ」と感じ、大幅な変更をする決断ができた。

② 当日の発表について
・オーディエンス一人ひとりの目を見て、自分の言葉で伝えることができ、学校部門ベストラーニング賞を受賞できた（カンボジア）。
・声に抑揚をつけたり、オーディエンスに近づいたり工夫をし、皆を引き付けられるプレゼンができ、最優秀賞(県知事賞)に選ばれた。

（2）全体の感想
・私にとって大きな刺激となる大会でした。各校から自分のプロジェトに誇りを持っている高校生が集まり、お互いのプロジェクトを尊重し合える雰囲気がありました。そのような場所で過ごした２日間で、プロジェクトについて正面から向き合うことができました。

4　評価と考察

ＮＰＯ法人「カタリバ」が主催し、高校生自身の学びの成果を発表する「マイプロ全国大会」の県予選が、本年度から長野県教育委員会主催で実施され、個人部門、学校部門ともに予選ラウンドを通過し、決勝ラウンドでは個人部門で最優秀賞にあたる県知事賞を獲得し全国大会への切符を手にした。また、学校部門もこれまでの自分たちの学びの成果が評価されベストラーナー賞を受賞した。ＳＧＨでの学びの成果が、生徒たちの主体的な学びにつながり結実を見せた実践事例として大いに評価できる。

Ⅳ　研究発表　　筑波大学附属坂戸高等学校「第８回高校生国際ＥＳＤシンポジウム」

１ ねらい　　主催：筑波大学附属坂戸高等学校

海外の高校生および WWL校、ＳＧＨ 校、地域協働事業校等の生徒および教員が集い、持続可能な社会作りに向けた国際シンポジウムを開催することを通じて、参加者が持続可能な社会の実現を目指してグローバル課題 に主体的に取り組む姿勢を涵養するとともに、グローバル人材としての資質を高める。また、学びの深化のためのネットワークづくりを進め、SDGsを実現するためのコンソーシアムを構築する。

２ 概 要

（１）**日　　時**　11月7日（木）
（２）**場　　所**　筑波大学東京キャンパス 文京校舎講堂
（３）**内　　容**　ポスターセッション形式（27高校参加）
午前:ポスターセッション①　午後:ポスターセッション②､分科会
発表タイトル「フィリピンの今と国際協力」

３ 生徒の感想

（１）**成果と課題**

① ポスターセッション〈準備〉
・事前にPSの練習が多くでき、内容を深められた。
・貼る作業をもう少し早目にすべきだった。その他は次回に活かしたい。

② ポスターセッション〈発表〉
・原稿を見ることなく、声を張って自分の伝えたいことを伝えられた。
・オーディエンスとのコミュニケーションを増やしたい。写真の使い方も向上させたい。

（２）**全体の感想**

・様々な国の同年代の人々や、都心部の高校生と触れる中で一番感じたのは、“可能性”と“今まで自分の意見を主張することを、どれだけ遠慮していたか”ということです。フィリピンやオーストラリアの生徒は、自分の意見が間違っていようとなかろうと、しっかり発言しているのを見ると、どんな意見であろうと何かの解決に繋がったり、無駄ではないだと学びました。これからは、自己中心的ならない程度に、自分の意見を主張するようにしたいと思いました。

４ 評価と考察

国内外から多くの高校生が集まり、多様な背景をもつ高校生の前で課題研究を発表できたことは貴重な経験となった。国外の高校生による探究的な活動の報告も聞き、各国の高校生がどのような問題意識を抱えているかを知る機会になった。午後の分科会では、フィリピンやタイ、オーストリアの高校生と世界の貧困問題についてディスカッションを行った。生徒によって問題の捉え方が異なり、新たな視点で貧困問題を考えるきっかけとなった。

Ⅳ　研究発表　　石川県立七尾高等学校「ＳＳＨ・ＮＳＨ成果発表会」

１ ねらい　　主催：石川県立七尾高等学校

姉妹校七尾高校の生徒と共に、世界農業遺産を中心とする能登の価値の発信、地域資源を活用した地方創生の方策を探究する取り組みを学ぶ。ＳＳＨ・ＮＳＨ(いしかわニュースーパーハイスクール)指定校である七尾高校の課題研究発表会に参加することで、具体的な研究に取り組む他校の生徒の様子を知り、自分たちの課題研究の手法に取り入れる。

２ 概 要

（１）**日　　時**　12月18日（水）
（２）**場　　所**　石川県立七尾高等学校
（３）**内　　容**
令和元年度石川県立七尾高等学校「ＳＳＨ・ＮＳＨ成果発表会」
※ポスターセッション　本校生徒2名発表
「製薬産業と知的財産権―発展途上国の医薬品アクセス問題―」
「LGBTと学校教育」

３ 生徒の感想

（１）**成果と課題**

① ポスターセッション〈準備〉
・スライドを作る過程で、その分野に対するいろいろな見方の人とディスカッションした。
・数字をあまり使わなかったので、改善していきたい。

② ポスターセッション〈発表〉
・LGBTに関連する知識がまだ深まっていないように思えた。
・プレゼン中のコミュニケーションが足りないと感じた。

（２）**全体の感想**

・文系では、商業についての発表が多かった。理数系は、仮設⇒実験までのプロセスも明確で思考の飛躍レベルが高かった。
・内容が深く難しかったが、とても興味深かった。応用の仕方も考えられていれば、更によい発表だった。

４ 評価と考察

参加した二人とも、それぞれ持ち味を出しながら堂々たる発表ができた。発表者と聴衆のインタラクティブなやりとりがもう少し見られるように、発表者の技能を高めていくことは今後の指導の課題となる。七尾高では実験に基づく実証を試みている発表も多かった。本校にも取り入れていくことが望ましい。

Ⅳ　研究発表　　ＳＧＨ全国高校生フォーラム

１　ねらい　　主催：文部科学省、国立大学法人筑波大学

全国のＳＧＨ、ＷＷＬ等の指定校が参加するプレゼンテーション大会に出場し、プレゼンテーション能力を育成するとともに、他校のハイレベルな生徒と交流して発信能力を高める機会とする。

２　概 要

（１）**日　　時**　12月22日（日）

（２）**場　　所**　東京国際フォーラム

発表タイトル　「誰にでも優しい世の中へ　～インクルーシブ教育からよりより社会をつくる～
For a World that is Kind to Everyone -Improving Society with Inclusive Education-」

午前中の生徒交流会では「社会的環境と生活」分科会に参加

３　生徒の感想

（１）成果と課題

① プレゼンテーション〈準備〉

・インクルーシブ教育を取りあげながら、多様性を学ぶことの大切さを伝えることができる課題になった。
・高校生にもできる解決策をもっと考えないといけないと思った。
・自分の意見を伝える機会があれば、もっといろいろな人の考えを聞いた方がより深まると感じた。

② プレゼンテーション〈発表〉

・ポスターを見ながら、まわりの人を見て話すことで、反応を確認しながら話せた。
・特に強く伝えたいことを、もっと英語で上手く伝えるようにしたい。声は大きく、ジェスチャーも行う場合は大きくしたい。

（２）全体の感想

・今できること、やるべきことがしっかりと考えられていて、解決策もいろいろ考えてあった。　また、既にアクションを起こしている人たちも多く、自分も何かできないかと思った。

４　評価と考察

文部科学省、筑波大学の共催による、全国のＳＧＨ指定校とアソシエイト校が参加する行事である。単なるプレゼンテーション大会でなく、テーマごと討論を行う時間も設定されている。ポスターセッションも分科会も全て英語の使用が義務付けられ各種大会のなかでもレベルは群を抜いている。ポスターセッションは１回目よりも２回目は堂々と参加し、発表したアイデアに対しての受け答えがはっきりできた。本校全体の英語能力の底上げが期待される。

Ⅳ　研究発表　　第4回関東・甲信越静地区高校生探究学習発表会

１　ねらい　　主催：立教大学

関東甲信越地区ＳＧＨ指定校を中心とした、プレゼンテーション大会に出場し、プレゼンテーション能力を育成するとともに、他校のプレゼンテーションを通じて意見交換する機会とする。

２　概要

（１）**日　　時**　12月15日（日）

（２）**場　　所**　立教大学池袋キャンパス

日本語プレゼンテーション部門

発表タイトル　「パラスポーツの振興」

日本語ポスターセッション部門

発表タイトル　「日本のジェンダーギャップ～男女格差から日本の教育を考える～」（日本語ポスターセッション部門優秀賞受賞）

３　生徒の感想

（１）成果と課題

① 準備段階

・スタディツアーなど、自分の体験に基づいた研究設定ができた。
・課題に持っていくためのスライドが多かったので、つかみをもう少し短くすればよかった。

② 発表

・今まで自分が視点をあてたことのない分野だったので、更に、研究したいと思った。
・解決策などを実行に移したときにどうなるかなど、課題がたくさんあるので直していきたい。

（２）全体の感想

・自分たちが考えたことを既に実行していたり、専門の方や団体へ話を通していたりと、先を見据えた活動をしているグループがが多かった。
・自らが主体となり、様々なアクションを起こしている人がたくさんいた。いろいろな分野の発表を見て、日本と世界の問題について知る良い経験となった。

４　評価と考察

ＳＧＨ、ＷＷＬ、グローカルの指定を受けた全20校、プレゼン29本，ポスター41作品が参加した、大規模かつハイレベルな関東・甲信越静地区課題研究発表会である。生徒は大勢の聴衆を前に緊張しつつも堂々と発表し、立教大学教員からの講評を得て，大いなる飛躍の機会となった。また社会への提言や行動を起こしている同世代の高校生の活動にも大きな刺激を受けたようである。なお，終了後ポスターを校内に掲示して多くの生徒が学べるようにした。

Ⅳ　研究発表　　シニア大学

１　ねらい

シニア世代の生きがいづくり・仲間づくり･社会参加のきっかけづくりを目指す事業においてプレゼンテーションとディスカッションを行うことで世代間の交流を図るとともに、ＳＧＨ活動を対外的に発信する機会とする。

２　概要

（１）日　　時　2月10日（月）

（２）場　　所　上田合同庁舎

発表タイトル　「フィリピンでの学び」

（前年度のフィリピンスタディツアー参加者５名が担当）

３　生徒の感想

（１）スライド準備

・現地の写真を多く入れて､視覚的にわかりやすいようにした。

・それぞれの分担スライドの様式を事前に統一したことにより，合作の際の見映えもよくなった。

（２）プレゼンテーション

･マクドナルドの照明で勉強する少年の姿が聴衆の共感を呼んでよかった

･敢えて原稿を作りきらずにその場で考えていう部分があったが､意外と言いたいことが言えた。

・自分の伝えたいことがしっかりと伝えられた。

・ただ端的に｢～～をして○○しました｣だけではなく､体験したことを踏まえてこれからどうしていきたいのかをプレゼン内に入れたのは効果的だったと感じるので､今後プレゼン発表などがある場合もそうしていきたい。

（３）全体の感想

・大人の方々の意見を聞くことで､自分の視点とは別な角度から課題を見つめることができ､新しい発見も多かった。

・ある方に「日本の未来はまだまだ明るいと感じた」といっていただけて、自分の経験をつぶさずにできることをもっと積極的にやろうと思った。

・様々な質問をいただき、時間が足りないと思うくらい濃いディスカッションをすることができた。私たちが「講師」の立場だったが、シニアの方から新たな質問を得て、逆に私たちが学ばせられる場面が多かった。

４　評価と考察

生徒がプレゼンテーションを行う相手としては珍しい､高齢者対象の企画である。価値観の違いを心配した生徒もいたが、いざ始まってみると高齢者の学ぶ意欲や多彩な質問に直面して、貴重な体験となったようである。本校ＳＧＨ活動の基本理念「いのち・健康」や地域社会とのつながりをを考えるうえでも､ＳＧＨ指定終了後も継承していかねばならない企画である。

Ⅳ　研究発表　　全国ＳＧＨ課題研究発表会2019　ＳＧＨ甲子園

１　ねらい　　主催：関西学院大学、大阪大学、大阪教育大学

ＳＧＨ全国大会に日本語ポスターセッションでエントリーした。

教育の課題解決を目指して軽井沢のISAKの取材から考えたことを発表し､ディスカッションから新たな課題を考える。

２　（１）日　　時　2019年3月23日（土）

（２）場　　所　関西学院大学　西宮上ケ原キャンパス

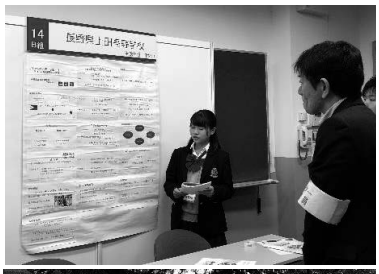
発表タイトル　「これからの世界に必要とされるグローバル教育のあり方」

３　生徒の感想

・ＳＧＨ甲子園に向けて準備をしたことで、たくさん取材に行くことができ、自分の研究の土台がしっかり作れた。

・決まってから取材に行ったり、本を読んだことで、自分が本来課題にしていたことの内容の薄さを痛感した。

・自分の目で様々な現場を見に行っていたので、それについての質問には対応できたのでよかった。



４　評価と考察

実際にISACに取材に行き学んだことから、公的な施設にも課題解決の糸口を探りに行き、いくつかの観点からアプローチすることができた。

この場で行ったディスカッションでは、意見交換をすることで意見を深めた。

他の課題研究に触れることによって自分の学びにも反映させることが出来た。

Ⅳ　研究発表　　ＷＷＬ・ＳＧＨ×探究甲子園2020

（１）日　　時　2020年3月21日（土）

（２）場　　所　関西学院大学　西宮上ケ原キャンパス

発表タイトル　「私たち高校生は世界のために何ができるか

―井戸掘りから始まる途上国支援―」

※新型コロナウィルス感染予防のため取りやめ

Ⅳ　研究発表　　留学フェローシップ

1　ねらい

海外大学在籍の日本人留学生と直に懇談し、海外留学について理解を深める。海外の大学の学びかたを研修し、高校時代にやるべきことを再確認させ、自己のキャリアプランとする。

2　実践

（1）日時　　令和元年7月20日（土）9時30分～11時30分

（2）場所　　同窓会館（学習室）

（3）講師　　海外大学へ進学した現役大学生　8名

(NPO留学キャラバン隊のメンバー）敬称略

山崎　詩乃　カリフォルニア大学ロサンゼルス校（米）卒業・地理環境学・GIS専攻

杉下　はる　ヴァッサー大学進学予定（米）新1年・国際関係学専攻

播　　知明　ノースイースタン大学（米）2年・ビジネス学・経済学専攻

川島　和幸　エンブリー・リドル航空大学（米）2年・航空科学専攻

高梨　真知子　グリネル大学（米）2年心理学等専攻

伊東　菜々美　パリ政治学院（仏）卒業・国際関係学専攻

加井野　絢　ウェルズリー大学（米）3年・政治科学専攻

岩井　唯花　ニューヨーク大学（米）3年・心理学専攻

（4）　参加生徒　本校生徒および東北信の高校生　15名　及び保護者

＜実施内容＞

海外の大学に通う現役大学生による、海外大学への進学を決めた理由、進学までのプロセスについてのプレゼンテーションを行った。ワークショップでは、ある学生のポートフォリオから、どのような学問に向いているか、この学生の強みは何かなどのディスカッションを行った。日本と大学の入学システムの違いや、奨学金についてなどの説明もあり、様々な国の大学に通う大学生からは、大学選びのポイント、キャンパスライフ、卒業後の進路についてなどについての情報をいただいた。

3　生徒の感想

＜海外留学と海外進学についてわかったこと＞

・海外留学には様々な選択肢があり、自分が知らない進学手段があることがわかった。

・実際に通った方の感想が聞け、日本と外国の大学の違いについて具体的なイメージが湧いた。

・費用がかかることがわかったが、奨学金にも何通りか方法があることもわかった。

・海外に行くにはそれぞれのタイミングがあるし、日本と海外の大学にはどちらも良さがあることがわかった。

・海外の大学は勉強中心なので大変だと思ったが、海外でしか学べないことがたくさんあることがわかった。

＜全般的感想＞

・今回の説明会を聞き留学も選択肢の一つと思い、今のうちから更に調べてじっくり考えていきたい。

・みんな自分の目標と勇気を持ちそれぞれの理由で進路選択をしているのだと感心した。

・アドバイザーのリアルな話やグループでの話し合いで色々な話を聞き、自分の進路決定にはやはり自分の思いが大切だと分かった。

4　評価と考察

世界の大学の多くは、日本のような「センター試験」に代表される筆記試験で実施される受験ではなく、エッセイを含めた書類審査で合否が決まる、「学力＋人間力」の多面的総合評価である。そのため、学業に加えて、課外活動での実績、社会貢献に対する意欲関心、個性と独創力といった力を高校生活の様々な活動を通して養いうことも重要である。本校でも台湾・フィリピン・ボストンの海外研修などを経験し、海外大学への進学も選択肢の一つとして考える生徒もいる中、海外の大学で学ぶ現役の学生たちの体験談を聞き、個別の進路相談にも応じてもらえるこの企画は大変貴重な機会であると感じる。

Ⅳ　研究発表　　長野県上田高等学校第５回ＳＧＨ報告会

１　ねらい

長野県職員のＳＤＧｓに関する基調講演を土台として、課題研究はＳＤＧｓ１７カテゴリーに関連づけて発表する。
１年２年４クラスずつＡＢの２グループ縦割りで、プレゼンテーション・ポスターセッションを午前午後で交互に実施する。
グローバルスタディⅠⅡで課題研究の全員では最終発表として、2年生が４カテゴリーでポスターセッション（一部英語）をする。
グローバルスタディⅠで課題研究をはじめた1年生が2年ポスターセッションを聞き、意見交換することで探究の意欲を高める。
グローバルスタディⅢ3年生が最終プレゼンテーションをし、3年間の学びの報告と大学に繋がる学びの計画について発表する。
ＳＧＨカリキュラムを学んだ大学生が現在の学びについて発表し、ＳＧＨの高大接続の重要性について認識させる。
本校職員もプレゼンテーションを行い、学びの意義に関して生徒と意識を共有する。
プレゼンテーション・ポスターセッションに対して、講師のほか、県内英語教員、大学生、高校３年生より助言を受ける。

２　概要

日時：令和2（2020）年 2月8日（土）　　場所：上田市文化センター・中央公民館

来賓　長野県ＳＧＨ運営指導委員		来賓　長野県教育委員会事務局	
赤池　学	ユニバーサルデザイン総合研究所長	三輪　晋一	教育次長
大井　恭子	清泉女子大学英語英文学科教授	佐倉　俊	学びの改革支援課長
金子　元昭	ASPINA シナノケンシ株式会社代表取締役社長	齋藤　則章	学びの改革支援課教育幹兼高校教育指導係長
近藤　誠一	長野県文化振興事業団理事長	内堀　繁利	長野県教育委員会高校改革推進参与
滝澤　正	上智大学名誉教授	飯島　由美	長野県総合教育センター所長
中西　茂	玉川大学教授		

内堀　繁利	講師	長野県教育委員会高校改革推進参与
直井　恵	講師	本校海外交流アドバイザー
中田　覚子	講師	佐久大学看護学科講師
間篠　花音	講師	青山学院大学地球社会共生学部
瀧澤日菜子	講師	長野県立大学グローバルマネジメント学部
龍野　謙信	講師	早稲田大学法学部
藤井健太朗	講師	慶応義塾大学理工学部
吉田　花菜	３年	

内堀　繁利	講師	長野県教育委員会高校改革推進参与
蓮見　純平	講師	佐久医療センター
成田　明	講師	信州大学繊維学部
山田　杏奈	講師	東京大学教育学部
望月啓太郎	講師	慶応義塾大学経済学部
南澤　諒真	講師	筑波大学人間学類
林　美里	３年	

A	１年１組	１年２組	１年３組	１年７組
	２年１組	２年２組	２年３組	２年７組

集合9:20　ＳＨＲ・準備　9:20-9:50　各会場

第１部　ポスターセッション　9:50-11:50
グローバルスタディⅡ課題研究発表
Ｐ　国際・人権カテゴリー
Ｑ　文化・地域・ビジネスカテゴリー
Ｒ　保健・教育カテゴリー
Ｓ　技術・環境カテゴリー
講評

昼食時間　11:50-12:25

開会行事　13:00-13:10

第２部　基調講演　13:10-13:25
講師　内堀　繁利氏
長野県教育委員会高校改革推進参与

プレゼンテーション①　13:30-15:15
１年グローバルスタディⅠ　大ホール
２年グローバルスタディⅡ　講評

休憩　15:15-15:30

第３部　プレゼンテーション②　15:30-16:20
３年グローバルスタディⅢ
大学生　教職員

閉会行事　16:20-16:40

B	１年４組	１年５組	１年６組	１年８組
	２年４組	２年５組	２年６組	２年８組

集合8:45　ＳＨＲ　8:45-8:55　大ホール

開会行事　8:55-9:05

第１部　基調講演　9:05-9:20
講師　内堀　繁利氏
長野県教育委員会高校改革推進参与

プレゼンテーション①　9:25-11:10
１年グローバルスタディⅠ　大ホール
２年グローバルスタディⅡ　講評

休憩　11:10-11:25

第２部　プレゼンテーション②　11:25-12:30
３年グローバルスタディⅢ
大学生　教職員
講評

昼食時間　12:50-13:40

第３部　ポスターセッション　13:40-15:40
グローバルスタディⅡ課題研究発表
Ｐ　国際・人権カテゴリー
Ｑ　文化・地域・ビジネスカテゴリー
Ｒ　保健・教育カテゴリー
Ｓ　技術・環境カテゴリー
講評

長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会（午前）

Ａグループ　１組２組３組７組

担当 2年　木村 佐藤 島﨑 太田
担当 1年　百瀬 中島 気賀沢 坂下

9:20 集合　　9:20-9:50　ＳＨＲ・会場準備

２階	第1会議室	2年1組	３階	大会議室	2年2組　1年1組2組
2階	第2･3会議室	2年3組　1年3組	１階	展示室	2年7組　1年7組

9:50-11:50　２年ポスターセッション　　グローバルスタディⅡ　　担当 小林まゆ子　西村晃洋

9:50-10:00　開会・方式説明　　２年全員ポスターセッション４班（①②③④）実施

評価表は各自が持参　　ポスター掲示→説明15分→ポスター取替５分

１年2年は聞き役　全員評価表記入

P　国際・人権　　9 ～ 10

説明時間　各15分

①グループ	10:00-10:15	10
②グループ	10:20-10:35	10
③グループ	10:40-10:55	10
④グループ	11:00-11:15	9

※クラス毎でない場合あります。

１Ｆ 展示室　２年 39 人　１年 32 人

講　師　間篠花音　青山学院大学地球社会共生学部

講　師　龍野謙信　早稲田大学法学部

◆最優秀賞：　3組　中村晴菜　「分かり合うことの難しさ」

司会進行　2年7組　久家千智　宮島怜子

評価表　1年7組　大橋明佳　古郡梓咲

Q　文化・地域・ビジネス　　7

説明時間　各15分

①グループ	10:00-10:15	7
②グループ	10:20-10:35	7
③グループ	10:40-10:55	7
④グループ	11:00-11:15	7

※クラス毎でない場合あります。

２Ｆ 第１会議室　２年 28 人　１年 26 人

講　師　直井　恵　本校海外交流アドバイザー

講　師　瀧澤日菜子　長野県立大学グローバルマネジメント学部

◆最優秀賞：　1組　相澤周作　「文房具のデザイン」

司会進行　2年1組　相澤周作　花岡響紀

評価表　1年1組　熊谷駿　宮下桜

R　保健・教育　　14

説明時間　各15分

①グループ	10:00-10:15	14
②グループ	10:20-10:35	14
③グループ	10:40-10:55	14
④グループ	11:00-11:15	14

※クラス毎でない場合あります。

３Ｆ 大会議室　２年 57 人　１年 50 人

講　師　中田覚子　佐久大学看護学科講師

講　師　吉田花菜　３年４組

◆最優秀賞：　7組　大日向郁真　「日本の医療制度は無事か？」

司会進行　2年2組　原田千優　牧内晴彦

評価表　1年2組　望月菜央　吉原凜

S　技術・環境　　9

説明時間　各15分

①グループ	10:00-10:15	9
②グループ	10:20-10:35	9
③グループ	10:40-10:55	9
④グループ	11:00-11:15	9

※クラス毎でない場合あります。

２Ｆ 第2･3会議室　２年 36 人　1年 51 人

講　師　小田切亨　本校理科教諭

講　師　藤井健太朗　慶応義塾大学理工学部

◆最優秀賞：　3組　清水裕文　「We are 外来種！」

司会進行　2年3組　木内ひより　村山大知

評価表　1年3組　新上瑞希　小宮山瑞季

11:20-11:30　評価表記入　　評価表回収

11:35-11:50　講評・閉会式　　講師講評　各会場にて

11:30-12:15　昼　食　　※一部を除き椅子はありません。各自シート等を持参して下さい。

P	国際・人権	1階展示室	R	保健・教育	3階大会議室
Q	文化・地域・ビジネ	2階第1会議室	S	技術・環境	2階第2･3会議室

長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会（午後）

Ａグループ　１組２組３組 7組

担当 木村 佐藤 島﨑 太田
担当 百瀬 中島 気賀沢 坂下

12:25-12:55　大ホールへ移動　発表者動作確認　ルーム長はクラス分の評価表を受け取って配布

13:00-13:10	開会行事 学校長挨拶　講師紹介　学校長 廣田昌彦 生徒代表挨拶　2年7組　久家千智 長野県長野高等学校の皆さん紹介 校歌斉唱　指揮　嶋田美紅 伴奏　小山千秋	プレゼンテーション会場スタッフ 担当　SGH 髙野芙美　メディア 小林和宏 司会　2-7 松本凛　2-7 井沢瑠菜 PPT　1-1 沓掛 結士　1-3 永井達希 Time　1-2 荒井直　1-2 望月菜央 質疑 mike 1-1 有馬芽生　1-7 橘小雪
13:10-13:25	基調講演 長野県教育委員会高校改革推進参与　内堀繁利	

13:30-15:15　プレゼンテーション①　※評価表を記入して下さい。　ゲスト：長野県長野高等学校の皆さん
ＳＧＨ課題研究必修科目「グローバルスタディⅠ」「グローバルスタディⅡ」の学びから発表します。

１年生 ＧＳⅠ （週1時間）	①「ホワイト企業を増やす」 1組 田中　結		13:35-13:45
	②「これからの医療と長野」 2組 若林虎太郎		13:45-13:55
	③「杏の里と工コツーリズム」 3組 西村萌樹	◆最優秀賞	13:55-14:05
	④「チケット転売の心理と問題点」 7組 守屋理子		14:05-14:15
２年生 ＧＳⅡ （週2時間） 日本語 （週1時間） 英　語 （週1時間）	⑤「信州に環境革命を起こす」 北村優斗　長野県長野高等学校２年	◆最優秀賞	14:20-14:30 招待高校
	⑥「学習支援がもたらす利益とは」 7組　髙津慎太郎，1組　濱太智，蓬田真夢花		14:30-14:40 自主活動
	⑦「台湾研修旅行報告」 2組　城田美衣奈，鴻巣有希		14:40-14:50
	⑧「Who are you?」 2組　金井京花，藤森彩季		14:55-15:05 使用言語：英語
15:10-15:15	講評　直井　恵　本校国際交流アドバイザー	（本校卒業生）	

15:15-15:30　休憩

15:30-16:20　プレゼンテーション②　※評価表を記入して下さい。
「ＳＧＨ学びの報告書」から「大学の学びの計画書そして未来」　「21世紀型スキルを養う探究的学び」

３年生 ＧＳⅢ（増1単位）	①「未来への第一歩」 吉田花菜　3年4組		15:30-15:40
大学生	②「地球社会で共生する」とは 間篠花音　青山学院大学地球社会共生学部	（本校卒業生）	15:40-15:50
	③「未来を創るために必要な行動力と主体性」 瀧澤日菜子　長野県立大学グローバルマネジメント学部	（本校卒業生）	15:50-16:00
	④「SGH活動の意義とこれから考えてほしいこと」 藤井健太朗　慶応義塾大学理工学部	（本校卒業生）	16:00-16:10
教職員	⑤「袁傪がくれた，幸せになるおまじない」 百瀬慎一　上田高等学校国語科		16:10-16:20
16:20-16:40	閉会行事 講評　学校長　廣田昌彦		諸連絡

長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会（午前）

Ｂグループ　４組 ５組 ６組 ８組

担当 2年　塩澤 山田 中澤 甲田
担当 1年　小坂 横山 桐山 藤沢

8:45-8:55　準備時間　ＳＨＲ　評価表配布　大ホール　　8:30-9:00　発表者動作確認

8:55-9:05　開会行事
学校長挨拶　講師紹介　学校長 廣田昌彦
生徒代表挨拶　2年6組　宮下大樹
石川県立七尾高等学校の皆さん紹介
校歌斉唱　指揮　小林夕希子
伴奏　矢花紗希

プレゼンテーション会場スタッフ

担当	SGH 髙野芙美	メディア	小林和宏
司会	1-4 鈴木祥子	1-6	佐藤優衣
PPT	1-4 佐藤雅桜	1-5	松﨑琉斗
Time	1-6 中澤侑希	1-6	両角春奈
質疑 mike	1-4 甲田 高志	1-4	藤巻 由輝

9:05-9:20　基調講演
長野県教育委員会高校改革推進参与　内堀繁利

9:25-11:05　プレゼンテーション①　※評価表を記入して下さい。　ゲスト：石川県立七尾高等学校の皆さん
ＳＧＨ課題研究必修科目「グローバルスタディⅠ」「グローバルスタディⅡ」の学びから発表します。

１年生 ＧＳⅠ （週1時間）	①　「水は子どもたちの命と未来を守る」 4組　宮﨑あずさ	9:30-9:40
	②　「少年法は改正すべきか」 5組　武者若奈	9:40-9:50
	③　「地域過疎と上田」　◆最優秀賞 6組　柳澤聖二	9:50-10:00
	④　「農業者の減少、高齢化を防ぐにはどうすべきか」 8組　町田多朗	10:00-10:10
２年生 ＧＳⅡ （週2時間） 日本語 （週1時間） 英　語 （週1時間）	⑤　「ワーケーション～work + vacation～」 山岡凜，宮﨑彩夏，出村康貴，橋場蒼　石川県立七尾高等学校２年	10:15-10:25 招待高校
	⑥　「幸せを与えるボランティア～夏休みのフィリピン支援体験～ ◆最優秀賞 8組　津久井優奈	10:25-10:40 自主活動
	⑦　「台湾研修旅行報告」 5組　新井玲奈，上原澪，舟木乃彩	10:40-10:50
	⑧　「Who am I?」 6組　菱田真歩	10:55-11:05 使用言語：英語

11:05-11:25　休憩

11:25-12:30　プレゼンテーション②　※評価表を記入して下さい。
「ＳＧＨ学びの報告書」から「大学の学びの計画書そして未来」　「21世紀型スキルを養う探究的学び」

３年生 ＧＳⅢ（増1単位）	①　「SGHの学び→大学」 林　美里　3年4組	11:25-11:35
大学生	②　「視点を始点へ～見えること・見ようとすること～」 成田　明　信州大学繊維学部　（本校卒業生）	11:35-11:45
	③　「SGHで見つけた自分」 南澤諒真　筑波大学人間学類　（本校卒業生）	11:45-11:55
	④　「伝え方のすゝめ」 望月啓太郎　慶応義塾大学経済学部　（本校卒業生）	11:55-12:05
教職員	⑤　「スポーツにおけるメンタル」 細田甚也　上田高等学校理科	12:05-12:15
12:15-12:25	講評　蓮見純平　佐久医療センター	諸連絡
12:30-	移動	

長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会（午後）

Ｂグループ　４組 ５組 ６組 ８組

担当 2年　塩澤 山田 中澤 甲田
担当 1年　小坂 横山 桐山 藤沢

12:30-13:30　昼食　※一部を除いて椅子はありません。各自シート等を持参して下さい。

P	国際・人権	1階展示室	R	保健・環境	3階大会議室
Q	文化・地域・ビジネス	2階第1会議室	S	技術	2階第2第3会議室

13-30--13:40 準備

13:40-15:40　２年ポスターセッション　グローバルスタディⅡ　担当 小林まゆ子　西村晃洋

13:40-13:50　開会・方式説明　２年全員ポスターセッション４班（①②③④）実施

評価表は各自持参　ポスター掲示→説明15分→ポスター取替５分

１年2年は聞き役　全員評価表記入

P　国際・人権　10 ～ 11

説明時間　各15分

①グループ	13:50-14:05	11
②グループ	14:10-14:25	11
③グループ	14:30-14:45	10
④グループ	14:50-15:05	10

※クラス毎でない場合あります。

１Ｆ 展示室　２年 42 人　１年 30 人

講　師　櫻井敦　本校地歴公民科教諭

講　師　山田杏奈　東京大学教育学部

◆最優秀賞：　4組　中村まうり　「『幸せ』とは？」

司会進行　2年8組　中村俊輔　宮下若奈

評価表　1年8組　山本日菜　日置海斗

Q　文化・地域・ビジネス　8 ～ 9

説明時間　各15分

①グループ	13:50-14:05	9
②グループ	14:10-14:25	9
③グループ	14:30-14:45	9
④グループ	14:50-15:05	8

※クラス毎でない場合あります。

２Ｆ 第１会議室　２年 35 人　１年 31 人

講　師　望月啓太郎　慶応義塾大学経済学部

講　師　林美里　３年４組

◆最優秀賞：　8組　丸山暖乃　「『住んでよし、訪れてよし』の街づくり」

司会進行　2年6組　堀内隼輔　宮澤涼平

評価表　1年4組　新井愛依　泉川晴香

R　保健・教育　10 ～ 11

説明時間　各15分

①グループ	13:50-14:05	11
②グループ	14:10-14:25	11
③グループ	14:30-14:45	10
④グループ	14:50-15:05	10

※クラス毎でない場合あります。

３Ｆ 大会議室　２年 42 人　１年 48 人

講　師　蓮見純平　佐久医療センター

講　師　南澤諒真　筑波大学人間学類

◆最優秀賞：　5組　青木優作　「新しい教育」

司会進行　2年5組　青木優作　山邉竣

評価表　1年6組　松井彩夏　吉見菜々香

S　技術・環境　10

説明時間　各15分

①グループ	13:50-14:05	10
②グループ	14:10-14:25	10
③グループ	14:30-14:45	10
④グループ	14:50-15:05	10

※クラス毎でない場合あります。

２Ｆ 第2･3会議室　２年 40 人　1年 50 人

講　師　松本俊一　本校理科教諭

講　師　成田明　信州大学繊維学部

◆最優秀賞：　5組　大森琉卯　「日本の木造建築の未来」

司会進行　2年4組　瀧澤亮太　塚田龍二

評価表　1年5組　飯島龍　成澤侑馬

15:10-15:20　評価表記入　評価表回収

15:20-15:40　講評・閉会式　講師講評　各会場にて

15:40-16:10　清掃・片付け

Ⅳ　研究発表　　長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会　生徒アンケート

1　ねらい

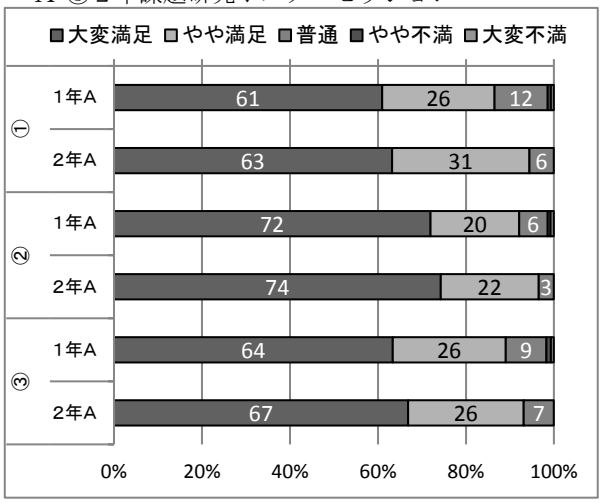
１年２年生全員参加のＳＧＨ報告会を、縦割りで各学年４クラスずつＡＢの２グループで実施した。
ＳＧＨ活動の集大成であるＧＳⅡ課題研究発表を２年生全員がカテゴリー別にポスターセッション形式で実施した。
また１年２年生は各クラス１グループの課題研究プレゼンテーションを実施した。

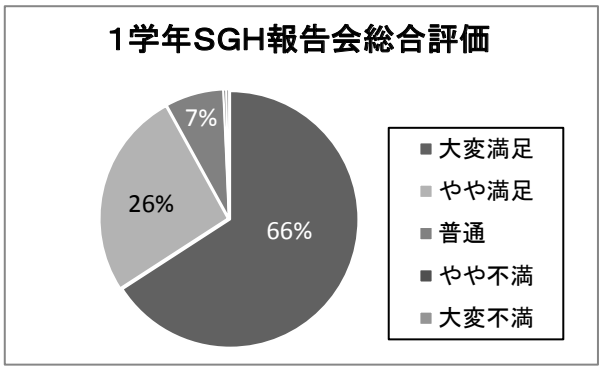
2　概　要

２月８日（土）　8時45分～16時40分　上田市文化センター・中央公民館
Ａ（１組、２組、３組、７組）　　Ｂ（４組、５組、６組、８組）　　２グループで開催
教育関係者（含ALT）30名、本校保護者45名、中学生２名、中学生保護者１名、一般15名の計93名が訪れた。

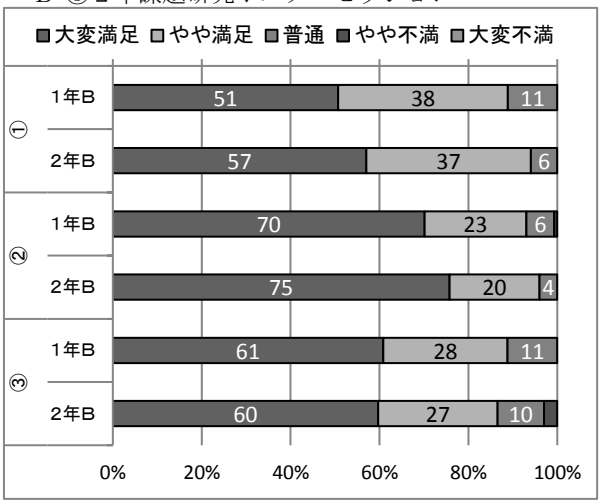
3　生徒アンケート

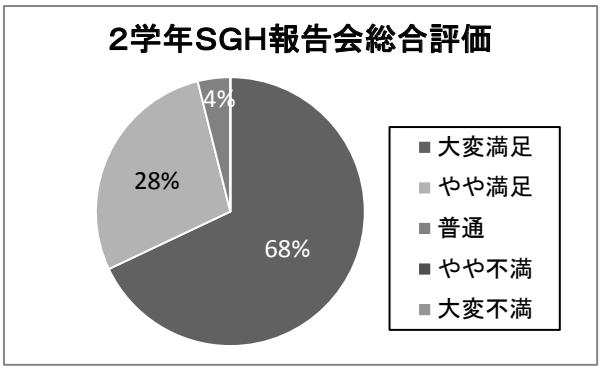
Ａ ①１年・２年プレゼンテーション
Ａ ②３年、大学生、教職員プレゼンテーション
Ａ ③２年課題研究ポスターセッション





Ｂ ①１年・２年プレゼンテーション
Ｂ ②３年、大学生、教職員プレゼンテーション
Ｂ ③２年課題研究ポスターセッション





総合的な感想

- 色々な人の考え方や行動の仕方を知ることができ、自分だけの意見ではなく、他の人の意見も取り入れることができるようになった。
- 自分の研究に関して、テーマの決め方や要点のまとめなど、参考にできるところがあった。
- 自分の課題研究でどのようにまとめていけばよいのか、どのような発表をすれば相手に自分の意見が伝わるのかが参考になった。
- 新しい視点で物事を見ることができ良かった。自分と研究が近い人の発表を見て参考になった。
- 自分の進路に活かせる点が多く、課題研究も更に気合を入れて取り組みたいと思った。
- 自分の意見を皆で言い合えてよかった。
- 自分のSGHの課題研究について見つめ直す機会があり有意義だった。
- 来年度の自分の姿を想像できた。これからの課題研究に活かせる会になったと思う。
- 他の人の発表を聞くという機会があるのは、自分の課題研究の参考にもなり、興味も広がってよかった。

4　評価と考察

プレゼンテーションに関しては､特に大学生や教員の発表を興味深く聞いている様子が窺える。
ポスターセッションに関しては､個人単位の研究ゆえに､ほぼ全員が積極的かつ興味を持って参加していた。とりわけ１年生は１年後の自分の姿をイメージしつつ、自らの課題研究を深めようとしていた。
他校のＡＬＴもポスターセッションの英語要約発表に指導の現場に加わり､指導の幅と厚みが増した。
総合評価を見ると、１，２年生ともに９割以上がかなりの満足感を持ったことが分かる。とりわけ２年生の「大変満足」の数字が前年度を８％上回った。

Ⅵ　研究発表　授業のＳＧＨ化（アクティブ・ラーニング）および教職員研修

１　ねらい

生徒の２１世紀型スキルを養成するため、主体的・能動的・対話的な授業を目指し、授業改善のための教職員研修を通年を通して行う。

２　実施活動

①　教職員研修

５月15日（水）および２月14日（金）に、進路学習指導部の主催で進路学習研研修会を実施した。５月は新指導要領に関して変更点や重点を文系・理系・実技系の教科グループで共有した。さらに、新しい大学入試に関わって試行テストや英語成績共有システムについて情報共有を行ったうえで、「新入試に対応するために何をどのように変えていくべきか」教科ごとに議論した。２月の研修会では、「教科横断型授業の可能性」について教科の枠を越えて検討しさまざまなアイディアが出された。機会を見つけて取り入れていきたい、との声が多く聞かれた。

②　互見授業活動と、互見授業強化週間の実施

例年のように、教職員が互いの授業を自由に参観しあう「互見授業」を通年で実施した。あわせて、６月下旬、11月中旬を強化旬間とし、この期間を中心に互見授業を行うことを呼びかけ、参観しやすくするために表示用の札を用意した。期間中には教員向けのニュースレターや情報共有ツールを活用し、授業の取組の様子を伝える取組を行った。また、各教科で行われる研究授業の際には、広く参加を呼びかけたことで、他教科からの参観者も多く見られた。

③　生徒による授業アンケートを用いた授業改善の実施

前期末および後期末に、生徒による授業アンケート（無記名）を実施した。生徒の声をもとに自分自身の授業を振り返り、改善する手立てとした。

④　先進的な取り組みを行う学校の視察

12月16日（月）に福井県立武生高等学校の視察に伺った。授業改善・学習指導・探究活動の取組について学び、職員会で報告し情報共有した。

⑤　学習支援の取組

台風19号の被害により登校不可能となった生徒たちに対する学習支援を検討した。学年ごとにgoogle driveを準備し、家庭でも教材にアクセスできることを可能にした。あわせて講義動画を配信した。予習・復習の素材として、より深い主体的・能動的な学びに活用が期待できるので今後も更に活用の方法を探っていきたい。

⑥　主体的な学び、思考力・判断力養成の取組

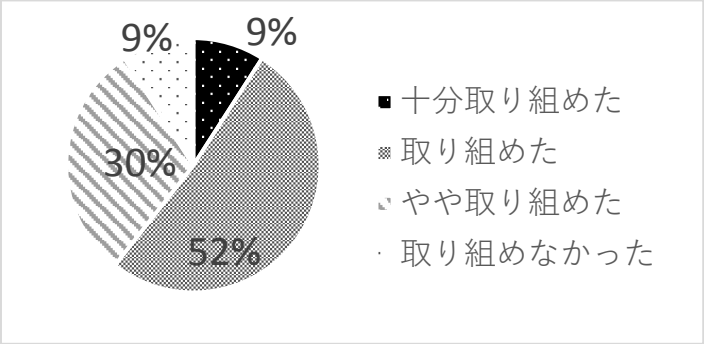
自ら課題を見つけて主体的に解決に取り組む姿勢をはぐくむべく、進路学習指導部通信を発行した。自ら校外の活動に取り組む生徒が多く見られた。テストにおいて思考力判断力を問う問題を出題。日頃から思考することを意識した授業への改善が図られている。

グループワークを取り入れた授業（英語）

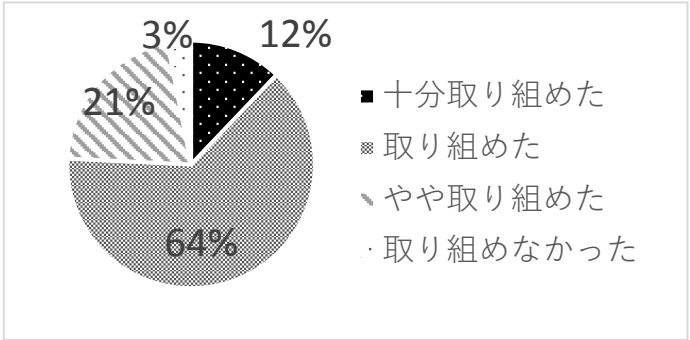
パワーポイントを用いての発表活動（GS）

3　教職員アンケート

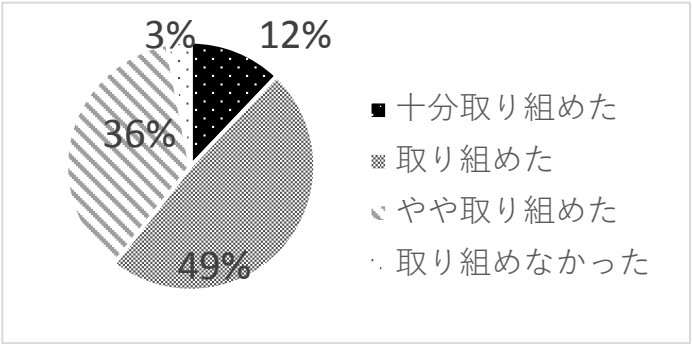
1. 互見授業を活用して授業改善に取り組めたか



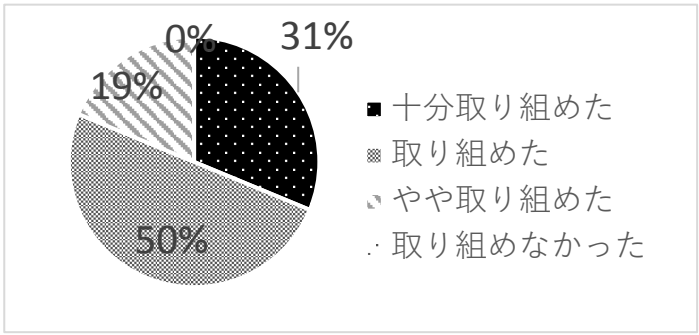
2. 生徒による授業アンケートの結果を活用して
授業改善に取り組めたか



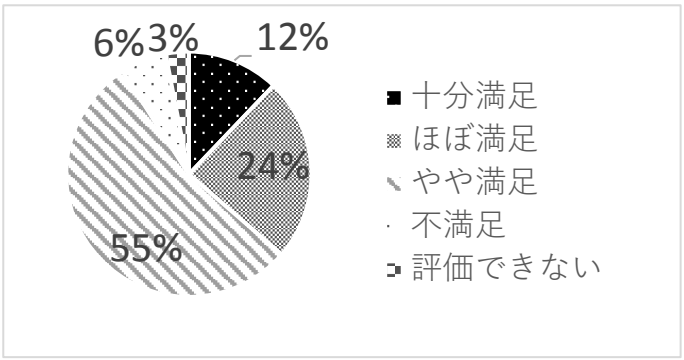
3. 進路研究会での教科を超えた議論を活用して
授業改善に取り組めたか



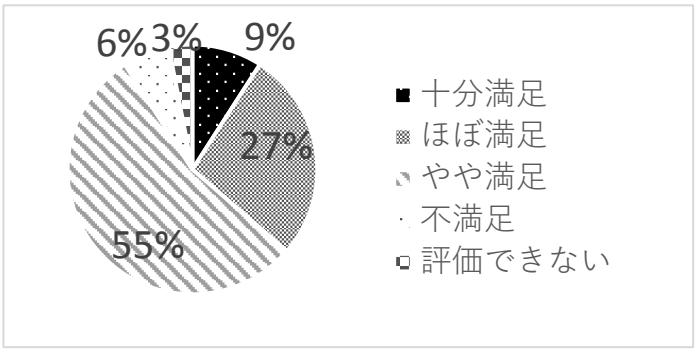
4. 知識技能だけでなく、思考力や判断力を問う考査を
作問・実施できたか



5. 授業改善に向けた取組を行うなどして、
「真の学力」（学力の三要素）を伸ばす
ことができたか



6. 豊かな感性・高い志を育むことができたか



4　評価と考察

職員アンケートの「１．互見授業を活用して授業改善に取り組めたか」「３．進路研究会での教科を超えた議論を活用して授業改善に取り組めたか」に対しては、昨年度「十分取り組めた」「取り組めた」を合わせてそれぞれ約３割、４割５分であったのが、本年度はいずれも６割になり、取組の定着がうかがわれる。「２．生徒による授業アンケートの結果を活用して授業改善に取り組めた」においては、「十分取り組めた」「取り組めた」と答える割合は昨年同様高く、授業アンケートを基にした個人での授業改善の取組についてはよく実施されている。また、「４．知識技能だけでなく、思考力や判断力を問う考査を作問・実施できたか」についても「十分取り組めた」「取り組めた」が81%で「取り組めなかった」は０であり、考査の問題に思考力を問う問題を出題することが定着してきたといえる。一方で「５．授業改善に向けた取組を行うなどして、『真の学力』を伸ばすことができたか」や「６．豊かな感性・高い志を育むことができたか」に対して、「十分満足」「ほぼ満足」と答えた職員の割合はともに36%である。昨年度の約６割、７割に比べると大きく割合がさがってしまった。個人によってとらえ方が難しい項目であり、来年以降、「真の学力」「豊かな感性・高い志」についての共通理解を深め、更に授業改善に取り組んでいきたい。日頃の授業の様子を見ても、多くの教員が授業改善に取り組み、その手ごたえを感じている様子である。電子黒板などのICTを巧みに活用して、講義の時間や板書の時間を省き、生み出した時間を用いて、生徒自身が考えたり、ペアワークやグループワークによって友人らと考えを深めていくといった授業が、よく見られる。また、教科の特性や、生徒の様子、教員の持ち味を活かして、さまざまな授業の展開を行っている教員が多い印象である。本年度の取り組みの成果と課題を踏まえ、引き続き、「授業改善」に向けて、校内全体で取り組んでいきたい。

Ⅴ　評価と考察

長野県上田高等学校ＳＧＨ評価考察

研究開発構想　**長寿県NAGANOから世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成**
～「長野モデル」からグローバルヘルスへ～　長野から世界へ健康長寿を発信しよう！

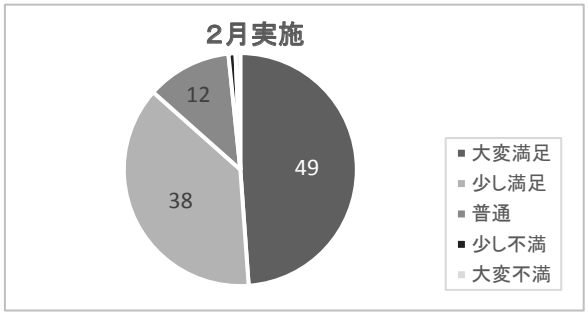
ＳＧＨカリキュラムにより生徒がどのように変容したかについて、定常的なアンケートによる調査を実施している。
ＧＰＳアカデミックにより３つの思考力を調査し、ＳＧＨ評価と考察について運営指導委員より助言をいただいている。

調査時期	１年生対象	２年生対象	３年生対象	教職員対象	保護者対象	運営指導委員
４月	アンケート	アンケート				
９月	アンケート	アンケート			アンケート	第１回助言
１２月	GPSアカデミック	GPSアカデミック	アンケート			第２回助言
２月	アンケート	アンケート		アンケート		第３回助言

１　年度末生徒アンケート　～ＳＧＨ行事の自己評価と事業評価～

①　自己評価　上田高校ＳＧＨ行事やカリキュラムを体験して、あなたは自分をどう評価しますか？

ａ　令和元年度　１学年　308名



ＳＧＨ４期生：１年終了時自己評価の「大変満足」は55%だったが、２年終了時（ｃ）には73%と大幅に増えた。

○２年生徒の意見

課題研究　自分の意見だけでなく、反対意見も考えて取り組めた。

海外研修　他国の人と英語でｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝがとれ自信につながった。

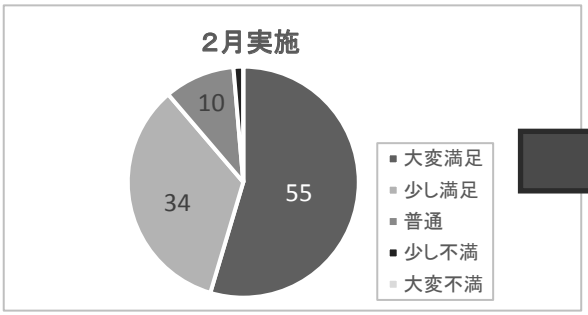
ＳＧＨ５期生：１年終了時の自己評価（ａ）は87%が満足。
ＳＧＨ４期生と比較して、満足度が若干下がった。

○１年生徒の意見

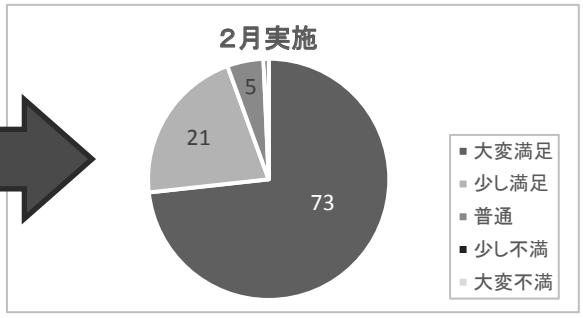
課題研究　物事に対して、自分の意見を持てるようになった。

海外研修　自国文化への理解が深まり、他国へも目を向けたい。

ｂ　平成30年度　１学年　306名

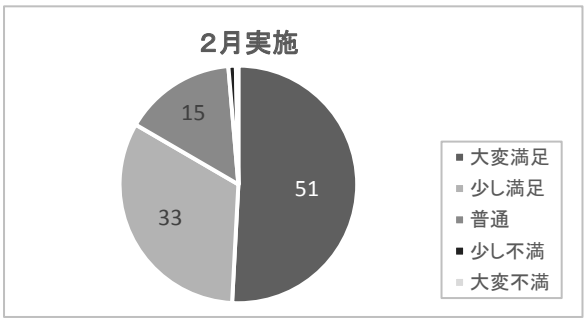


ｃ　令和元年度　２学年　292名



②　事業評価　あなたは上田高校ＳＧＨ行事をどう評価しますか？

ａ　令和元年度　１学年　308名



ＳＧＨ４期生の１年終了時自己評価（ｂ）は87%が満足であった。
２年終了時（ｃ）には、とりわけ「大変満足」が大幅に増えた。

○２年生徒の意見

課題研究　自分で課題を見つけ、解決策を提案し考えを深め、共有できた。

海外研修　自ら世界の問題にも目を向けたいと思うようになった。

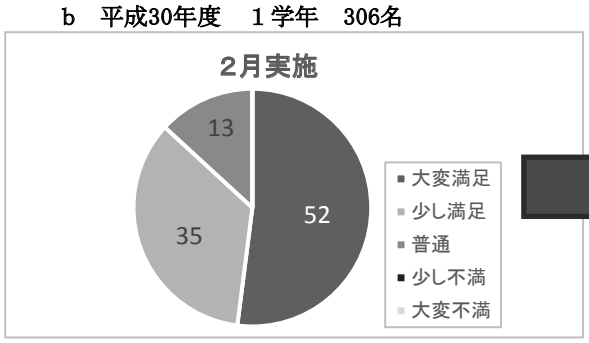
ＳＧＨ５期生の１年終了時の自己評価（ａ）は84%が満足。

○１年生徒の意見

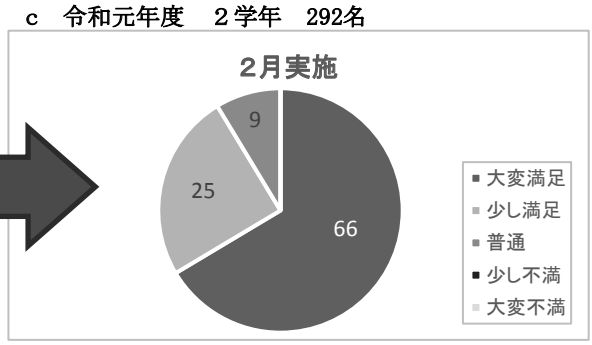
課題研究　課題研究を通して自分の考えていたことが具体化した。

海外研修　英語の判断力や理解力を向上するきっかけとなった。

ｂ　平成30年度　１学年　306名



ｃ　令和元年度　２学年　292名

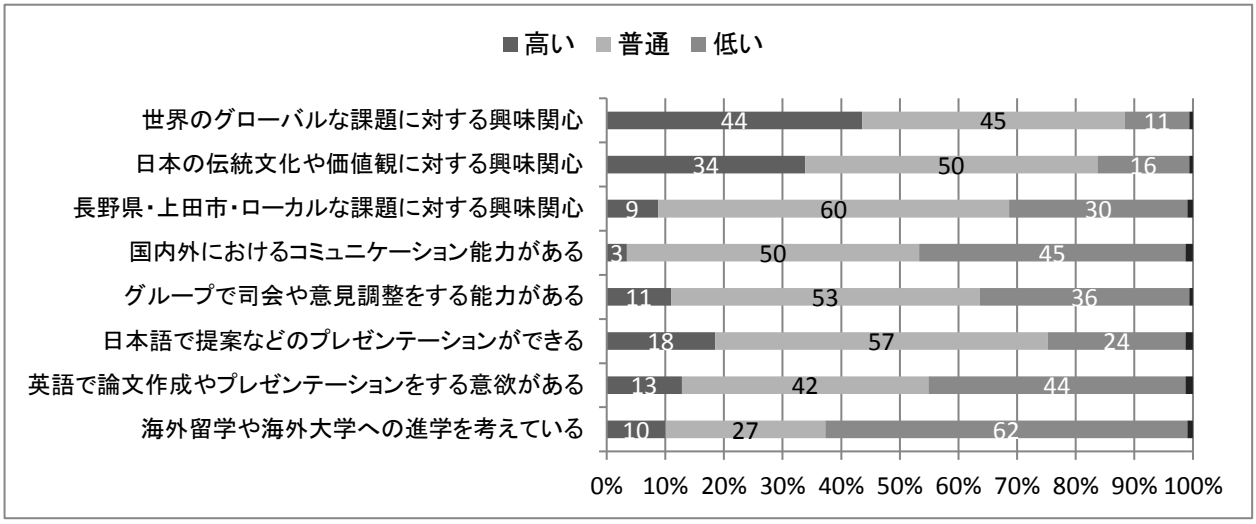


Ⅴ　評価と考察　　ＳＧＨに関する１学年生徒アンケート

２．ＳＧＨ５期生（１年）の４月と９月の比較　　生徒の自己評価　　生徒数３２０名

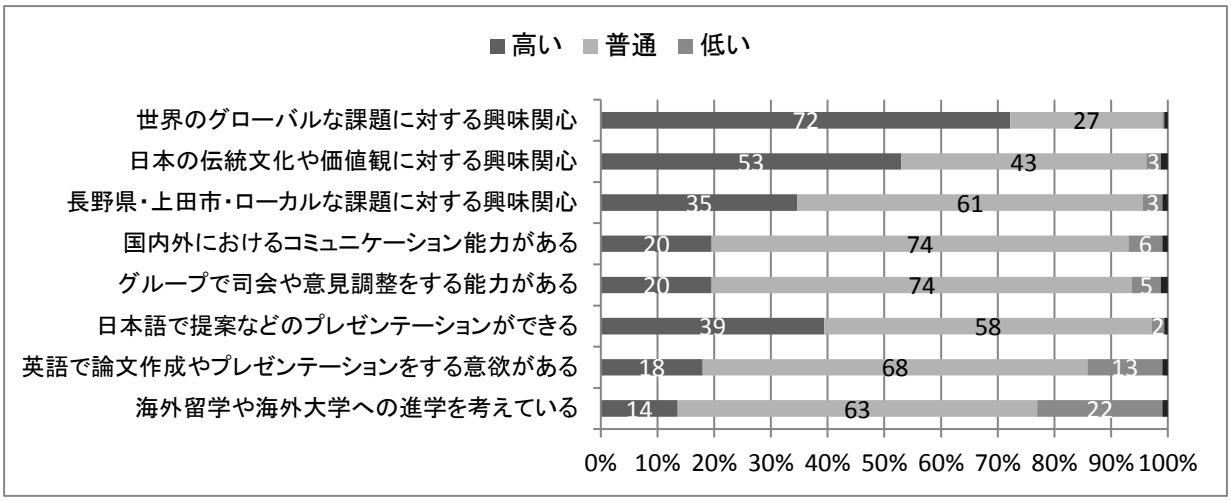
①　４月実施　　グローバルスタディⅠ授業の最初の時間

ａ　興味関心　あなたの興味関心の高い分野は？

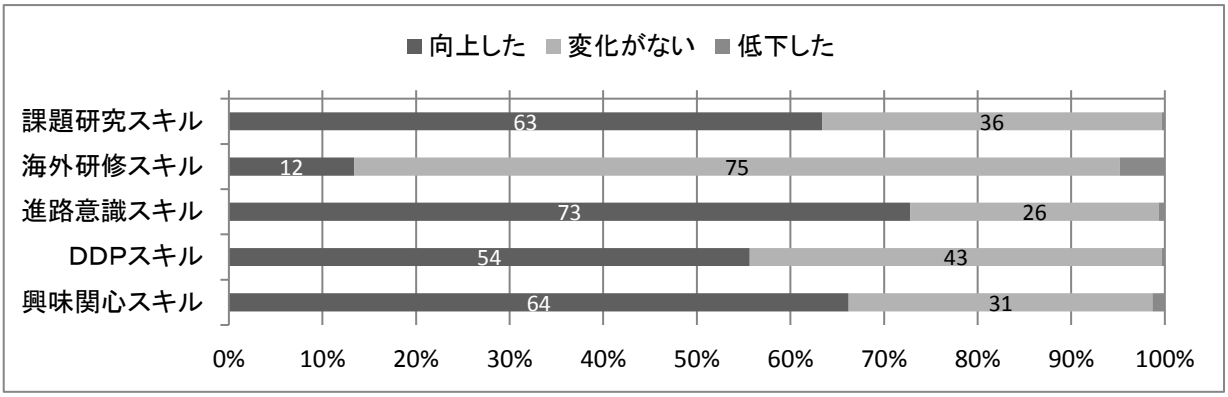


②　９月実施　　県内フィールドワーク直後

ａ　興味関心　あなたの興味関心はどれですか？



ｂ　入学してから本日までＳＧＨに関連したスキルは向上しましたか？



③　評価と考察

アンケートの実施は県内フィールドワーク終了直後のグループ別事後学習の時期である。

ＳＧＨカリキュラムを経て「世界のグローバル課題に対する興味関心」が44%から72%へと、大幅に伸びた。日本語プレゼンテーション力が18%から39%へとほぼ倍増した。全クラスでプレゼンテーション学習に取り組んだ成果だと思われる。

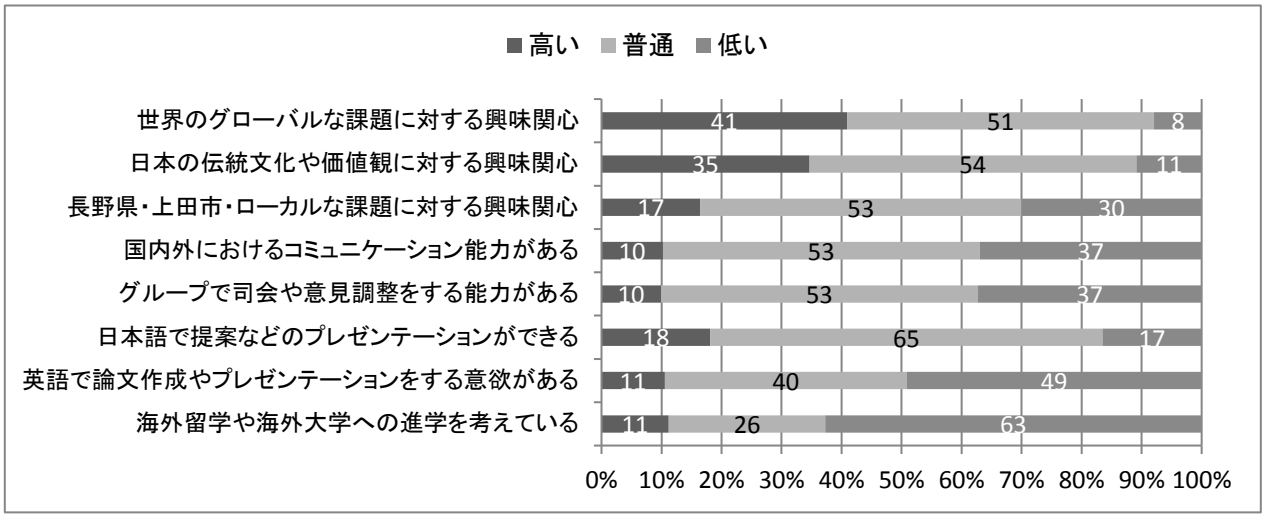
授業で何事にも問題意識を持って取り組むことを強調するなかで「興味関心スキル」の向上を実感する生徒が昨年より倍増した。

Ⅴ　評価と考察　　ＳＧＨに関する２学年生徒アンケート

３．ＳＧＨ４期生（２年）の４月と９月の比較　　生徒の自己評価　　生徒数３２０名

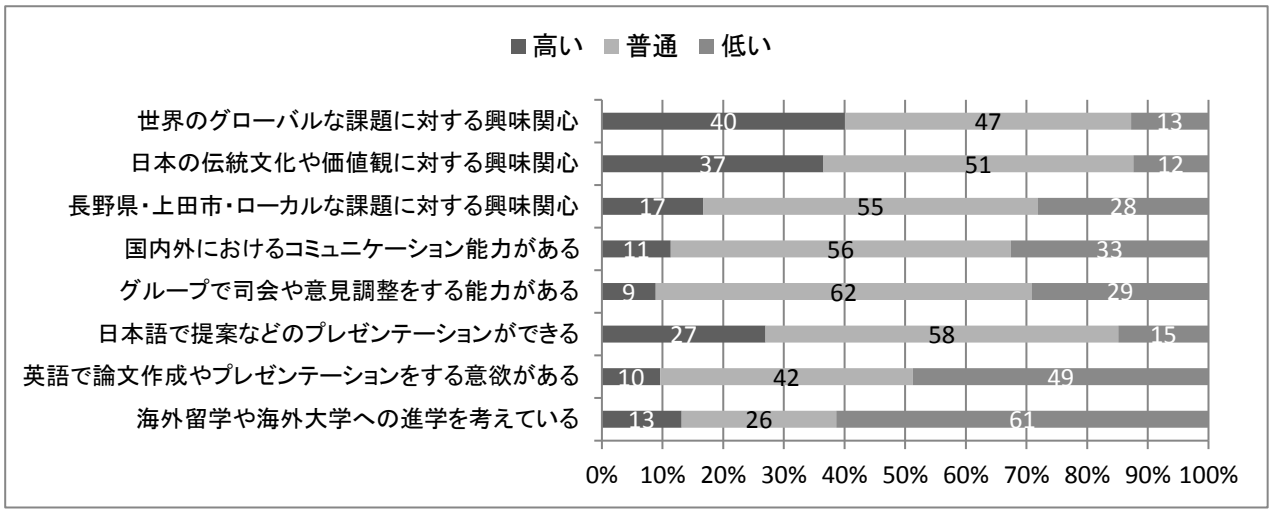
①　４月実施　　グローバルスタディⅡ授業の最初の時間

ａ　興味関心　あなたの興味関心の高い分野は？

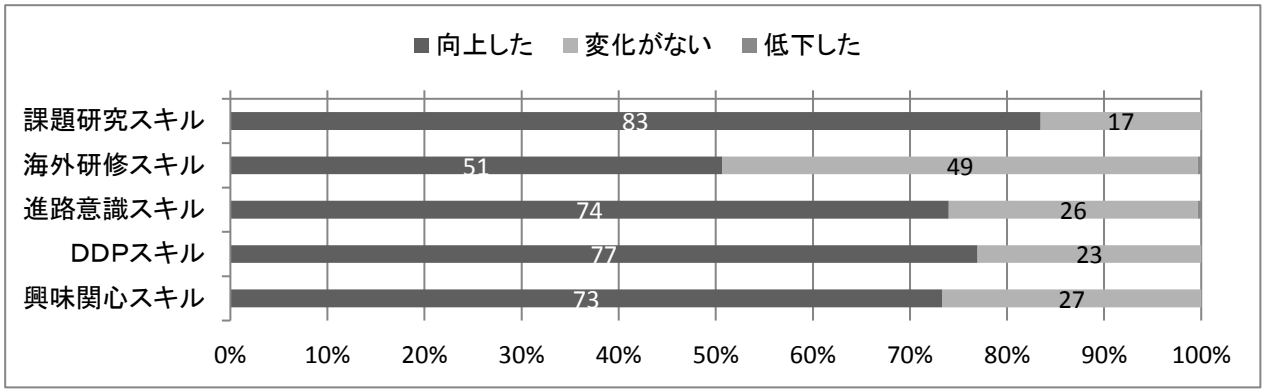


②　９月実施　　首都圏フィールドワーク直後

ａ　興味関心　あなたの興味関心はどれですか？



ｂ　４月から本日までＳＧＨに関連したスキルは向上しましたか？



③ 評価と考察

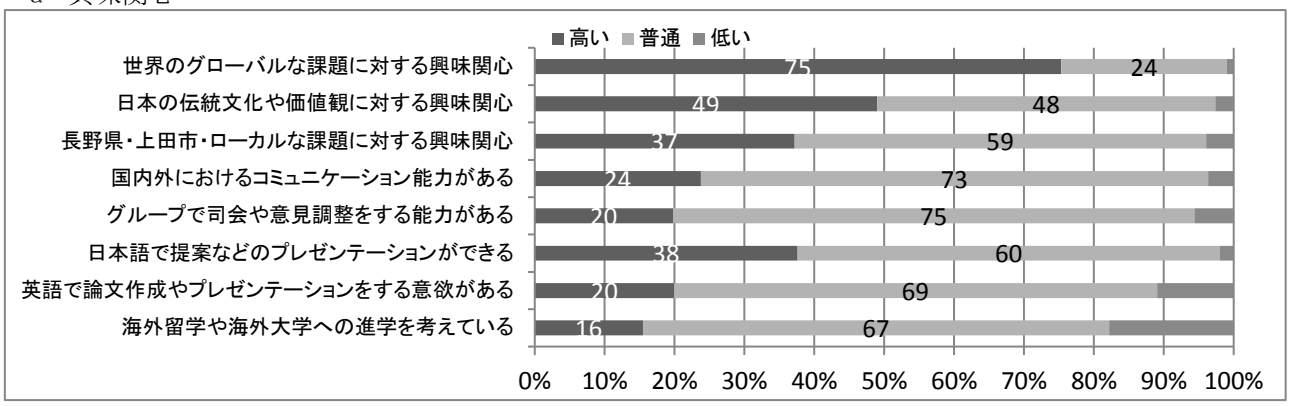
アンケートの実施は課題研究論文終了後の、首都圏フィールドワーク終了直後の時期である。
ＳＧＨカリキュラムも２年目となり、１年生のような劇的な興味関心に関する変化は起きていない。
しかし５つのスキルに関する向上をする実感は、１年生より高い。
そして５つのスキルとも、半数以上の生徒が向上を実感している。
首都圏フィールドワーク事前事後学習のせいか、日本語提案プレゼンテーション能力の向上を自覚する生徒が増えた。

Ⅴ　評価と考察　　ＳＧＨに関する１年間の意識の変化

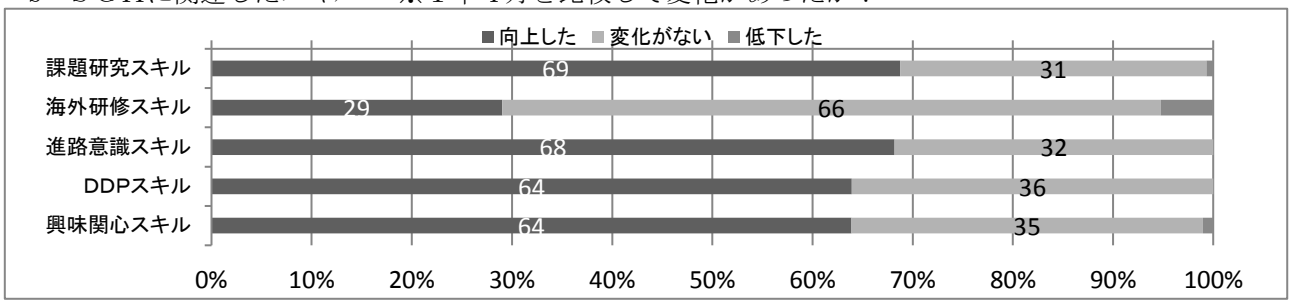
ＳＧＨ５期生（令和元年度入学，１年生）とＳＧＨ４期生（平成３０年度入学，２年生）

①　１学年アンケート調査　　回答生徒数306人

a　興味関心

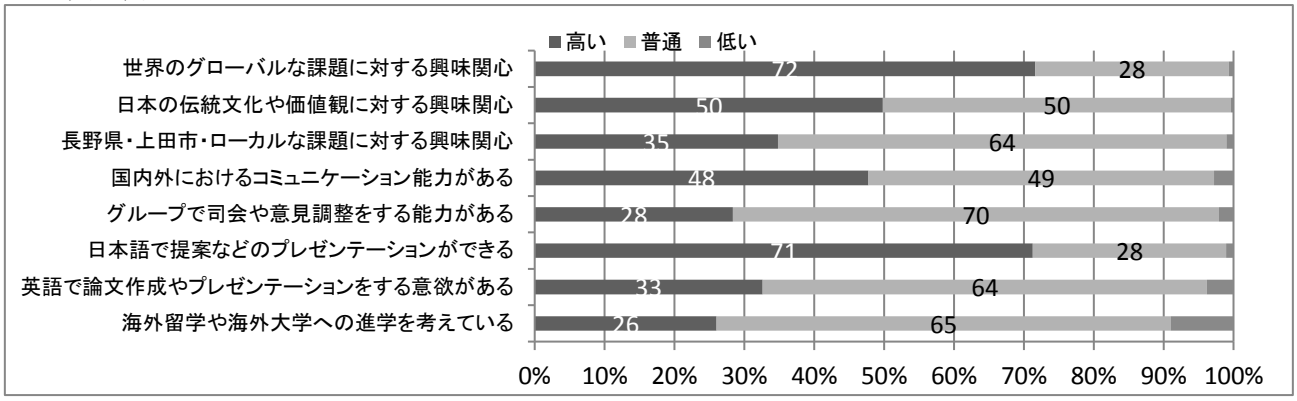


b　ＳＧＨに関連したスキル　※１年４月と比較して変化があったか？

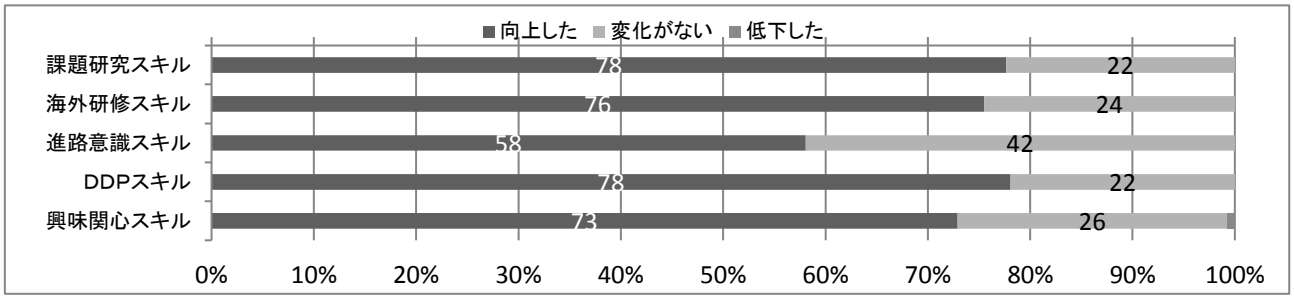


②　２学年　アンケート調査　　回答生徒数289人

a　興味関心



b　ＳＧＨに関連したスキル　※２年４月と比較して変化があったか？



③　評価と考察

１年：入学以来「世界のグローバル課題に対する興味関心」が30%以上伸びたほか、日本語プレゼンの自信も高まった。

１年：海外研修スキルの伸びの実感度が低いのは、今年度台湾高校生との交流機会が少なかったせいではないか。

２年：「興味関心」の全ての項目で４月より数値が高まった。

２年：全員がポスターセッションを実施したことで、日本語や英語のプレゼンテーションに関する関心が高まっている。

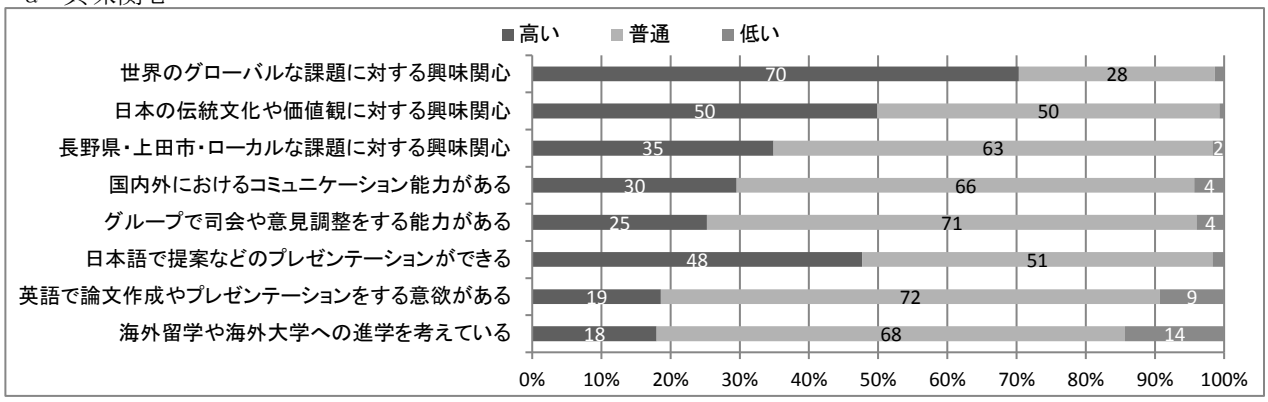
２年：全員で取り組む台湾研修旅行やSGH報告会ポスターセッションを経て、全分野で向上感を実感している。

Ⅴ　評価と考察　　ＳＧＨ４期生の意識の変容

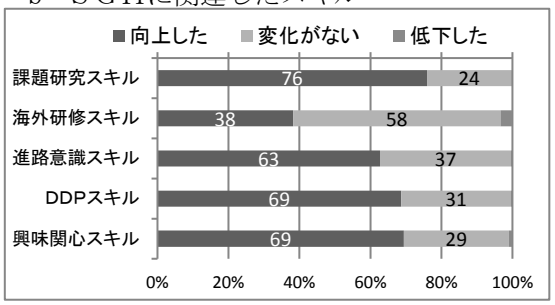
ＳＧＨ４期生（平成３０年度入学，２年生）の１年次，２年次の比較

①　１年次（平成31年2月実施アンケート）　　生徒数305人

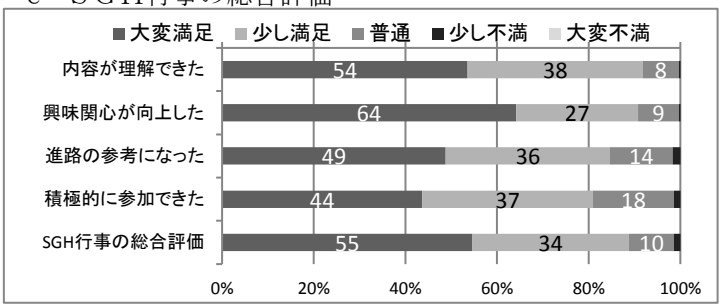
a　興味関心



b　ＳＧＨに関連したスキル

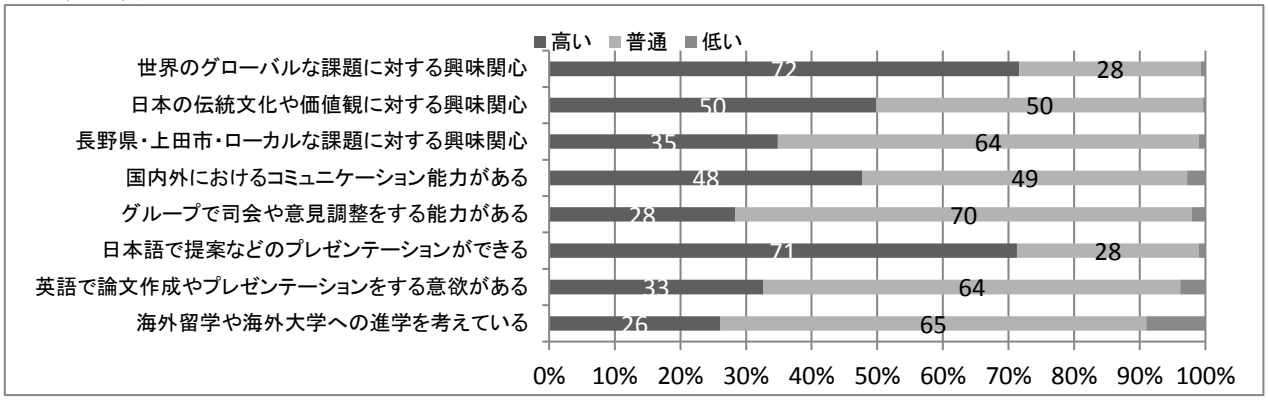


c　ＳＧＨ行事の総合評価

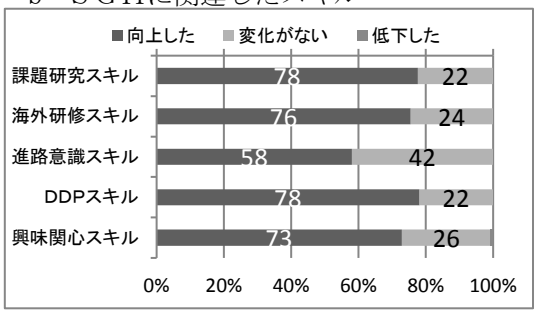


②　２年次（令和2年2月アンケート調査）　　回答生徒数289人

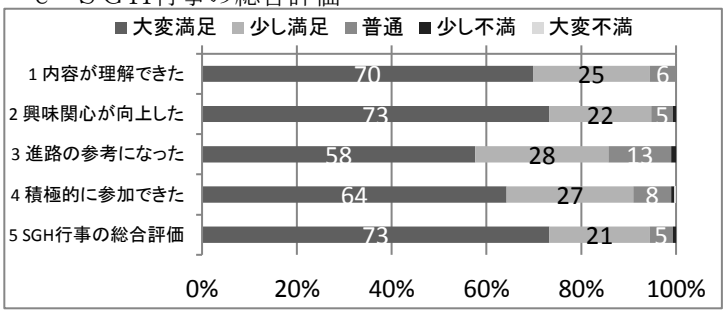
a　興味関心



b　ＳＧＨに関連したスキル



c　ＳＧＨ行事の総合評価



③　評価と考察

1年次2年次の興味関心の数値は比較的類似している。ただし日本語プレゼンや英語での論文、プレゼン意欲が１年前に比べて大きく伸びていて、成長を実感している。海外留学意欲も大幅に高まった。

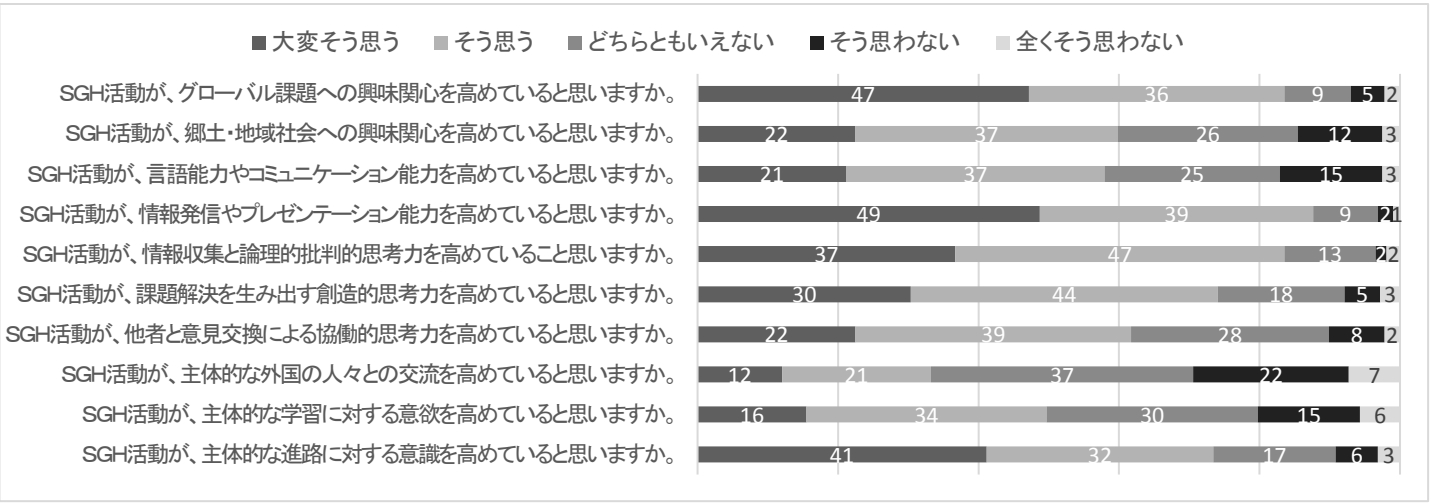
１年次に比べ、２年次で海外研修スキルの向上を実感する生徒が倍増した。台湾研修旅行の影響と思われる。

２年次にＤＤＰスキルの向上を実感した生徒が１年次より９％増加した。ＳＧＨ報告会の影響が考えられる。

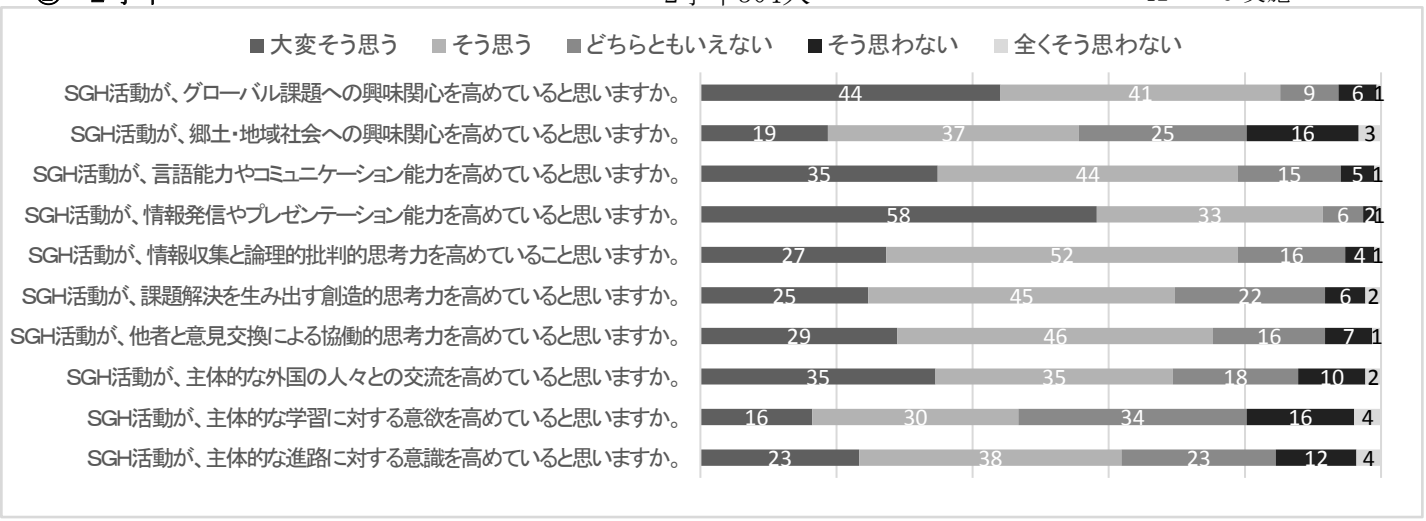
ＳＧＨ行事の評価に関しては、全般に評価が高く、9～20%向上した。

Ⅴ　評価と考察　　ＳＧＨ活動がどのような能力を高めているか？

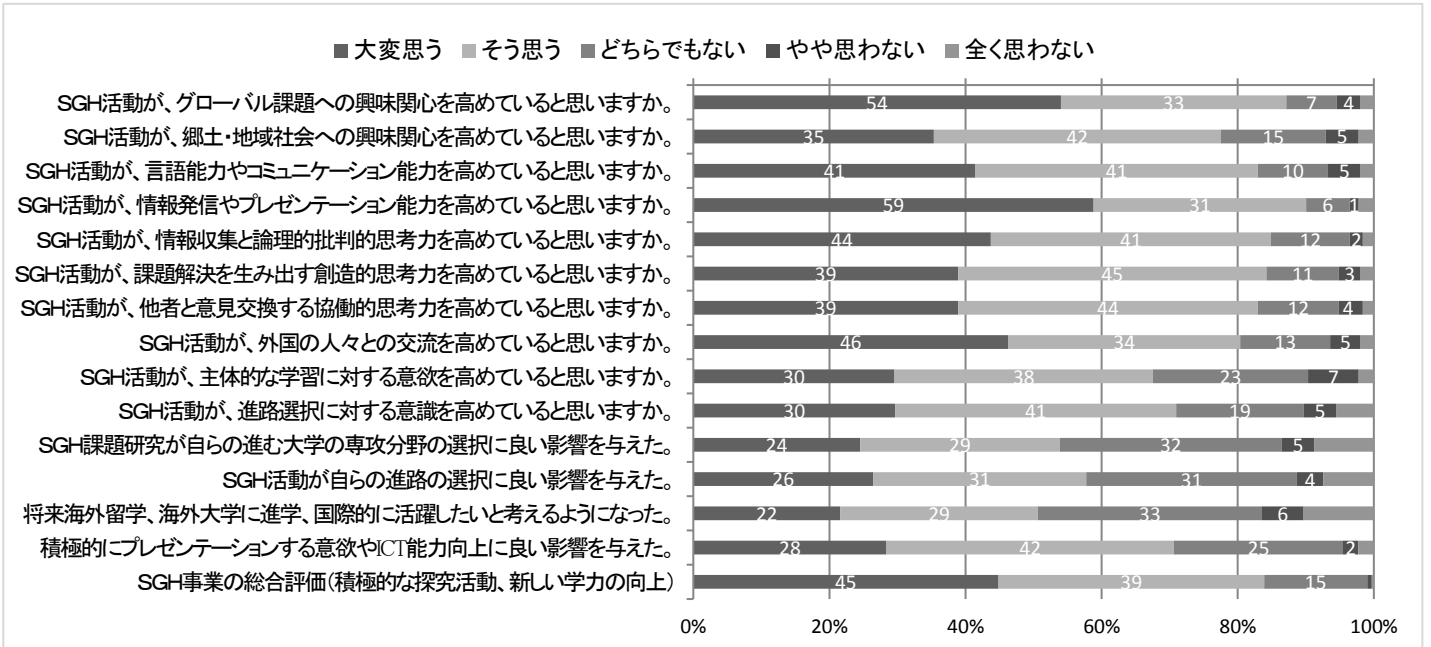
①　１学年　　1学年316人　　12　　6 実施



②　２学年　　2学年304人　　12　　6 実施



③　３学年　　3学年311人　　12　　19 実施



考察　全般的に、質問に対する肯定的な評価が、学年の上昇にしたがって高くなる傾向が見られる。

昨年度のGPS-Academicテストにおいて、１、２学年とも協働的思考力の低さが表面化し、それがこの調査にも表れていたが、今年度は少なくとも２年、３年においてはその項目が突出することはなく、GPS-Academicテストの結果とも一致した。３学年の諸数値は、概ね全ての項目で「大変そう思う」「そう思う」の合計値が過去最高レベルに達している。進路指導との連携が、１つの課題ではあったが、全般的には良い傾向に流れている。

Ⅴ　評価と考察　　ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテストによる学力評価

ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテスト　　2019年　12月 実施　　１年２年問題共通

○社会で必要な３つの思考力　　受験者　２年　307 人

1 批判的思考力　　2 協働的思考力　　3 創造的思考力　　受験者　１年　316 人

○問題解決のプロセス

課題の設定→　情報の収集→　整理・分析→　まとめ・表現→　振り返り・考えの更新

考察 本年、昨年のＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテスト数値を比較して考察した。
両学年とも学年の平均で見ると批判的思考力がB、協働的思考力がB、創造的思考力がAで、昨年と同様だった。
両学年とも前年の学年に比べて協働的思考力のBランク層が薄くなり、Aランク層が厚くなった。
しかし、両学年とも３つの力の中では協働的思考力のAランク層が若干薄く、今後の課題といえる。

①　思考力テスト度数分布と到達度

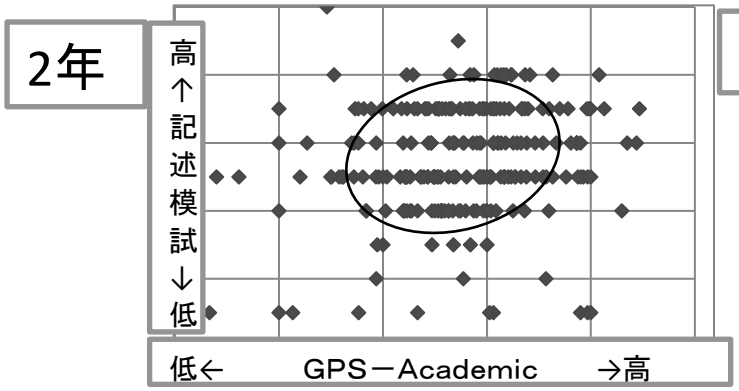
現２年　度数分布	A　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	45	52	2	1
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	0	38	52	8	1
創造的思考力	問題発見・問題解決力	2	53	40	4	0
現２年昨年１年度数分布	B　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	2	42	53	3	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	1	17	73	10	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	3	51	45	1	0
現２年昨１年比較	A－B　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	−2	3	−1	−1	1
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	−1	21	−21	−2	1
創造的思考力	問題発見・問題解決力	−1	2	−5	3	0

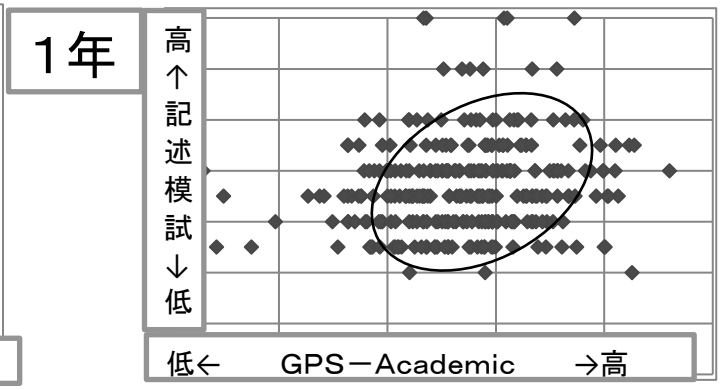
現１年　度数分布	C　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	44	56	1	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	0	41	55	4	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	1	55	43	2	0
現１年昨１年比較	C－B　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	−2	2	3	−2	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	−1	24	−18	−6	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	−2	4	−2	1	0

思考力テスト結果	学年全体の到達度　　Ｓは目標
批判的思考力	S→ 目的に応じてすべての情報を抽出し活用し、納得感のある主張を提示できる。
B　情報抽出吟味	やや抽象的な設定の資料から適切な指示に従って情報を抽出し活用できる
B　論理構成力	明確な主張回答がある
協働的思考力	S→ 多様な考え方で、相互にアイデアを提供し、解決の主体者になろうとしている。
B　他者理解	相互のアイデアを提供または共有しようとし、その違いを受け入れることができる。
C　協働的社会参画	提示された問題の解決を実行している人々を支援する意志がみられる
創造的思考力	S→ 資料と既有知識を結びつけ、実現可能性の高い独創性のある解決策を提案できる。
B　情報発見	与えられた資料と他の事例との相似性関連性を見いだし、他の事例に転用できる。
B　問題解決	提示された範囲で、問題解決のための条件を満たした解決策を提案できる。

②　ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ・記述模試相関表　　教科学力（英語数学国語）１２月実施

考察 ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃスキルと教科学力はほぼ相関する。２年で教科学力とＧＰＳスキル値がいずれか片方に偏る生徒が目立つが、これは１年次から続く傾向である。
１年では、記述模試の低位層が少ない分、中心部への凝集度合いが高い。





③　思考力の自己評価×課題研究プロセス相関表

考察　問題解決プロセスでは、1年、2年とも情報収集能力の自己評価が高い。特に協働的思考力において顕著である。
２年の昨年１年次との比較では、整理・分析・まとめ・表現において値が上昇し、成長を実感している。
２年次には課題研究のまとめやポスターの作成があり、こうした探究活動に取り組んだ結果と考えられる。

問題解決プロセス別

現２年　　A	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	3.3	3.5	3.5	3.3	3.4	3.4
協働的思考力	3.5	3.8	3.6	3.4	3.6	3.6
創造的思考力	3.3	3.5	3.3	3.3	3.2	3.3
プロセス平均値	3.4	3.6	3.5	3.3	3.4	
現２年昨１年　　B	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	3.1	3.4	3.3	3	3.3	3.2
協働的思考力	3.4	3.7	3.4	3.3	3.5	3.5
創造的思考力	3.2	3.3	3	3.1	3.1	3.1
プロセス平均値	3.2	3.5	3.3	3.1	3.3	
現２年昨１年比較A-B	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	0.2	0.1	0.2	0.3	0.1	0.2
協働的思考力	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1
創造的思考力	0.1	0.2	0.3	0.2	0.1	0.2
プロセス平均値	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	

現１年　　C	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	3.1	3.4	3.4	3.1	3.2	3.2
協働的思考力	3.3	3.7	3.4	3.2	3.5	3.4
創造的思考力	3.1	3.3	3.1	3.1	3.1	3.2
プロセス平均値	3.2	3.5	3.3	3.1	3.3	
現１年昨１年比較C-B	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	0.0	0.0	0.1	0.1	-0.1	0.0
協働的思考力	-0.1	0.0	0.0	-0.1	0.0	-0.1
創造的思考力	-0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1
プロセス平均値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

④　テスト結果×自己評価相関表

考察　現２年の昨１年次との比較では、協働的思考力、創造的思考力の上位割合が伸びたが、前者に関する自己評価の低い生徒が意外にいる。２年１年比較では、３つの能力とも学年間で大きな差はないが、２年生の自己評価が高い傾向がある。

P

自己評価	現２年　批判的思考力		現２年　協働的思考力		現２年　創造的思考力	
5	77	62	112	59	55	71
4	25%	20%	37%	19%	18%	23%
3	98	77	76	59	80	100
2	29%	25%	25%	19%	26%	33%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

Q

自己評価	現２年昨１年　批判的思考力		現２年昨１年　協働的思考力		現２年昨１年　創造的思考力	
5	51	65	126	33	40	57
4	16%	21%	40%	11%	13%	18%
3	124	73	133	21	105	111
2	40%	23%	42%	7%	34%	35%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

P-Q

自己評価	現２年　批判的思考力		現２年　協働的思考力		現２年　創造的思考力	
5	26	-3	-14	26	15	14
4	9%	-1%	-3%	8%	5%	5%
3	-26	4	-57	38	-25	-11
2	-11%	2%	-17%	12%	-8%	-2%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

１年

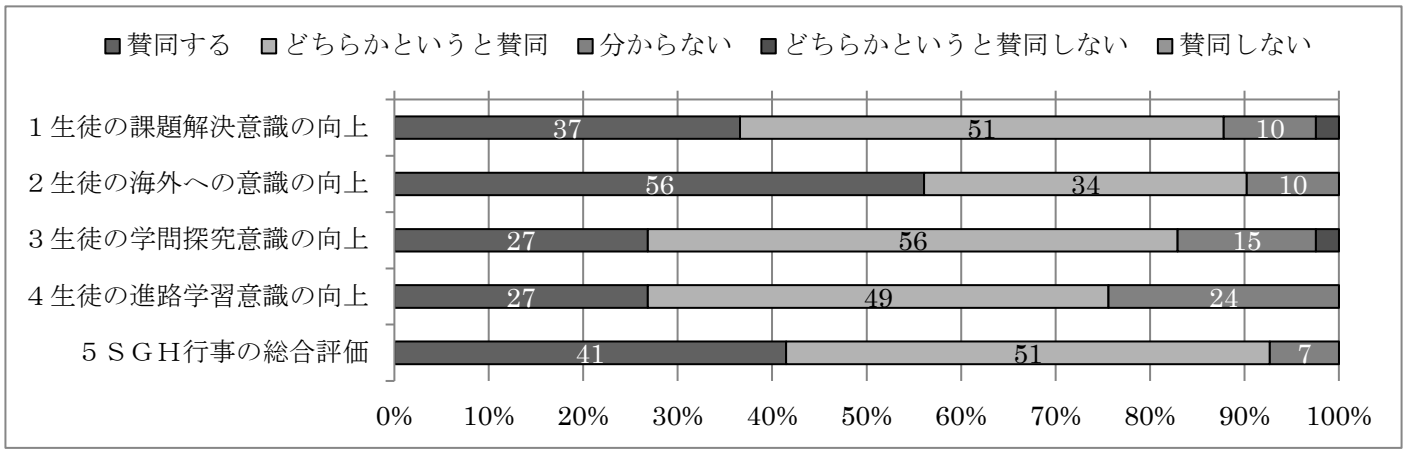
自己評価	現１年　批判的思考力		現１年　協働的思考力		現１年　創造的思考力	
5	56	47	89	61	43	56
4	18%	15%	28%	19%	14%	18%
3	122	91	98	68	98	119
2	39%	29%	31%	22%	31%	38%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

思考力テスト　　思考力テスト　　思考力テスト

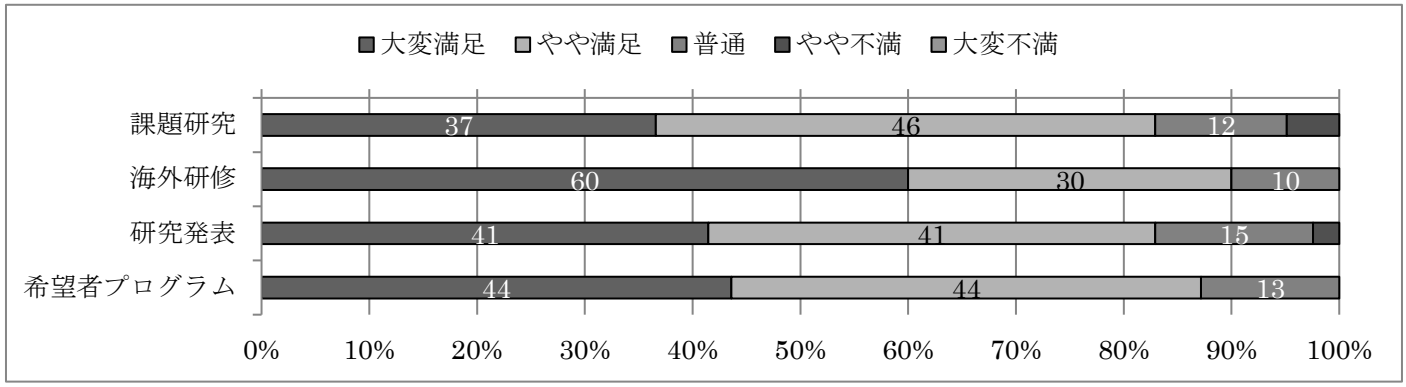
Ⅴ　評価と考察　　ＳＧＨに関する教職員アンケート

令和２年２月 12 日（水）実施

＜総合評価　ＳＧＨ活動により、上田高校生の成長がみられたか？＞

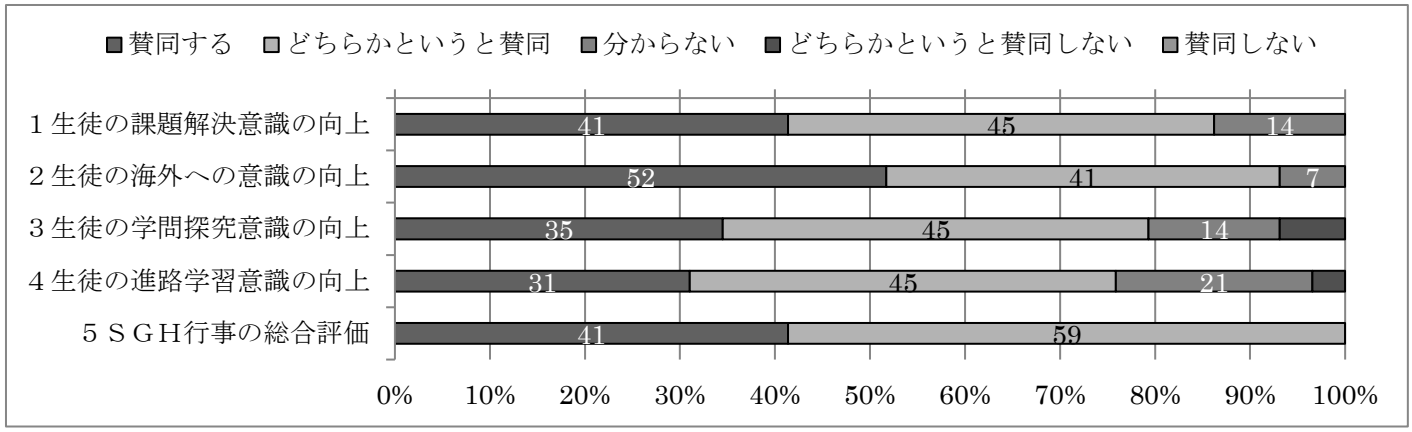


＜ＳＧＨ活動に対する教員の分野別満足度＞

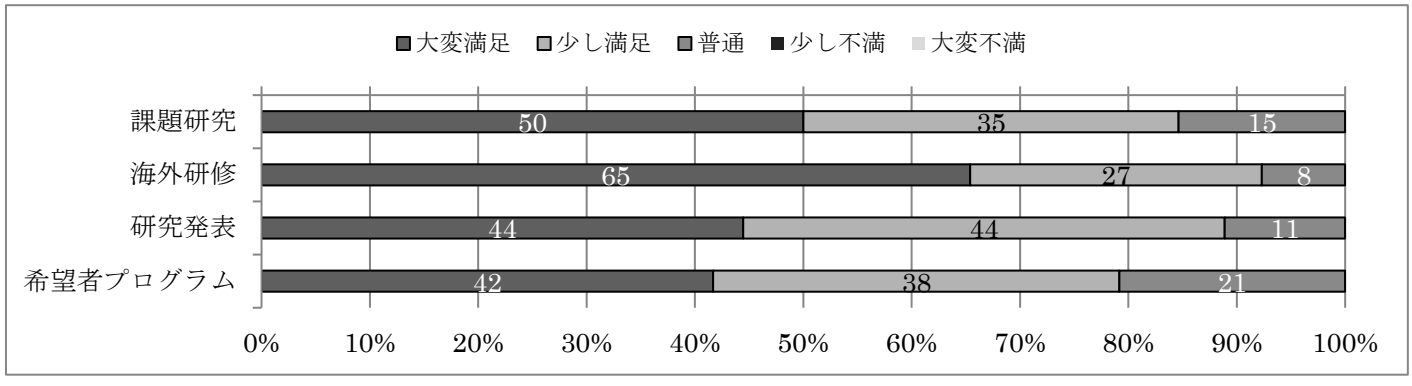


平成 31 年２月 13 日（水）実施

＜総合評価　ＳＧＨ活動により、上田高校生の成長がみられたか？＞



＜ＳＧＨ活動に対する教員の分野別満足度＞



A 課 題 研 究

○良かった点	◇改善点・アドバイス
・ＧＳⅠ，Ⅱにおいて、職員全員による課題研究指導体制が確立した。 ・生徒が興味・関心を深めるきっかけになった。 ・学年全体で全員の生徒がそれぞれの課題研究に取り組めたことが良かった。 ・生徒自身が自らの目的意識を持って課題に取り組んでいる。 ・一人一研究で、多くの生徒の社会への関心が高まった。 ・フィールドワーク等で、進路選択の良いきっかけが作れた生徒が複数いた。 ・首都圏フィールドワークは、生徒の興味関心が深まった。 ・最先端の研究について話を聞く機会は、学ぶことの楽しさに気づくと思う。 ・GSⅡEは、英語をツールに様々なことを学べるので良い。 ・興味があることを探究する姿勢が育った。	・GSⅠの課題研究の時間をもう少し増やしたい。 ・課題研究指導の生徒の数が多く、一人に対して指導できる機会が限られていた。 ・情報収集がネット頼りの生徒がしばしばいる。ネット情報は正しいとは限らないため、裏付けが必要。自身の“信じたい”情報を鵜呑みにし過ぎる。 ・浅い理解にとどまり、自分の考えを深めるまでに至っていない生徒がまだ散見される。

B 海 外 研 修

○良かった点	◇改善点・アドバイス
・グローバルシチズンシップの涵養に大いに貢献できた。 ・台湾研修旅行は、他国に友人ができるという貴重な経験なので良いと思う。 ・国際貢献活動への関心が高まったこと。 ・同じ世代の異なる文化を持つ生徒たちと交流し、視野が広がった。 ・フィリピンスタディツアーは、推薦入試やAO入試で評価された。 ・台湾の高校生との交流では、英語でのコミュニケーションなど、日本であまりできていない生徒も参加できていて良かった。 ・外国の問題にも関心が広がった。スタディツアー後、それぞれの生徒が自分の課題を見つめ、自発的に活動している。	・もう少し英語のコミュニケーション能力を高めることはできないか。 ・台湾研修旅行の事前学習の時間をどのようにするか検討が必要。 ・台湾の交流校との事前の生徒同士のやりとりがもっとほしかった。 ・交流相手の地域について、もう少し事前に知っておくことが必要ではないか。

C 研 究 発 表

○良かった点	◇改善点・アドバイス
・一人ひとりが発表できる機会があることは良いと思う。 ・各種プレゼンを経験することにより、人前で話しをすることに抵抗がなくなった。 ・人前で理路整然と発表ができる生徒が増えた。 ・ポスターセッションに慣れた。 ・ポスターセッションでは、皆一所懸命自らの考えや想いを伝えようとしていた。聞く側もよく質問していて良い。 ・松尾ゼミナールの蓮見先生の講演は、進路や生き方の参考になったと思う。	・ＳＧＨ報告会では聞ける発表が限られてしまい、残念がる生徒も多かった様子。 ・協働力は何人かで発表に取り組んだケースで深まっている。 ・一年生の報告会への積極的参加(二年生の話を聞くだけになっていないだろうか)。

D 希望者プログラム

○良かった点	◇改善点・アドバイス
・自主性を育むのにたいへん効果的。 ・SGHの活動を通して目指す進路が決まる生徒もいる。活動をアピールして入試に活かす生徒もおり、希望者にはとても良いと思う。	・進路志望確定やその対策に必ずしも生きていないケースも。

E　全体	
○良かった点	◇改善点・アドバイス
・スタートした頃に比べて、生徒も意欲的・積極的に取り組んでいるように感じる。 ・生徒たちの自分の意見を堂々と述べる姿勢に成長を感じる。 ・この事業があるか無いかで、生徒の国際感覚は大きく異なると思われる。 ・生徒が自分は何に興味があるのか発見したり、関心を広げたりする機会になっていたと思う。 ・現代社会における様々な課題について、生徒の意識が高まっている。 ・物事の考え方（探究の方法）を学んでいる。 ・自分の考えを人前で発表することが、自然にできる土壌はできたと思う。また、プレゼンテーションの進め方、ルール、必要性は生徒も理解できたのではないか。 ・GSⅢの深い探究活動が、AO 入試や自己推薦入試で自分の武器となるなど、進路実現に大いに寄与したように思う。 ・プレゼン能力の向上。自らの興味関心のある事象についての研究への取組みは前進した。 ・５年間様々なことを模索して、良くしようとしたこと。 ・学校全体、OB、企業、地域を巻き込んで取り組んでいる点が素晴らしい。 ・異文化を身近に感じられるようになっているのではないか。 ・上田高校は大きな変革を遂げたと思う。 ・適切な課題を見つけ、三年間の在学中に解決法を探る能力は、これからの社会で有用な能力であると思う。 ・希望している進路に関わらず様々な経験ができるので、進路選択にも役立っている。 ・積極的に発言し、課題を設定し、探究する生徒が増えた。 ・活動を通じて、海外や自分の進路への意識を高めることに役立っていると思う。	・自分の意見を述べるだけでなく、人の言葉に耳を傾け、先学の研究に触れようとする態度が育っていくと、更に素晴らしいと思う。 ・頑張りたいと思っているが、時間が足りず物足りない生徒もいた。 ・未来の社会に向けて、ある程度は提言できる内容を目指しているが、今あることをそのまま調べているだけの取り組みに終わってしまっている人もいる。 ・“独善的”になっていることに気付けない生徒も見られる。「日本」で生まれ育ったから当然に思うことでも、他の国、他の文化ではどう考えるのか、本当にそれで相手が幸せを感じられるか、もう少し想像力を養いたい。 ・研究のアドバイザーを校外に求めることも検討してみてはどうか。 ・協働力の育成。他との意見や考えの共有したい意識。他を知る、知ろうとする意欲。これらの力の育成がより求められる。

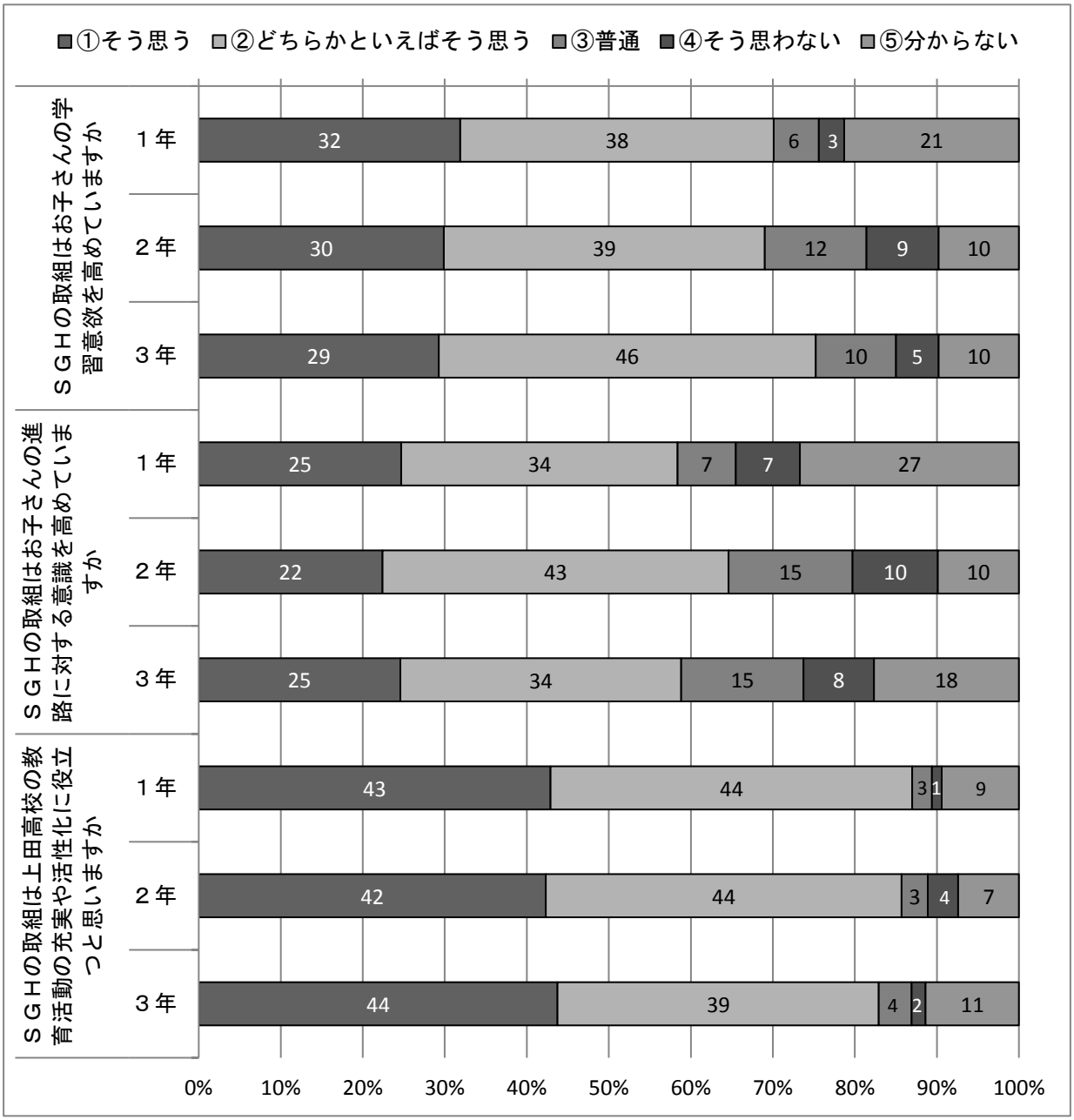
考　察

・１年前のアンケートと比べて、いずれの項目においても大きな変化は見られない。ただし「大変満足」や「賛同する」といった数値が下がった質問があるものの、「分からない」や「賛同しない」「やや不満」といった否定的意見の比率は全般的に１年前，あるいは４年前と比較するとほとんどの調査項目において下がっている。「改善点・アドバイス」における個々のコメントも、積極的で、改善すべき点を提案するものが多い。昨年度の GPS-Academic テストでも明らかになった、生徒の協働力の不足（今年度は改善されたが）に関するもの等は、実際に指導や活動に携わったからこそ出てくるものだろう。「課題研究のネット依存」、「人の言葉に耳を傾け」ることの必要性などの指摘も貴重である。課題研究から導き出される生徒の提言が、単なる自己満足や他者批判に終わるものになってはなるまい。

・今年度の活動の成果として、職員全員でＧＳⅠ、Ⅱの課題研究を担当する体制をとることに成功したことがあげられる。指導すればする分、生徒の研究のあり方への物足りなさも覚える部分もあろうが，ぜひ前向きに捉えてＳＧＨ指定後に向けて進めていきたい。思えば、前項のような建設的な意見も、担任によるＧＳⅠ指導やフィールドワーク、さらには台湾研修旅行へ多くの職員が関与するなかで認識されてきたものではないだろうか。「研究のアドバイザーを校外に求める」などの意見も、職員の負担削減という意味のみならず、生徒の課題研究の深化や現実への参与という視点から、今後検討していきたい。

Ⅴ　評価と考察　　保護者アンケート

① 期　　日　　８月３０日（金）～９月１２日（木)全学年保護者対象 有効回答数 622名



② 記述部分（本校の教育に関する全般的な意見より抽出）

・ＳＧＨの活動を通してさまざまな世界を知り、学習意欲も高まっているように感じる。
・ＳＧＨ、フィールドワークといった特徴ある教育活動は魅力がある。
・ＳＧＨ活動のおかげで将来の目標が明確になった。
・ＳＧＨの活動を通して貴重な体験ができていると感じる。
・ＳＧＨのプレゼンや文化祭のパフォーマンスなど内容が充実している。高校生の力に感激する。
・ＳＧＨは今後も継続されると良いと思う。地元の産業と関連付けるともっと身近なものになるのではないか。
・様々な世界に触れることで視野が広まっているように感じる。
・様々な活動の中から、子供がそれぞれ知的好奇心に合うものを見つけることができる。

③ 評価と考察

毎年秋に全保護者を対象に実施しているアンケートのなかからＳＧＨに関連する項目についてまとめてみた。これまでの調査では、全般的に下の学年に行くほどＳＧＨに関する肯定的評価は高い傾向が見られ、今年度も「ＳＧＨの取組は上田高校の教育活動の充実や活性化に役立つと思いますか」の項目ではこの傾向が見られる。ただし従来までと異なるのは学年間の差が縮小してきている点である。「ＳＧＨ活動が生徒の学習意欲や進路に対する意識を高めていますか」という問に対して①，②を選択した保護者は年々増加し、各学年とも今年度は過去最高レベルの数値となり、これまで課題の１つであった、「ＳＧＨ活動による進路意識の涵養」に関して明るい展望が見えてきた。２月のＳＧＨ報告会での保護者参加者数も45名と過去最高になり、ＳＧＨ活動は着実に浸透してきた。こうした期待に応えていくとともに、指定５年間の終了後も保護者の方々への広報活動を活発に行いたい。

Ⅴ　評価と考察　　英語コミュニケーション能力を高める検定

1　＜研究開発単位Ⅳ　課題研究推進のための英語コミュニケーション能力の育成＞

課題研究を支える英語力をつけるため、英語コミュニケーション能力やプレゼンテーション力をつける。

英語力到達度に関しては外部検定試験を活用し、英語４技能に対し個別に目標を設定し指導する。

2　外部英語検定受検状況

①　　ＧＴＥＣ　＜Advanced＞

B1　：海外進学を視野に入れることができるレベル

A2.2：海外の高校の授業に参加できるレベル

A2.1：海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル

CEFR-J	２年	１年
トータル	A2.2	A2.2
リーディング	A2.2	A2.1
リスニング	A2.2	A2.1
ライティング	A2.2	A2.2
スピーキング	A2.1	A2.2

＜グレード別の人数＞　２学年３００名受検　　第３７回　令和元年９月実施

	トータル		リーディング		リスニング		ライティング		スピーキング	
	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数
B2	*1190*~	1	280~	4	290~	8	300~	0	320	3
B1.2	*1060*~	6	250~	5	250~	30	260~	5	300~	1
B1.1	*960*~	19	220~	29	220~	60	240~	54	280~	3
A2.2	*810*~	167	180~	167	190~	120	220~	158	220~	144
A2.1	*690*~	101	150~	92	160~	76	190~	77	190~	113
A1.3	*520*~	2	110~	10	130~	11	140~	11	140~	32
A1.2	*370*~	0	80~	0	90~	2	100~	2	100~	4
A1.1	*270*~	0	60~	0	70~	0	60~	0	80~	0
Pre-A1	*0*~	0	0~	0	0~	0	0~	0	0~	0

＜グレード別の人数＞　１学年３１７名受検　Ａタイプ　第４０回　令和元年１２月実施

	トータル		リーディング		リスニング		ライティング		スピーキング	
	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数
B2	*1190*~	1	280~	1	290~	5	300~	0	320	2
B1.2	*1060*~	1	250~	0	250~	4	260~	7	300~	4
B1.1	*960*~	13	220~	8	220~	20	240~	92	280~	9
A2.2	*810*~	194	180~	133	190~	87	220~	129	220~	251
A2.1	*690*~	103	150~	165	160~	143	190~	86	190~	42
A1.3	*520*~	5	110~	10	130~	54	140~	3	140~	8
A1.2	*370*~	0	80~	0	90~	4	100~	0	100~	1
A1.1	*270*~	0	60~	0	70~	0	60~	0	80~	0
Pre-A1	*0*~	0	0~	0	0~	0	0~	0	0~	0

② 実用英語技能検定の取り組み

本校では、次のような理由から、実用英語技能検定試験を 2015 年度から実施してきている。当初、行事・部活・模試等の理由から、原則年間 3 回実施される検定のうち、第 3 回実用英語技能検定試験を本校で実施することにしていたが、2016 年度から、規定人数に達した場合に限り、第 1･2 回の検定試験も取り組むことにしている。

理由１　本校で受験実施を望む声が多くあったこと。

理由２　総合的な英語力アップに繋がること（目安：準１級＝センター190 点以上)。

理由３　大学入試における外部試験導入への対応になること（2 級以上が対象。令和元年度当初時点)。

理由４　資格としても有効であり、高校での学習内容をもとに一般的な英語力が問われる内容であるため、日々の英語学習の動機づけにもなること。

【合格者状況】

	準１級	2 級	準 2 級
2016 年度	4	100	198
2017 年度	6	204	190
2018 年度	4	48	15
2019 年度（第 2 回まで）	0	39	13

2019 年度第 3 回一次試験合格者（2020 年 2 月 25 日現在）
準１級　０名　２級　67 名　準２級　183 名

※2018 年度は今後の新テストへの移行を鑑み、ＧＴＥＣを全員受験とし英語検定は 3 回とも希望者受験とした。

３　評価と考察

①**２年生**　ＧＴＥＣは外部検定試験への対策の一環として、全員受験で実施した。リーディング、リスニングではスコアの上昇が見られたが、発信技能バランスを見ると、発信技能が若干弱いように見受けられる。特にスピーキングでは写真の描写や意見を述べるパートに苦手意識を感じる生徒が多いようである。ライティングにおいては、段落の構成を意識して、自分の考えを整理して書く力が必要となるので、今後は、意見の根拠となる事実や感想を単に列挙するのではなく関連性を持たせて、主張とつなげる練習を行っていきたい。

②**１年生**　ＧＴＥＣは、１１月学習合宿で準備を行い、１２月に受験した。出題形式を知ったうえでの受験であった。トータルでは、CEFR-J で A2.2 となった。スキル別では、リーディング、リスニングが A2.1、ライティング、スピーキングが A2.2 であった。前年度と比較して、スピーキングの成績が良い結果となった。これは、通常のコミュニケーション英語Ⅰ で週１回スピーキングドリルを継続したこと、さらに一斉考査ごとに個人面接試験を実施したこと、教科書暗唱を義務付けたことの成果が現れたと見ることができる。ただし、定期考査の成績と負の相関を示した生徒も多かった。

英語検定は第３回受験を全員受験とし、準２級もしくは２級を受験させた。準２級２０９名受験、２級９２名受験であった。１６年度、１７年度との比較は２次試験結果が出る前のためできない。１次試験の結果で判断すると、定期考査の成績と英語検定は正の相関があるように考察できる。準１級については、２級保持者に受験を勧めたが、かなわなかった。２年次に挑戦を促すことで上位生徒の引き上げに貢献したい。

③その他

SGH の指定を受けた 5 年間で、海外研修旅行での学校交流活動、SGH 報告会の英語によるポスターセッション、そして海外高校生の受入れなど英語を使って情報を発信する機会が増加した。授業で学習した内容を実践することを通して、自分の英語力の向上にむけて前向きに学習に取り組もうという生徒の意欲の高まりが感じられる。

長野県SGH第1回運営指導委員会・議事録

1　日時　　令和元年（2019 年）８月５日（月）14:00-16:00
2　会場　　上田高等学校同窓会館
3　出席者（敬称略）
　　副委員長　滝澤　正（上智大学名誉教授）
　　委員　　赤池　学（株ユニバーサルデザイン総合研究所所長）
　　大井恭子（清泉女子大学教授）
　　金子元昭（シナノケンシ株式会社社長）
　　中西　茂（玉川大学教授）
　　指定校　廣田昌彦（上田高等学校長）
　　管理機関　斉藤則章（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課 教育幹兼高校教育指導係長）ほか
4　内容
⑴開会行事：委員紹介、教育幹あいさつ、委員長・副委員長選出

⑵議題「ＳＧＨ事業の計画と取組」
　廣田校長・柳沢教頭より説明
　グローバルスタディーⅢ「課題研究」生徒発表
　発表①「どうしたら女子大生に秋の菅平を訪れてもらえるか」　３年生女子生徒
　発表②「投票しないと損をする？若者の投票率を上げるために」　３年生女子生徒

　① 生徒の発表に対する質疑応答・講評
　赤池委員　「グローバル人材の育成」がＳＧＨ事業の目的だが、菅平の観光客を増やすという研究をする中で、どのようにＳＧＨの学びの成果を生かしたのか。
　生徒①　ローカルな問題をグローバルな視点で解決することを考えた。いろいろな場所で発表してきたが、グローバルなことを考えいくために、まずはローカルなことを考えるようにアドバイスをいただいた。
　金子委員　菅平の観光客を増やすための取組について、保護者に聞いたことはあるか。
　生徒①　スタンプラリーは何年か前にやったと聞いている。
　金子委員　観光協会が小さな地域で乱立していて、連携が希薄だと聞いたことがある。そのようなことは聞いたことがあるか。
　生徒①　聞いたことはある。
　金子委員　忙しいというのは若者が選挙に行かない理由ではなく、優先順位の問題である。統計をあまり信用しすぎないことも大切だと思う。
　大井委員　素晴らしい発表だった。地元の菅平というテーマ設定の理由はわかったが、選挙について研究しようと思ったきっかけは何か。
　生徒①　４月にこの研究を始めた。投票権を持った友達が「選挙に行かない。」と言っているのを聞いて、全員が選挙に行く家庭に育った私にはショックだった。そこで、どうしたらこの問題を少しでも解決できるか考えようと思った。
　中西委員　２人とも、自分で考えたことが実際にできるのかを選挙管理委員会や菅平のお店に確認しているところが評価できる。４月からの研究ということで、時間がなかったのだと思うが、東京都の選挙に関するデータを使うよりは、地元の長野県のデータを引用できると更によい。
　赤池委員　なぜ海外の学生は投票しているのかを調べたか。
　生徒②　スウェーデンは、主権者教育が進んでいる。また、政党青年部が充実している。オーストラリアは選挙権を放棄すると罰金が科せられるなど、制度的な理由もある。
　赤池委員　選挙割などはスウェーデンでは行っていない。選挙割導入などのアイデアは、本質的な解決策になっていないのではないか。
　生徒②　「選挙に行きなさい。」と言われれば言われるほど、若者は行かないと聞いた。先ずは、本質的な解決策ではなくても、きっかけづくりでもいいのでやってみたらどうかと考えた。
　赤池委員　きっかけづくりだけではなく、本質的な解決策にまで踏み込んだ研究を行ったほうが良い。

　② 上田高校の説明に対する質疑応答
　中西委員　資料「本年度の課題と取組」の「ＧＰＳアカデミック検査」の結果から、「批判的思考力・論理的思考力」、「創造的思考力」に比べ、「協働的思考力」に課題 が　あることがわかったという報告があったが、今後この課題に対してどう取り組んでいくのか。
　廣田校長　説明資料に記載されている結果を分析すると、現３年生で「協働的思考力」がＡランクの生徒の割合は 15%である。これは、「批判的思考力」（45%）、「創造的思考力」（50%）がＡランクの生徒の割合と比較して最も低くなっている。これは、現２年生の結果でも言えることであり、上田高校の探究活動の短所を明らかにしている。問題解決のプロセスには、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現→振り返り・考えの更新」と様々な段階があるが、課題設定の段階では、「創造的思考力」が必要となるし、まとめ・表現の段階では「批判的思考力」が必要となる。課題研究を進めていく過程で、それぞれの段階ごとに伸ばす思考力を意識し、指導に当たっていきたい。また、課題研究全体を通して、「協働的思考力」を伸ばす場面が少ないことがわかったので、あらゆる探究活動の段階でグループワークやディスカッションなどを増やしていきたい。

赤池委員　長野高校の運営指導委員も務めていたが、長野高校は個別のビジネスや産業をテーマに取り組んできた。長野高校でも同じような分析をしているのか。上田高校と比較して何か特徴はあるのか。

廣田校長　次回までに調べておきたい。

赤池先生　上田高校と長野高校では研究テーマが異なる。長野高校は個別ビジネスに焦点を置いて研究をしていたが、上田高校は社会的な課題の中で課題発見をさせ、研究を行ってきている。課題研究の内容の違いも今回のＧＰＳアカデミック検査の結果の要因の一つではないか。

③ 各委員からの指導・助言

赤池委員　２人の生徒のプレゼンテーションも、報告書の進学実績も素晴らしいと感じた。先生方も忙しいと思うが、もう一歩踏み込んで、「取組から学べることは何か」 を考えてほしい。報告書も拝見したが、「生徒にこういうことを経験させました。」という報告に留まらず、心情的なケースタディーの分析や、教員の所感を加えることが、ＳＧＨ事業を他校へと広げていく上で重要となる。「自分たちがこういう教育のプロセスを共有しながら、ここに生徒が着地したとか、こう変わった。」といった肉声を盛り込んでいってほしい。そうすることで、ＳＧＨ事業の取組をした生徒たちにとっても、学びがより自分事となっていくと思う。

ＧＰＳアカデミック検査の結果から、「協働的思考力」の醸成に課題があるという報告があった。昨年も話をしたが、ＳＧＨ事業の究極的な目的や本質は、「生徒の利他的な感性を育て、社会的な自立を促すこと」だと考えている。フィリピンやカンボジアなど新興国との交流を継続して行っているので、個々の生徒に、利他的な互恵ビジネスの可能性があるのかをしっかり把握・自覚させることが重要ではないか。５年目の今年は、学びのまとめをさせながら、「上田高校のＳＧＨ事業の取組を通して、自らのキャリアデザインがどう変わったのか。」という点について、生徒一人ひとりの考えを引き出してあげることが、取組のまとめとして大切だと思う。

大井委員　２人の生徒の発表はとても良かった。研究当初と比べると、レベルが上がってきている。研修旅行のレポートの内容も素晴らしいものであった。全員の生徒のものではないにしろ、生徒たち一人ひとりにとって学びが深まったのだと納得させられた。今年度は最終年度であるので、上田高校での活動を他校にどう汎用させていくかが課題であるということもわかった。

これまでは担当の教員がＳＧＨ事業に携わり生徒を指導してきたが、今年は、全員の教員が指導に当たっているという報告があった。本事業の取組を他校へ汎用させていく上で、教員がどう関わり指導したのかのプロセスが参考になる。探究的な学びを支援する教員の指導・関わり方の仕方をモデル化していってほしい。

金子委員　生徒の発表もとても面白かった。５年前の研究開始の段階から、「何のためにＳＧＨ事業を行うのか。」、「５年間のＳＧＨ事業が終わったらどうなるのか。」ということに興味を持って見てきた。フィリピン、台湾、ボストンなど海外に行くのは費用がかかり大変であるが、課題研究はそれほどお金がかからない。事業終了後、ＳＧＨの取組をどう継承していくかについて、いずれ報告をしてほしい。

ＳＧＨ事業立ち上げの時に、当時の内堀校長が、「問題解決だけではなく、問題を発見し解決まで導いていく力を育成することが大切だ。」と話していたが、私もそう思う。赤池委員から指摘のあった「グローバル」と「ローカル」の問題においても、同窓会という立場からも、どうお手伝いできるかを考えていきたい。

「汎用化」ということが取り上げられているが、ＳＧＨ事業を汎用化させて長野県全体で活用していきたいという姿勢は素晴らしい。大井委員の言われたように、教員の関わり方・指導の仕方を、暗黙知から形式知にしていくことが必要である。モデル化は難しいかもしれないが、それができれば他校での実践にも役立てられる。

ＧＰＳアカデミック検査の結果は統計的に意味のある数字なのか若干疑問がある。進学実績の向上も誤差の範囲ではないかと思う。成果を計ろうとするのは必要だし参考になると思うが、結果に囚われすぎない方がよいのではないか。

長野県中小企業振興会に係わっているが、「できる生徒を伸ばすのか、一番下を落とさないのか。」という問題がある。企業経営的には、「選択と集中（だめなものは辞める。いいものは伸ばす。）」という考えがあるが、学校教育でもあまり全体を横並びに伸ばしていくことに重点を置きすぎるのではなく、メリハリをつけることも必要ではないだろうか。

中西委員　金子委員から検査の数値に差があるのかという話があったが、差があるという前提に立って「協働的思考力」について思ったことを話す。生徒２人の発表は面白かったし、最初の年度から比べてもよくなっているが、「協働的思考力」という観点から見ると改善の余地があるのではないか。ＳＧＨ事業の目的である「異質で多様な人と交わり、問題を解決してくことができるグローバル人材の育成」のためには、「協働的思考力」が重要になってくる。その点において、「海外に行った経験を課題研究にどう活かしていくか。」という視点が大切になる。例えば、台湾研修旅行に行った際にすでに問題意識を持っていれば、台湾の同世代の人たちは選挙についてどう考えているのか調査することができたはずだ。

元記者という立場から意見を述べると、「見せ方」が大切である。昨年度の研究報告書の「課題研究グローバルスタディーⅢ受講者ポートフォリオ」は資料としてなるほどと思うが、これは手持ちの資料ではないかと思う。この資料を一般の人に見せても、変化を読み取ることが難しい。年度末のＳＧＨ成果発表会のように、コンパクトでもいいので、「私はこう変わった。」ということを個々の生徒がまとめればよりアピール性のある報告になるのではないか。

滝沢副委員長　２人の生徒の発表は素晴らしかった。菅平高原も選挙のことも一般的なテーマだが、自分のテーマとして捉え、自分なりの方法で調査をし、解決策の提示までしている立派な発表だった。ＳＧＨ事業の成果の一つだと言える。

上田高校では全員がＳＧＨ活動に取り組み、共通の部分と特殊化した部分をうまく組み合わせて運用している。この様な取組を通して、グローバルなことに興味のある生徒も、興味のない生徒も全員がグローバルなことについて学び、一定の共通認識ができる。この共通認識を土台にし、意識のある生徒を更に伸ばす指導をしてきたことで、成果が上がってきているのではないか。生徒も頑張っているが、教員全体でＳＧＨ事業に関わるシステムを作ることで、

教員間でもグローバル教育に対する共通認識ができてきている。汎用性のある研究にし、他校に広めていく努力をしている点も評価できる。

冒頭の管理機関のあいさつで、長野県教育委員会の名称が変わったという報告があった。「指導」というと、上からこうしなさいという意味合いが強いが、「支援」というと、各校での教育活動を教育委員会がサポートしていくというニュアンスになる。これは、生徒が主体的に課題を発見し、探究し、解決策を見出していくプロセスを、 教員が支援していくというＳＧＨ事業の精神そのものだと言える。

上田高校の今後に向けた対応や長野高校での取組、県全体としての今後の考えをお聞かせ願いたい。

斉藤教育幹　長野高校は今年から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定校として採択された。ＳＧＨの後継事業としてこの事業に着手している。文部科学省では、この他に「World Wide Learning（ＷＷＬ）事業」も進めている。上田高校については、ＷＷＬ事業も視野に入れて検討している。長野県独自の取組としても、「未来の学校」として新たに指定校を指定し探究的な学びを推進している。上田高校の今後のことは、色々な選択肢があるので、今後ご意見をいただきながら検討していきたい。

大井委員　様々な視察の方が来られているということだが、海外からの視察があった時にはどう対応しているのか。

廣田校長　これまで海外から２校訪問があった。思考力・表現力・判断力・生徒の創造性の育成を目指した探究活動を行っていることを説明したり、電子黒板を使った授業を見学したりしてもらっている。

大井委員　普段の授業を見たり、教員の説明を行ったりしているということで理解できた。

廣田校長　本日発表をした生徒もそうだが、発表の背後には、様々な成長のストーリーがある。例えば、本日発表した生徒２人も、ビックデータの扱い方の学びを菅平の研究に生かすとか、いじめのことを考えていくうちに、社会の弱者、女性の社会貢献へと考えが及び、国会議員との対談を通して、「若者と選挙」というテーマにたどり着いた。これからは、上田高校の学びがどう生徒を成長させてきたのかという視点から、成果物だけではなくストーリーとしてプレゼンテーションをすることで、他の学校へも普及させていけるのではないかと考えている。

金子委員からご指摘のあった「協働的思考力」に関して、ＧＰＳアカデミック検査で、全体的に高い点数を取る生徒ほど、「協働的思考力」が他の思考力と比べて低い傾向にあることがわかった。何が要因なのかは今後よく研究していきたい。

上田高校入学時からＳＧＨ事業に取り組んだ生徒たちが、現在大学１，２年生になっている。ボストンやフィリピン研修後、生徒たちは留学に対して高い意識を持つようになる。ＳＧＨ事業は今年度終了するが、今後も生徒たちのキャリアをどう形成していくのかよく考えていきたい。

金子委員　高校再編について県教委としてどう考えておられるのか。生徒数減に対応して、高校数をもっと減らしていくことも必要ではないか。

斉藤教育幹　高校再編は、ハードとソフトの両面で行っていく必要がある。ただ学校数を減らすとか統合するのではなく、学びの改革・学びの発展と両者不可分の関係で進めていくというのが県教育委員会の立場である。

中西委員　今年度の入学生では、女子生徒の方が男子生徒より多いと聞いたが、何か要因はあるのか。ＳＧＨ事業を運営する上でも何か関係はあるか。

斉藤教育幹　特に分析はしていないが、私が教頭をしていた数年前までは男子生徒が多かった。

金子委員　私が在籍していたころは、女子生徒はクラスに３，４名しか居なかった。女子生徒の方がチャレンジしているのか。いすれにしても、今後の展開に大いに期待したいと思う。

長野県SGH第2回運営指導委員会・議事録

1　日時　　令和元年（2019 年）11 月 18 日（月）10:30-12:00
2　会場　　上田高等学校会議室
3　出席者（敬称略）

委員長	近藤誠一（長野県文化振興事業団理事長）
副委員長	滝澤　正（上智大学名誉教授）
委員	大井恭子（清泉女子大学教授）
	金子元昭（シナノケンシ株式会社社長）
	中西　茂（玉川大学教授）
指定校	廣田昌彦（上田高等学校長）
管理機関	三輪晋一（長野県教育委員会教育次長）
	佐倉　俊（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課長）
	斉藤則章（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課教育幹兼 高校教育指導係長）ほか

4　内容
⑴開会行事：教育次長あいさつ、本日の日程確認

⑵議題１「学校からの報告」（本年度の取組に係る中間報告）
廣田校長・柳沢教頭より説明

① 質疑応答
金子委員　思考力テスト（ＧＰＳアカデミック）の⑶創造的思考力について、「情報を関連づける・類推する能力」、

「問題をみいだし解決策を生み出す能力」は共にＢランクになっているが、全体ではＡランクを獲得したということでよいか。

柳沢教頭　個々の能力ではＢランクだが、総合評価ではＡランクとなった。

中西委員　「探究的な学び研究会」に 50 校が参加したとあるが、様々な教科の教員が参加したのか。

柳沢教頭　探究的な学びの研究主任が多く参加した。中には、複数の教員が教科の代表として参加した学校もあった。手探りの状況の学校も多いが、各校で教科横断型の学習が始まっていると認識している。

金子委員　１、２年生のフィールドワークについて、Ｈコースは我が社に来てもらった。この結果を見ると、Ｂコース「国際理解」、Ｇコース「化学・材料」、Ｈコース「テクノロジー」は「大変満足」と回答した生徒の割合が、他のコースに比べて低い。来年以降に向けて、学校として改善していくことがあると考えているか。

柳沢教頭　Ｇ、Ｈコースは理系の生徒向けのコースである。見学だけではなく、今後実験や実習も入れて、理系の生徒たちがより主体的に研修を受けられるように工夫していきたい。

金子委員　是非学校の要望を言ってもらいたい。企業としても生徒たちに満足してもらう研修ができるよう協力したい。

② 各委員からの指導・助言

大井委員　年度が進むにつれてＳＧＨ事業の取組が広がり、深まっていることを感じている。長野県立大学でも「グローバルマネジメント科」ができたが、グローバルな視点でマネジメントをしていくことや、統計などの分野にも学びが広がりつつあり、これからの社会で求められている人材を育成していると感じる。フィールドワークの内容についても、これまでの取組を今後さらに改良していくということで、感銘を受けた。

11 月６日に宮崎県で講演会を行った。宮崎県は教育に熱心な県で、１時間目の前と７時間目の後に「課外授業」を行っている。教員が指導をし、課外授業分の授業料は保護者から徴収しているとのこと。普通科だけだが、全員が取り組んでいる。英語検定の受験率も九州の中では一番高く、先生方が熱心に授業をしていると聞いた。授業視察を行ったが、50 代の英語の教員が英語で先駆的な授業を行っていた。情報提供としてお伝えした。

金子委員 資料を読ませてもらったが、よい実践を行っていると感じた。課題研究入門講座の実施に当たっては、今回のようにテーマがはっきりしていれば、講師の推薦もしやすい。同窓会としても積極的に講師の招聘のお手伝いをしていきたい。

中西委員　県内フィールドワークに対する１年生の生徒の声の中に、「感動した。」「刺激的だった。」「驚いた。」「地元企業を誇りに思う。」などの感想が散見される。このような感想が出てくる様な取組をしていることがわかった。

ベネッセのＧＰＳの結果については、前回の指導を受け、結果が向上しているとのこと。大学生を教えていると、高校までにどこまで「たたずまい」ができているかがとても大切だと感じる。大学でも、手取り足取りで教えないといけない学生も少なくない。大学に来てから伸びるためには、思考力の基礎が高校までにある程度身に付いていることが必要である。引き続き、頑張っていただきたい。

滝澤副委員長　中間報告を拝見し、優れた取り組みをしていると感じる。フィールドワークにおいても、ただ実施するだけではなく、生徒のアンケート結果を分析し、より生徒たちが直接係われる企画へとステップアップしていく工夫をしているのがよいと感じた。

「ＳＧＨ通信」、「CHALLENGE」の通信を発行しているとのこと。学校外の学びの機会の情報を生徒に提供し、生徒が自主的に学び、次のステップへと進むための取組として評価できる。

ベネッセのＧＰＳは、大学生を対象にした思考力テストであるが、上田高校の生徒の結果は、ある程度のレベルに到達していると言える。上田高校の取組を継続していくことで、総合的な思考力が今後も伸びていくことが期待できる。次回の結果報告を期待している。

近藤委員長　中間報告の資料はわかりやすく、読みやすく、よくできている。５年間でＳＧＨ事業の期間が終わるが、一番大切なことは今後のステップにどうつなげていくかだ。

「Super Global University」というものがある。私もある大学に係っている。初めは総花的に色々な取組をしようとしていたが、今では、短期でできること、中長期で取組むこと、当面は切り捨てることを整理し取組を改良している。

上田高校では、既に取組を精査・改良をしているが、その中でも取組の汎用化の発想が素晴らしい。上田高校が率先し、日本全体の教育のレベルを上げるために、他校でも汎用性のある指導法を開発していこうとしていることが評価できる。

『日本語が滅びるとき』（水村美苗（著））という本がある。著者は、英語は普遍言語化してきており、便利であるため、多くの人々に使われている一方で、他の言語が衰退している状況にあると述べている。フランス語はかつてヨーロッパの中心的な言語であり、広く使われていたが、今では英語が支配的になり、フランス人も一生懸命英語を勉強している。この様な状況がずっと続くと、やがて日本語も危機的な状況になるのではないかと警告をしている。

英語が堪能になることは極めて重要であり、英語ができれば世界で起こっていることをいち早く理解できるし、自分の言いたいことも世界に伝えられる。しかし、その結果として、日本語だけが持っている美しい言葉やニュアンスが、次第に使われなくなってきている。スマホはその典型かもしれない。便利で端的に情報を伝えられる。しかし、おもむきのある言葉や、日

本語でなければ表現できないことを表現する場がなくなり、やがてその言葉の持つニュアンスすら感じられなくなっていく。おそらく子どもたちは、日本語の「ゆかしい」、「たおやかな」という言葉やそのニュアンスを知らなくなるのではないか。英語は英語としてマスターしつつ、同時にローカルな日本語（方言などローカルな言葉）に含まれているニュアンスや文化を大事にするという発想を維持していかなければならない。ただ英語が堪能になるだけではいけない。英語という新しい言語から日本語を外から理解し、日本語や日本人にしかない感性を育てていくことが大

事である。

今後のAI時代では、ローカルな多様性のある発想がどんどん駆逐されていく恐れがある。計算、論理性、効率性はAIに任せ、感性や創造性やひらめきを磨いていかないと、人間はどんどんAI化していく。人間がAI化しても、AIには勝てない。生徒たちの様々な能力を磨いていくと同時に、感性を磨いていくことも大切だと思う。

今から５年後ぐらいに、卒業生や我々運営指導委員も交えて、今の取組を振り返ることも必要かもしれない。そうすることで、５年後の上田高校にいい刺激を与えられるのではないか。また、ＳＧＨ通信に委員が一言ずつコメントを書くことで、委員の働きがわかるようにする仕組みを作ることで、次の５年につないでいくことができるかと思う。

中西委員　三輪次長のあいさつで、「『カンボジア井戸プロジェクト』の取組が、中学生にも広がってきている。」とおっしゃっていたが、もう少し具体的に教えてほしい。

長嶋指導主事　上田高校は、長年に渡りカンボジアに井戸を贈るプロジェクトに取り組んでおり、今度４基目の井戸を贈ると聞いている。ＳＧＨ事業の取組の一つとして上田高校の生徒が始めたこのプロジェクトの支援の輪が、次第に地域や中学生の間にも広がってきている。10月26日に県主催で行われた「私のプロジェクト中間発表会」では、上田高校の生徒がこの取組の広がりについて発表をしてくれた。

⑶議題２「来年度以降の取組について」

佐倉課長・廣田校長より、ＷＷＬ事業拠点校として申請する予定であることを説明。

① 質疑応答及び各委員からの指導・助言

大井委員　是非、ＷＷＬコンソーシアム事業に採択されることを願っている。説明には「大学教育の先取り実施を可能にする取組」とあるが、具体的にどこの大学での取組を考えているのか。

斎藤教育幹　基本的には、県内大学を中心に連携を考えていきたい。現在、長野県教育委員会では、県内の大学と高校とをつなぐプラットホームの構築を進めている。その流れを活かしつつ、具体的なことは今後検討していきたい。

大井委員　意欲的な取組であるので、採択を祈っている。

金子委員　コンソーシアムの構築は大変だが、ぜひ頑張っていただきたい。同窓会としても、できるだけの応援をしていきたい。

中西委員　資料に①～⑨までのＷＷＬの取組要件が挙げられている。これらを全て行うとなると、かなりハードルが高いと思うが、頑張っていただきたい。⑦「文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成」とある。「STEAM教育」に対して様々な受け止め方があるが、文理融合は結構難しいことではないか。具体的にどうお考えか。

廣田校長　おそらく３年生の選択科目の１つに、文系と理系の教員がある一定の時期に入れ替わり、教科を融合した内容を扱う「学校設定科目」を設定することを考えている。Art Thinking、Design Thinking、デッサンをさせたりすることも大切だと思うので、そういう授業を研究していくことも考えている。

滝澤副委員長　複数の他県の高校を視察し参考にしているとのこと。わかりやすいポンチ絵の作成がカギだと聞いている。イメージ図を適切に考えていただきたい。

今年度採択された10校は、首都圏と関西圏がほとんどである。全国の各地からＷＷＬ事業の拠点校を作ることの大切さをアピールしていくのはどうか。

近藤委員長　長野高校等との連携については、どう考えているか。

斎藤教育幹　長野高校は「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）の指定校として研究を進めている。ＷＷＬ事業では、管理機関と拠点校が企業や他の高等学校と連携をし、コンソーシアムを構築していく。長野県としては、県内の「SSH校」、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業の指定校」、「『未来の学校』研究指定校」などと連携をしていく。長野高校とは、連携校の１つとして協力していきたい。

近藤委員長　⑨に「国内外の大学、企業、国際機関等と協働…」とあるが、企業については、具体的にどのような企業を考えているか。私は、今年４月から「国際ファッション専門職大学」という新しくできた大学に関わっている。この大学は、産業界の要望によってできた大学で、専門職の技術と高い学力の両方を兼ね備えた人材を育成していくためにつくられた。産業界のニーズに合った人材の育成が、大学教育に求められている。「学問は経済のためではない。」と言ってしまえばそれまでだが、一方で、文化であれ芸術であれ、学問は社会を活性化し、人々を幸せにするためにあると言える。経済という仕組みを上手く使わなければいけないのであるから、学問（大学）と産業界の連携はもっとあってもよい。産業界が、どのような人材を求めているかを知ることが重要である。

国際ファッション専門職大学では、４割が実務科教員である。20年、30年専門職で働いてきた教員と、いわゆる学問を研究してきた教員が教える内容は全く異なり、それぞれが学生にとって財産となる。日本の経済・社会の活性化のためにも、企業との連携を進めてもらいたい。

中西委員　玉川大学では、ＳＴＥＭ、ＳＴＥＡＭ教育に熱心に取り組もうとしており、来年の春には新校舎も建つ。このような縁もあるので、玉川大学に見学に来ていただければと思う。

金子委員　マーケティングの分野は、日本では遅れていると感じている。中小企業振興センターの理事長を務めているが、社会人をどう育成していくかという「リカレント教育」に力を入れている。この地域には、長野県立大学、信州大学繊維学部、長野大学、上田工科短大がある。これらの大学と連携をし、高校生のころからマーケティング思考を身に付けてもらいたい。また、この地域には、多くのグローバルな企業が多い。企業との連携を進めるに当たっては、お手伝いしていきたい。

長野県SGH第3回運営指導委員会・議事録

1　日時　　令和２年（2020 年）２月８日（土）14:15-16:45
2　会場　　上田市文化センター
3　出席者（敬称略）

委員長	近藤誠一（長野県文化振興事業団理事長）
副委員長	滝澤　正（上智大学名誉教授）
委員	赤池　学（(株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長）
	大井恭子（清泉女子大学教授）
	金子元昭（シナノケンシ株式会社社長）
	中西　茂（玉川大学教授）
指定校	廣田昌彦（上田高等学校長）
管理機関	三輪晋一（長野県教育委員会教育次長）
	佐倉　俊（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課長）
	斉藤則章（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課 教育幹兼高校教育指導係長）　　ほか

4　内容

(1) 開会行事：教育次長あいさつ、本日の日程確認

(2)「ＳＧＨ報告会」参観：第３、４グループ発表

(3) 議題：ＳＧＨ事業５年間の総括報告、令和元年度のまとめ
廣田校長・柳沢教頭より説明

① 質疑応答

金子委員　報告書にＧＰＳアカデミックの結果が載っているが、グラフの見方を説明してほしい。

柳沢教頭　過去３年間、ＧＰＳアカデミックを使い、生徒の「批判的思考力」、「協働的思考力」、「創造的思考力」を測定してきた。掲載されている結果は、過去３年間の２学年の経年比較である。３つグラフが並んでいるが、一番上のグラフが今年度（2019 年）、次のグラフが昨年度（2018 年）、一番下のグラフが一昨年度（2017 年）の結果である。これまでのテストの結果から、上田高校生は「批判的思考力」、「創造的思考力」は高いところで推移しているものの、「協働的思考力」（他者の信念や価値観を尊重しながら、合意形成していく力）に課題があることがわかった。そのため今年度のＳＧＨ活動においては、生徒同士で協働的に学ぶ機会をこれまで以上に増やした。その結果、依然Ｂゾーンの生徒が最も多いものの、Ａゾーンの生徒数は昨年度の約２倍になった。

　他にも今年度の１学年、２学年のテスト結果を載せた。テストの種類別にも選択式テストの結果と記述式テストの結果である。Ａ判定を多くいただいている。

② 各委員からの指導・助言

赤池委員　生徒たちの興味・思考・問題意識に合わせた多様な研究活動を行っていて、素晴らしい。研究カテゴリーを類型化し、絞ってしまうより、アクティブな成果が上がっていると感じる。

　一方、生徒の興味に任せたが故に、中には研究が深まっていない発表もあった。それぞれの研究テーマの上位にある「社会課題」に、果たして辿り着いているのか疑問が残った。例えば、「高所得者の課税」、「これからのビジネス」など様々なテーマで異なった発表をしているのだが、その上位概念にある「お金とは何か」、「法律とは何か」、「テクノロジーとは何か」、「海外に対する互恵ビジネスとは何か」など、いくつかの研究領域をつないでいる大きな共通課題への気づきが足りないと思った。この部分に気づかせてあげると、課題研究がさらに深まっていく。この気づきを与えることこそが、教師の重要な役割である。今後も課題研究を続けていくということだが、各チームでディスカッションを行い、「あなたの研究と私の研究は、実はここでつながっている」という発見をさせるのはどうか。抽出された個々の研究の課題をつなげる力や、補助線を引く力を養っていってほしい。こういう力こそが、解決策を導く想像力・知恵の本質だと思う。この点を教員が指導することで、さらに素晴らしい成果を上げてもらいたい。

　「国際・人権」をテーマにしたポスターセッション会場で、講評をされていた歴史の先生が、「ユバァル・ノア・ハラリの『ホモサピエンス全史』をとにかく読みなさい。多分そこに紐づく課題解決のプランがあるよ」と言われていた。まさにこのような指導がとても大切だと思う。

大井委員　この５年間を振り返ってみると達成感がある。最初は、「そもそもプレゼンテーションとは何か」など、PPT を初めて作るところから始まったが、今日はそれぞれの生徒が調べたことや考えたことを堂々と発表していて、本当に感服した。発表の中には、時間があればもっと聞きたいと思わせるような、研究者の知的好奇心を満たしてくれそうな発表もあり、本当に頼もしいと思った。

　また、ＳＧＨの取組紹介の中で、華々しい成果を出していることがわかった。例えば、「私のプロジェクト」や「模擬国連」の発表など、是非読みたいと思うが、いずれは、冊子等になるのか。

柳沢教頭　いずれ本校の HP にアップする予定である。

大井委員　模擬国連のことなど、どのような意見交換が展開されていたのかとても興味深い。先ほど校長先生から、地域の方々の考え方・見方が変わってきているとの報告があったが、そこまで影響があったということや、全教員がＳＧＨの指導に当たっているということは素晴らしいと思う。５年前は「探究」という言葉が真新しかったが、今は探究的な学びが当たり前になっている。この５年間の間に、教員が色々なワークシートを作ってきたということだが、

今後この取組が、さらに他校へ波及していくことを期待している。

金子委員　５年前とは全く違っているとつくづく感じている。校長先生がおっしゃっていた「周りの見る目が変わった」ということもよかったと思うし、地域のリーダー校としてＳＧＨの取組を推進していることも素晴らしいと思った。

先ほどの学校からの報告の中で、「協働的思考力が伸びてきている」とあったが、今日のポスターセッションを見て、「ロジックがおかしくないか」と思った発表があった。誰かが見てあげれば気づいたのではないか。もう少し指導する余地があったと思う。また、何人かの生徒に聞いたところ、情報はほぼネットや本からとってきたということだった。先ほどの教頭先生の説明では、「マイプロジェクト」で賞を取った生徒は、自分の足で地域の人々にインタビューをしたとのことだが、ネットなどの二次情報ではなく、自分の足で得た一次情報だったからこそ、発表にインパクトがあったのだと思う。情報収集の仕方を指導することで、個々の研究がさらに改善されると思う。

これで５年間のＳＧＨ事業は終わるが、文部科学省のＳＧＨのＨＰには、その概要として、「高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的としています」と書かれている。この目標をどう捉えたのかということが、学校からの報告になかったのが残念だった。例えば、目標の最初の部分にある、「生徒の社会課題に対する関心」をどう高めさせるかということがある。内堀前校長先生が、「問題解決力ではなく、問題発見力を高める」とおっしゃっていたが、報告書には、「問題解決力」についての記述はあるが、「問題発見力」についての言及がなかったので、もう少し強調してもよかったのではないか。

中西委員　「５年間お疲れさま」と申し上げたい。外部のコンテスト等に出場して、当たり前のように賞を受賞しているが、これも５年間の積み重ねの成果だ。

報告書に、「全職員がＳＧＨの指導に当たる」とあるが、どれだけ多くの大人が生徒の問題意識に答えてあげられるかがポイントである。数日前に、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校に行ってきた。課題が明確にあるという大前提があり、リアル感があることにより、生徒たちの学びが深まっていると感じた。今日は、２年生全員が発表をしたとのことだが、中には、知識不足だと感じる発表もあった。そういうものも含めて、どれだけ大人・教師が関わっていくかが非常に大切になる。次年度以降もこの取組を継続・発展させていってもらいたい。

滝澤副委員長　報告書に、台湾でのフィールドワークについての生徒アンケートの結果があるが、理系の分野のフィールドワークの満足度が、他の分野に比べて低い。首都圏のフィールドワークでも同じ結果が出ており、改善策はわかっているとのことなので、今後取組が改善されていくことを期待している。

また、「グローバルスタディⅢ」の取組について、「高校卒業後の主体的なキャリアデザインの支援ができた」との報告があった。探究的な学びがＳＧＨ事業を通して広がったことの意義は大きい。単に既存の偏差値で大学を選ぶのではなく、高校時代に、自分なりの観点をもって進路を考えることは重要だ。ただし、高校時代に選んだ研究テーマを、大学でも学ばなければいけないなどと狭く考える必要はない。将来の可能性の一つに、自分の課題研究のテーマも含まれると考えてほしい。大学や社会に出てからも、様々な可能性がある。転職してもいい。学びの幅を狭めないようにしてほしい。

次のステップとして、他校への普及とネットワークづくりを進めていくとのことであるが、そもそもＳＧＨの取組は、生徒に新しい学びのスキルを身に付けさせるために始まった生徒主体の取組である。上田高校の生徒はもとより、長野県教育委員会の指導・助言の下、全県下の若い高校生に同じような経験をさせてあげたい。ＷＷＬコンソーシアム事業は、まさにそのような取組である。縦の方向として卒業生とのネットワークを、横の方向として地域や他校とのネットワークを拡充していくことが大切だ。

今日のポスターセッションを参観して、他の委員からもご指摘があったとおり、具体的な経験を基に発表しているものは説得力があると感じた。ベルギーでの経験を基に発表した生徒がいたが、よい発表だった。一方、文献からのみ知識を得て発表していた生徒は、論理に飛躍があり、大丈夫かと不安になった。断片を切り取るのではなく、複眼的な視点から物事を考えていくことを指導すれば、研究の質がさらに向上するはずだ。

近藤委員長　５年間の目覚ましい成果を感じた。５年前はここまで成果が上がるとは思っていなかった。校長先生の話にも自信と喜びを感じた。生徒・先生のみならず、保護者の見る目が変わったということは大きな成果だ。この取組を持続可能なものにし、どう拡大していくかが課題である。せっかくここまで取組んできたので、単に拡散させるのではなく、さらに充実させるにはどうしたらいいのかを考えていってほしい。生徒たちが大学生や社会人になったときに、新しい組織なり環境・社会が、こういった探究的な学びをやりやすい環境である保証はない。昔ながらの大学だったり、会社だったりもする。そういった環境の中に入っていくと、課題を発見し問題提起をしていくことが難しくなる。そんな生徒たちを励ますためにも、卒業生同士のつながりを強くし、上田高校で学んでよい芽を出した生徒が、将来どんどん伸びていき、いずれ木になり花を咲かせられるよう応援をしていただきたい。

上田高校の卒業生の弟妹がいる保護者もいる。兄姉が学んだことを、周りの子どもたちに伝えていき、いずれは今の生徒たちが親になり、その子どもたちにも自分の学んだことを伝えていく。この様に、何らかの形でＯＢ・保護者との連携を深めていっていただきたい。せっかくここまでの成果を上げたので、縦・横にその成果を広く波及させていくことができれば、ＳＧＨは大成功の事業になる。

今日の発表の中でも、「政治にもっと興味を持とう」と発表者が訴えている場面があった。今の日本では、若者の政治に関する興味・関心が低い。選挙権を引き下げても、投票率は依然低い。デンマークでは、中学生くらいから自分で党を選び、政治の議論に参加していく。中学・高校時代から国の政治に参加しているので、投票率は90％に達している。中学・高校から、問題を解決するために、政治という力、組織、システムが重要であることを自然と学んでいるが、日本ではこのことが欠けている。ＳＧＨの直接的な目的でなくても、波及効果として、生徒の政治に対する意識を高め、政府や自治体ができないことを市民として補っていき、社会全体をよりよくデザインしていける社会人

になっていただきたい。本来の望ましい21世紀の在り方を達成していくために、ＳＧＨで得た経験を、生徒のみならず、教師や保護者にも波及させていってほしい。素晴らしい成果を上げていただいた。心から、お祝い申し上げたい。

赤池委員　滝澤副委員長もおっしゃっていたが、できれば生徒のキャリアデザインが、ＳＧＨでどう変わったのかをレポートさせてほしい。また、教員もＳＧＨを通してどう変わったのか、どんな課題を課したのかを全職員にレポートさせると大きな財産になると思う。ここまでしっかりＳＧＨに取り組んだからこそ、まとめをしてほしい。

近藤委員長　書き記すことで、自分自身の意見も明確になる。

赤池委員　色々なレポートが出てくれば、進路指導の重要なリソースにもなる。

大井委員　教員のレポートも行ってもらいたいし、計画にはないかもしれないが、これだけうまくいったのだから研究を論文としてまとめてもらいたい。文章にしてしまうと、論理の破綻があるものもわかる。生徒たちが書いた論文を、教員が読んでフィードバックすることは手間もかかりとても大変だということなら、我々にも振ってもらってもよい。スイスの英語教育について発表していた生徒がいたが、この分野なら私もフィードバックできると思った。書くことで研究のまとめができるし、教員や我々がフィードバックするチャンスがあれば、さらに実りがあると思う。

滝澤副委員長　近藤委員長が、「ＳＧＨは文部科学省の事業の成功例に入るのでは」とおっしゃっていたが、ＳＧＨは知識偏重ではなく、考える能力、議論する能力、英語で発表する能力などを伸ばす取組だ。文部科学省は、この能力を大学入試でも測ろうと試みたが、来年度からの実施は見送りになった。

近藤委員　「Super Global University（ＳＧＵ）」でも、それなりの成果が上がっているが、ＳＧＨほどの成果が上がったということは聞いていない。よいイニシアティブを取ってくれたと感じた。

(4) 卒業生との懇談「大学生から見たＳＧＨの学び」　（ファシリテータ：柳沢教頭）

成田　明さん（信州大学 繊維学部４年）　大学では神経細胞調査の研究を行っている。３年生の時に、上田高校がＳＧＨ指定校になった。大学に入学してから、改めて上田高校という恵まれた環境にいたということに気付き、大学では、ＳＧＨで学んだことを生かしながら積極的に研究を行ってきた。来年から長野県の高校教員（理科）になる予定である。

山田杏奈さん（東京大学 教育学部２年）　上田高校の体験入学の際にＳＧＨの取組について話を聞き、憧れて入学をした。「フィリピン スタディツアー」に参加したことが、自分の転機となり、これまで４回現地を訪れた。大学でもフィリピンに関係した研究を行っている。

ＳＧＨでの学びや、先輩方との縁も自分の財産になっている。ＳＧＨの学びを通して、地域創成など、学外の活動にも積極的に取り組むエネルギーを得た。現在は、教育事業と地方の企業との関係について最も興味を持っており、学部の先輩とNPOの立ち上げを目指して取り組んでいる。将来は、地方の教育に携わりたいと考えている。

望月啓太郎さん（慶應義塾大学 経済学部１年）　「グローバルスタディⅡ」の授業で、「幸福学」について研究をした。自分を取り巻く外的要因や環境が、どの程度その人の主観的幸福感に寄与しているかを研究した。高校時代はそれを分析するツールがなかったが、大学で心理学を学び、その分析ツールを得ることができた。今は心理学の分野から幸福学について学びを深めている。

高校時代からずっと英語ディベートを行い、大学でも行っている。高校時代は、ＳＧＨ活動だけではなく、自己発見、サマースクールなどの学校外の活動にも参加していた。そのような活動の中でプレゼンテーションをする機会が多くあり、伝えること自体も、研究対象になるとの思いに至った。本日も後輩たちに対して、「伝える」ということについて発表を行った。

南澤諒真さん（筑波大学 人間学類 教育学部１年）　教育学部に進もうと思ったきっかけはＳＧＨ活動である。「フィリピン スタディツアー」や、「カンボジア井戸プロジェクト」に参加する中で、貧しい子どもたちと触れる機会が多くあったのだが、彼らに何もしてあげることができなかった経験をした。その経験を通して、「そもそもなぜ貧しい子どもたちがいるのか」という疑問を持ち、教育機会の不足が主な原因の一つだという結論に至った。そして、大学では教育について学ぶことを決意した。

現在、「教育社会学」を学んでいる。子どもたちの家庭の経済状況や親との関わり方が、その子の学力や性格にどう影響を与えているのかを研究している。また、「Learning for All」という団体でインターンシップを行っている。この団体は、貧しく困難な問題を抱えた子どもたちに対して、学習支援・居場所支援をすることで、子どもたちの貧困の本質的な解決を目指している団体である。その団体が、夏からつくば市内の小学校や公民館を借りて、学習支援を行っている。その中で、子どもの貧困は見えづらいことを痛切に感じている。今支援をしている子どもたちは、服装も普通だし、勉強熱心だし、貧困という問題を抱えていても、なかなか見えづらい。その中で、本当に支援が必要な子どもたちに対して、どうしたら支援を提供していけるのか、どうしたら子どもたちを救えるのかを考えている。

今、教師の多忙化が問題視されているが、学校・行政・ＮＰＯが連携した学習支援の拠点を作り上げたいと考えている。一つの成功事例をつくば市内で作り上げ、成功事例を長野県にも紹介したいと考えている。

三木菜月さん（早稲田大学 人間科学部２年）　上田高校のＳＧＨでは、幸福度の研究を行った。「フィリピン スタディツアー」に参加し、「本当の幸福とは何か」という課題研究に取り組んだ。現在は、教育工学の分野の研究を行っている。また、早稲田大学の「Gender Sexuality(ＧＳ)」と「アナウンス研究会」での活動も行っている。

ＳＧＨの学びの意義は、高校時代にはわからなかった。なぜこのような学びをするのかと考えていた。しかし、大学生になり、その意義がよくわかるようになった。後輩にその意義を伝えていくのが、私たちの役割だと思う。

大井委員　ＳＧＨの活動を経験した大学生として、周囲の大学生について思うところは何か。

山田さん　ＳＧＨではなくても、都内の私立高校では探究的な学びや海外研修を行っている学校が珍しくない。自分にあって、周りの人に足りないと思ったことはない。

三木さん　大学に入学し、周りの学生が、プレゼンテーションが上手くできないことに驚いた。高校で、発表やフィール

ドワークの仕方、ＰＰＴの作り方などのスキルを学び、人前で話すことに慣れることができてよかった。

柳沢教頭　いわゆる詰込み型の学習を多く行っている高校の卒業生は、そのような傾向があると思う。

金子委員　若い頃は、同窓会活動にあまり興味がないかもしれないが、是非、同窓会活動も積極的に参加し、皆さんの経験を後輩たちに還元して頂きたい。上田高校の同窓会では、入学後間もない１年生を対象に、17～18 人の講師を招聘して「社会人講座」を行っている。就職のことでも、学生生活のことでもよいので話をしてもらいたい。年が近い方が、共感度が高くなるはずだ。

柳沢教頭　去年から、「課題研究入門講座」も行っており、そこで先輩として講師をお願いしている。

中西委員　みなさんは、大学の授業だけでは満足していないと感じた。他の活動をやることに抵抗がないという印象を持ったが、いかがか。

南澤さん　抵抗がないというか、ハードルが低いと感じている。周囲の大学生を見ていると、インターンシップなどの活動は、２、３年生になってからやればよいと考えている気がする。その辺の感覚が違う。１年生の内から見つけたチャンスは逃さない姿勢は、高校時代のＳＧＨ活動で培ったと思う。

望月さん　「話すためにまとめる」のではなく、「まとめるために話す」ということが重要だと思う。私は、人との新しい出会いを大切にしている。最近も、Facebook の Messenger で、「君のやっている取組は面白いね」と言ってくれた同世代の人に直接会った。今自分がやりたいことや悩んでいることを言葉にして話してみると、自分の中で考えがまとまってくる。このような作業が私は好きなので、新しい人との対話を意識的に持つようにしている。

金子委員　大井委員が、「書いた方がまとまる」とおっしゃっていた。会社にも書く力が弱い若い社員が多く、書く力が落ちていると感じる。書くことでより多くの人々に伝えることができるし、自分の考えもまとまる。是非書くことも行ってほしい。

柳沢教頭　行動はしているが、振り返る機会が少ないかもしれない。

赤池委員　「地方創成」ということを何人かが言っていたが、これからの長野県をどうデザインしていけばよいのか。どんなビジネスを育んで行けばよいのか。教員になりたいと言っていた人が何人かいたが、どんなアクションを若者に起こさせていきたいと思うか。

山田さん　人口減少は仕方ないと思う。東京の方が便利で、大学や働く場所も多いので、流出を抑えることは難しい。しかし縁を大切にすることで、関係人口を保ったり増やしたりして、東京にいても長野県に対して何かができる、そんな仕組みができればいいと思う。

望月さん　「地方創成」という言葉を使い始めた時、そもそも地方創成は必要かを考えた。中学時代の先生が、極端な話として、「長野県の人口を全て主要都市にひとまとめにして、インフラを集約してしまえばコンパクトシティができ、より効率的な財政運営ができる」と話しているのを聞いた。しかし、実際に地元の人々を見てみると、人と人とのつながりによって、私たちは幸福を感じるのだと思う。例えば村の住民という共通の意識や、回覧板を回して共通の情報を共有しているコミュニティの一員などとしての帰属意識など、いわゆる「温かい人々まとまり」が、私たちを支えている。このことを無視して、政治や経済の効率を求めてはいけない。

赤池委員　ここ最近、新興国の事業者が、日本の環境・エネルギー・観光・食・などのベンチャー企業を一緒に作りたがっている。中小・中堅企業がどう新興国とつながるか考えて行ってもらいたい。また、留学生とはどんな付き合いをしているか。

望月さん　大学が持っている国際寮に入っている。２/３が留学生で、日頃から交流を行っている。第２外国語がドイツ語などで、ドイツ人の留学生とドイツ語で会話をしたり、ノルウェーの家庭料理を御馳走になったりしている。また、韓国人の留学生と日韓関係について議論したりもする。Nation というバイアスなしに留学生と付き合える環境にいることは、大変有難い。

三木さん　今「アナウンス研究会」に所属しているが、留学生とも日本語でコミュニケーションをとることが多い。その中で、「私にとって日本語とは何か」、「他の言語を話す人々にとって日本語はどんな言語か」という視点から、日本語について学ぶことが多い。

赤池委員　新興国から優秀な留学生は何回も来ているが、大企業はもとより、中小企業に就職することが難しいので、ほとんどの留学生はアメリカに行くか自国に帰国してしまう。卒業後、知り合った留学生やその出身国と、どのように付き合い続けていくのかを、皆さんのキャリアデザインと併せて考えてみることは、大きな学びになる。

金子委員　日本の経済状況が他国に比べてよくないので、留学生が日本に留まりづらい。今、ベトナムからの留学生の多くは韓国に行っている現状がある。

柳沢教頭　委員の皆様から貴重なご意見をいただき、有意義な懇談になった。今後の卒業生の皆さんの活躍を期待している。

Ⅴ　評価と考察　　令和元年度ＳＧＨ活動の自己評価と課題

所　属　校	研究開発構想名
長野県上田高等学校	**長寿県NAGANOから世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成**
研究開発の概要	長寿県NAGANOが世界に誇る「いのち」「健康」に関わる課題研究をすすめる。その研究成果を発信するためフィリピン、台湾研修を実施し、現地高校生と交流の中でグローバル課題を発信し、世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーを育成する。

令和元年度研究開発構想の評価

研究開発単位		評価項目
（Ⅰ）課題解決型の教育プログラムの開発 ３つの課題研究（１年ＧＳⅠ、２年ＧＳⅡ、３年選択ＧＳⅢ）カリキュラムにおいて、１年２年は時間割に組み込んだ必修授業、３年は増単位によるカリキュラムで実施した。	ＳＧＨ事業	○ 上回った　計画どおり　下回った
３つのフィールドワーク（１年県内、２年首都圏、台湾）を通じて課題研究に適した研修ができた。2年次の首都圏、台湾では大学専門機関で課題研究プレゼンテーションを含む研修が実現し、専門の講師より助言をいただくことができた。研究の進展や自らのキャリア育成に役立った。	生徒の変容	○ 十分である　計画どおり　十分でない
課題研究は全職員が生徒一人一人の個別の研究に対し、指導を行った。ＧＳⅠは２名で授業を実施。ＧＳⅡの首都圏フィールドワークおよび台湾研修旅行準備の段階から２学年全職員での指導が実現した。３年選択教科ＧＳⅢでは、各自の課題研究の充実や「北陸新幹線サミット」の開催にも丁寧に指導ができた。	教職員	○ 十分である　計画どおり　十分でない
（Ⅱ）海外研修プログラムの開発 ３つの海外研修のうち台湾研修は実施した。台湾では台湾師範大学や病院施設等で研修が実現した。３月に予定していたフィリピン、ボストンの研修は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となった。	ＳＧＨ事業	○ 上回った　計画どおり　下回った ※２つの研修が中止となったため計画をやや下回った。
年間を通じ様々な場面で外国人との交流の機会を設けたり、グローバルスタディⅡ（英語）授業で英語プレゼンテーション、ディスカッションを学ぶことで実践的なコミュニケーション能力の向上が見られた。 台湾研修旅行では、２年全員が英語で意見交換することができた。研修後には、自主的に海外研修をする生徒も増加している。	生徒の変容	○ 十分である　計画どおり　十分でない
台湾研修旅行において英語プレゼンテーションを実施し、英語による自己紹介、郷土紹介など日本文化を題材に英語コミュニケーション能力を高めた。また、この成果を「ＳＧＨ報告会」で発表することができた。 中止となったが、３月の海外研修についても、事前学習として約40時間の事前学習の指導に当たり、生徒の能力の開発にも貢献した。	教職員	○ 十分である　計画どおり　十分でない
（Ⅲ）生徒の成長が期待できる報告会の開発 ４月アカデミックプレゼンテーション、５月グローバル人材を講師とする松尾ゼミナール、６月北陸新幹線サミット、２月ＳＧＨ報告会、それぞれの発表会において英語での報告を実施した。	ＳＧＨ事業	○ 上回った　計画どおり　下回った
校外でも課題研究の内容を発信した。フィールドワークで訪れた大学等の研修先、NAGANO英語プレゼンテーション大会、筑波大学附属坂戸高校、石川県立七尾高校、ＳＧＨ全国フォーラム、立教大学関東甲信越静大会、マイプロジェクト全国大会で、プレゼンテーションを行った。	生徒の変容	○ 十分である　計画どおり　十分でない
指導する教員も各種発表会に向け、それぞれの研究発表が生徒の成長につながるよう丁寧な指導を行った。 また、２月に行われた、ＳＧＨ報告会においても、効果的なプレゼンテーションの在り方について、多くの教員が実践的な指導を行った。	教職員	○ 十分である　計画どおり　十分でない
（Ⅳ）研究成果の周知 ＳＧＨの研究成果を校外に広く周知することに努め、各種研修会や学校行事で多くの人々に取組みを紹介できた。本年度も国内外から計５件の視察があり、本校の取り組みを周知できた。	ＳＧＨ	○ 上回った　計画どおり　下回った
上田高校の文化祭「松尾祭」では、学校全体で取り組んできたＳＧＨの諸活動を紹介する企画を行い、多くの市民に理解してもらった。また、海外ボランティア活動について理解を求めるため、市内の小学校や佐久市の図書館講座に参加し活動報告を行った。	生徒の変容	○ 十分である　計画どおり　十分でない
本校の取り組みを、他校でも活用可能な汎用化された実践モデルとして、「探究的な学び研修会」において域内の多くの教員に紹介した。また、学校のホームページにも各種の取り組みを掲載し、一般の方々への本校の取組の周知を図った。	教職員	○ 十分である　計画どおり　十分でない

成果と課題

これまでの研究開発で積み重ねてきた課題解決学習は、調査研究の方法やフィールドワークへの臨み方の指導も充実した。特に全員が進める課題研究については、全職員による個別指導が始まり、研究内容にも客観的な視点を持つことができた。また、本年度からは、１年次、課題研究を始めるにあたり、社会の第一線で活躍する卒業生による、課題研究入門講座を行い、自己の課題を発見する際の参考になった。「新幹線サミット」では、各分科会とも充実したディスカッションが行われた。指定最終年度を迎え、これまでの研究成果を域内の各校で活用できるように、汎用化し、周知することができた。

台湾研修では、グローバル課題についての知識や興味をもって研修を積むことにより、ものの見方や考え方に広がりがみえた。本年度も、実践的な国際コミュニケーションの経験は、その後の学習の動機づけにつながり、個別の学びの充実につながった。
３月の研修は中止となったが、これまで海外研修に参加した生徒は、帰国後に、カンボジアの水道インフラが整備されていない地域に井戸を建設したり、Ｇ２０環境相会議で高校生代表として英語で発表をしたりと様々な成果を上げている。来年度以降も、生徒の能力を大きく引き出すことのできる海外研修は更なる発展を目指す。

報告会に参加した生徒たちは、課題研究の探究および発信を通じて、課題解決型の意義を体験的に学習することができた。
また、各プレゼンテーションを経験することでプレゼンテーションスキルとコミュニケーションスキルが飛躍的に向上した。
生徒全員のプレゼンテーションに関わる汎用的能力の向上を目指した発表の機会を設けることは、従前の高校での学びではなかなか開発できなかった実践的な場となっている。今後は、こうした機会が日常の学びの場面でますます重要になってくる。
日々の授業等でも採用できる形式の研究が課題となる。

本年度の課題は、本校のＳＧＨでの取組の汎用化を進め、域内の高等学校への周知を行い、それぞれの学校の探究的な学びの支援を行うことである。
県主催の探究的な学び研修会でも、昨年度の報告よりも具体的な教材を提示することができた。
また、ＳＧＨの各行事については、学校のホームページにも終了後に掲載するように心がけた。
今後は英語での周知活動も課題となる。

総合評価

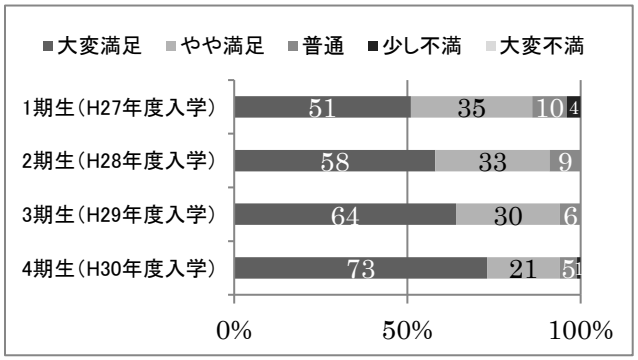
上田高校における「高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ること」を目指したＳＧＨの研究開発は、一定程度の成果を残した。 課題研究では指定当初は、レポート形式のものが散見されたが、５年を経て多くの生徒が自分たちで思考を重ねた探究的な学びをしていることが分かった。この背景には、教員の研究開発が重層的になり指導方法のクオリティーが高まったことによると思われる。また、本年度の課題であった「学びの個別最適化」についても、教員一人一人による指導体制の確立により、生徒の学びに客観的な指導助言が加わり、オリジナリティーの高い課題研究とすることができたことも大きな要因と言える。 昨年度ＧＰＳアカデミックの結果分析から見えてきた、入学後の生徒の「協働的思考力の伸び悩み」については、本年度はこれまで以上に協働的に取組む場面を意識的に増やし、周囲との協働的なかかわりを持たせた。その結果、本年度の協働的思考力の伸び悩みは劇的に解消された。	ＳＧＨ事業	○ 上回った　計画どおり　下回った
	生徒の変容	○ 十分である　計画どおり　十分でない
	教職員の変容	○ 十分である　計画どおり　十分でない

今後の課題

この５年間である程度結果を残してきた課題研究については、今後いかに調査研究や思考を深いものとするのか、その内容の充実が課題となる。研究に必要な情報の入手方法はインターネットや簡単な入門書中心の簡単なものであったが、専門書やインタビューなどのフィールドワークへと転換させたり、自らの仮説に対し、教員から客観的な意見を受けられるように、教員側の知識や指導法の充実について研究を進めたい。
また、本校の研究開発が、県内高等学校の教育改革のフロントランナーとして支援を続けられるよう、これまで以上に、自らの研究開発のＰＤＣＡサイクルの評価にも世界的な基準を取り入れる必要がある。

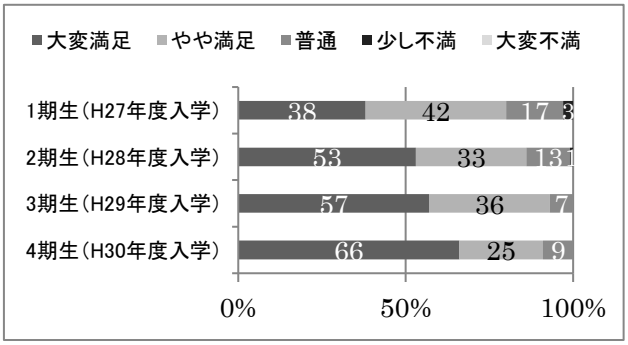
Ⅴ評価と考察　　５年間の活動における意識調査と実態調査のデータ推移

ＳＧＨカリキュラムを学んだ自身の自己評価(2 年次 2 月)



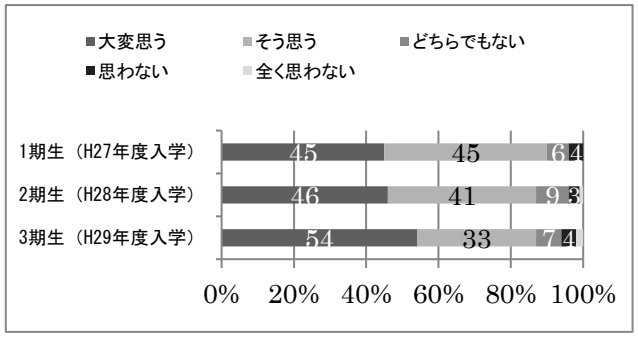
年度を追うごとに着実に満足度が上昇した。

ＳＧＨ諸行事の生徒による総合評価（2 年次 2 月）



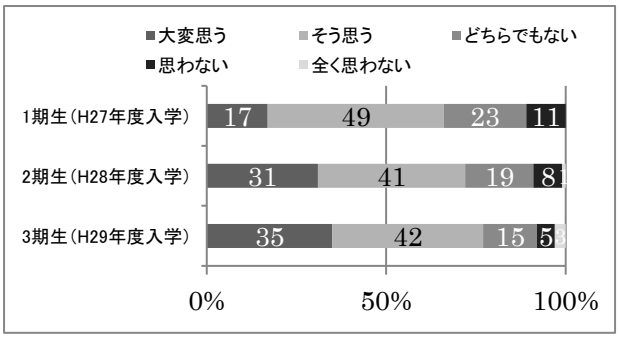
年度を追うごとに着実に満足度が上昇した

ＳＧＨ活動が、グローバル課題への興味関心を高めていると思いますか。（卒業時のアンケート）



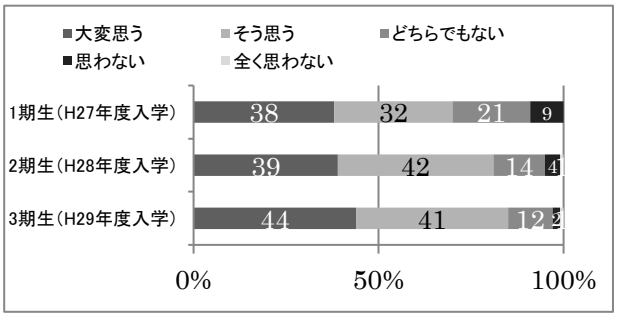
グローバル課題への関心への高まりが読み取れる。

ＳＧＨ活動が、郷土・地域社会への興味関心を高めていると思いますか。（卒業時のアンケート）



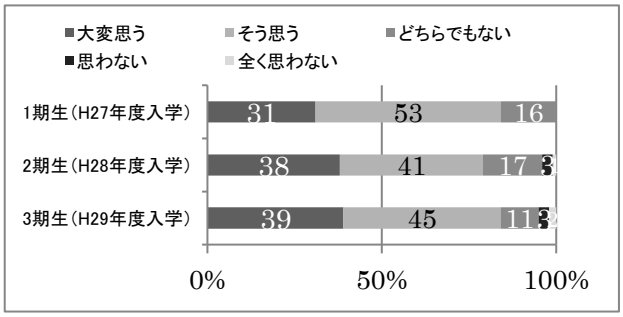
着実にローカル問題への関心も高まってきた。

ＳＧＨ活動が、情報収集と論理的批判的思考力を高めていると思いますか。（卒業時のアンケート）



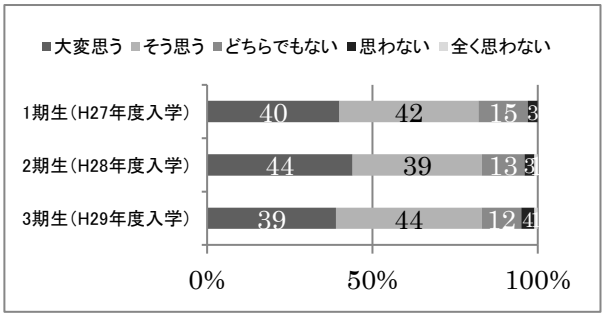
批判的思考力の高まりを感じる生徒が増加してきた。

ＳＧＨ活動が、課題解決を生み出す創造的思考力を高めていると思いますか。（卒業時のアンケート）



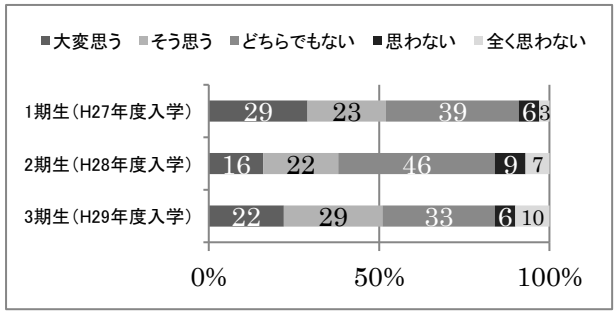
創造的思考力の高まりを感じる生徒が増加してきた。

ＳＧＨ活動が、他者と意見交換による協働的思考力を高めていると思いますか。（卒業時のアンケート）



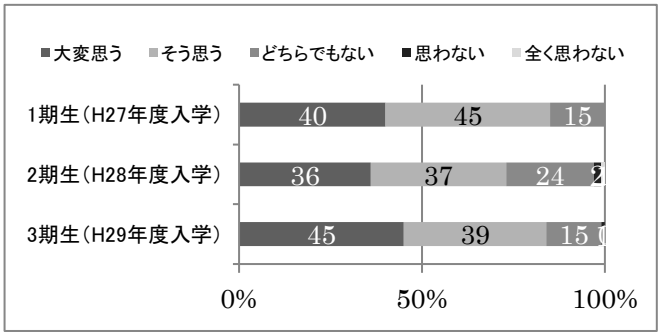
協働的思考力の高まりの意識には変化がない。

将来海外留学、大学進学、国際的に活躍したいと考えるようになった。（卒業時のアンケート）



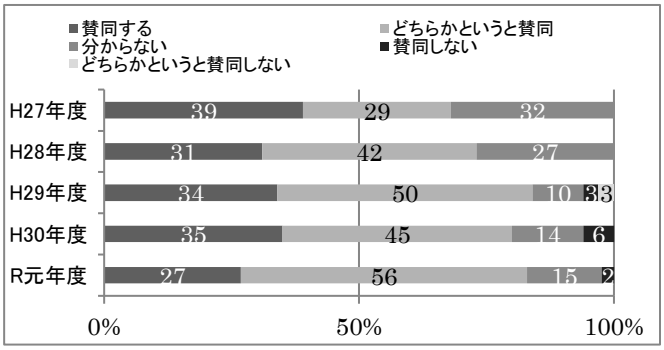
将来の留学に関する意識には大きな変化がない。

ＳＧＨ事業の総合評価（積極的な探究活動、新しい学力の向上（卒業時のアンケート）



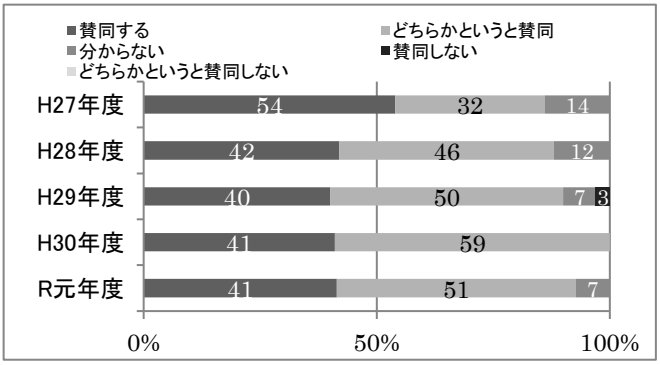
多くが卒業時には満足感を持っている。

生徒の学問探究意識の向上（教職員アンケート）



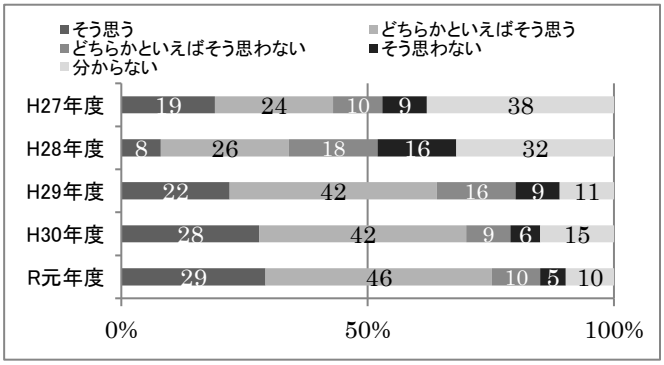
前向きな立場が年を経るごとに増えている。

ＳＧＨ行事の総合評価（教職員アンケート）



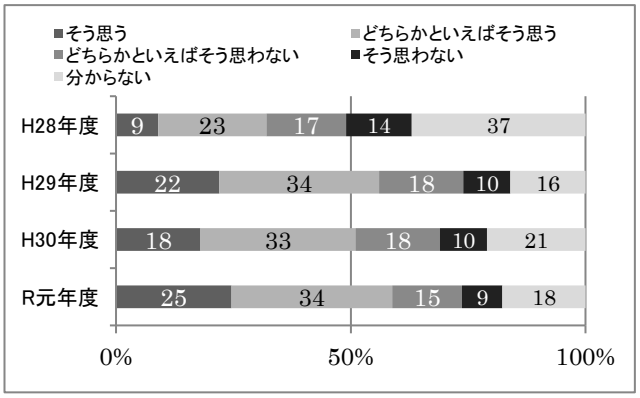
前向きな立場が年を経るごとに増えている。

ＳＧＨの取組はお子さんの学習意欲を高めていますか（３年保護者アンケート）



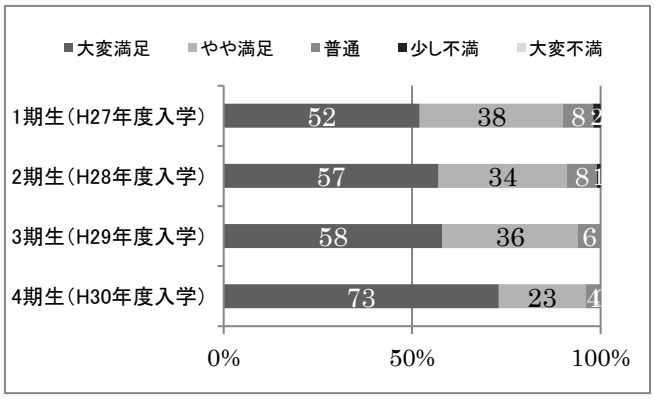
保護者の理解，共感は着実に深まっている。

ＳＧＨの取組は上田高校の教育活動の充実や活性化に役立つと思いますか（３年保護者アンケート）



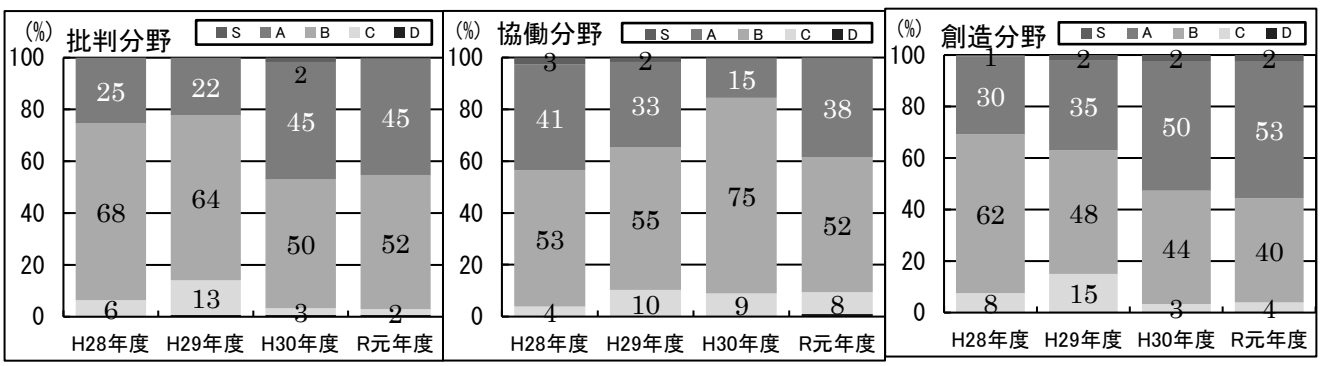
保護者の期待は着実に伸びてきている。

台湾研修旅行後の生徒評価（2 年次 12 月）



着実に生徒の満足感は高まってきた。

GPS-Academic（2 年次 12 月実施）3 分野に関するランク毎の比率の推移



批判，創造両分野は順調に上位者層が伸びた。協働分野は令和元年度には再び上位者層が増えた。

Ⅵ　参考資料　　令和元年度教育課程表

	教科	科目	標準単位数	1年 必修	2年 共通	2年 文Ⅰ	2年 理Ⅰ	3年 共通	3年 文Ⅰ	3年 文Ⅱ	3年 理Ⅰ	3年 理Ⅱ	合計	備考
各学科に共通する各教科・科目	国語	国語総合	4	5									5	
		現代文Ｂ	4		2				2 ■	2	2	2	4	
		※現代文探究							2	2			0･2	
		古典Ｂ	4		3				4	4	2	4	5･7	
	地理歴史	世界史Ｂ	4			3							0･3	
		※世界史探究							4	4			0･4	
		日本史Ｂ	4			3 6	3 3						0･3	
		※日本史探究							4	4	4	4	0･4	
		地理Ｂ	4			3	3		8	8	4	4	0･3	
		※地理探究							4	4	4	4	0･4	
		※国際関係論		3						▲			3	
	公民	倫理	2						4 2	4 2	4	4	0･2･4	
		政治・経済	2						4 2	4 2	4	4	0･2･4	
	数学	数学Ⅰ	3	3									3	
		数学Ⅱ	4	1		4	3						4･5	
		数学Ⅲ	5				1				5		0･1･6	
		数学Ａ	2	2									2	
		数学Ｂ	2			2	2						2	
		※数学探究							4		3	4	0･3･4	
		※数学研究α							2	2		2	0･2	
		※数学研究β							2	2			0･2	
	理科	物理基礎	2	2									2	理Ⅰの物理、生物については、２年次で選択した科目を、３年次でも選択する。
		物理	4				3				4	4	0･3･7	
		化学基礎	2				2						0･2	
		化学	4				2 3				5 4	5 4	0･2･7	
		生物基礎	2	2									2	化学は２、３年次継続して履修する。
		生物	4				3				4	4	0･3･7	
		地学基礎	2			3							0･3	
		※物理探究							3	3			0･3	
		※生物探究							3 2	3 2			0･2･3	
		※地学探究							2	2			0･2	
	保健体育	体育	7～8	3	2			2					7	
		保健	2	1	1								2	
	芸術	音楽Ⅰ	2	2									0･2	
		音楽Ⅱ	2			2	1		3	3			0･1･2	
		※応用音楽							3	3			0･3	
		美術Ⅰ	2	2 2									0･2	
		美術Ⅱ	2			2 2	1 1						0･1･2	
		※応用美術							3	3			0･3	
		工芸Ⅰ	2											
		工芸Ⅱ	2											
		工芸Ⅲ	2											
		書道Ⅰ	2	2									0･2	
		書道Ⅱ	2			2	1						0･1･2	
		※応用書道							3	3			0･3	
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4									4	
		コミュニケーション英語Ⅱ	4		4								4	
		コミュニケーション英語Ⅲ	4					4					4	
		英語表現Ⅰ	2	2									2	
		英語表現Ⅱ	4		2			2					4	
		英語会話	2						2	2			0･2	
		※英語探究							2	2			0･2	
	家庭	家庭基礎	2	2									2	
		※ライフデザイン				2							0･2	
		※課題学習							2	2			0･2	
	＊ＳＧＨ	※ＧＳⅠ		1									1	
		※ＧＳⅡ			2								2	
		※ＧＳⅢ						1					(1)	自由選択（増加単位）
★	家庭	食文化	1～3			2							0･2	
各教科・科目の単位数計				33	33			33(+1)					99(+1)	
［総合的な探究の時間］			3～6	1	2			0					3	
ホームルーム活動			3	1	1			1					3	

注1　＊印は学校設定教科、※印は学校設定科目
注2「総合的な探究の時間」は、実施時間数を1750分(50分×35回)を1単位として換算した単位数を記載
★のところには「主として専門学科において開設される各教科・科目」が入る。
■３年次「文Ⅰ」において、■の２単位科目より２科目選択する。
▲３年次「文Ⅱ」において、▲の２単位科目より２科目選択する。
※国際関係論（３単位）及び、ＧＳⅠ（１単位）は世界史Ａ（２単位）と現代社会（２単位）の代替措置
※ＧＳⅡ（２単位）は社会と情報（２単位）の代替措置

Ⅵ　参考資料　令和元年度ＳＧＨ研究開発活動

1　課題研究に関する活動

4	4	水	ＧＳⅢカリキュラム開始		生徒13名
5 上旬		頃	ＧＳⅢフィールドワーク　　各自設定		生徒13名
5 半ば			ＧＳⅡ課題研究　全職員による指導開始		
5	23	木	松尾ゼミナール		講師 蓮見純平氏　　佐久総合病院
5	30	木	ＧＳＩ　国際理解講演会　　１学年全員		本校海外交流アドバイザー　直井恵氏
6	**16**	**土**	**ＧＳⅢ北陸新幹線サミット**		
7	18	木	東京外国語大学望月ゼミとの交流会		望月圭子教授
7	27	土	ＧＳⅡ中学生対象課題研究2年ポスターセッション		生徒10名
8月上旬			ＧＳＩ県内フィールドワーク下見　　１年ＨＲＴ		
9	11	水	**ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク（～12）**　10コース	１泊２日	2学年生徒全員対象
9	12	木	**ＧＳＩ県内フィールドワーク**　８コース	日帰り	1学年生徒全員対象
9	17	火	ＧＳＩ国際理解教育ＪＩＣＡ生徒リハーサル		講師 竹内岳氏
10	3	木	ＪＩＣＡ・ＩＣＡＮ国際理解教育　　１学年全員		講師 ＪＩＣＡ竹内岳氏・ＩＣＡＮ西坂幸氏・直井恵氏
10	29	火	１学年課題研究入門講座　　１学年全員		講師１２名
12	6	水	令和2年度グローバルスタディⅢガイダンス①		ＳＧＨ係
12	19	木	ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ調査		1学年2学年全員
1	14	金	ＧＳＩ課題研究　全職員による指導開始		
1	15	水	令和2年度グローバルスタディⅢガイダンス②		ＳＧＨ係
2	**8**	**土**	**長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会**		
2	14	金	令和2年度グローバルスタディⅢガイダンス③		ＳＧＨ係
2	18	木	ＧＳＩ　ＪＩＣＡ青年海外協力隊ＯＢ出前授業国際理解講演会		講師 小木曽一希氏，下村珠美氏

2　海外研修・海外交流に関する活動

5	22	水	台湾新北市立錦和高級中学来校		２年２組、２年a講座化学選択者
5	28	火	台湾国立苗栗高級中学来校		２年７組、２年b講座化学選択者
5	30	木	台湾教育旅行計画協議		恵崎良太郎氏
7	4	木	台湾研修旅行フィールドワーク計画協議		王　珠恵氏　（亞智威信有限公司 AsianWise　代表）
8	29	木	ボストンスタディツアー入札（プロポーザル方式）		ＳＧＨ係
9	28	金	令和３年度新入生台湾研修旅行業者入札		ＳＧＨ係他
10	3	木	ＪＩＣＡ・ＩＣＡＮ国際理解教育・座談会		西坂　幸氏来校 アイキャン名古屋事務所
10	3	木	台湾研修旅行事前学習講演会		王　珠恵氏　（亞智威信有限公司 AsianWise　代表）
10	3	木	フィリピンスタディツアー計画協議		西坂　幸氏来校
10	17	木	ボストンスタディツアーガイダンス①		ＳＧＨ係
10	18	金	フィリピンスタディツアーガイダンス		SGH係　海外交流アドバイザー直井恵氏来校
10	24	木	ボストンスタディツアーガイダンス②		蝦名　恵氏　猿橋　あや子氏　来校　ボストンブリッジ
10	31	木	長野県観光部台湾研修旅行協議		恵崎良太郎氏
11	7	木	フィリピンスタディツアー・ボストンスタディツアー面接審査（～８）		ＳＧＨ係
11	13	水	フィリピンスタディツアー・ボストンスタディツアー選抜者発表		ＳＧＨ係
11	14	木	台湾研修旅行ガイダンス		2学年
11	15	金	フィリピンスタディツアー・ボストンスタディツアー派遣者ガイダンス		ＳＧＨ係
11	18	月	長野県観光部台湾研修旅行最終協議		恵崎良太郎氏
11	25	月	**2学年台湾研修旅行（～29）**		
12	5	木	アイキャン名古屋事務所訪問協議		海外交流アドバイザー直井恵氏
12	12	木	フィリピンスタディツアー・ボストンスタディツアー事前学習開始		ＳＧＨ係・引率者
1	20	月	台湾私立延平高級中学来校		1年・2年63名
1	24	金	フィリピンスタディツアー直井恵氏講演会		海外交流アドバイザー直井恵氏
1	24	金	フィリピンスタディツアー・ボストンスタディツアー保護者説明会		講師 直井　恵氏　　蝦名　恵氏　猿橋　あや子氏
2	6	木	フィリピンスタディツアー事前学習会　コミュニケーション講座		講師　清水洋幸氏
2	6	木	台湾新民高級中学来校		１年５組
2	11	火	フィリピンスタディツアー事前学習会　ＮＢＬ交流会		
3	15	日	～　3　21 土　**フィリピンスタディツアー＝コロナウイルス流行のため取りやめ**		引率３名
3	16	月	～　3　24 火　**ボストンスタディツアー＝コロナウイルス流行のため取りやめ**		引率1名
3	26	木	～　4　1 水　**カンボジア井戸プロジェクト＝コロナウイルス流行のため取りやめ**		引率1名

3　研究発表に関する活動

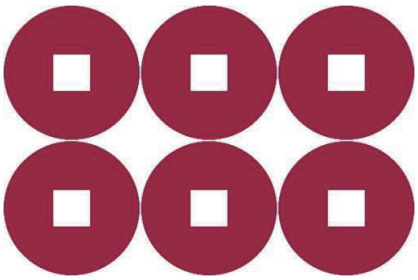
3	14	木	早稲田大学山西ゼミ交流会	職員1名、生徒４名、講師 山西優二 早稲田大学教授
4	5	金	新入生ＳＧＨガイダンス	フィリピンスタディツアープレゼンテーション
4	13	土	第1回アカデミックプレゼンテーション　　土曜公開授業	講師 斉藤則章氏ほか 長野県教育委員会より
5	17	水	ＨＬＡＢ小布施説明会	生徒15名、ＨＬＡＢ実行委員
5	23	木	松尾ゼミナール　　全校ＳＧＨ講演会・座談会	講師 蓮見純平氏　　佐久総合病院
5	25	土	ＰＴＡ総会生徒プレゼンテーション（ボストンスタディツアー）	生徒２名
6	15	土	G20 環境相会合でのプレゼンテーション	生徒３名
6	**22**	**土**	**第１回北陸新幹線サミット（関東北信越地区ＳＧＨ課題研究発表会）**	
6	15	土	第1回上田高校小学生対象説明会　生徒プレゼンテーション	生徒10名
7	6	土	**研究発表　松尾祭**　　スーパーグローバル教室　　長野ビジネス外語カレッジ生徒７名来校	
	～		フィリピンＮＧＯ　ＩＣＡＮのフェアトレード製品販売	
	7	日	カンボジア井戸プロジェクトバザー	１・２学年生徒有志
7	18	木	東京外国語大学望月ゼミ大学生来校	職員５名、生徒４０名、講師　望月圭子教授
7	19	金	長野市立東部中学校での発表　フィリピンプレゼンテーション	小林 生徒３名
7	22	月	サイエンス・アソシエーション・プロジェクト事業報告会	校長 髙野 生徒５名
7	27	土	中学生対象体験入学　フィリピンプレゼンテーション	生徒５名
7	20	土	留学フェローシップ	職員２名、生徒15名　講師　留学生8名
8	13	土	ＨＬＡＢ小布施サマースクール（～19）	生徒２名、講師　ＨＬＡＢ大学生
8	24	土	屋代高校課題研究発表会	白鳥 生徒2名
9	28	土	長野高校NAGANO英語プレゼン大会　　分科会	髙野 生徒２名
10	4	金	三校交流会でのプレゼンテーション	白鳥 生徒３名
10	19	土	第３回信州学サミット　　台風19号水害のため取りやめ	白鳥 生徒2名
10	19	土	第２回アカデミックプレゼンテーション（土曜公開授業）　台風19号水害のため取りやめ	
10	20	日	第5回長野県高校生プレゼンテーション大会	教頭 生徒３名
11	7	木	筑波大学附属坂戸高等学校第2回全国ＳＧＨ校生徒成果発表会	塩澤 生徒2名　ポスターセッション
11	9	土	同窓会会員大会でのプレゼンテーション	白鳥 生徒1名
11	9	土	長野県上田高等学校小学生説明会　生徒プレゼンテーション	生徒５名
11	23	土	こんにちは県議会　予選	白鳥 生徒１名
12	5	木	こんにちは県議会	白鳥 生徒１名
12	14	土	長野県高校生「私のプロジェクト」発表大会（～15）	教頭 生徒３名
12	15	日	立教大学第４回甲信越静地区高校生探究学習発表会	白鳥 生徒２名　ポスターセッション・プレゼンテーション
12	18	水	石川県立七尾高等学校課題研究発表会	西村 生徒2名　ポスターセッション
12	22	土	ＳＧＨ全国高校生フォーラム高校生発表	小林 生徒1名　ポスターセッション
2	**9**	**土**	**長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会**	
2	10	月	上田市シニア大学発表	白鳥 生徒５名
2	15	土	うえだ環境市民会議　環境講演会	白鳥 生徒２名
3	19	木	第２回北信越探究フォーラム（～20）　金沢大学など＝ｺﾛﾅｳｨﾙｽ流行のため取りやめ	白鳥 生徒３名
3	21	土	探究甲子園　関西学院大学＝ｺﾛﾅｳｨﾙｽ流行のため取りやめ	竹内 生徒１名
3	27	金	マイプロジェクトアワード（～29）　東京	教頭 生徒１名

4　職員研修に関する活動

5	15	水	長野県上田高等学校第１回進路・学習研究会	全職員
7	10	水	神戸市立葺合高等学校視察（～12）	校長
8	5	月	長野県ＳＧＨ上田高校第１回運営指導委員会	校長 教頭 ＳＧＨ係　於　上田高校
8	12	月	広島県立国泰寺高等学校・広島県教育委員会視察	校長
10	23	水	大室悦賀教授（長野県立大学）による職員研修会	全職員
10	23	水	静岡県立三島北高等学校視察	小林
11	18	月	長野県ＳＧＨ上田高校第２回運営指導委員会	校長 教頭 ＳＧＨ係　於　上田高校
11	22	金	ミネルヴァ大学	髙野
12	16	月	福井県立武生高等学校視察	宮下 村沢
2	9	土	長野県ＳＧＨ上田高校第２回運営指導委員会　ＳＧＨ報告会同時開催	校長 教頭 ＳＧＨ係　於上田市文化センター・中央公民館
2	14	金	長野県上田高等学校第２回進路・学習研究会	全職員
3	17	火	長野県上田高等学校進路指導引継会	2学年3学年職員

5　本校への学校訪問

7	16	火	岡谷南高等学校	
6	22	土	ＧＳⅢ北陸新幹線サミット	
9	2	月	台湾教師教育旅行団	
10	31	木	台湾教師教育旅行団	
12	9	月	東京都立三田高等学校	
2	8	土	**長野県上田高等学校ＳＧＨ報告会**　　来場者93名	石川県立七尾高校、長野高校、上田染谷丘高校、赤穂高校
			講師 内堀繁利氏　　蓮見純平氏　　直井　恵氏　　中田覚子氏	筑波大学附属坂戸高校、福井県立高志高校
			成田明氏、　間篠花音氏、　瀧澤日菜子氏、　山田杏奈氏、　龍野謙信氏	野沢北高校、諏訪清陵高校、軽井沢高校、塩尻志学館高校
			南澤諒真氏、 望月啓太郎氏、 藤井健太朗氏	明科高校、白馬高校、松本国際高校、蓼科高校
				教育関係者（含ALT）30名、本校保護者45名、
				中学生2名、中学生保護者1名、一般15名

6　新聞に掲載されたＳＧＨ行事

4	19	金	第１回アカデミックプレゼンテーション	信州民報
6	11	火	G20 環境相会合でのプレゼンテーション	信濃毎日新聞
6	16	日	G20 環境相会合でのプレゼンテーション	信濃毎日新聞
6	26	水	北陸新幹線サミット	信州民報
6	28	金	G20 環境相会合でのプレゼンテーション	信濃毎日新聞
7	3	水	松尾祭・カンボジア井戸プロジェクト	東信ジャーナル
7	7	日	カンボジア井戸プロジェクト	信濃毎日新聞
10	21	月	第5回長野県高校生プレゼンテーション大会	信濃毎日新聞
12	16	月	長野県高校生「私のプロジェクト」発表大会	信濃毎日新聞
1	10	金	長野県高校生「私のプロジェクト」発表大会	信濃毎日新聞
1	17	金	長野県高校生「私のプロジェクト」発表大会	信濃毎日新聞